
カン違いにもほどがある！

乃梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カン違いにもほどがある！

【Nコード】

N5089R

【作者名】

乃梨

【あらすじ】

美春は駆け出しのWebデザイナー。優秀な弁護士だが中身は？な兄と二人暮らしをしている。ある日派遣先の会社で社内運動会に出て活躍したことから社長に気に入られてしまい、何かとチョッカイを出されるウザい日々を送っていたが、異動してきた新しい上司によってその生活に変化が訪れる。なぜなら、社内でも評判のできる男でいい男である彼の秘密を知ってしまったから――

果たして社長の真意は？ 次々と襲いかかる悲劇（喜劇？）を乗り越え、美春は幸せをつかむことができるのか？

＊ラブコメちよつとシリアスなお話です。＊番外編『ふたりの休日』移転しました。＊現在第1章を加筆修正しています。詳しくは活動報告にて。

登場人物紹介

越智美春（おち みはる）二十二歳。Webデザイナー。秋田県出身。インターハイ陸上女子四百メートル四位入賞の経歴を持つ。家では兄、会社では社長と、ウザい人たちに悩まされる日々を送っている。色気より食い気。ベタ好き。彼氏なし。純愛に憧れているが、自分の恋愛には無頓着である。

瀬尾達也（せお たつや）二十七歳。PR事業部から異動してきた新係長。美形でモテるが社内恋愛はしない。仕事のできる男として周囲からも認められ、出世も早い。以前とある場所で見かけたことから美春の関心を引きいてしまい……

越智悠人（おち ゆうと）二十八歳。美春の兄で弁護士。幼い頃から美春の面倒を見る。頭脳明晰・成績優秀・眉目秀麗で、誰もが認める「理想の兄」だが、その実態は……？

藤田徹（ふじた とおる）二十六歳。美春の同僚でWebプログラマー。高校時代の同級生と純愛一直線の人。美春の憧れ。

相沢杏子（あいざわ きょうこ）二十七歳。美春の同僚でWebデザイナー。美春の姉的存在。頼りになるアネゴ肌。

佐久間佳祐（さくま けいすけ）二十八歳。Webプロデューサー。主任に昇進する。部署の若手社員をまとめる存在。瀬尾とは同期。エロ軍団の一人。

石津浩太（いしづ こうた）二十五歳。美春の同僚。エロ軍団の一人。

小林亜矢（こばやし あや）二十四歳。美春の同僚で、おやつ仲間。おとなしい性格だが、激しい一面も。常にブログネタを探している。

斉藤 WEB事業部社員。

西嶋 同上。

山本 同上。美春と同じWebデザイナー。エロ軍団の一人。

倉田 WEB事業部女性社員。美春の弁当仲間。

大森 同上。美春の弁当仲間。

手塚 WEB事業部のお局的存在。

工藤貴文（くどう たかふみ）三十四歳。WEB事業部課長で美春の上司。元広告代理店勤務で、自他共に認める仕事のできる男。部下から信頼されている。瀬尾の元上司でもある。

工藤みどり（くどう みどり）二十七歳。工藤課長の妻。旧姓金子。元WEB事業部社員で瀬尾と佐久間の同期だった。

秦野真司（はたの しんじ）三十三歳。WEB事業部主任。クリエーターをまとめてWeb制作を統括している。

松永繁（まつなが しげる）四十四歳。WEB事業部部長。

片岡麻里子（かたおか まりこ）二十六歳。PR事業部二課社員。瀬尾の元同僚。

長野遥（ながの はるか）二十六歳。PR事業部二課社員。片岡の後輩。

川嶋真一郎（かわしま しんいちろう）四十八歳。H&G

コミュニケーションショーンズ常務取締役人事部長。半田社長の大学時代の友人。美春の味方？

半田暁（はんだ あきら）四十七歳。H&P, Gコミュニケーションショーンズ社長。やり手でワンマン。美春を気に入り何かとチョッカイを出す、果たしてその真意は？

半田光（はんだ ひかる）十七歳。半田社長の長男。高校で陸上部に所属している。美春を先輩ランナーとして尊敬するが、なにやら思惑も？

滝沢信広（たきざわ のぶひろ）二十八歳。営業部一課主任。瀬尾とは同期で彼をライバル視している。美春と偶然出会ったのをきっかけに近づくが、その目的は……？

比嘉朋之（ひが ともゆき）三十三歳。営業部二課課長。H&P, Gコミュニケーションショーンズで最も若くして課長になった人物。瀬尾が営業部時代に指導係を務めた。

登場人物紹介（後書き）

物語開始時点での年齢です。
登場人物は順次追加予定です。

プロローグ

第二走者の斉藤さんからバトンを渡されたとき、青いTシャツの裾をはためかせた背中はずぐにも手の届きそうな距離にいた。軽くストライドを伸ばして追い抜くと、靴底から感じるトラックの感触が五年前の記憶を身体に呼び覚ました。

そう。どう走ればいいのか、もう私の身体は分かっている。

走りだした瞬間から放射する熱を風が冷却していく。コースに出る前にずっと溜めていた熱。一番を目指す熱だ。

あの日々はもう思い出になっってしまったけれど、細胞のひとつひとつに記憶は刻み込まれていて、溜め込んだ熱を発散させて得られる快感を貪欲に求めている。

風と一体になる快感を。

速く走ろうとすればするほど強く抗う空気が、次第に私を受け入れ、包み込んでゆく。

空気に溶け込む。風になれる瞬間。

この瞬間が欲しくて、あの頃は走っていたんだ。

やがて黄色いTシャツの背中が大きく見えてきた。あれはどここの部署だったろう。長身のわりには身体が安定しているけど、思うように脚を動かせていないみたい。

彼の呼吸音が風に流れて耳に入ってくるほど近づき、横に並んだときにはもう、私の目は前方を走るオレンジのTシャツを見ていた。抜かしたときにチラッとこちらを見たような気がしたけど、女だと知ってびっくりしたかもしれない。

身体が叫んでいる。もっと速く。もっと。

空気と一体になった私の脚は重さを感じない。いつもより百メートル短いから、ペースを落とさずこのままいけそうだ。でも普段忙しくてなかなか運動できないサラリーマンには三百メートル全力疾走はきついだろうな。アンカーはもっと大変だけど。

次第に大きく見えるオレンジのTシャツ。かなり上体が揺れている。その先では、黒のTシャツに包まれた身を大きく動かしてアンカーの石津さんが何か叫び、バトンタッチの体勢に入った。

ああ、もうすぐ終わってしまう。

オレンジの背中に追いついたときには、苦しさより名残惜しさの方が大きかった。

もっと走っていたいのに。だってこの瞬間は風のように自由でいられるから。

本番一時間前にちょっと練習しただけだったのに、バトンタッチは小気味良いほど上手くいった。幸運の女神が微笑むとはまさにこのことだと思う。反対にオレンジチームはとことんツキに見放されたようで、逆転されて焦ったのか、アンカーがバトンを落としてしまった。

もはや前方には誰もいないトラックを石津さんが駆け抜けてゆく。わずかに距離を縮められたものの独走態勢は揺るがなかった。一周して再びここに戻ってくる彼を、少しずつ身体のはてりを冷ましながら見守る。

それは私だけでなく、すでに出番を終えた走者たち、観客席にいるどの部署の社員も同じだった。先頭を走る黒いTシャツの姿を皆が目で追い、歓声を上げて迎え入れる。

だからそのとき、私のことをじっと見つめる人がいたなんて、
気づけがなかった。

——これがすべての始まりだったことも。

プロローグ（後書き）

初連載です。

つたないところはいろいろあるかと思いますが、楽しんでいただけたら嬉しいです。

第一話 ワケあり(?)の正社員登用

「で、部長、何だって？」

ニヤニヤした顔で隣の席の藤田さんが尋ねる。朝イチで松永部長に呼ばれた私をてぐすねひいて待っていた様子だ。

彼には悪いと思いながらも、私は仏頂面で返事をした。

「正社員として契約したいって」

「やっぱりね。絶対そう来ると思ってた。で、どうすんの？ 今度は受けるの？」

私は無言でモニターを睨みつけると、意味もなくマウスを数回クリックした。そのせいで加工した画像の色が暗くなったのを見て、彼が意外そうな声を出す。

「あれ、何かちよつと怒ってる？」

眉をひそめて私の顔をのぞき込む藤田さんの目は、心配半分興味半分と言ったところか。正社員契約を打診されて怒る理由など思い当たらないのだろう。

私は心情を訴えることにした。彼ならきっと私の気持ちを分かってくれるはずだ。

「部長、私にお寿司を奢^{おご}ってくれるって言うんですよ」「は？」

藤田さんは目を瞬かせた。部長の話が予想とは違っていたからであらう。そりゃ、朝っぱらから部下を呼んで「寿司を奢る」なんて言う上司は普通いない。

しかし話は寿司だけでは終わらなかったのだ。

「それに、焼肉もつけるって言うんです」

瞬かせた目を今度は細めて、彼は無言で先を促した。寿司、焼肉と来てさすがに不審に思ったようだ。

「なんなら、しゃぶしゃぶも連れて行ってもいいって。だから、正

社員になれって」

話の行き着く先が見えてようやく腑に落ちた彼は、なるほど、とつぶやいた。これならば私の気持ちに同調してくれるに違いない。彼はとても優しい人なのだ。

「私のことなんだと思ってるんですかね、部長は？　まるで食欲魔人みたいに！　食べ物さえ出せばなんとかなると思ってるところが、悔しいんですっ」

私は部長に対する憤りをぶちまけた。しかしそれを聞いて藤田さんの口からぽつりと漏れたのは、部長への非難や私への慰めの言葉ではなかった。

「……正しい戦略だったと思うけどな」

なんで藤田さんまで！

私、越智美春^{おちみはる}二十二歳。職業はWebデザイナー。PR会社H&p;GコミュニケーションズWEB事業部が現在の職場だ。派遣社員として働いて約半年になる。

実は三ヶ月前の契約更新時にも同様に正社員契約を持ちかけられたのだが、とある理由によりお断りした。今回もまた首を縦に振らないと思ったのか、エサをちらつかせる作戦できたのだろう。

確かに寿司——「回転寿司じゃないぞ」と部長は念を押した——には心が惹かれた。それは否定しない。だけど、更に焼肉だしやぶしやぶだと畳みかけられて、単純に私が喜ぶと思われていることが屈辱なのだ。

ちよつと考えさせてください、と返事は保留してきた。考えたところでは答えは決まっているような気もするのだが——

「美春ちゃん」

………来た。

正社員になる話をすんなりと受け入れられない原因が。

「今日も暑いねー。ほら、水ようかん持ってきたよー。一緒にお茶にしようかー」

彼がこう言えば従うしかない。「いつもありがとうございます」と少々引きつった笑顔で、共に休憩室へ向かう。ちょうど良いレイアウトを思いついたところだったのに、作業は全て後回しだ、彼のお陰で。

「こんなに暑いと仕事やる気にならないんだよねー。でもビッチリスケジュール入れられちゃってさ、秘書の目を盗んで逃げ出してきたんだよ、美春ちゃんとお喋りしたくて」

私の方こそ逃げ出したい。彼とお喋りしている時間がもったいない。

「疲れたときにはやっぱり甘いものだねー。この水ようかん、取引先の社長さんからもらったんだけどさ、美春ちゃんに食べてもらおうと思って冷やしといたんだよー」

そんなに疲れているようには見えないぞ。水ようかんは美味しいけど。

話を聞き流しながらじつと彼をうかがう。今回の正社員登用について一言でも言及しようものなら、部長の背後に彼がいることを確信できるのだが。

何を考えているのか、はたまた何も考えていないのか、彼はどうでもよいお喋りを続けた――探しにきた秘書に連れ戻されるまで。

行きつけの洋風居酒屋は、ところどころに配置された観葉植物が邪魔をして空席状況が分かりにくいのが特徴だ。それでも冷房が効きすぎない席をなんとか見つけて、とりあえず生ビールと料理をいくつか頼む。

大きく広がったヤシの葉がぼんやりと影を落とすテーブルに、泡

立つビールが先に運ばれてきた。乾杯して喉に流し込む。

共に同じテーブルを囲むのは藤田さんと相沢さん。職場で一番親しくしている同僚だ。

「あー、うまいっ。やっぱ仕事のあとのビールは最高」

私の向かいで威勢の良い声を上げる相沢杏子さんはWebデザイナーだ。今年二十七歳になる。アネゴ肌でとても頼りになり、派遣として働き始めたときから彼女にはいろいろと世話を焼いてもらっている。

その隣りに座る藤田徹さんはWebプログラマーで杏子さんとは同期である。穏やかな性格の人で、技術上の質問にはいつも丁寧に答えてくれる。

このふたりとは同じチームで仕事をすることが多く、自然と仲良くなった。三人で飲みに行くことも少なくない。でも今夜のお誘いは明らかに正社員契約の話をするためで、藤田さんが部長の発言に絡めて説得に乗り出した。

「まあ、デリカシーのない言い方だったかもしれないけど、それだけ部長も本気でポチのこと欲しがってるんだからさ。正社員になれば？ 条件だって悪くないんだろ？」

ちなみにポチというのは職場での私の愛称である。藤田さんが子供の頃に飼っていた犬に似ているそうだが、私が。

犬に似てるって、なんかショック。だって『ポチ』だよ。名字は越智だけだ。

この愛称のせいなのか、職場で一番年下だからなのか、日頃からなにかといじられることが多いのだ。

やがて杏子さんも藤田さんに加勢し始めた。

「そうよ、才能を認められたようなもんなんだから。それにウチは基本、定時上がりでしょ。残業しないのもスキルのひとつってね」

そのとおり。このH & amp; Gコミュニケーションズは私にとって初めての派遣先なのだが、残業ゼロを目指す会社なのだ。こん

なところもあるのかと新鮮な驚きでもって働き始めたことを思い出
す。

前に勤めていたWeb制作会社では若い女の社員であろうと残業・
徹夜・残業・徹夜の繰り返しだった。しかもサービス残業だ。一度
時給に換算してみたら涙がこぼれそうになったものの、私のような
新人、ペーパーデザイナーは認められたいからやるしかない。

同居している兄に「若い女が朝っぱらから栄養ドリンク飲んで
ようじゃ世も末だぞ」と言われようとも。

もともと私は朝型人間で従って就寝時間も早い。それが昼出勤・
深夜残業の職場では生活サイクルが合うわけがなく、無理に合わせ
たのがいけなかったのか、十ヶ月頑張った挙句に倒れた。

病院のベッドの上で気がつくと傍らには心配そうな顔でのぞき込
む兄がいて、気が動転していたのかずれた表現で無理をした私を叱
った。

「お前が先に死んだらいったい誰が俺の葬式を出すんだよ!？」
知るかそんなこと!

と言いたいのを飲み込んだ。また話がややこしくなるから。
しかし激怒した兄は会社側を訴えると息巻いて、なだめるのが大
変だった。職業が弁護士であるため理論武装には長けているのだ。
心配をかけたことは事実だったので、素直に謝り退職の意志を示す
とやっと落ち着いてくれた。

専門学校を卒業して、最初にアルバイトで入ったデザイン会社や
Web制作会社も正社員はやたらと残業が多かった。この業界と残
業は切っても切り離せないのかい!

結局、一ヶ月休養して派遣会社に登録した。派遣社員ならば残業
を強いられないからだ。そして最初に派遣された会社が、H&am
p;Gコミュニケーションズだった。

良い仕事をして認められればいつかは正社員になれるかもしれな
い。頑張ろう。これが最初の目標だった。

運ばれてきたタコのマリネサラダに早速箸をつけ、空っぽの胃袋に送り込んだ。コリコリしたタコの食感を楽しむ私に、藤田さんと杏子さんは正社員の有利な点を説き続ける。

「キャリアアップだってできるよ？ ディレクターになれば収入もアップするし」

「派遣は不安定でしょ。あんただっていつも言ってるじゃない」

職場環境だけを言うなら申し分ないと思っている。それで正社員になって安定した収入が得られるなら御の字だ。

それを伝えると杏子さんが訝しげに訊く。

「だったら何が問題あるの？」

「オッサンですよ」

ふたりは顔を見合わせ、そろって大きくため息をついた。

「社長かあ……」

ほら、ふたりだってちゃんとわかってるのだ。オッサン——社長が唯一無二の問題であることに。

半田暁社長。今年四十八歳になる自称ナイスミドル。元広告代理店勤務で、三十歳のときに転職したのが現在のH & amp; G コミユニケーションズ。傾きかけていた同社を再建し、三十九歳で社長に就任、売上高三十億の企業に成長させた。

このやり手社長が。普通ならば一派遣社員なんぞが口を利くはずもないお偉いさんが。

ウザい。

暇を見つけては私が所属するWEB事業部に顔を出し、差し入れだよと言っては一緒のティータイムを強要し、フリーズしちゃった

と言っではノートパソコンを持ち込み、挙句の果ては同僚の前で私を「美春ちゃん」と呼ぶ。

はつきり言っただ邪魔！ 作業が波に乗っているときに社長のお相手を務めるのは著しい効率ダウンなのだ。業務妨害と言ってもいいが、ワンマン社長ゆえ誰も注意してくれない。こんなことがもう三ヶ月も続いている。

素直に正社員の話を受け入れられないのは、この面倒くさい社長がいるからに他ならない。三ヶ月前に断ったのも彼が原因だ。今回の話も彼が裏で糸を引いているような気がするのだ。

正社員になったらこれまでに以上に遠慮もせずに邪魔をしに来るのではないか。ますますウザくなられたらどうしたらいいのか。

……こんなことになるのなら、リレーになんか出るんじゃないかった。あの社内運動会の日を境に社長のWEB事業部通いが始まったのだから。

なぜあのときリレーに出ると言ってしまったのか。もしも時間を巻き戻すことができるのなら、決してしゃばらずにひたすら貝になっているものを。

第二話 WEB事業部の人々

忘れもしない、五月も末のある日のこと。

その朝、本日残業のない者も全員居残りとお達しは聞いていたものの、派遣社員である自分には適用外とばかりに終業時間になって帰り支度を始めた私を、工藤課長が目ざとく見つけ声をかけた。

工藤貴文課長は我がWEB事業部において自他共に認める仕事のできる男である。自信満々で不遜な態度をとることもあるが、その自信に見合うだけの業績を上げているのが彼のすごいところだ。さっぱりした性格で面倒見もよく、部署の皆の尊敬と信頼を集めている。去年独身生活に終止符を打つまでは、女性にはスゴ腕の男だったらしい。

「ポチ、お前も残るんだよ。……残業代は出さないけどな」
チクリと一言忘れない課長に心で悪態をついたが、興味がそれを上まった。

「何があるんですか？」

「社内運動会のメンバー選考」

社内運動会？ イマドキですか？

私の心の声が聞こえたのか否か、課長は苦笑している。

「コミュニケーションを商売にしているウチが、伝統的にやってる社内コミュニケーション。だから派遣社員にも出てもらうんだけどね。……休日手当は出さないけどな」

あくまで私側のサービスであることを強調するところ、工藤なだけにクドイ。

まあ、私はもともとこういう行事は嫌いじゃないし、この会社での最後の思い出になるかもしれない。もうすぐ契約満了だし。社員さんだけではメンバーの足りない種目があったら、ちょこっと出るくらいはいいか。

そう考えながら、単なる見学者のように同僚たちの輪の一番外側に椅子を持ってきて、ちょこんと座ったのだった。

メンバーの選考は初めから揉めに揉めた。これは毎年のことらしく、特にリレーはこの部署でも押し付け合いになるそうだ。

社会人になって数年あるいは十数年、運動から遠ざかっている人たちにはガチンコリレーは不人気ナンバーワンなのである。それだけにこのリレーに出て活躍した男性社員は一気に株が上がり、その後飲み会や合コンのお誘いが引きも切らない……らしい。

「俺またアンカーですか？　今年こそ新入社員に押し付けようと思っただのに！」

入社三年目の石津浩太さんは元サッカー部で俊足を誇っていたそうなのだが、大学時代はチャラチャラとテニスサークルで女の子を口説きまくっていたとかで、すでに現役を離れて約七年。にしても、その逃げの姿勢、男らしくない。普段は「オトコは肉食でなんぼ」なんて言ってるくせに。

ちょうど研修が終わって各部署に新入社員が配属される時期でもあることから、若いという理由だけで彼らがリレーのメンバーになることが常であるのに、去年入ってきたのは女性社員で、今年はなんとゼロ。石津さんとしては文句のひとつも言いたい気分なのだろう。

新規リレー要員——新入社員はリレーのために入ってくるのではないが——がいらない以上メンバーは去年と同じで、という流れになったときに問題が生じた。メンバーの一人である西嶋さんは現在、右足小指骨折で治療中の身なのだ。

「お前っ、使えねえっ、優雅に自転車通勤なんかしやがるからだ」
通勤途上で転倒して怪我をしたにもかかわらず、その日一日勤務をこなした西嶋さんを『サラリーマンの鑑』と称して褒めちぎって

いたくせに、リレーから逃れるとなった途端、罵倒する佐久間さんもまたメンバーの一人である。

佐久間佳祐さんは入社六年目。若きWebプロデューサーとして活躍している。口は悪いが統率力があり、部署の若手社員をまとめているリーダー的存在だ。このメンバー選考でも積極的に指揮を執っている。

「この際、怪我を押して出ろよ」

「無茶言わないでくださいよー」

代わりに誰がメンバーになるかで、場は紛糾した。

「藤田がいいんじゃないかねえ？」

「俺文化部出身ですよ」

「若いだろ。歳いくつだ」

「二十六ですけど、最後に運動したのは大学一年の体育の授業です」

「平野さん」

「俺はボウリングぐらいしかしたことないよ」

「山本さんは？」

「運動はベッドの上だけだね」

「ソファの上でもでしょ」

「風呂場でよけいに汗かいちゃうときもあるな」

「要するに場所は選ばないってことですよね」

いったんエロい話題が出ると止めどもなく脱線していくのが、WEB事業部男性陣の特色だ。

「相沢さん、女バレ出身ですよ。そうですね、サクッとスターターで」

今度は石津さんが杏子さんに話を振った。

リレーのメンバーは男女不問だから、勝つためには男性社員が出た方がいいんだろうけど、元運動部の女性だったら充分戦力になるだろう。

しかし杏子さんはキツとした顔で石津さんを睨んだ。

「絶対やだっ！ 入社した年に走って、もう二度とやるもんかって誓ったんだからね！」

女性に声をかけては断られることに慣れている石津さんは、めげずに次々と女性陣に話を振っていった。

「小林は？」

「ダイエツトが必要な人間に訊きます？」

「手塚さん」

「ゴルフならいいけど」

「富樫さん」

「妊娠中だっつうの！」

なおも女性社員に話を持ちかけようとする石津さんを、佐久間さんが遮った。

「石津、お前俺に第三走者やらせる気か？ ああ？」

なぜ女性が出ると佐久間さんが第三走者になるんだろう。ハテ。

佐久間さんがガラ悪く睨みつけても、石津さんは悪びれもせずに言い放った。

「死なばもろともってことで」

「誰がお前と一緒に心中するか！」

ここで斉藤さんが横やりを入れる。

「あ、僕は第二走者の仕事を全うするんで、佐久間さん、あとはお願いします」

「斉藤、どっちが先輩だ？」

先輩後輩の垣根を越えて、麗しい押し付け合いが始まったそのとき。

「まあまあまあ」

収拾のつかない場に割って入った工藤課長がふと、一番後ろで事の成り行きを見守っていた私に目をやり冗談めかして言った。

「ポチ、お前、走ってみるか？」

突然指名されてとっさに出た返事は、聞き苦しいことこの上なかつた。

「えへばいいんえふか？」

タイミングの悪いことに、頂き物のバウムクーヘンをちょうど口に入れたところだったのだ。運動会の花形種目といえやはりリレー、派遣社員なんかでしゃばって出ちゃいかんだろう、と黙って控えていたのだが、空腹には勝てない。

慌てて飲み込んでからもう一度訊く。

「私が出てもいいんですか？」

いつもよりトーンの高い声。もはや確認ではなくイエスの意思表示だ。ただ、この場にいた全員が一斉にこちらを振り向いたのにはぎよっとしてしまった。

「私、中学高校陸上部で短距離やってました。あ、リレーもやってました」

胸を張って少々自慢げに言ったその瞬間、うおおーという歓声で部屋は包まれる。

「何だよ、早く言えよ」

「あー、助かった」

「ポチのくせにー」

次々と上がる喜び(?)の声。

「ポチ、第三走者、いける？ 三百メートルだけど」

顔をほころばせた石津さんの問いかけに、ようやく私は納得がいった。

「スウェーデンリレーなんですか!？」

スウェーデンリレー。

第一走者の百メートルから始まり、第二走者が二百、第三走者が三百、最終の第四走者は四百メートルと順に走る距離が増えていくリレーである。あとの走者ほどんどくなってバテてくるわけだが、走る距離が長い分デッドヒートが多く見られ、運動会では盛り上が

ることウケアイの競技なのだ。

熱が身体の奥からせり上がってくるのを感じた。久しぶりに本気で走れる場を与えられたことで、身体中の細胞が眠りから覚めて活動し始めたかのようにだった。

「いげマス、いげマス。はいいい」

いかん。興奮してつい訛なまってしまった。

「ちよっとポチ、何、その妙な自信？」

藤田さんがニコニコしながら「何か隠してることがあるなら全部言っってください？」という目をして言うものだから、再び胸を張る。

「わたくし、越智美春、インターハイ女子四百メートル四位入賞でゴザイマスっ！」

一瞬シン……となったあとに雨あられと降ってきたのは。

「なんで最初っから言わねえんだよ！」

「思いつきり時間無駄にしたじゃん！」

「今日のデートにかけてたのに、このタコ！」

「ポチのくせに！」

という怒号でありました……

そして社内運動会本番。

リレーで一位となった我がWEB事業部は、部創立初の優勝に輝き社長から金一封を受け取り、私は三人をこぼう抜きして部を優勝に導いたとしてMVPに選ばれ、社長とツーショットで記念写真に収まったのだった。

第三話 社長のお気に入り

「おはよう、美春ちゃん」

「あ、社長、おはようございます」

「これね、来る途中のコンビニで見つけたの。おやつにどうぞー」

「えっ。これ一日限定三個のミルクプリンじゃないですか。いいんですか、こんなレアもの」

「もちろん。美春ちゃんのために買ってきたんだからねー。あ、今日お昼一緒にどうぞ？」

「すみません、私お弁当を持ってきたので……」

「そうか、じゃあ明日はどう？ 懐石ランチの美味しいお店があるんだよー。もちろん僕の奢りね」

「えええっ、本当にいいんですかっ」

「うんうん、じゃあ明日の予約しておこうかー」

……思えばこの頃の私は可愛かった。どうやってか私の嗜好を嗅ぎつけた社長に、無邪気に餌付けされていた。思い返すたびに忌々しさを感じる。

半田社長はリレーで活躍した私をいたくお気に召したらしく、運動会の翌日には社長室に呼び出されて三十分もお喋りに興じた。企業のトップにいる人と話するのは初めてのことで最初は緊張したが、気さくで話し上手で話題の尽きない人だった。

その後WEB事業部を訪れては差し入れを持ってきたり、優しく声をかけてくれたりして、私にとっては社長というより親切なおじさんだった。

一緒にランチに行ったときには前の会社の労働環境はどうだったとか、今の職場に不平不満はないかとかいろいろ訊かれて、働きやすい職場であると力説した。

私が朝型でできれば残業を避けたいために派遣をやっていることも正直に話した。社長はニコニコしながらうなずいて話を聞いてくれた。

同僚たちはこぞって「すっかり社長に気に入られちゃって」と鷹揚に構えていて、私への特別扱いを特に不快に思う人はいなかった。「『ド田舎から出てきた女の子に都会で味わえる美味しいものを食わせてやる親戚のオジサン』なシチュエーションだよな」などとからかわれた。自分たちも社長の差し入れのご相伴にあずかっていたのだから、文句を言える筋合いではなかったのかもしれない。

そんなある日のこと、上司である松永繁部長に呼ばれてついていた社長室で、正社員としてこの会社に迎えたいと言われたのだった。

「君みたいに元気のある子にぜひ入ってもらいたいんだよねー。君もウチの会社に入ってくれてるみたいだしー」

チラッと部長を見やるとかすかに苦笑いしている。

「あ、大丈夫だよ、松永部長には僕からちゃんと話したいからねー。君のような将来性豊かな子はウチで採るべきだって」

心が急速に冷えていったが、その下ではフツフツと負の感情が沸騰し始めていた。

……このオッサン。今言っちゃいけないことを言ったね。

なんで社長が一部署の人事に口を出す？

私は、能力を認められるなら現場の同僚や上司に認められたかった。それで正社員として誘ってほしかった。それを現場とは直接関係ない社長から言われたって。

社長、あなたは私の仕事ぶりを一度でもちゃんと見たことがあるんですか。

私のことを気に入ってるから誘ってくれてるだけじゃないんです

か。

ワンマン社長には誰も逆らえないと分かってて。

社長に気に入られている自覚があるだけに始末が悪いと思った。

「……せっかくのお話ですけど、自分がまだまだ力不足だったことはよく分かってますのでお断りします。でもこの職場が好きなのは本当ですし、もし私を必要としてくださるなら派遣として契約更新をお願いします。今はそれ以上のことは望んでいませんので」

一気に言っただけとは目を合わせないように部屋を出た。プライドが傷つけられたことは自覚しても、それをこのふたりに見透かされるのはごめんだった。

WEB事業部室へと向かう廊下を肩を怒らせ早足で突き進みながら、私は激情に捕えられていた。

悔しい。

部長に認められる前に社長にフライングされたことが。

悔しい。

私の実力が未だそんな程度だったことが。

「悔し——い！」

抑えきれずにとうとう口に出してしまった場所は部署の入り口だった。

「うわっ」

「びっくりした」

「何だよいったい」

皆が驚いた顔でこっちを見てる。もうこの人たちともお別れかも。あの社長のご意向に逆らったんだから、契約更新だってもうないだろうな。

このとき私の心は絶望に支配されていた。

食事に誘ってくれた杏子さんと藤田さんには正直な気持ちを話した。

「あんたって負けず嫌いというか、損な性格だよ」

杏子さんのため息をよそに、味噌ラーメンをズズズッと吸い上げる。

今日はやけ食いだ。ラーメン餃子に半チャーハン。あと、デザートも必須だな。たとえ絶望していようがご飯を食べるのが私の信条なのだ。

速攻でラーメンを平らげると彼らに再び主張した。

「現場の人に認められたいんですよ。社長の鶴の一声なんか要りません。あとで惨めになるだけじゃないですか」

「俺たちは認めてるって」

「そうよ、秦野主任だってあんたの契約のこと、前から気にしてくれてたじゃない」

秦野主任というのはクリエイターたちをまとめて実際のWeb制作を統括している人だ。現場で最も近い上司と言っている。彼に認められることを第一目標に頑張ってきたけれど、それももうお終いだ。

「もういいんです。どうせ社長のお気に入りじゃなくなればお払い箱だろうし」

藤田さんの麻婆豆腐を勝手にチャーハンにぶっかけた。

「部長が簡単に辞めさせないって。ほら、やけ食いはやめなよ」

翌日、出勤した私を待っていたのは派遣契約更新のお知らせだった。切られるものとばかり思っていたから、狐につままれたようだった。

WEB事業部にやってきた社長は見るからに上機嫌で、私は自分の目を疑った。

「いやー、美春ちゃんたら、僕のツボにハマってくれちゃって参ったなー、もう」

彼の笑顔に何やら悪寒を感じたとしても致し方あるまい。

「真っ直ぐで不器用で純粹で、ホント可愛いんだから。あ、ドーナツ買ってきたから一緒にお茶にしようかー」

――それからというものの、『社長Ⅱウザいオッサン』の定義が私の中でできあがったのだった。

松永部長からエサ付きで正社員に誘われて一週間が経った。同僚たちは「さっさと正社員になれ、こき使ってやるから」と、どこまで本気か分からない表現で背中を押してくれようとしたが、私は返事を保留したままでいた。

そんな状況を変えるべく現れたのは工藤課長だ。昼休みの休憩室になどいつもは来ない彼の登場は、何かあると思わせるには充分だった。

「お疲れさまです」

「お疲れさん」

自販機でアイスコーヒーを買い、向いの席に座って私が読んでいた雑誌をパラパラとめくる。さりげなさを装ってはいるが何やら言いたそうな雰囲気、こちらも身構えた。

「そろそろ決めたか」

……来たな。

返事を延ばし延ばしにしていたが、いよいよ決断しろと迫られるのか。

何か言わなくてはと思いい口を開くも、気の重さが口調にも現れる。

「……悩んです。社長の真意が分からなくて。あれ以来正社員のせの字も言っていないし」

「もともと各部署の人事は部長が権限持ってるんだ。今回は正真正正

銘部長の意向だぞ。ていうか前回だってそのつもりだったさ。社長に先越されただけで」

私を思いやってか、課長は現場の意向であることを強調した。

「それはもういいんです。私のつまらないプライドなんかとつくに傷口ふさがってます。ただ社長がウザいだけです」

「それなんだよな」

うなるような声を上げる課長。彼もまたお手上げ状態なのだろう、あのオッサンには。しかし彼はひとつの問題を提起して逃げ道を塞ぎにかかった。

「けどな、次の派遣先がもっといい職場である保障はないんだぞ。お前にとって『いい』って意味だけど」

それはよく分かっております。

「ウチの連中、みんな心配してるよ。お前辞めないだろうなって。もうちゃんと認められてんだ、周りからはな。秦野なんか、お前を当てにしてチーム編成やってんだから、辞められたらむしろ困るって言ってるぞ」

優しい口調で的確にポイントを突いてくる。さすが課長。元女たらしというだけあるな。

「課長はどうなんですか。私、見込みありますか？」

「お前はやる気はあるし、勉強熱心だし、いい仕事してると思うよ」

「……ホントに？」

課長がこんなに褒めるなんて、胡散くさい。この人、職場では愛情込めてボロクソに言うタイプだから。

「お前にはもっと色んなことを学んでもらいたいと思って。クライアントとの交渉もだけど、マーケティングも。コンサルティング全般ができるようになったらもっと面白くなるぞ」

考えたこともなかった未来の選択肢を示され、軽く驚く。

「デザインやるだけじゃだめですか」

「それはお前次第だけだな」

色んな可能性が広がっているということなんだろうか。

考え込んでいると、思ってもみなかった方向から攻めてこられた。「社長にはセクハラされてるわけじゃないだろ。この際社長を練習台にして男のあらしい方を覚えるってのはどうだ」

な、ななな何ちゅうことを。

私があたふたしているのを見て苦笑いを浮かべる。

「まあ、それはハードル高すぎるか。お前って見るからに処……」
課長は慌てて口を抑えたが、心に寒風が吹き込むのを止めるには遅すぎた。

……聞いたよ。聞きましたよ、ちゃんと。

はいそうですよ。悪かったっすね、処女で。しかも彼氏いない歴イコール年齢ですよ。デートだってしたことないですよ。

いきなり冷たい空気をまとわりつかせた私を、課長はなだめにかかった。

「いやあれだ、きっと、そういうウブなところが社長のお気に召したというか、ほら、機嫌直せ？」

別に社長の好みなど知りたくもない私はブスツとしたまま報復攻撃を考えた。やられたままではいけない。そして頭をぐるぐると巡らせた結果、天啓をひらめいたのだ。嫌でも課長を巻き込む方法を。ニヤリとして彼を見やると、少々ひきつった笑顔が返ってきた。

「……ひとつ条件があるんですけど」

数日後、人事部、派遣会社そして私との間で契約書が交わされ正式に社員になった。この会社派遣されたときからの目標に到達できたことはやはり嬉しい。社長という問題は残っているがちゃんと手は打つてある。自分で自分を褒めてやりたい。

その足で松永部長に報告に行くと、そこには顔の緩んだ工藤課長となぜか苦虫を噛み潰した顔の杉本係長がいた。

なんとなく嫌な予感がして部長と課長に視線を走らすと、ニヤけ

た顔の二人が交互に口を開いた。

「社長命令が出てたんだよ、部長と俺に。絶対お前を正社員にしろって。できなかったら減棒だぜ？ もうすぐ子供が生まれるってのにそりゃねえだろ？ あー良かった、お前がオッケーしてくれて」
「食いもん釣られてくれなくて初めはどうしようかと思ったぞ。お前さんもあれだな、社長がちょっかい出すようになって学習したんだなあ」

「あ、お前が出した条件、『社長がちょっかい出してきたら体よく追っ払う』役は係長に任せるから。部下が働きやすい環境を作るという仕事はそろそろ係長にやってもらおうと思っていたところなんだよ」

「社員になったんだからこれからやっかまれるぞ。背中に気をつけた方がいいかもしれんぞ？ いやー、お前さんも大変な人に見込まれたなあ」

がっちり握手を交わしたふたりをぼんやりと見つめた。

……………やられた。

私が心の中で課長の首を絞めたことは言うまでもない。

第四話 異動の季節

「おはようございまーす」

エントランスホールに立つ警備員のおじさんに挨拶すると、目深にかぶった帽子の下から少し眠そうな目がこちらを見た。

「おはようさん。いつも早いねえ」

派遣社員としてこの会社で働くようになってから、そして正社員となった今でも、職場では一番乗りの私である。誰もいないオフィスに足を踏み入れる瞬間、競争しているわけでもないのに「勝った！」と思ってしまうのだ。

「あ、美春ちゃん」

エレベーターホールとは反対側へ向かう私をおじさんが呼び止め、ニヤリと笑う。

「走るんでねえぞ？」

「分かってますよお、もう」

自分のやったこととはいえ、いったいいつまでいじられるのかと思うと恥ずかしくなるのだが、気を取り直してそのままホールを抜け、非常階段へ向かう扉に手を掛けた。

エレベーターを使わずに階段を上ってオフィスまで行くことは、すでに日課となってしまう。仕事柄パソコンの前に座っている時間が長いので、適度な運動は必要不可欠なのだ。

週末の朝にはジョギングやダッシュなど走り込みをして、負荷を求める身体の欲求に応えてやっているし、この会社で働くようになってからは代々木公園にある陸上競技場、通称織田フィールドにも時折行っはトラックの感触を忘れないようにしている。一般開放日には無料でトラックが使えるとあっては、走らない手はない。

つくづく私は走ることが好きなんだなあ、と思う。

恵比寿駅から徒歩七分の距離にあるH&Gコミュニケーションズは、十階建てのビルの八階から十階の三フロアを占めており、我がWEB事業部は最上階にある。

エレベーターの脇にある階段は、日中はシャッターが空けられるため見た目を意識した作りになっており、社内のフロア間の行き来にはこちらが使われることが多い。

一方、私が利用する非常階段は防火壁及び防火扉によって遮られた、無機質で簡素な階段室となっており、ここを十階まで上ってフロアに入り、IDカードを使って裏口から社内に入ることにしている。

私の他に非常階段を使う人なんていないから、つい鼻歌が出てしまっても全然問題ない。それどころか、実はこっそりカラオケの練習までしているのだが、そのことはまだ誰にも言っていない。

この階段がほぼ私専用であることに味を占め、二ヶ月ほど前、かねてよりやってみたかったことに挑戦した。一階から十階までダッシュで上ってタイムを計るのだ。

ちょうどスニーカーを履いていたから、まさにうってつけの日だったと言えよう。階段室への扉を開けたときにぐふふ、と漏れた声を聞いた人は誰もいないはずだ。

が、私の階段ダッシュは防犯カメラにしっかり捉えられており、何事かと跳んできた警備員さんにこっぴどく叱られてしまった。その後松永部長に呼び出されて赴くと、これまでに見たこともないほどしかつめらしい表情をした彼が私を待っていた。

「お前さんが足が速いことはよく分かった。分かったけどな、非常階段はやめとけ？」

すみません、と身を縮こまらせて蚊の鳴くような声で謝罪する私の前で、部長はくるっと椅子を回転させて向こうを向くと肩をプルプルと震わせた。

お……怒ってるううっ。

部署に戻った私を迎えたのは同僚たちの爆笑だった。

「涙目！ 涙目になってるよ、ちよっと！」

ひどいっ。そりゃ、自業自得だけど。

例のオッサンからは、

「美春ちゃん、松永部長に怒られたんだって？ 可哀相にー。僕が慰めてあげるから一緒にランチに行こうよー。うな重なんてどう？」
最後の一言には大いにそえられるものがあつたが丁重に断った。

正社員になってからも社長のWEB事業部詣では続き、意外な効果を我が部にもたらしている。いくら私目当てに来るとはいえ、社長を前に同僚たちも気の抜けた仕事はできないから、途端に集中して真面目に取り組むようになるのだ。

「部内の総残業時間が減った」と喜ぶ課長だが、私の冷たい視線に気づくと咳払いをして誤魔化そうとするのも当然見逃さない。

よくも逃げたな、課長のヤツ。

私の目配せ（別名ガン飛ばし）に気づいて、社長を部屋から丁重に追い出そうとする係長の作戦は成功率二割五分といったところで、あまりはかばかしくない。上司の連帯責任で何とかしてくれっての！

この日も課長に対する恨みつらみをグダグダ考え、どのようにして報復するのが一番効果的かと一通り思案してから業務に没頭していたら、パソコンメールが来ているのに気づくのが遅れた。私はいったん気持ちが入ってしまふと、集中しすぎて周りを遮断してしまふことがあるのだ。

メールは杏子さんから私と藤田さん宛で、内容は《極秘情報ゲット。今日飲みにくよっ》

彼女は社内の情報通で、そんなこと私に話してくれちゃっていい

んですか！　なんて思うことまで気持ちよくバラしてくれるのだが、WEB事業部外の人たちと交流のない私には誰が誰やらさっぱり分からなくて、いまいちバラし甲斐がないようにで申し訳ない。

だいたい、ディレクターならばクライアントや営業と会議はするし、連動して仕事をすることもあるPR事業部とも顔見知りになれるけど、私のような駆け出しデザイナーはディレクターの指示通りに動くのが主で、他部署の社員と顔を合わせることもない。

加えて、大所帯のPR事業部は八階に、営業・総務・経理・広報部などは九階にあり、杏子さん提供の噂の社員と遭遇することもない。

十階にはWEB事業部の他、少数のリスクマネージメント部と対メディアマネージメント部、社長室、重役室や資料室、あとは役付き会議などが行われる会議室ぐらいか。

それほど社内の人間関係には疎かったので、この日も飲みに誘われたのは嬉しかったけど、極秘情報とやらは酒の肴にすらならないはずだった。

「え？　杉本係長が？」

「そ。この度めでたく課長に昇進、リスクマネージメント部に異動だってさ」

聞き流しながら春雨サラダを咀嚼する。会話はふたりに任せて次は焼き鳥に手を出した。

杉本係長はWEB事業部の中では珍しく、私をからかったりしない人だ。なのに異動とは残念だな。……え、ちょっと待ってよ、もしたら……

「でもそのどこが極秘なの？　いずれはみんなが知ることだよ」

それがね、と言って杏子さんはぐっと顔を近づけ、小声になった。

「リスク部の現課長は総務に異動して、総務の現課長は部長に昇進の上、経理に異動」

「経理の部長は？」

「子会社に出向。しかもその理由がなんと」
更にヒソヒソ声になる。

「フ・リ・ン」

えええええっ！

驚きのあまり手にしていた焼き鳥の串をポロツと落としてしまった。

しかし藤田さんは冷静に疑問を呈する。

「ウチの会社、プライベートには関与しないでしょ。大人同士がすることなんだからって」

「会社が不利益を被らない限りはね。そこんところ、社長はすつごく厳しい人だから。今回は被っちゃったんだよ」

「奥さんが会社に乗り込んで修羅場ったとか？」

ひょっとしてと思って口にした予想はあっさり外れてしまう。

「ポチ、それ昼メロだから。……実はね」

経理課のベテラン大崎佐和子主任は直属上司どころか社長の信頼も厚い、とにかく仕事ができる人だった。

各部署から上がってくる予算書をくまなくチェックし、各種税金の申告を一手に引き受け、外部開示資料を作成する。毎年の経営計画は彼女が提出する素案を基にして作成されるとも言われており、日々の地道だが精密な業務遂行を評価され、社長賞に輝いた経歴を持っていた。

そんな彼女が寿退社をすることになり、会社側は慰留に努めたが本人の意志は固く退職。

しかし半年後に偶然再会した元同僚が、彼女から涙ながらに打ち明けられた話とは。

経理の高浜部長と不倫関係にあったこと。妻と離婚して彼女と再婚するという話を信用して会社を辞めたが、結局離婚はかなわず、

ふたりは別れた。

元同僚からこの話を聞き社長が激怒、高浜部長は左遷されたという。

「ここからがウチの社長らしいといえらしいんだけどさ。別に不倫がどうこうっていうのが問題じゃなくて、会社の大切な人材だった大崎主任を退職に追い込んだのが許せなかったみたい。会社にとっては著しい不利益だった」

オッサンらしいのか、それが？

「高浜部長って、何てことないフツのオッサンなんだけどねえ。いったいどこが良かったんだか……って、ポチ、あんた食いすぎ！」杏子さんが私の前に置かれた、すでに食べ終わった焼き鳥の串の数を指摘した。藤田さんがため息混じりにそれを見つめる。

「いつの間に……俺の分まで」

本当だ。気づいたらふたりの焼き鳥にまで手を出していた。いかに、言い訳しろ。

「食欲の秋ですから」

「一年中だろ！」

藤田さんは私にデコピンをひとつ食らわせ、枝豆をつまみ始めた。

「で、ウチの後任係長には誰が来るの？」

「そうそう、それなのよ！ 本日のメインディッシュは」

杏子さんがよくぞ訊いてくれました、とばかりに目を輝かせる。

「不倫の話じゃなかったんですか？」

ふっふっふ、と不敵な笑みを浮かべると、彼女はとある人物の名を口に出した。

「聞いて驚け。瀬尾主任よ」

誰？

「誰？」

私の心の声を代弁してくれた藤田さんと全く反応のない私に、杏子さんはガクツと肩を落とした。

「俺、一緒に仕事した人ぐらいいしか知らないもんなあ。あとは同期の連中。どんな人なの？」

「PR事業部一課にいるんだけどね。一言で言うなら、できる男。

最速で主任になったと思ったら、もう係長に昇進よく。あー楽しみ」

その意見は納得しがたい。仕事ができる人って部下にも自分と同じレベルを要求しそうだから、楽しみだなんて思えない。それに、工藤課長のような厳しいながらも愛を感じさせる上司は稀だまれと思う。

私の心の動きなど察するはずもなく、杏子さんは瀬尾主任とやらの人物像に言及した。

「いい男なのよ！ イ・イ・オ・ト・コ。一見、爽やか王子様。だ
が立ち居振る舞いからそこはかとなく漂う色気、フェロモンに群が
る女たち」

宣伝コピーのような文句を口にしてうっとりとする様子は、とても彼氏持ちとは思えない。

「会社に来る楽しみが増えるのはいいことでしょうが。目の保養にもなるし。あんたもねえ、少しはいい男を見て色気を養いなさい」

「色気じゃお腹は膨れないですよ」

「そんなんだから彼氏ができないのよ。ったく」

杏子さんと私の色気談義に藤田さんが割って入った。

「そんなの、男にとっては楽しくもなんともないじゃないか。ウチの奴らが齒ぎしりする姿が今から目に浮かぶよ」

一般的な男性の意見であろう。WEB事業部の男性陣なら齒ぎしり以上のことをやりそうだ。

私にとっても、新係長の見てくれなどはどうでもいい。

「その人、若いんですね？ ちゃんと社長を追っ払ってくれるんですか？ 私はそっちの方がずっと気になるんですけど！」

あの工藤課長でさえ杉本係長に押し付けたのだ。どれだけ仕事ができるか知らないが、そんなエリート街道を突っ走るような人に社長をうまくあしらえるのか？

それに私は、王子様なんて呼ばれる人の実態を知り尽くしている。声を大にして言いたい。外ヅラに騙だまされるな！

第四話 異動の季節（後書き）

相手役、やつと名前だけ登場です。

織田フィールド… アマチュアのランナーや学校の陸上部も多く利用している陸上トラックです。

第五話 兄と私

多摩川沿いの道を緩やかに走りながら、きらきら輝く川面に目をやる。鼻腔をくすぐる朝の空気は少しだけひんやりとして心地良い。九月も末になり、朝晩は少し気温も下がって過ごしやすくなった。季節の移り変わりが川面にきらめく陽の光からも窺える。

川のあるこの風景は私が育った田舎を思い起こさせる。周りにある住宅の数は比べ物にならないけど、天候によって表情が変わる川のうねりは、どの土地もどの時代も変わらない。もしかしたら兄は、私のために、私がこの土地を好きになることが分かっている、選んだんじゃないかとさえ思う。

田園都市線、二子玉川駅から徒歩十分のマンションに、突然兄が引越しを決めた。今から三週間ばかり前のことだ。場所も部屋も私は何の相談もされていない。ある日いきなり言ったのだ。

「美春、引っ越すぞ」

私と五歳違いの兄、越智悠人（おちゆうじん）は弁護士を生業としている。私の収入には不釣り合な小洒落たマンションに住めるのも、ひとえに兄が高額所得者だからだ。

思えば兄と私には幼い頃から格差があって、『成績優秀な兄と走るしか取り柄のない妹』という構図が一般的であった。だからと言って兄は決して私に劣等感を感じさせることはしなかったし、それは今でも変わらない。互いの収入に見合った生活費を出し、協力して家事を行う。

パッと見には仲の良い兄妹が共同生活を送っているように見えるだろう。

……あくまでパッと見だが。

ジョギングを終えてマンションに戻る。オートロックの入り口に部屋の鍵を差してドアを開ける。以前住んでいたマンションにはなかったもので、三週間たっても未だに慣れずにドアの前でまごまごして鍵を探してしまう。

シャワーを浴びてキッチンへ向かうと、ダイニングテーブルの上に紙片が置いてあるのを見つけた。

《十時に起こして》

またか。二十八歳・成人男性の言葉とは思えない。目覚ましで起きろ！……と面と向かって言いたい。言ったらあとが怖いから、決して言えないけど。

いつものあの台詞で起こさなければならぬのだろうか。考えるだけで恥ずかしい。

身悶えする思考から逃れるために、朝食作りに取りかかることにした。

兄と私は秋田県出身である。

私が幼少の頃に脱サラをして父は新聞販売所を始めたのだが、今でも習慣として残る早起きはその頃から身体に叩き込まれたものだ。仕事柄休みも少なく家族と一緒に旅行に行った思い出もないし、特に裕福な生活をしていたわけでもないが、毎日毎日同じことを黙々と続ける父の姿はむしろ、格好いいことだと思っていた。……これは多分に兄の影響によるのだけだ。

仕事の忙しい両親に代わって私の面倒を見てくれた兄は、各家庭で毎朝毎晩新聞を読めるのは父のおかげ、たとえどんなに地味で変化のない仕事であろうが社会の役に立っているのだ、だから父を誇りに思え——と、小学生の私に何度も説いた。

兄は幼い頃から頭脳明晰・成績優秀で、高校に進学してからは勉強ばかりしていた。私は毎晩夜食におにぎりを持っていき、「頑張

れ、あんちゃん」と馬鹿の一つ覚えみたいに言っていた。
やがて東京の国立大学に合格した兄は故郷を後にした。

父が亡くなったのは私が中学二年の秋だった。折からの長雨で地盤が緩んでいたところに大型台風が直撃し、各地で土石流の被害が出た。長年の顧客である独居老人を心配し様子を見に行った父は、崖下にあるその家で土砂崩れに遭い、帰らぬ人となった。

新たに人を雇って新聞販売所を続けた母は、病で逝った。私が高校三年の秋のことだった。ショックのあまり進路も何も考えられなかった私は、兄の勧めに従って上京し、専門学校に入学した。

午前十時。兄が指定した起床時間である。

のろのろと兄の自室に向かうのは心理的抵抗が足を重くさせているからだ。しかしこれをやらないと、後が怖い。

意を決して部屋のドアを開け、ベッドに近づき、兄の身体をそっと揺する。

「……お兄ちゃん、起きて。もう朝ご飯できてるよ。ほら、お兄ちゃんてば」

気色悪くならないように、努めて平坦に言ったつもりだったのに。背筋が寒い。

兄はこちらに背中を向け、布団をかぶったままで返事をした。

「何だよ、その棒読み。もっと心情込めて言えよ。はい、やり直し」とつくに目が覚めていたんじゃないかと思えるほど明晰なお言葉だ。クソッと思ったが、面倒くさくなる前に片付けてしまいたい。「お兄ちゃん、起きて。ご飯が冷めちゃう。今日は買い物に連れていってくれるって言ったじゃない！ ほらあ、早く起きてってばあ」顔を引きつらせながら糖分過多な声を出す。すると、わざとらしく伸びをした兄は、

「日曜ぐらい寝かせろよお、もう、仕方ないなー、美春は」

やれやれといった表情で、むっくりと起きだした。

——ウザい。変態。

心の底から思った。

母のお腹に宿った第二子が女の子だと分かった瞬間から、両親は兄に思想教育を施した。

『おとなしくて可憐な妹を守る、強くて優しい兄』『わがままな妹に甘い兄』『いつもあとにくっつくお兄ちゃん子の妹の面倒をついつい見てしまう兄』などという、古くから漫画や小説で使い回されてきた設定が大好きなベタな両親が、我々兄妹にもそのパターンを当てはめようとしたのだ。

何かにつけ、妹を守れだの、優しくしろだの、兄とはこういうもののだの、私がまだ生まれてもないときから洗脳された結果、面倒見が良いと言えば聞こえはいいが、やたらと心配性で過干渉な兄が出来上がる。

未だ幼児であつた兄が慣れない手つきで私のおしめを替え、離乳食をスプーンで私の口に運び、よちよち歩きの私の手を引く。

それだけではない。私が聞き分けのないことを言えば優しく諭し、いたずらをすれば一緒に謝り、危険なことをすれば厳しく叱った。思えば何という分別くさい子供であつたことだろう。

成長するにつれて両親からは『理想の兄』、周囲の大人たちからは『よくできたお兄ちゃん』との評価を受けるようになった我が兄であつたが、妹の私はというと、これがちつとも理想的ではなかった。

つまり『おとなしくて可憐』でも『お兄ちゃん子』でも特別『わがまま』でもなかったのだ。

お転婆で元気いっぱい、近所の子供たちと徒党を組み、売られた

ケンカは必ず買い、負けても泣き言は一切言わず、その上逃げ足も速かった。

両親と兄は軌道修正に励んだものの、生まれ持った性格ゆえか、私は家族にとっぴつまでたつても理想とはほど遠い存在だった。

しかし陸上部に入つて活躍し始めると、『自慢の娘』『自慢の妹』としての地位を獲得し、『理想の妹』という幻想は忘れ去られたと思つていたのだが。

シャワーを浴びた兄が朝食の席に着く。Tシャツにスウェットパンツというラフな格好でも絵になるのがムカつく。オフの時だけ垂らした前髪の下には形の良い眉とくつきり二重の目。すつきり通つた鼻筋と少し薄めの唇。長身に長い脚。くつろいだ王子様がここにいる。

味噌汁を一口すすつた兄が口を開いた。

「で、今日は何の買い物をしたいの、美春？」

さっきのあれは思いついた台詞を口走つただけだ。別に付き合つてもらふような買い物なんかないから！

兄と一緒に買い物をする気などさらさらない私は、先約があることを思い出させた。「あんちゃん、今日デートだべ？」

途端に目をすつと細めて低い声を出す。

「お兄ちゃんはいつだつて美春優先だよ？ そんなこと今更言わせるなよ」

ああっ、ウザい。私のことはいいから、デートに行つてくれ！

またフラれたつて知らないからね！

兄が東京の大学を受験すると知り、私は心中ほくそ笑んだ。毎夜おにぎりを差し入れて応援したのも下心があつたからだ。煩わしい兄がいなくなれば平和な生活が訪れる。

受験勉強の息抜きと言っては私の勉強に鬼教師のように口を出し、休日友人と出かければ誰とどこに行って何時に帰ってくるのかとしつこく問い詰め、陸上部の練習のあと男子部員と一緒に帰ろうものならどうという関係だと詮索する。

これだけならどこにでもいる——かどうかは分からないが——過保護・過干渉な家族の一例に過ぎないだろう。しかし兄の場合、その外見ゆえに厄介な事情がついて回った。

私が物心ついた時から兄はモテていた。毎週のようにラブレターをもらい、デートに誘われ、バレンタインデーにはチョコレートが山積みになる。

王子様の容貌もさることながら、妹に対して王子様であろうとする心根が外にも漏れるのか、「なにげない笑顔からも滲^{にじ}みでる優しさ」（某クラスメート談）にオチた女子の多いこと多いこと。

しかし『理想の兄』である彼は、常に私が優先で、それをおかしいとも思わない。

「妹の宿題見てやらないと」とか、「妹の買い物さ付き合わねば」とか、こっちが頼んでもいないのに積極的に私に関わろうとするため、どれだけ妬まれたことか。

だから、兄が大学に合格して心の中で快哉を叫んだ。やっとこれで自由だ。地元の女子たちには気の毒だが、兄も東京でいける女性たちを相手に、妹の関わらない自由恋愛を楽しんでくれるだろう。そして、自然と妹離れをしてくれるだろう。

そう願っていた。

しかし、母の死で独りぼっちになってしまった私を東京に呼んだ兄は、今度は保護者としての責任も背負うことになり、過保護・過干渉ぶりを更にパワーアップさせたのだった。

朝食を食べ終わって新聞を読み始めた兄に熱いお茶を差し出し、私も自分の分を湯呑みに注いで手近にあった煎餅に手を出す。

「あんちゃん、お墓参りどうする？」

「あー、裁判の準備で行けそうもない」

「へば私一人で行ってくる」

兄はお盆に行っていたな、そういえば。

「早いなあ。あれからもう五年か」

ふと兄がつぶやいた。

本当にそのとおりだ。来年はもう七回忌。また節目の年がやってくるんだなあ。

感慨に浸っていると、兄もまた昔を懐かしむ目をしている。

「今にも泣きそうな顔で俺につかまっていた美春が、もう会社勤めしてるんだもんなあ」

心の中でガクツとよろめいた。

そこかよ。……思い出したくないことを。

新幹線から降り立った私を出迎えた兄は、これまでで一番、優しくて頼もしかった。

母の死のショックを引きずっているのに加え、大都市の喧騒、人の多さ、狭い空――要するに慣れない都会への不安に怯えていた私を、暖かく包み込むように受け入れてくれた。

五年に渡る東京暮らしで兄自身、もまれて強くなっていたのかもしれない。

しかし私は知らなかったのだ。心細くて袖に縫^{すが}る私を気遣いながら、内心兄がほくそ笑んでいたことに。

両親が教え込んだ『理想の兄妹』の肖像が、数年間離れて暮らす間に次第に兄の中で変質していったことを知る兆しは、専門学校への入学手続きが終わったあとに起きた。

「これから人前では『お兄ちゃん』て呼べよ」

これを聞いて目が点になり、

「あんちゃんは、あんちゃんだべ？ 『お兄ちゃん』て、あべわり

(気持ち悪い)……」

一瞬眉間にしわを寄せたものの、すぐさま微笑んで兄は言った。

「美春にそう呼ばれたいんだ。ほら、言ってごらん、お兄ちゃんって」

背筋がゾゾツとした。こんな兄を見るのは初めてだ。

再び兄に促され、嫌々ながら口に出した。

「お……おにい……ちゃん……」

途端に鳥肌が立った。

しかし兄はそんな私の心情などおもんばかりすることもなく、

「萌えるなあ」

あんちゃん……なんかおかしい。

次は、ふたりで買い物に行ったときのこと。

私がストレートジーンズを選んでいる傍らで、何やら物色していた兄が喜色を浮かべて近づいてきた。

「これ着てみるよ」

兄が渡したそれは、真っ白いワンピース。フェミニンだが露出は多くない。が、私なら決して選ばないデザインだ。無理やり試着をさせられたものの、着ていく機会もないし要らないと言ったのに兄は勝手に購入した。

何か変だという予感、後日兄の友人たちと会う機会がありその服を着るようにと『命令』されたときに、現実のものとなった。

白いワンピースに包まれた私を見て、彼らは驚きの声を上げる。その不躰な視線が痛くてつい兄の背中に隠れたのがまずかった。

「かわいいーい」

「ほんとに言ったとおりだな」

そこで言い含められていた呼び名を、兄を見上げて口に出した。

「お……お兄ちゃん」

彼らの間に衝撃が走り、歓声が上がる。

「こりゃ萌えるわー」

「いいなー」

何なんだ、この人たちはっつ！

肩を引き寄せられて兄を見遣ると意地悪な笑みを湛^{たた}えている。

「お前らにはやんなーい。こいつ、俺見て育ってるから理想高いし」

「うわ、ムカつくー」

兄よ……友達選べ。

その後も兄は自分好みの服を買っては私に着せて連れて歩いた。繰り返すうちによく飲み込めてきた。兄は『理想の妹が服着て歩いたらこんな』を実践しているのだということが。

両親から植え付けられた『理想の妹』像は朽ち果てることなく、兄の中で生き続けていたが、時間的物理的な距離によって徐々に歪められていったと思われる。肝心の私がちっとも『理想』になっしてくれないので、強制的手段を取ることにしたのだ。都会に出てきたばかりで心もとない私につけこんで。

それだけではない。

専門学校時代は門限を課し、交友関係には口を挟んだ。男女交際はもちろんのこと、合コンも一切禁止。

恋愛には興味はなかったけど、締め付けが厳しければ反発心も湧いてくる。

子供時代のように兄に食ってかかると、いちいちもつともな理屈をつけては私の主張を封じ込める。昔からディベートでは負けたことがなかった兄だが、弁護士になって理論武装に更に磨きをかけたようだ。

理論では勝てないので感情に訴えると、決まり文句が炸裂する。「俺は家長だよ」「家長を何だと思ってるんだ」「家長の言うこと

がきけないのか」

あんまり家長家長言うものだから、携帯の兄の登録名を【かちよー】としてやった。

しかし、最大の衝撃は私が門限を破って帰宅した夜に起きた。

ウザい兄から一時でも自由になりたくて、携帯の電源を切って専門学校の同級生たちとカラオケに行った私に、黒い笑みを浮かべて「お仕置きだな」と一言告げる。

ビクっとして身構えると、私の部屋からあるものを持ってきて着替えるように促された。

――高校時代のセーラー服。

そしてソファに腰を掛けた兄の目の前に立って、用意した台詞を言わされた。

「お兄ちゃん、ごめんなさい」

「お兄ちゃん、もうしません」

「お兄ちゃん、許して」

……最後に一番恥ずかしい台詞を口にしたときは、悶絶死寸前だった。

「お兄ちゃん、…………好き」

変態！

結局午後のデートを断った兄は、駅前百貨店に散歩がてら出かけようと提案した。いそいそと支度をする兄を横目に、うかつにもあんな台詞を口走った自分を呪う。

いつものことだが、兄は断る口実に私を使った。

「ごめんね。妹がどうしても俺じゃなきゃ嫌だって言うもんだから。昔からわがままでね、困った妹なんだ」

これでは執着しているのは完全に私ではないか。それが兄にとっては『理想の妹』だと分かっているにしても、いや、分かっているからこ

そ、忌々しいのだ。

エントランスで同じ階に住む奥様がたとすれ違い、声をかけられた。

「お散歩ですか？ 本当に仲の良いご兄妹ですね」

……パツと見はね。

翌日の月曜朝、心の中でブツブツ言いながら出勤した。兄のお陰でせっかくの日曜日が台無しになったのだ。ひとりでリラックスしたかったのに！

オフィスに到着してもブツブツ言っていたら、ふと空気がいつもと違うことに気づいた。同僚たちが何だかそわそわしている。特に女性陣。やたら机まわりを片付けたりとか、何度も鏡をのぞいたりとか。

「何なんですか、みんな」

壁に掛かったホワイトボードの汚れを拭き取りながら、一番近くにいた小林さんに訊いてみた。

「ほら、今日からでしょ、新係長。すごいよね、みんなの期待度」
クスクス笑って続ける。

「役付き会議が終わって、もうそろそろ来る頃じゃない？」

ああ、例のできる男でいい男とかっていう。

「おはようー」

真後ろでいきなり声がしたのでびっくりして振り向くと、佐久間さんだった。

「あれ、佐久間さん、今日遅くないですか？」
何だかニヤニヤしちゃって、気味わる。

「ポチ、俺のことは今日から佐久間主任と呼べ」

「……改名したんですか？」

「……天然か、それともわざとか、ああ？ どの口が言ってんだあ？」

両頬を摘まれて左右にびよーんと引っ張られる。

「す、すびばせえん」

「……お前さんたち、入口を塞ぐんじゃない」

呆れ顔で入ってきたのは松永部長。

「つたく、しょうもないことやってんな」

工藤課長は苦々しげに。

そして、クスッと笑ってこちらを見た人物は、涼しげな表情で。

——これが瀬尾係長か。

印象的な二重の目が興味深そうな色を浮かべている。すっきりと通った鼻梁の下には笑みを乗せた薄めの唇。自然な黒色の髪は、トップは長めだが耳周りと襟足が短く清潔感にあふれ、整った顔立ちに嫌味を与えない。

背筋がぴんと張った立ち姿は長身の身体を更に大きく見せていた。細身だが決して貧相ではなく、むしろ引き締まった体つきは野生の鹿を連想させる。

まるで絵のモデルにでもなりそうな——というより、一枚の絵から抜けだしてきたかのような美しい人。

WEB事業部、本日王子様御降臨。

第五話 兄と私（後書き）

ようやく相手役登場。これで次回から話が動き出します。

これまで分割していたものを一つにまとめました。

秋田弁については、誤りがありましたらご指摘いただけると助かります。

若者が話す言葉なので、コテコテの秋田弁よりは少し標準語に近い感じなのかな、というイメージで書いています。

＊秋田の方からご指摘をいただいて、秋田弁の表記を多少改めました。

第六話 係長の秘密

「王子様、もとい、瀬尾達也係長。二十七歳、東京生まれ。K法学部出身、入社六年目。身長百八十二センチ体重六十九キロ。」

一年間の営業部勤務のあと、PR事業部に異動。化粧品、アパレル、家電等々の会社のPRを担当し、彼が指揮するチームは社長賞を二度獲得。入社四年目に主任に昇進。

社内恋愛は一切しない主義。それでも『あわよくば』を狙う女性社員から果敢にアタックされるも全く相手にしない。『もったいない……』との声が男性陣から聞こえてきそうな、実際石津さんあたりから漏れ聞こえてきたような気がするが、本人は周囲のやつかみなどどこ吹く風である」

「お前、それは何なんだ」

「瀬尾係長のプロフィールですよ。石津さん、知りたがってたじゃないですか」

「だからそれになんで俺の名前が出てくるんだ！」

「続きまだありますよ！ 石津さんが知りたがってた女性関係。ええと、これまでに交際した女性は多数。全てが女性からのアプローチによるもので、平均交際期間は約五ヶ月。同時期に複数の女性との交際もあり。未確認ですが三股かけていたとの情報も。『あいつは女を口説いたことがない』とは同期であるS間主任の証言です。また『あいつの傍にいとオコボレがもらえることもあるんだよね』とニヤつきながらつぶやいたことから、どうやら実際にオコボレをもらったと推測されます」

「ポチお前っ、俺の名前出すなって言っただろうが！」

「相手は美人でキャリア志向の女性が多い。職業は雑誌編集者、テレビ局ディレクター&AD、キャビンアテンダント、ファッションモデル、芸能人……」

「マジ!？」

「それはガセネタ」

噂話で盛り上がる場に響き渡る魅惑的なテノール。皆が部屋の入口に振り向き、声の持ち主を確認する。王子様の登場だ。

「おはようございます」

「おはよう」

真っ直ぐこちらに近づき輪の中に入る瀬尾係長。

「朝から盛り上がってるね」

声に含まれた皮肉な調子に、現場を押さえられた同僚たちは慌てて責任転嫁を始めた。

「あっ、いやっ、こいつが面白いネタがあるって言うから」

「ゴシップなんてくだらないからやめろって言ったんすよ」

そろって私に非難の視線を浴びせる。みんな喜んで聞いてたくせに！

係長は困ったような目をこちらに向けた。ヤバイ、何を言われるのかと身構える。

しかし彼は苦笑して同僚たちにチクリと言葉の針を刺した。

「噂話っていうのは一人じゃできないと思うけど？ 今度僕に関する面白いネタが入ったら、僕も混ぜてもらおうかな」

あまり怒ってはいない様子の彼にとりあえず安心して、皆が白々しい笑いを返す。そこに松永部長と工藤課長が入ってきたので、輪を解いてそれぞれ持ち場に戻った。

瀬尾係長が異動してきて一週間。

このどちらかというとかサツで下品なWEB事業部に端然とおわす王子様は、果たして馴染めるのだろうかという周囲の心配をよそに、あっという間に自分の居場所を見つけてしまった。女性社員はもちろん、男性社員の信奉も集め、現在人気沸騰中。寄ると触ると

彼の話題で盛り上がっている。

何と言ってもその外見がまず目を引く。物腰は柔らかで口調も丁寧だ。王子様というのもなるほどかなずける。が、時折見せる「エロカッコいい」（某同僚談）表情もまた彼の魅力の一つで、女性たちを惹きつけてやまない（のだそうだ）。

そこがウチの兄と違うところで、兄の場合は職業柄、知的で真面目でシャープな印象を与える（ように見せている）。

さて、係長のモテ度の高さは毎日昼時になると確認できる。
すなわち、ランチのお誘い。

取っ換え引っ換えどこその部署の女性社員たちが、あるときは単独でまたあるときは複数でやってくるのだ、ここ十階のWEB事業部まで。これには私たち全員が仰天したと言っても過言ではない。

女性社員からのディナーや飲みの誘いには絶対に応じない係長であるので、ランチだけが彼女らに残された唯一の希望なのだろう、とは杏子さんの意見である。聞くところによると、誰が係長とランチに行くかを巡って喧嘩になったこともあるそうなの……

私たちWEB事業部が十階で平和を享受している間に、階下ではそんな争いが繰り広げられていたとは、あな恐ろし。

ちなみにこの一週間、係長は彼女らの誘いには応じず、WEB事業部の同僚たちとランチに行く方を選んでいく。これは、新しい職場に早く馴染もうとする彼の立場からすれば当然だろう。そういう事情を彼女らもちやんと汲んであげればいいのに……

パソコンのメールチェックを始めたところで肝心なものを石津さんから受け取っていないことに気づき、直ちにメールで督促した。

《情報料》

このために職場のお姉サマ方による噂話に首を突っ込んでネタを集めていたのだ。この世の中、情報を制する者が勝つ。

ところが彼の返事は実に素っ気なかった。

《ガセネタに払う金はない》

私の努力をむだにする気か。

《他にもいいネタありませ》

《要らん》

ちっ。ケチ！ 今日のお昼代にしようと思ったのに。

報酬をもらいそこねてムスツとしていると、藤田さんから声をかけられた。

「ポチ、これあげる」

目の前にポトンと置かれたものは、抹茶フレーバーのミルクキャンディ。

「きゃうーん、藤田さん」

藤田さんはプログラマーとして技術上のサポートをしてくれるだけでなく、時々こうしておやつをサポートもしてくれる。いい人だなあ。いや別に餌をくれるから懐いているわけではない、念のため。情報料をもらえなかったのは残念だったが、おやつが降ってきた。収支はトントンだ。それに係長のはほとんどゴシップの類だったしなあ。でも本人に聞かれていたのは大いにまずかった。怒ってないみたいだからよかったけど。

そつと瀬尾係長に目を向けてみると、彼も自分の席からこちらをじっと見ている。どきっとして慌てて目を逸らした。

やっぱり怒ってるのかな。うわ、まずいなー。これはますます訊きづらくなってしまった。

というのも、同僚たちが瀬尾係長フィーバーするなか、私はどうも心に引かかるものがあって気になっているのだ。係長とどこかで会ったことがあるような気がする——いわゆる既視感というもの。でもどうしても思い出せない。

係長がこれまで所属していたPR事業部は八階に、ここWEB事業部は十階にあり、業務が重ならない限り顔を合わせることはない。

もちろん同じ会社にいる以上その可能性は低くはあってもゼロではなく、例えば主任以上の管理職は毎朝十階の会議室に赴くから、遭遇することもあり得る。

ただWEB事業部室というのは重役室に近い奥まった場所にあり、会議室の方が十階の入り口からは近いために、役付きの面々と顔を合わせるなど滅多にないのだ。それに彼ぐらいの美形なら社内では会えば印象に残るはずだ。

さりとて社外での接点となると更にないわけで、どんなに考えても答えは見つからない。

だからと言って係長本人に尋ねるのもためらわれた。「どこかで会ったことありませんか？」なんて、ナンパじゃあるまいし、恥ずかしくて訊けるかって。

しかし係長は私を知っているような素振りにはまるで見せない。思い違いだったのだろうか。訊こうにもきっかけがつかめずもやもやとしていたところに、噂話をしていたことで悪印象を抱かれてしまっただけだ――そう思っていた矢先。

「あー腹減った。俺もうお昼行くね」

時計を見ると十一時四十五分を指していた。

我がWEB事業部では昼休みの時間は各自の裁量に委ねられている。各々の仕事の進捗状況によって、キリのいいところで行っていくのだ。

「藤田さん、私も一緒に行っていていいですか？」

「あれ、お弁当じゃないの」

私は節約のため毎朝弁当を作る。弁当派の女性社員は他に二人いて、時折おかずを交換するのも楽しみの一つだ。

「お米切らしちゃって。買うの忘れてたんですよ」

「ポチはよく食べるからね」

日頃から兄には「たくさん食べて大きくなれよ」などと言われて

いるせいか、我が家の米の消費量が多いのは確かである。しかしすでに二十歳も超え、今さらどこをどう大きくしろというのか。

唯一思い当たる部分に目をやった。……ま、小さくても困る人は誰もいない。

しかし藤田さんには無難に反論することにした。

「食欲の秋ですからねえ」

「だからポチの食欲は一年――」

「瀬尾さん」

馴染みのない甲高い声が彼の声をかき消した。

部屋の入口には係長のファンと思いき若い女性社員三人が立っていて、笑顔を振りまき彼ばかりか同僚たち全員の注意を引いている。一番手前にいて目についたのは明るい茶色の巻き髪をした女性で、存在感のある胸を見せつけたのか身体にピタッと貼り付くようなカットのブラウスは、嫌味と捉えても差し支えないだろう。

係長が近寄って二言三言会話を交わす。途端に笑顔がしぼんで「えー、またですかあ」と三人は不満げに帰っていった。

「たまには一緒に行ってやんねえと人気落ちるぞ」

佐久間主任のからかいを係長は笑っていない。

「じゃあ落ちる頃に行くことにするよ。かなり先になると思うけど」「お前が言っても冗談に聞こえねえからムカつくんだよ」

同期ふたりの掛け合いに他の同僚たちの間から笑い声が上がった。

藤田さんと私はパソコンの電源を落として、休憩に入るべく席を立った。周りはまだ立ち上がる気配がないので、「お先です」と声をかけて入り口に向かう。

先程の女子社員たちが立っていた場所には残り香が漂っていた。その匂いとあのやけに明るい茶色い頭が妙に私の記憶層を刺激することに気づく。

あの髪の毛の色、この甘い香り、覚えがある。どこだった……？埋もれた記憶を掘り起こそうと夢中になっていたら、いつものよ

うに非常階段に足が向かってしまい、背中から藤田さんに声をかけられた。

「ポチ、どこ行くんだよ」

「へ？」

あ、そうだ。外にお昼ごはんを食べに行くんだった。エレベーターで……

その瞬間、頭に冷水をぶっかけられたようにこれまで眠っていた部分が突然目を覚ました。さまよっていた記憶の湿原で少しずつ霧が晴れてゆき、今まで覆い隠されていたものが露になる。

「あああっ！」

走って部署の入り口に戻り内部を見渡すと、私を訝しげに見る皆の視線の中で、瀬尾係長のそれにぼつちりとぶつかった。

あれだ、あのときの。間違いない。

「何だどうしたポチ」

「ビツクリするじゃないよ」

口々に驚きを伝える同僚たちの傍らで、係長の目には不審の色が浮かぶ。

「何でもありません」

焦った私は急いで踵を返しその場を逃げ出した。

あれは今年の四月。今日のように弁当を持ってこない日があった。ただその理由はお米の買い忘れでなく、兄に強奪されたから。

その日、午前中は家で資料を作成し午後から出勤する予定だった兄は、昼食を作ったり外食したりする手間を省くために、私が早起きしてせっかく作った弁当を分捕った。その代わりしっかりランチ代はもらったが。

午前中の仕事が一段落して席を立ったのが十二時十五分。すでにほとんどの社員は昼休みに入っており、私はひとりで部屋を出て、終業後にいつもするように非常階段へ向かった。

階段室に入るとふと違和感を覚える。いつもなら静寂が包むそこにかすかに人の声が聞こえるのだ。話し声が近づくにつれ、声の主は若い女性と分かった。どうやら電話中のようなうだ。時折クスクス笑う楽しそうな様子がこちらにも伝わってくる。

スニーカーの靴音は軽すぎて彼女には聞こえないだろう。ゴム底の靴にありがちなキュッキュツという音もこの階段では発生しない。突然上から現れた私に驚かなければいいけど。

七階まで降りると突然女性の声が止んだ。オフィスに戻ったのだろうか。が、耳をすますと人の気配はする。そして、衣擦れの音と、「ん……」というくぐもった声。

何だろう。好奇心に駆られて、息を殺し足音を忍ばせ、更に階段を降りる。

踊り場から六階に続く階段に足を踏み出そうとしたそのとき、嗅覚が甘い香りを認識し、視覚は非常扉から少し離れた壁際に、ある情景を捉えた。

——ミリの隙もなく体を密着させた男女のキスシーン。しかもかなり濃厚な。

生まれてこのかたこんなに濃い——いや濃くなくても——キスシーンを生で見たのは初めてのことで、つい目が離せなくなってしまうった。

別にのぞき見したかったわけではないのだが、結果的にのぞき見だったと言われれば、はいそうでしたと認めるしかない。

本能に従って行動する男と女の『生』に圧倒されている自分がそこにいる。

やがて男の唇が女のそれから離れ首筋に伝う。女は明るい茶髪の手を少し後方に仰け反らせ、その角度を変え、そして目を開けてトロンとした視線を泳がせて——踊り場で足を凍りつかせている私を

認めた。

「ひっ！」

これは私の悲鳴だ。自分の声が足の呪縛を解き、秒速で回れ右をしてもと来た道を今度は駆け上がる。八階に到着して防火扉を開け中に飛び込み、IDカードでピピッと裏口を通過し、反対側のエレベーターホール目指して急ぎ足で廊下を歩いた。

八階に来たのは初めてだったが、十階とレイアウトは同じなので最短距離を脇目も振らずに突き進む。幸い昼時のためにオフィスにはほとんど人影はなく、私を見とがめる者は誰もいなかった。

下りのエレベーターの中で一息つく、私が逃げ出す必要などなかったことに気づいた。非常階段は公共の場所であるのだから、あんな所でキスなんかしている方が悪い。

とはいえ、見てしまったという後ろめたさがあつたのも事実だし、素知らぬ顔をしてあのふたりの前を通り過ぎることができるよう、私は大人ではなかった。

あのふたりは六階のオフィスで働いているのだろうか。

制服に身を包んだ二十歳くらいの若い女。そして二十代後半くらいで、顔の造作が整った長身の男。私の顔を男は見えていないはずだから、この先ビルの中で万が一会うことがあっても気づくことはないだろう。

ディープキスを生で見た動揺は、私の前に注文した生姜焼き定食が運ばれてくるまで続いたが、やがてドラマのワンシーンのように現実味のない映像として頭の中で処理されていった。

その日以降私は昼休みに非常階段を使うことはなく、あの制服は五階に入っているオフィス機器リース会社の受付嬢たちが着ていることが分かったが、女にも男にも二度と出会うことはなかった。

そしてこの日のことは誰にも告げぬまま、いつしか私の脳裏から

忘れ去られた。

第七話 十年愛

眠っていた記憶を完全に呼び覚ますと、瀬尾係長の姿が目の前に浮かんであの情景の中にぴたりとはまった。

係長はあのとときの男だ。私をいたく動揺させた生キスの張本人。

あー、思い出すだけで恥ずかしい！

あの場に居合わせたことが！

バッチリ見ちゃったことが！

あの男が現在私の上司として同じ職場にいることが！

あれからすでに五ヶ月以上がたち、あのとき感じた後ろめたさなどもはや微塵も持ち合わせていない。代わって私の心を支配しているのは、上司の秘密を握ったという優越感。

爽やか王子様が。昼休みに。非常階段で。恋人と逢引。ねっとりデ IPPキス。

ククククク。

それにしても同じビルに彼女がいるなんてなあ。いや、すでに元カノ？ 平均交際期間は五ヶ月だったっけ。

「何考えてんの、ポチ」

「へっ？」

意識を目の前にいる藤田さんに向けると、不思議そうな目がこちらを見ていた。

「さっきからニヤニヤして。顔も赤いし」

「あ、え、えーと、海老フライ定食楽しみだなーって」

カントリー調の様式で統一されたこの洋食屋は藤田さんの行きつけの店だ。木目を生かした粗雑感のあるテーブルが肩肘をはらずくつろげる雰囲気に一役買っている。お陰でランチセットを注文したあとはすっかり気が緩んで、思い出したばかりの記憶にどっぷりと

浸ってしまった。

誤魔化されてはいなさそうな彼の様子を見て、強引に話題を変えることにした。

「そうだ、都さんはお元気ですか？」

「うん、元気。再来週修学旅行の引率で京都だって」

都さんというのは彼の恋人だ。一度会わせてもらったことがあるが、ふんわりと人を包み込むようなタイプの女性で藤田さんとは似たもの同士、ふたりと一緒にいたら縁側でひなたぼっこをしているような気分になってしまった。

高校で国語教師をしている彼女はこれでは生徒たちになめられるんじゃないかと心配になるが、学校では『ピシピシ厳しいお姉さん』というキャラの先生らしい。だからこそプライベートでは恋人の藤田さんに見せる顔がふにゃっと柔らかくなるのかなと思ったたりもする。

「いいなあ。京都かあ」

「本人は大変だって言ってるよ。やんちゃな子たちばかりだから、何も問題が起きずに帰ってくることだけ考えてるってさ」

都さんのことを語るとき、彼の表情や声には温もりが現れる。周りの空気をじわじわと温めていくぐらいの、体温より少しだけ高めの心の温度。早い話が互いを深く想い合っているカップルというわけだ。

「そりゃあ、修学旅行っていったら高校生にとっては一大イベントですもんねえ、藤田さん？」

言外に含まれた意味を察して彼は少し赤くなった。

「よく覚えてるなあ」

「忘れるわけじゃないですよー。あの話思い出すだけでお腹いっぱいになっちゃうんだから」「……ポチに限ってそれはないと思うけど」

「どういう意味ですか！」

そこに海老フライ定食が運ばれてきた。藤田さんには煮込みハンバーグ定食。ハンバーグソースのツヤツヤした色合いを見てそちらも美味しそうだと思っていると、向かい側から小さなつぶやきが聞こえてきた。

「……そういう意味だよ」

藤田さんと都さんの馴れ初めを初めて聞いたのは、私が派遣社員として働き始めたときにWEB事業部で開いてくれた歓迎会だった。まだ職場にも慣れず年齢も一番下の私は緊張ばかりしていたが、前の会社のこととか、どこの専門学校に通ってたとか、とっつきやすい話題を振られて少しずつ硬さも解れてゆく。

酒が入るとやはり気分がよくなって舌も動きやすくなるのか、突っ込んだ質問をされるのはお決まりと言ってもいいだろう。

「彼氏いるのー」

ここで計算してわざと否定する女の子たちも存在するが、私の場合本当のことなので計算する理由も必要もない。

「えー、いませんよー」

「うん、そんな感じだねー」

そんな感じて何？

この頃の私はまだ同僚たちの為人を把握していなかったから、彼らが心の中で笑い転げていることには気づきもしなかった。

オフィスでも隣の席でこの場でもたまたま隣に座った藤田さんは、遠慮しがちの私のために率先して料理を取り分けてくれて、「どんどん食べて」と優しく笑っていた。思えば私の嗜好はすでに見破られていたのかもしれない。

そんな彼に甘えて気安く恋の話を振ったのがそもその始まり。

「藤田くんはねー、十年付き合ってる彼女がいるんだよ」

にまにましながら杏子さんがバラした情報に、私は食いついた。

「十年!？」

藤田さんと都さんは高校三年間同じクラスで——このさわりだけで私は「ぎゃっ」と奇声を上げ——、一年半の片想いの末にようやく都さんに想いを告げ——「いやーん」と悲鳴を上げ——、卒業後は別々の進路となるも今の今までずっと交際を続けてきた——と聞いてテーブルに突っ伏した！

「素敵！ 純愛！ 十年愛！」

もはや緊張や遠慮のかけらも見せずに私は叫んだ。驚いた藤田さんは身を引きつつ謙遜する。

「いやあのそんな大げさなもんじゃ……」

「十年もひとりの人を想い続けてるなんてすごいですよ！ 憧れますよ、女の子なら誰だって。ね、そうですね？」

興奮気味に彼をたたえ、同じテーブルを囲む女性社員たちに同意を求めた。

「うんうん、いいよね、純愛」

「私もしたーい」

「ホラホラホラ。で、どうなんですか、今でもずっとラブラブなんですか？」

ランランと輝いているであろう私の目を見てもはや逃げられないと諦めたのか、藤田さんは十年越しの恋人との現況を語った。

「ラブラブっていうより、もう空気みたいな存在かな。そこにいたら『あれいたの』って感じだし、いないとなんか物足りないような」
そこにいるのが当然などという描写に私は悶^{もだ}えた。

「もうだめ、これ以上聞けないっ。耳の毒！ ……で、告白はどうやって？」

「え？ ……訊くの？」

しかしまさかこれほどまでに悶える展開が待っているとは思いませんでした。まるで純愛映画にでも出てくるような都さんへの告白

シーン。

なんと修学旅行の班別行動で、強引に手を引っ張ってふたりきりになった上で一年半に及ぶ想いを告げたのだそうだ。驚いた彼女が泣き出してしまい焦ったが、嬉し涙と知って気が緩みその場に座り込んでしまったのだとか。

「ぎゃああ、もうだめえ」

こちらの萌えるツボを見事に突いてくれたお陰でもはや悶絶死寸前だった。同席する女性社員たちも紅潮した顔のニマニマがとまらない。

このあとはもう質問攻め。初めてのデートはどこだったとか、一番最初のプレゼントは何だったとか、まだ結婚しないのとか。照れながら質問に答える彼はとても幸せそうで。私の歓迎会だったはずが、途中からは『藤田さんから幸せをお裾分けしてもらおう会』に変わっていた。

話が一段落したところで私は藤田さんに身体ごと向き直り、心を込めて想いを告げた。

「藤田さん、好きです」

「はい？」

他の女性のことでさんざん惚^{のろけ}気ている男性に向かって告白する女に、周囲はギョツとなった。

「一途愛を貫く藤田さんって格好いいです。どうかこれからもうずっと彼女さんのこと好きでいてくださいね。浮気なんかしちゃだめですよ？ 彼女さんのこと裏切ったりしたら嫌いになっちゃいますよ？」

彼はしばらくポカンとしていたが、やがて破顔して私の頭にポンポンと手を載せた。

「うん、分かった」

……それ以来、藤田さんと都さんは私にとって憧れの純愛カップルで、ふたりの萌え萌えエピソードを聞くことが、ともすると枯れて

しまいそうな私の乙女心に水を与えてくれている。

昼休みが終わり部署に戻ると、人影のないがらんとした部屋で最初に目に入ったのは瀬尾係長の机だった。するとあのキスシーンが彼に焦点を当てて再び蘇る。

貪るように女の唇を求める男。長い腕が包み込んだ女の身体に押し付けるように重ねられる男の身体。隠されない欲望は鮮烈で荒々しく、刺激的だった。

でも私はゴシップをばらまきたいわけじゃない。本人にも他の誰かにも言うつもりはないけど、心理的に優位な位置に立ったことは確かだ。

ふっふっふー、係長、私あのコト知ってるんですよ。あんなふうに情熱的になっちゃうんですね。私だけが知っているヒ・ミ・ツ。

とはいえ、やがて続々と戻ってくる同僚たちの中に彼の姿を認めて、ついニンマリとしてしまった私はまだまだ人として修行が足りないのかもしれない。

それにしても、係長のように取っ換え引っ換え女性と付き合う男性と比べたら、やっぱり藤田さんは素敵だなあと思う。情熱的じゃなくてもいいからひとつひとつ愛情を積み重ねてふたりの歴史を作っていく、そんな男女のありように私は惹かれるのだ。

その日の業務が終わると、私は休憩室に行って兄に電話をかけた。今日は外で一緒に食事をする約束になっていたのだ。

正直兄との外食など気が進まないのだが、『高級レストランになかなか自腹では行けない妹に日頃の家事労働をねぎらって食事を共にする兄』の設定を楽しみたいらしい。

つくづくウザい兄だが、高級レストランの料理には罪はないので堪能させてもらうことにしよう。

「……ん、七時ね？　新宿のどこ？　……わがんね。怖いがら改札さ迎えさ来て」

こんなことを言ったらあの兄を喜ばせるに違いない。しかし、いい年をして迷子になる恥ずかしさを思えば、甘えるのは癪しゃくに障るが我慢するしかないのだ。

兄は私が頼めば喜んで会社にだって迎えにくるだろうが、変態と一緒にいるところを同僚に見られるのだけは御免被る。

「越智さん」

通話を終わると背中に声をかけられた。この魅惑的な声の持ち主が誰かは見なくても分かる。振り向くと、そこにいたのはやはり瀬尾係長だった。

「ちよつといいかな」

「はい」

何だろ。係長とふたりきりで話をするのは初めてだ。自分が少し緊張しているのが分かった。

「今朝のことなんだけどね」

女性たちを魅了する王子様の微笑みを私に向け、係長は今朝の噂話について言及した。

「誰が言ってるのかなあ？　僕がモデルだの芸能人だのと付き合ってるって」

口調は柔らかいが、ひんやりした空気を感ずる。

「私が聞いたのは大森さんです。でも大森さんも又聞きだと思えますよ。係長がモデルの藤村レイナと一緒にいるのを見た人がいるって」

ゴシップをばらまいた犯人探しをしたいのだろうか。むだなような気もするが。

しかし目を細めた係長は思いがけない言葉を口にした。

「それは本当に僕だったと思う？」

「え？」

「もしかしたら見間違いつてこともあるよね？ その場で僕と話をしたわけじゃないんだろ？」

噂の信憑性について言っているわけか。でもそれがゴシップというものだし、今朝披露した話はどれも出回っているネタを集めただけで私が流しているわけではないのだが。

「確証もないことをペラペラ喋るのって無責任じゃないかな。越智さんはどう思う？」

柔らかな口調と笑みを湛えた口もと。そしてそれらに不調和な――険しい目。そこから真っ直ぐに放たれる視線が私をたじろがせる。王子様の仮面に隠された顔だ。沸き起こった警戒心がそう告げていた。

そしてある確信が心の中で水位を高めていく。

この人は私があのかのキスの場に居合わせたことを知っている。知った上で釘を刺してる。ペラペラ喋るなど。

「……申し訳ありませんでした。私が軽率でした。以後気をつけます」

ここはとりあえず退くのが賢明だ。

「うん、ありがとう」

彼の目から険しさが消え、再び王子様のにこやかな微笑みが現れる。

「それじゃ、お先に失礼します。お疲れさまでした」

「お疲れさま」

足早に横を通り過ぎようとして、もう一度声をかけられた。

「六十九キロじゃなくて六十七キロ」

「はい？」

「僕の体重。訂正しといてね」

その爽やかな口調も私の心の中ではもはや清涼な響きとはならなかった。

この男————要注意。

第八話 歡迎会

「はい、こちらです。一番奥ですから。ちょっと山本さん、女の子は放つといてとつとお店に入ってくださいよう」

店の前に立ち、工事現場の交通整理よろしく肘から先の腕を左右に振って誘導する。

今日は瀬尾係長の歓迎会である。幹事となって仕切るのは部署で最年少の私の役目だ。

場所はいつもの洋風居酒屋を選び、宴会用個室を予約した。これならば多少騒いでも迷惑にはなるまい。何しろあの人たちときたら周囲の輦蹙ひんしゅくも顧みず平気で猥談わいだんをするのだから。

全員が入店したところで店側に合図をし一番最後に個室に入る。

二つある長テーブルにはすでに同僚たちが着席していたが、ものの見事に男女で分かれていた。女の園と化したテーブルの中心には黒一点の瀬尾係長。彼女らの下心が見え見えの座席配置である。

女性社員たちに囲まれた彼の困った様子がまた好感を誘う。しかし美しい仮面の下に隠された素顔を一瞬垣間見た私としては、あれも計算の内だろ、と意地悪な見方をしてしまう。酒の席で彼がボロを出さないかどうか見届けたいところだが、今日は幹事なのでそれもできない。

食べ物コースで決められてあるので、今は飲み物の注文が先だ。私は店員に渡された紙とペンを手に握った。

杉本前係長の送別会——と言っても同じフロアにある別の部署に異動になっただけなのだが——でもそうだったが、同僚たちは人使いが荒い。しかもザルのようによく飲む。

追加注文のために呼び鈴を鳴らしても忙しいのかなかなか来られ

ない店員に直接注文しにいき、その間に空いたグラスを片付け、サーバーをテーブルにこぼしたからと布巾を取りに行き、戻ってきたらまた追加注文が入り——ちっとも落ち着いて飲み食いができない。

「ポチ」

私を呼ぶ声に振り返ると藤田さんが手招きしている。

「もういいから座って食べなよ」

そう言って数種類の料理が載った皿をすつと寄越した。

「え、これ、私のために取っといってくれたんですか？」

「冷めちゃってるけど」

「わーん、藤田さん好きー」

もし私に尻尾が生えていたとしたら、間違いなく振っていたはずだ。嬉々として藤田さんの隣に腰を下ろし彼からの好意を早速口に入れ始める。

そこへどうやら中座していたらしい瀬尾係長が、向いの空いていた席にやってきた。

「越智さん、幹事ご苦労さま」

私にまで好感度アップを図りたいのか爽やかな笑顔を浮かべて、部下の労苦をねぎらう上司を演じる（ように見える）係長。

「いえ、とんでもないです」

無難な返事をする一方で思考はぐるぐると渦を巻いていた。

休憩室での一件以来私は彼を警戒の目で見るようになったが、つぶさな観察もまた怠らなかった。『瀬尾係長観察日記』が書けるほどだ。

その結果分かったことは、呆れるほどに爽やか・穏やか・涼やかな態度を崩さず冷静沈着に業務を遂行する、完璧な王子様の姿だけであった。しかしあのとき確信したことを否定できずに思考を重ね、ひとつの興味ある疑問にたどり着いたのだ。

——なぜ五ヶ月以上も前のことを今更秘密にしたいのか。

昼休みに逢引していたなどと言い触らされればバツの悪い思いをすることは想像に難くない。しかし恋人同士が会うこと自体は悪いことでもなんでもないし、もしも元カノだとすればそれこそ『今更』ではないか。

そこで越智探偵が思うところ――

「越智さんと藤田くんは仲がいいよね。もしかして付き合ってるの？」

……何を言ってるの、この人？

係長が放った突拍子もない質問は推理で稼働中の頭には負荷が高すぎ、一瞬返答が遅れた。

「そんなんじゃないですよ」

「そんなんじゃないよ」

後の台詞は誰が……と思ったら、係長の左隣、私の斜め向かいに座る佐久間主任だった。

「こいつ、藤田のファンだからさあ」

「ファン？」

きょとんとする係長に、純愛一直線の藤田さんに私が萌えまくり、ついでに愛の告白までした件を主任が語る。

「彼女一途の藤田が好き、浮気をする藤田は許せない、だからこのふたりが付き合うことは永遠にナシ」

「それは……不毛の愛だねえ」

笑いをこらえるような表情が私を妙に苛立たせた。

「藤田さんのファンっていうより、純愛のファンなんですよね」
分かったように論評したのは私の右隣に座る石津さんだ。

「お子チャマなんだよなあ、ポチは。どうせデートしたこともねえんだろ」

片方の肘を椅子の背に載せて寄りかかり、馬鹿にした目で主任が私を見る。

「初日におさげで来てびっくりしたわ。どこの田舎の高校生かと思
った」

「それじゃ田舎の高校生に失礼ですよ」

黙っていれば言いたい放題の彼らに我慢がならず、私はとうとう
叫びだした。

「おさげでなんか来てないですよ！ それに田舎田舎って言うけど、
冬は寒くてやることないからみんな恋愛するんです！ 恋愛経験豊
富なんですよっ、田舎の高校生は！」

厳密に言うとは私はその中に含まれていないのだが、そんなことは
分かるまい。

「ポチって部活少女だったんだろ？ 冬場も室内練習場でトレーニ
ングばかりしてたって言ってなかったっけ？」

石津さん、何でそんなことを覚えてるんですか！

反論できずに口をパクパクさせていたら、周りにどつと笑われた。
悔しさと恥ずかしさで脳みそが沸騰するかと思っただけだ。これを
静めるには飲むことしか思い浮かばず、だいぶ汗をかいたレモンサ
ワワーのグラスを口に運びグイッと傾けた。エロ軍団への仕返しを心
に誓いながら。

エロ軍団とは佐久間主任、石津さん、山本さんそして工藤課長を
指す。飲み会のたびにエロについて語り、武勇伝を競い合っている
のだ。

今夜ももれなくエロ談義に花を咲かせ、私が藤田さんに呼ばれて
席についたときには『一回のセックスで何度女をイカせられるか』
について盛り上がっていた。当然私としては関わりたくない話題で
あるので、彼らに背を向けて聞こえないふりをしていたのに。

瀬尾係長の魅惑的な声が響いたのはそのときだった。

「デートの相手ならいるよね、越智さん？」

あまりの自然な言い方に名前を呼ばれても自分のことだとは分か

らず、しばらくピンと来なかった。

「電話で話してるの聞いちゃって。待ち合わせ場所が分からない、怖いから迎えにきてって甘えてたよね」

なんですと？

びっくりして声も出ない私とは逆に、なぜか得意げな様子の彼の舌は止まらない。

「越智さん秋田弁使ってたし、もしかして、一緒に上京してきた彼氏とか？ だったらそれこそ純愛相手じゃないか。越智さんもすみにおけないな」

なんつーことを！

「マジ！？」

「ありえねーだろ」

男性社員たちが半信半疑につぶやいた。それにかぶさるように隣のテーブルから飛んできた杏子さんの鋭い声。

「ちょっと、あたしそんなの聞いてないわよっ」

このタイミングの良すぎる食いつき。よもや離れた席で聞き耳を立てていたのか？

「あ、そういえばポチ、最近引っ越したって言ってたよね。まさか同棲してんの？」

なぜそうなる！

飛躍しすぎの質問をわざと冗談として流そうとする目論みは、彼女の周りにいるお姉サマ方によって潰えた。

「え——っ！」

「うそ——！」

「ポチのくせに——！」

荒々しく椅子を蹴って立ち上がる勢いで迫る女性陣に恐れをなし、藤田さんを継る目で見た。私の味方はもはや彼だけだ。……と思っただのにいつもの優しい眼差しはどこへやら、その目は笑って私を突き放していた。

「ポーチー。今までさんざん俺のことは聞くだけ聞いて、自分のこ

とは話してくれないのかな？ うん？」

……もはや孤立無援か。

再び頭が沸騰しそうになったが、落ち着け自分、と言い聞かせて状況把握に努めた。

係長が電話で話しているのを聞いたという内容からすると、相手は兄しかいない。なのにそれを田舎から一緒に上京してきた彼氏だとか？ よくもそんな当て推量を皆の前で言ってくれたな！

これではもう下手な言い訳は通用しない。ああ、あの兄のことを話さねばならないのか。せっかく今まで隠しに隠してきたのに……私はため息をついて口を開いた。我ながら驚くほど低くて暗い声だった。

「……兄ですよ。あの日は兄と一緒に食事をする約束をしていて」

「そうやってまたベタな言い訳を」

言い逃れは許すまじという皆の目が怖い。

「本当ですって！ 一緒に暮らしてるのも兄ですから！」

「証拠は？」

ここは取調室かよ！

仕方なく財布に入れっぱなしにしている兄の名刺を取り出して藤田さんに差し出した。

「平岡・渡辺・越智総合法律事務所、弁護士、越智悠人」

彼が名刺を読み上げるとあちらこちらから驚きの声上がる。

「弁護士！？」

「マジ？」

「自分の事務所持ってるの？」

正確に言うと兄は一年半の司法修習を終えると現在の事務所に就職。三年間イソ弁（雇われ弁護士）として勤め、今年の一月からパートナー（共同経営者）になった。

それをもごもごと口の中で小さく説明しながら、同僚たちの手か

ら手へと渡っていく兄の名刺を見守っていると、妙に艶っぽい声が落ちてきた。

「ちよっとお、ポチ、お兄さんいくつ？」

ほら、きたよきたよきたよ。

早速食いついたのは手塚さん。二十九歳、独身、彼氏なし。

「……二十八歳です」

わあっという歓声と共に空気が華やき、お姉サマ方の顔から厳しさが消えた。なんと現金な！　こうなることが分かっていたから兄のことは話したくなかったのだ。

「独身だよね？」

「年収いくら？」

打って変わって今度は獲物を見つけた肉食獣のように迫ってくる彼女たち。

ひいひい。誰か助けて！

「いい男かな」

「ポチのお兄さんなら悪くないでしょ」

「合コンしよ、合コン！」

いやいや、絶対会わせたくないですから！　それに皆さん、ついさっきまで瀬尾係長フィーバーしてませんでしたっけ……？

「やだねー、女って。愛よりも肩書きか。純愛よりも年収か」

女性陣の露骨な欲望に呆れた男性陣を代表して、佐久間主任が冷たく言い放った。

激しく同意して首を縦にブンブンと振っていたが、彼が続けて口に出した言葉でそれも止まる。

「それに比べたらエロスは普遍だよなあ」

一方、非難された彼女たちは怯む色も見せず^{ひる}にきっぱりとやり返した。

「肩書きのある人との純愛が理想なのよ！」

……見事なまでに開き直った答えは拍手ものであろう。

「条件をつける時点ですでに純愛じゃねえっての」

普段純愛とは付き合いたくない主任の批評など受け入れる気もない彼女らは、毒をもって応戦した。

「エロい足軽とじゃ純愛できないのよっ！」

「誰が足軽だよ！」

いきり立つ男性陣対女性陣。いったいなぜこうなった、瀬尾係長の歓迎会のはずが……そうだ、係長だ！

テーブルを挟んで向かいには、騒がしい周囲にもひとり端然と微笑む彼がいた。私の視線に気づいたのかこちらに美しい顔を向ける。そしてかすかな薄ら笑いを口もとに浮かべたのを見て確信を抱いた。わざとだ。わざとやったんだ。

皆が食いつくと分かっているわざと私のことを話した。どうして？ 彼の私生活を面白おかしく吹聴した私への意趣返し？ それとも部署内の興味を自分から逸らしたかった？

どちらにしても彼のせいで兄の存在がバレたのだ。お姉サマ方から合コンを迫られる事態に陥っているのは、他でもない係長のせいだ！

怒りにワナワナと震えていると、ふと黒い考えが頭をよぎった。いつそのこと皆の前である濃厚キスシーンの細部までバッチリ喋ってやろうか？

そう決意しかけると、係長が申し訳なさそうな表情で口を開いた。「ごめんね、越智さん。やっぱり憶測でものを言っちゃいけないね。何の証拠もなく他人の噂話なんてするもんじゃないな。いや、普段自分があれこれ言われているものだから、つい。本当にごめんね」

性格悪い……………

口を塞がれ為す術もなく私は肩を落とした。

第八話 歓迎会（後書き）

イソ弁…『居候弁護士』が元の意味らしいです。弁護士事務所の従業員ですね。

第九話 似てる？

体内でふつつと湧き上がった怒りが皮膚に到達し、全身の毛穴という毛穴から立ち昇っていく。決して目には見えないはずの負の揺らめきだが、隣に座る藤田さんには感知できているようだ。

「なんか黒いオーラが出てるよ、大丈夫？」

怒りの噴火が起きないかどうか心配げに見守る彼に心の中で返事をする。

もちろん大丈夫じゃありませんとも。

女性社員の皆様から兄及び弁護士仲間との合コンの約束をさせられたのだ。極力人前には出たくない兄が、お姉サマ方と合コン！

……あり得ない。

目の前で同僚たちと談笑する瀬尾係長を睨みつけた。

こうなったのはすべて係長のせいだ。彼の策略によって兄のことを話すハメになったのだから。

報復だ。仕返した。目には目を、歯に歯を。やられたらやり返せ。思いつく限りの『復讐』の類義語を並べて、粘度の濃い暗黒な情熱の温度を上げていった。彼に対する好戦的な気持ちを作っていくために。

何としても係長をぎゃふんと言わせてやる。私だって変態とはいえ抜け目のない兄の妹だ。同じ血が流れているのだ。用意周到に黒い計画を練って、彼の美しい顔を歪ゆがませてやらねば。

皮膚の下には青い血が流れているんじゃないかと思えるほどの冷たい決意表明だった。そうともなればたとえ暗い目的のためとはいえ私の脳細胞は活性化する。ここ数日の間に係長を観察して導きだしたある疑問を検証するのだ。

すなわち、数ヶ月も前の非常階段でのキスを口止めしたいのはな

ぜか。

推理その一。昼休みにこっそり逢い引きしていたという事実を秘密にしたい。

推理その二。相手の女の存在を隠しておきたい。

これらを検証するにはまず状況分析が必要である。あの女の身元を確かめるのだ。そうすれば秘密にしておきたい理由も自ずと分かる。

おおっ、なんだか探偵小説っぽくなってきたぞ。何を隠そう、論理的に推理を組み立てていくのは私の得意とするところなのだ、何しろ兄が弁護士だから。

越智探偵はさらに思考を進めたいのだが、今は飲み会の真っ最中、こうも周りがうるさくては脳内回路もきちんと作動しない。仕方ない、今は飲んでやる。

心に溜まった汚泥を流すべくレモンサワーのグラスを一気に空けた。

そこに新たな話題を提供したのはまたしても瀬尾係長だった。

「工藤課長、金子チャン——奥さんは元気にしてますか」

佐久間主任の左隣で、松永部長や秦野主任と共に先程からの騒ぎを傍観していた課長は、いきなり自分に話を振られて目をパチパチさせた後でニヤッと笑った。

「おう、元気元気。お前がN社の広報とどうなったのか知りたがつてたぞ」

「うわ、ヤブヘビ。もうすぐお子さんが生まれるって聞きましたよ。おめでとうございます」

工藤課長の奥さん、旧姓金子みどりさんは以前WEB事業部に勤務していた社員で、瀬尾係長や佐久間主任と同期にあたる。私は社内運動会で杏子さんに——課長ではなく——引き合わされた。在

籍当時ふたりは一番仲が良かった先輩後輩で、今でも頻繁に連絡を取り合っているのだとか。

退職したにもかかわらず情報に通じているのは、杏子さんが積極的に職場の近況を――特に課長の言動を――知らせているからだ。要するにスパイね。

『もしウチの人がおイタをしたら、遠慮なく言ってちょうだいね』
にっこりと微笑んだその顔は年齢のわりに幼さを残してはいたが、家庭ではしっかり夫の手綱を握っていると見た。

「あの金子チャンがねー、母親になるって何か信じらんねえよな。
まあ課長が父親になる方がもっと信じらんねえけど」

佐久間主任の揶揄^{やゆ}に周囲がどっと笑う。放つとけ、とふてくされた顔で課長はビールをぐいと呷^{あお}った。

当時のことを知らない私は課長の恋愛話に興味津々だ。女性にモテモテで独身生活を謳歌していた彼に結婚を決意させた女^{ひと}。乙女心が動こうというものである。

「課長の奥さんってどんな人だったんですか？　今は課長のことしつかり尻に敷いていそうだけど」

同期のふたりが目を合わせてぷつと吹き出すと、合わせたように周りの皆もゲタゲタ笑い出した。そんなに笑える関係だったのだろうか。

やがて主任は笑いを収めると課長夫妻の馴れ初めについて語り始めた。それを聞きながら忍び笑いをする同僚たち。「俺は尻に敷かれてなんかいない」という課長の言葉は誰も聞いていなかった。

工藤課長はかつて広告代理店に勤めていたが七年前に我が社に転職、係長としてPR事業部に配属されて手腕を発揮する。

営業部から異動してきた瀬尾係長（当時は平社員）は彼のもとでPRのノウハウを叩き込まれ、女関係が派手なところもついでに受

け継いだようだ。つまり工藤課長と瀬尾係長は様々な意味で師匠と弟子の関係というわけ。

その後課長は昇進してWEB事業部に異動するのだが、そこで出会った部下、金子みどり嬢を――食っちゃった。

「く……食っちゃった？」

「そ。食っちゃったの、文字どおり」

「佐久間。えげつない言い方はやめてくれ」

「他に言い方ありますか？ あ、手込めにしたとか」

「俺は悪代官か」

みどりさんは両親からそれはそれは大切に育てられた一人娘だった。女子高・女子大出身で男性慣れしておらず、真っ直ぐに育てられたせいか他人を疑うことを知らない。様々な誘惑から娘を守るために両親は社会人という身分になっても彼女に門限を課した。

過保護とも言える両親に反発を感じながらも最終的には彼らの意見に従う『良い子』であったことは、みどりさんにとって葛藤の一部であつたらしい。そこを巧みに突いた課長の手練手管により彼女が陥落するのは自然の流れとも言えた。

「年下のあたしから見てもとにかく無防備で隙だらけ、これはもうあたしが守ってあげなくちゃ、と思って実際ずつと守ってきたのにさ。よりによって異動してきたエロ上司の毒牙にかかっちゃって。例えるなら、毒グモの巣に絡め取られた蝶」

「相沢。上司への敬意を微塵も持ち合わせていないのか、お前は」

「ミジンコ程度なら持ってますよ」

「それは何だ、オヤジギャグか」

「はい、とあるオヤジについてのギャグです」

みどりさんの変化にいち早く気づいたのは、さすがに長年手許で

慈しんで育ててきた両親だった。

彼女の帰宅時間が毎日に遅くなり、ついには門限を破るに及んで二人は娘を問い詰めた。嘘がつかないみどりさんは、職場の上司と付き合っていることを打ち明ける。

烈火の如く怒った父親は会社に乗り込み、松永部長をも巻き込んで抗議した。上司が七つも年下の部下を弄ぶなど言語道断、どうやって責任を取るつもりなのか、云々。

日頃職場恋愛には寛容な部長も鼻白まざるをえない。客観的に見て、女には百戦錬磨な工藤課長が『風に揺れる一輪の野の花・金子みどり』を手折ったことは明らかだったから。しかも上司という立場を利用したとあらば、ことは単なるプライベートの問題では済まなくなる。

こうした突き上げに対し課長は開き直る。職場では上司と部下であろうが外に出れば大人の男と女、互いに合意の上の関係であり、しかも自分は独身、いったい何の問題があるというのか。

結局、「責任を取れ」という周囲の声に対してごねにごねて、いくつものすったもんだの末ふたりはようやく結婚した。

主任が工藤課長の所業を毒づいた。

「処女は面倒くさいから嫌だ、なんて言ってたくせに金子チャンを食っちゃったんだから、自業自得だよな」

「それが違うんですよ、佐久間さん。本当はね」

課長に流し目くれた杏子さんが意味ありげな含み笑いをする。「課長ってば本当はみどりさんと結婚する気マンマンだったのに、先に先方のご両親から『責任取れ』って言われてむくれちゃったんですよ、あまのじゃくだから。プロポーズのときも『責任を取るために君と結婚したいんじゃない』なんて言っちゃって」

恥ずかしい台詞を暴露され泡を食う課長。動揺が声に現れる。

「おまつ……何でそれ……みどりか!？」

「ぎゃー、課長が照れてるう。明日雪が降るー。わははは」

課長が真面目くさってプロポーズするとこなんか想像したら……
ひいっ、笑える！

遠慮もせずに大笑いしたら、一睨みして彼はうなるように言った。

「ポチ！ 後で覚えてろ」

照れ隠しであることは誰の目にも明らかで、それがまたからかうネタとなる。仕事で厳しくやり込められるお返しとばかりに皆が彼を冷やかした。なんだかんだ言って愛されている上司なのだ、工藤課長は。

やがて空気の中に笑いの残滓が融けてしまう頃、ぽつりとつぶやく声が聞こえた。

「越智さんって、あの頃の金子チャンに似てるなあ」

初めて見る和らいだ笑顔で瀬尾係長が私を見ていた。

愛おしむような優しさが溢れる表情。目と唇が描く緩やかな曲線は、普段彼が見せる完璧で隙のない笑顔から無機質さを取り除いてしまったように生き生きとして、まるでフィルターを外した心情がこぼれ出ているみたいだった。

心の一番純度の高い部分をすくい取ったような、何も手を加えられていない、自然で暖かい笑顔。いつまでも見ていたいと思わせるような笑顔。

それは私の心に鮮やかな像を描いて刻み込まれた。

……こんな笑顔ができる人だったんだ。

誰しにも振りまく魅力的な王子様の笑みではなく、深い情感から生まれる笑顔。『あの頃の金子チャン』に向けられた愛おしさが作り出している表情だ。きっと係長にとって『あの頃の金子チャン』はとても大切な存在で、同期として友人として共有した時間は鮮やかなまま彼の中で息づいているのだろう。もしかしたら彼女のこと

がひそかに好きだったのかもしれない。

そんなことを思い巡らしてしまうのもまた、乙女心の一部だったりする。

私が見どりさんに似ているという係長のつぶやきに、我が意を得たとばかりに応じたのは佐久間主任だった。

「あ、やっぱりそう思う？」

「思う思う」

このふたり、同期入社だからなのか全然違うタイプなのに気が合うのが不思議だ。入社六年目にして初めて同じ職場の同僚となった彼らは、上司と部下の間柄になっても感情の齟齬^{そご}を見せることもなく、信頼関係を築き上げているようだ。

とはいえ彼らの見解には納得しかねるので反論させてもらう。

「どこがですか。私、女子高出身じゃないし箱入り娘でもないですよ」

「そういうんじゃないくてね。雰囲気が」

どういう雰囲気だというのか、言いあぐねる係長に主任が横から口を出した。

「もっとはっきり言ってやれよ。色気がなくて男慣れしてなくて見るからに処女でちょっと親切にされると信用してホイホイあとについて行くような無防備なところ」

……よくも噛まずに言い切ったな。日頃から練習していたんじゃないか？

どうだこの滑舌とむしろ得意げな主任に反撃しようと口を開けた途端、目の前の人物が涼やかな声で邪魔をした。

「越智さんの場合は食べものをくれる人にホイホイついて行くんじゃないか」

一同、どっと笑う。——なんて、ト書きみたいなこと言ってる場合じゃない！

「失礼なこと言わないでください、係長！ 私そんな子供じゃない

ですよ!」

「そうやってムキになるところが子供だっちゅーの」

「石津さん!」

「お前、気をつけろよ。そういうところにつけこんで課長は金子チヤンを食っちゃったんだから」

「佐久間。俺に恨みでもあんのか……?」

その後はエロ軍団によるエロ話が再び始まり、係長を含めたその他の男性たちも参戦した。いたたまれずに真っ赤になって逃げ出した私を、皆がからかい、いじりまくる。

兄のことを話すハメになったのもそうだが、私がこんな目に遭っているのは係長が原因だ。課長の奥さんに似てるなんて言うからだ。そりゃ色気はないけど。しょ、処女だけどっ。……男慣れしてない? いやいや、そんなことは。高校だって共学だったし、私にだって……

普段は閉めたままにしている心の引き出しがずっと開いた。学生服を着た彼が微笑みかける。五年前から変わらない姿に回顧と安心と悔恨の情が入り乱れて、場所もわきまえず夢想到に耽^{ふけ}った。

「ポチ? どしたの?」

杏子さんに声をかけられ、ハッと我に返る。

「何でもないです」

レモンサワーのグラスに手を伸ばし、勢いよく飲み干した。瞼の裏にゆらゆらと揺れる映像がすうっと薄くなっていく。もう大丈夫。

エロ軍団としようもない話に興じている瀬尾係長に目をやった。心の中で思いきり罵倒し誓いを立てる。

ぜーったい、ぎゃふんと言わせてやるから! 待ってろよ、瀬尾! そしてまた飲んだ。

それからのことは……記憶にない。

第十話 思い出がもたらすもの

多摩川の土手で夕陽を眺めながら、私は誰かを待っていた。オレンジ色に染まった空が明日の予定を訊いてくる。

うん、まずは布団を干して太陽の光と熱をいっぱい吸収させておこう。そして夜はまたぐっすり眠れるだろうから。それからジョギングに行って……

〈越智さん、お待たせ〉

待ち人が現れた。王子様だ。

〈はい、お待ちかねのたこ焼き〉

王子様にこんな庶民の食べものを買に行かせちゃってごめんなさい。

〈はい、あーんして〉

食べさせてもらうなんて、畏れ多い。でも口開けちゃお。

〈おっと、ごめん〉

王子様ったら、慣れないことをするもんだから、たこ焼きがポロツと落ちて土手を転がっていつちゃった。

〈今取ってくるから待っててね〉

たこ焼きを追いかける王子様。でもどんなに走っても追いつけない。

王子様、遅い！ 仕方ない、ここはこの美春さんの出番です。ほーら、あつという間に王子様に追いついた。たこ焼きもすぐ手に届きそう。もうちょっと……私のたこ焼き……あと一センチ。

そこで誰かに頬をむぎゅうと摘まれる。邪魔をするのは誰？ 王子様？

「みーはーる。もう起きなさい」

ふえ？ 目を開けるともうひとりの王子様。

「新幹線に乗り遅れるぞ。全くしょうがないなあ、美春ちゃんは」
そうだ、新幹線！

ガバツと起きるとキャミソールとショーツのみというアラレもない格好だった。

「ぎゃっ」

「酒臭い服のまま寝かすのは忍びなくてねえ。でも昔を思い出したよ。いつも俺が美春を着替えさせてやったあの頃。もう自分でできるのに、俺のどこに来て甘えてさ、『ボタンかけて』って」

いつの話だ。兄の頭の中で作り上げた妄想じゃないのか。

「でも、しばらく見ないうちに成長したなあ、美春も。お兄ちゃん
は感激だ」

やめろ変態！ それ以上口にするな！

何とか無事に新幹線に乗り込み、ようやく一息ついた。お気に入り
のZARDを聴きながら夕べのことを思い出してみる。

半分寝ていたからところどころ記憶が抜け落ちているが、確かカラオケボックスでの二次会の最中に眠り込んでしまい、起こされたときには同僚たちは帰り支度をしていた……ような気がする。隣にはなぜか瀬尾係長がいて、私を見て笑っていた……ような気がする。駅までの道中は杏子さんにもたれかかって歩いた……と思う。

遅くなるのは分かっていたので、兄が迎えにくることになっていた。頃合いを見て電話をかけるはずだったのに酔っ払ってしまったため不可能となり、業を煮やした兄からのコールにより一発で酔いが覚めた。ちょうど渋谷で電車を乗り換える前で、なぜか一緒にいた工藤課長をもう大丈夫だから、と先に帰したのだった。

兄の車に乗ってしまったあとは再び睡魔に襲われ、朝まで爆睡したようだ。

あんなに飲むはずではなかったのに、どこでどう間違ったんだか。

シートに身を沈めて目をつむった。

この列車が向かっている故郷の映像が蘇る。その風景の中に収まる家族は一人減り二人減り、彼の地にはもう誰もいない。私は土の下に眠る両親に会いに行くのだ。

映像の中の私は、何年たっても十七歳のまま同じ場所で立ちすくんでいる。忘れられない記憶が追いかけてきては、現在の私を五年前に連れ戻す。

母の死が近い未来に既定のものとなり、絶望という言葉の無慈悲な意味を理解した高三の夏。

インターハイへ出場するよりも母のそばにいようと、練習にも出ずに病院に入り浸った。母がなんと言おうと聞く耳を持たなかった。残された時間を片時もむだにしたくなかったのだ。

そんな私を叱りつけたのは兄だ。

「お前はお前にしかできないことをやるんだ。時間をむだにするな、美春」

私とは違うベクトルで母のことを想う兄に諭され、トレーニングに戻った。走っている間は何も考えずに済む。私にとってはむしろの方が楽だったかもしれない。

四百メートル走で四位に入賞して帰ってくると、母は精いっぱい力で抱きしめてくれた。パジャマを涙で濡らしてしまった私とは対照的に、目を潤ませることさえなく、美春はきつとやってくれると思ってた、と笑顔だけを見せて。

暑い夏が終わっていくのと歩調を合わせるように母の生命力も低下していき、そして秋。偶然にも父と同じ命日に、母は逝った。

母の死には心の準備ができていたが、その後の生活まで思い描いていたわけではなく、予想以上の寂しさが私の心を支配した。父の死後、兄は東京におり、私たちは女ふたりで仲良く支え合ってきたのだ。

でももう、母はいない。独りだ。心にポツカリ穴が開くとはこう

いうことを言うんだろ、とまるで他人ごとのように自分を眺めた。

母の死の前後は私についてくれた兄も司法修習生として忙しい身で、東京と秋田を往復して諸々の雑務を処理していた。その中には私の進路決定も含まれていたが、私自身何も考えられない状況が数ヶ月続き、一步も前に進んでいなかった。学校も休みがちになっていた。

そんなある日。

クラス委員の水野くんが私を心配して訪ねてきた。休んだ分のノートのコピーやらお菓子やらと一緒に、クラスメートや先生の言動を面白おかしく報告してくれる。

彼は明るくて格好良くて人の心をつかむのが上手で、絵に描いたようなクラスの人気者だった。私が初めて県大会で優勝したときは「将来のオリンピック選手だな。オレ、一生友達さ自慢できる」と言って喜んでくれた。

私は、彼に恋をしていた。

学校の様子を語り終えると、水野くんがポツリと言った。

「越智がいないとつまね。早く学校さ来^け」

その瞬間、涙がこぼれ出した。抑えていたものが堰^{せき}を切って溢れてくる。

顔を見られたくなくてうつむいた。狭まった視界の中で、ぼたぼたと畳に落ちるしずくの向こうに水野くんの膝が見えたときにはもう、抱きしめられていた。

また涙がこぼれて、詰襟をぎゅっとつかむと、彼も私を抱きしめる腕に力を込める。

——どれくらいの時間がたったのか、ようやく私の激情が静まり、まだ目は少し濡れていたが顔を上げた。

「ごめん。服濡ら」

言い終わらないうちに唇を塞がれた。何が起こっているのか分からず呆然としたが、彼がいったん唇を離して再び口づけてきてやっ
と、キスされているのだと気づいた。

初めてのキス。大好きな水野くんと。

それはずっと心の中で描いてきた情景で、現実にはあり得ないはずだった。――でもこれは夢じゃない。

ねえ、水野くん、私ずっと好きだったんだよ。ずっと。ずっと。息が苦しくなって私から唇を離した。そうすると彼と目が合って慌てて面を伏せた。心の中でつぶやいた「好き」が伝わってしまった気がして恥ずかしかった。

ところが彼は左手で私の顎をつかみ顔を上げさせ、後頭部も押さえて三度目のキスをした。今度は唇を割られ舌が入り込んでくる。

「んっ……んぐっ」

その生々しさに思わず両手で彼の肩を押すと、両手首をつかまれて押し倒された。少し乱暴に唇が押し付けられ再び舌が侵入してくる。私はどうしていいのかも分からずただされるがままで、身体にのしかかる彼の重みと嵐のような激情を受け入れていた。

嫌ではなかった。これから起きることに不安は確かにあったものの、好きな人と触れ合う喜びがそれを凌駕し、未知の領域へふたりで進む一体感に心は酔っていた。

そして首筋にかすかな吐息を感じた刹那、この場に似つかわしくない軽快なメロディが重なった身体から流れる。ビクっとして身を起こし携帯電話を取り出す彼。

私も続けて起き上がったが、たった今彼と行った行為、これから行おうとしていた行為を思い描いて羞恥のあまりうつむいた。

誰からの電話なのか、水野くんは短く、後でかけ直すと早口で言
って通話を切る。

「わり」

小さくつぶやく声が聞こえた。

「わりがった」

謝られても、恥ずかしさから口を利くことも彼の顔をまともに見ることができない。水野くんもそれ以上の言葉は続けず、そっと立ち上がり目の前から去っていった。

結局行為は最後まで行き着かなかったが、それだからこそ、彼の気持ちを確かめたかった。あのキスで私たちの間に何かがつながったような気がしたけど、やっぱり言葉が欲しい。確かなものが欲しい。私は独りではないのだと安心したい。

明日は学校へ行って彼に会おう。私の想いを伝えよう。彼の気持ちを確かめよう。

それは寂しさが支配していた真っ暗な心に突然差し込んできた一筋の光であり、幸せの予感だった。

ところが、期待混じりの決意はその夜にかかってきた電話でくじかれる。

隣のクラスの小松さんからだった。水野くんの彼女。

〈カン違いさしてごめんね〉

彼女はいきなり高みから謝ってきた。

〈水野くん、優しいがらほっとけねんだ。越智さん可哀相だし〉

可哀相って何が？

〈慰めただけだっただけなんだ。その場の雰囲気で、キスしちゃっただけで〉

違う、そんなんじゃない。そんなキスじゃなかった。

〈だがらカン違いせねで欲しんだ〉

カン違いって何？ 彼も私を好きかもしれないと期待したこと？
だって私を抱きしめてくれたじゃない。キスしてくれたじゃない。
それって私が可哀相だからなの？ 好きでもないのに抱こうとし

たの？

私、そんなに可哀相なの？

間もなく日付が変わろうとする時刻、東京の兄に電話をかけた。独りで過ごす空間が恐ろしく静かすぎて私を圧迫し、怖くてたまらなかったのだ。

ところが用意しておいた愚にもつかない話題は、兄の声を聞いた瞬間にどこかに消えてしまった。私はひたすら唇を噛み締めた。

〈どうした？〉

涙が出るの。

〈どうした、美春？〉

嗚咽が聞こえないといいんだけど。

〈美春、何があった？〉

言葉にならないんだ。

〈美春、そっちは寒いかな？〉

……うん、寒いよ。

〈そろそろ鍋食いたくなってきたな、美春〉

うん、ウチはみんな鍋好きだもんね。

〈美春、こっちに来いよ〉

え？

〈東京に来い、美春〉

あんちゃん……！

〈一緒に鍋食おう、美春〉

返事のできない私に何度も何度も名前で呼びかける兄の声。私はその声に縋りついた。

翌日の新幹線に飛び乗って東京へ向かう頃には、進路を模索するためという口実を使った自分を省みて自己嫌悪できるぐらいには立

ち直っていた。

これが逃げであることは充分自覚していた。でも勇気を出して差し出した手を水野くん拒否されるのは怖かったし、可哀相だからと手を取られるのはもっと嫌だった。

そんなところにばかりプライドの高さが現れる自分を愚かだとは認めながらも、他にどうしようもなかった。

慣れない東京の生活にあたふたしながら、どうせなら全て新しく一から始めてみようかと決意するに至った。一番にはなれなくてもいいから、毎日コツコツと積み重ねて生きていけるように。私たちの両親のように。

そしてWebデザイナーの道を見つけたのだった。

あれから恋はしていない。

勉強が忙しくて。東京の生活に慣れるのが大変で。仕事を覚えるのが優先で。

そんな言い訳をお守りがわりにして、カン違いが起こらないように努めてきた。

やり方は簡単。初めから恋の対象として見なければいい。そうすれば、甘い期待も幸せの予感もあとでカン違いだったと失望せずに済むのだから。

水野くんへの想いは心の底にたゆたっては、ふとしたときに顔を出して幻想と後悔を抱かせた。やっぱり彼も私を想ってくれていたんじゃないだろうか。どうしてあのとき逃げてしまったのだろう。

今更確かめる術もなく、確かめたところでどうしようもない。それ以上に確かめるのはやはり怖い。

宙ぶらりんな想いを抱えたまま月日だけが過ぎ去っていった。

お墓参りは淡々と終わった。母の死から五年がたち、心の中では一区切りができている。あの頃流した涙も時と共に思い出に変わった。

変わらないのは初めてのキスの記憶だけ。お盆や正月に帰ることをためらうのは、帰省する彼に会うのが怖いから。

あの記憶は引き出しに仕舞って鍵を掛けてしまおう。いつものように。

「美春ちゃん東京さ行ぐって聞いたときは泣いて帰ってぐるて思っただども、頑張ってるよお。だからおめらも安心せ」

伯母が両親の眠る墓に向かって語りかける。ふたりに聞こえるように明るく大きな声で私は言い添えた。

「んだんだ。泣いてなんかねえから。仕事も頑張ってたから」

だから大丈夫だよ、お母さん。私は大丈夫。

第十話 思い出がもたらすもの（後書き）

美春はもちろんZARD世代ではありません。あることがきっかけで聴くようになったという設定です。

第十一話 上司の秘密を握る女

両親の墓参を終え、その夜は伯母の家に泊まった。

伯母ご自慢の料理を味わいながら仕事や同僚のことを語って聞かせる。そこに杏子さんから、昨夜はちゃんと無事に帰れたのかという内容のメールが届いた。だいぶ酔っ払っていたので心配をかけてしまったようだ。反省反省。ちゃんと帰りました、ご心配なく、と返信した。

同僚と仲良くやっている様を見て、伯母も安心したらしい。

「お土産いっぺえ用意しながら、持ってってけれ」

この伯母がいっぱいと言うからにはかなりの量に違いない。職場で配れというのだろう。

伯母らしい思いやりに、心から礼を述べた。

翌日の日曜日、母校に立ち寄り陸上部の練習に顔を出した。

名前も顔も知らない後輩たちばかりであったが、私の名は知られているらしく、顧問の根津芳弘先生が紹介するやいなや歓声が上がリ、握手責めにあって何とも面映ゆい。

先生と最後に会ったのは母の三回忌だったから、実に三年ぶりの再会だ。東京での暮らしをあれこれ訊かれたので真面目に仕事していると答えたら、本気で驚かれた。年賀状のやり取りはしていたから近況は知らせてあったのに、私ってそんなに信用がないんだろうか。

ブツブツ言っていたら、「走ってるおめしか知らねがら」と笑われた。

例えば根津先生とは師弟として濃密な時間を共に過ごした。私の進路を最後の最後まで心配してくれたのも先生だった。何とかして陸上を続けさせようとする彼の説得にも結局応じることはなかった

けれど。

あの頃は本当に毎日が充実していた、と先生が言う。才能のある人間が開花していくのを傍で見ることができて、自分がその成功に寄与することができて、本当に幸せだったと。

私も一人で勝ち上がったつもりは毛頭ない。先生や他の部員たちはいつも私を最優先で練習計画を立ててくれた。時には励まし時には慰め、精神的にも支えてくれた。皆がいなかったらインターハイで四位に入賞することもなかったはずだ。あれは私個人でなく、チームで勝ち獲ったものだ。

皆で一番を目指した熱い日々。私にとっては唯一無二の宝。あの頃のような熱をいつかまた身体に感じる日は来るのだろうか。

車窓の景色を眺めながらも一度恩師や陸上部員たちの顔を思い浮かべ、彼らと共有した時間に思いを馳せた。できればこのまま東京までまったりとしていたいのだが、そうも言っていられない事情がある。

懸案事項である『瀬尾係長にぎゃふんと言わせる計画』を立案せねばならない。頭を切り替え、脳みそを活性化するのだ。

これまで係長は女性との交際に関しては常にオープンで、会社近くでデートを目撃されたことも数知れずだったという情報はすでに入手済みだ。目撃されるたびに相手の女性が違うことを冷やかされても、そののない笑顔でかわしてきたという。

つまり、これまで交際相手を秘密にすることはなかった。ではなぜあの五階の受付嬢のことは隠しておきたいのか？

昼休みに逢引してキスしていた事実を社内で言いふらされればきまりが悪いから、というのが推理その一。しかしそんな数ヶ月も前の話を今更蒸し返したところで、客観的に見て信憑性^{しんぴやう}はないし、ど

れだけの社員が本気にするだろうか。

そう考えるとより蓋然性が高いのは推理その二だ。つまり、相手の女の存在を隠しておきたいから。係長は彼女と交際している事実を秘密にしたいのではないか。

それはなぜか。――他人には知られたくない秘密の関係だから。ずばり、不倫。

あの受付嬢は人妻なのではないか。

そう考えるとピタリとはまるような気がする。隠しておきたいのは彼女を守るため。

いくらウチの会社がプライベートには関与しないといっても、不倫ともなれば虚実入り交じった噂になるのは必定、同じビルで働く者同士気まずい思いをするのは間違いないし、いずれ彼女の夫の耳に入る可能性だって充分にあるのだ。

彼女が係長の大本命で、華やかな女性関係は全て隠れ蓑みのだったとしたら――

あの情熱的なキスがすべてを物語っているような気がした。昼休みという短い逢瀬の時間に人目を忍んで会うには、誰も来ない非常階段は絶好の場所なのだ。

今や『係長不倫説』は私の中で確信に変わりつつあった。次にすべきことは証拠固めだ。まずはあの女の身元調査のために五階に潜入して、左手薬指に指輪があるかどうかを確認しよう。

彼女は私の顔を覚えているだろうか？　もしものために変装した方がいいかもしれない。

フッフッフ、面白くなってきた。

今後の行動計画を練ろうとしたところで、ふと素朴な疑問が浮かぶ。

あのふたりは、数ヶ月たっても未だに不倫継続中なんだろうか。

離婚協議が長引いているとか。そもそも離婚するつもりもないとか。係長はそれで納得しているのだろうか。愛する人が他の男のもとへ帰ることを。それはあんまりだ。

いつの間にか、心の中で彼に向かって呼びかけていた。

係長、それは良くないよ。不倫はやっぱ良くないよ。彼女の旦那さんだけじゃない、彼女も、係長も傷つくよ。なんでそんなつらい恋愛をするの？

ふたりで幸せになる道を模索しているというなら、そのためにもう少し周囲には隠しておきたいというなら、喜んで口をつぐんでいいのに。

間もなく仙台到着を告げる車内放送が、思考に没頭していた私を現実に戻した。空腹を感じて、秋田駅で購入した秋田比内地鶏の鶏めし弁当に手を伸ばす。鉄道の旅には何と言っても駅弁が欠かせない。

次第に列車がゆるゆると減速して仙台駅のホームに滑りこむ。まだ秋の観光シーズンには少し早いとはいえ、この週末は爽やかな秋晴れの行楽日和だったので、列車を待つ人の群れがホームに溢れかえっていた。あふ

更に速度が落ちていきやがて完全に停車したとき、最後のつくねを口に放り込んでなにげなく窓の外を見た。すっと流した視線が何かを捉え、確認するため再び水平移動して戻す。

ホームの人混みの中には見知った顔がいた。工藤課長だった。

私服姿でリラックスモード漂う彼が、乗降口に向かってノロノロと進んでいる。課長の陰に隠れてよく見えないが、女性が一緒にいるようだ。

あらら、課長ってば、奥さんと仙台旅行？

飲み会で聞いたふたりの馴れ初めを思い出して顔がニヤついた。妊娠八ヶ月だと聞いているが旅行などして身体の負担にはならな

いのだろうか。それとも出産前に夫婦水入らずを楽しんでいるのか。子供が生まれたらふたりきりでゆっくり旅行もできなくなるだろうし。

明日会社で課長をからかうネタができた。内心でほくそ笑みながら、わずかに残っていた弁当をすべて平らげる。目を再びホームにやると、人の群れが動いて次々と乗車していき、課長の陰になっていた奥さんの位置がずれて姿を現した。

……私の目がおかしいのだろうか？ 妊娠八ヶ月の妊婦には見えな
いのだが。

カチツとしたブラウスとパンツのスタイルからはスレンダーな体型であることが一目で見取れる。あれは妊婦じゃない。というより、あれは奥さんじゃない。一度会っただけだが、もっと背は高かったと思う。顔つきも全然違う。それなら、あれは誰？

寄り添い合うふたりが醸し出す、大人の男と女の妖しい雰囲気。断言してもいい、絶対に友人とか仕事がらみの関係ではない。

課長、仙台で何してるの？ これってまさか。

——不倫旅行？

嘘！ なんで？ 課長が！？

あわあわしていたら、件の女が前方から車内に現れた。まさか同じ車両とは！

女の後ろに課長の姿を認めて、慌てて前の座席の陰に隠れる。隣に座る三十代とおぼしき男性が明らかに不審そうにこちらを見ているのを無視して、そろそろと頭を上げ、目から上だけ出した状態で様子をうかがった。

キョロキョロと該当する座席を探す女の、チケットを持つ左手薬指にキラリと光るものを見つけて、更に衝撃を受ける。

……ダブル不倫!?

映画やドラマでしかお目にかかったことのないアレが、現物が、生モノが、今私の目の前に……!

女は三十代前半と思われる、しっとりとして少し陰のある美しい人。いかにも課長の食指が動きそう。さもありなんと言うべきか。座席を見つけたふたりが並んで腰を下ろした。私もようやく背もたれに背を預けて、気持ちを落ち着けるべく深く息を吐く。しかし落ち着くどころか身体に充満し始めたのは、工藤課長に対する怒りだった。

妻の妊娠中に浮気する夫。ひどい。ひど過ぎる。いくらエロ課長だからって――

彼がかつて女性にはスゴ腕だったことは知っている。でも部下だった奥さんと真面目な恋愛をして、女性遍歴は独身生活と共に過去のものになったのだと信じていたのに。結婚しようが女好きは変わらないってこと? 最低! こんな裏切りってない。

課長といい、係長といい、どうして私の上司は人の道に外れたことばかりするの?

このやり場のない怒り、いったいどうしたらいいのか。

奥さんに報告すべきだろうか――いやいや、妊娠中の人にそんなショックを与えたらだめだ。でももしも課長がこのまま奥さんを裏切り続けるとしたら、見て見ぬふりなんて私にできるの?

杏子さんに相談しようか。……だめだめ! きっと怒り狂って大騒ぎになることは目に見えてる。どっちにしても奥さんの耳に入る。ああもう、どうしたらいいのお!

自問自答を繰り返しても納得のいく答えは出てこなかった。ならば、とりあえず逃げよう。それだけは決心がついた。

東京駅への到着が近づくと早くも行動を起こした。荷物を柵から

下ろし、両手に下げてよたよたと後方のデッキへ移動する。

課長は六列前に座っており、このまま到着まで座席にいれば降車の際にはこちらに気づくことは間違いない。姿を見られたくないのはむしろ彼の方であろう。しかし見てはいけないものを見てしまった側が逃げるのが定番というものだ。あの衝撃的キス目撃事件（いつの間にか事件になっている）のときもそうだった。

三十六計逃げるに如かず。都合の良いことに私は逃げ足が早い。

停車して乗降口が開くとさっと一番でホームに降りる。伯母が渡してくれた両手に抱えきれないほどのお土産が、足枷となったかのように動きを緩慢にしている。私はエスカレーターの上では移動しないことをモットーとしているが、今日はそれも返上だ。とにかく急ぐのだ。

それにしても荷物が重い。手提げ袋の持ち手の紐が指に食い込んでちぎれそう。汗も吹き出してきた。きつと真っ赤な顔でヒーヒー言ってるようによそからは見えるんだろう。……ああ、なんと無様な。

改札を抜け在来線への通路までやってきて、ようやく一息つく。ここまで来れば大丈夫だ。課長が追いつくことはない。

テンポの速い呼吸を繰り返すうちに何かおかしい、という思いに捕われ始めた。

何だって私がこんな理不尽な目に遭わねばならないのか。悪いことをしているのは課長なのに。上司の秘密を見たくて見たわけではないのに。

口の中で愚痴をこぼしつつ、在来線改札口に向かおうとしたそのとき、横合いから声をかけられた。

「すみません、東北新幹線の乗り場はどこでしょうかね」
杖をついたおばあさんが不安げな顔で私を見上げている。

在京五年にもかかわらず未だに東京には不案内な私であるが、今

回はたった今歩いてきた道を指せばいいだけのことである。

「ここを真っ直ぐ行ったところです。表示に従って行けばわかりますよ」

しかし日曜日の午後のこと、駅のコンコースはごった返していて、立ち止まって表示を見上げるのもおばあさんにはしんどそうだ。

「一緒に行きましょうか」

このおばあさんを放っておくことの良心の痛みの方が強かったので、元きた道に戻ったが、見れば前方からは工藤課長が件の女とこちらに向かつて歩いてくる。

たらーつと冷や汗が流れた。

「すみませんねえ」

「いえいえ」

おばあさんに微笑みながらも視線は課長を追う。

どうかこっちを見ませんように……女と喋っていれば大丈夫かな……あつやババ、こっちに目を向けた！ 見つかる！

土産が詰まった紙袋をとっさに顔の前に掲げて隠した。そのまま通路を進んでふたりと通り過ぎる。

……いったい何をやっているのか、私は。

精神的疲労が肉体的なそれを上回り、イライラを通り越してムカムカしてきたのを自覚する。これを誰かにぶつけてやらねば気が済まない。誰か——そんなもん、あの男しかない。瀬尾係長だ！

ぜーんぶあんたのせいよ！ あんたが不倫なんかするから！ あんなところでキスなんかするから悪いのよ！

心の中で思いきり彼を罵倒した。課長と係長のそれぞれの不倫の間には何の関係もないのだが、このときの私はとにかく瀬尾が悪い、ですべてを片付けることに決めたのだった。

私って上司の不倫現場に出くわす星の下に生まれたんだろうか。

課長と係長、二人そろって不倫するなんて、師匠と弟子ってそういうことなのかい！

不倫上司二人の下で、これからどんな顔して働けばいいのっ！？

上司の秘密なんて握るもんじゃない――――

明日からのことを憂えて早くも盛大なため息が出てきた。

第十二話 酒は飲んでも……

人影もまばらな早朝のエントランスホールを、普段とは逆の方向へ向かう。降りてきたエレベーターの箱に乗り込み壁に寄りかかる、自然とため息が口をついて出た。

非常階段を使わないのは秋田の土産を両手に下げているからというだけではない。直属の上司二人の不倫現場を目撃したことがこんなに私を悩ませ、活力を奪っているのだ。

ため息ひとつで幸せもひとつ逃げていくというなら、今日だけで一生分の幸せが私を見捨てて逃げ去ったのではないだろうか。いや、実際は昨日からすでに数えきれないほどのため息をついてるぞ。私の幸せは夜逃げしたと表現する方が的確なのかもしれない。

瀬尾係長についてはぎゃふんと言わせることは決まっている。不倫をしているという確信はあるが、相手の女の素性がわかっていないため全体像がおぼろげで、実感は今ひとつだけれど。

だが工藤課長は違う。奥さんとは面識があるしふたりの間にはもうすぐ子供だって生まれるのだ。何も見なかったふりをして今までと同じ部下としての顔を見せる自信がない。

若くして課長に昇進しただけあって、誰もが認める腕の立つ上司。性格は問題あるけど、仕事上は頼りになるし、尊敬できる人でもある。でも奥さんを裏切っていることを知ってしまった今、課長を軽蔑する心は隠しておけそうもない。

信頼できない上司とどう接してゆけばいいのだろう。

オフィスに入ってもため息が何度も漏れる。このやるせない心情を誰かわかってくれ。ひとりでこんな秘密を抱えているのは私には荷が重すぎる。いっそのこと、大声で叫んだらすっきりするだろうか。どうせ誰もいないんだし。

「朝からため息なんて越智さんらしくないね」

「ぎゃっ」

突然声をかけられて飛び上がった。振り返ると、瀬尾係長が入り口から訝^{いぶか}しげな表情でこちらを見ている。

「か……係長……いきなり声かけないでくださいよ……心臓止まるかと」

朝の定例会議にいつもは直接会議室に行く係長が、先にこちらに来るとは珍しい。

「これから会議ですよ。何か資料でも？」

それには答えずたすたと私のところまで来ると、手近の机に軽く尻を落とした。そして気遣わしげな表情をしてためらいがちに口を開く。

「越智さん……あのあとは大丈夫だったの？」

「はい？」

「ちゃんと帰れた？ そのう……課長は」

「課長？」

今まさに悩みの種となっている人物が話題に出て、思わず彼の言葉を遮ってしまった。だめだ、やっぱり課長のこと、平静でいられない。

「課長が何だってんですか」

嫌悪感を隠すことができず、つい吐き捨てるように言ってしまった。そんな私にただならぬものを感じたのか、係長は眉をぴくんと上げ険しい表情を作る。

「まさかと思うけど、越智さん」

そこへ新たな声が乱入した。

「ポチ、おはよ……うございます、係長」

前半後半でこれほどトーンの違う挨拶も珍しい。いつも始業時間ギリギリに来る石津さんがこんなに早く来るのも珍しい。

「おはようございます。石津さんがこんなに早く来るなんて、何か

のどつきり？」

軽口を叩いたのにやり返しめせず真っ直ぐこちらにやってくる。その上仕事中にも見せないような真面目な表情で私を見下ろした。女の子の口説き文句を考えているときと同じくらい真剣な顔。

「金曜日の夜、ちゃんと帰れた？」

へ？ たった今係長にも同じことを訊かれなかったっけ？

「はい……兄が車で迎えにきてくれたので」

奇妙に思いながらも事実を告げると、石津さんは見るからにホツとした。

「それならいいんだけど」

「あ、そうだ、二次会の会計とか石津さんにやらせちゃったみたいで、すみません」

幹事のくせに眠り込んだのは失態だった。エロいとはいえ一応先輩なので謝るに越したことはない。が、何とも思っていないように彼は首を軽く横に振った。

「ああ、そんなのはいいんだ。ポチ、だいぶ酔ってたし」

なんだか妙に機嫌がいいなあ。どうしたんだろ。

ふと横にいる係長を見ると、こちらは逆に不機嫌丸出しだ。そんな彼に石津さんは勝利者のような笑みを浮かべて言った。

「係長、もうすぐ会議始まるんじゃないんですか」

とっとと行ったらどうですか的ニュアンスを前面に押し出した台詞に私は啞然とした。

「そんなことは君に言われなくてもわかってるよ」

係長の返答はブリザードが吹き荒れるかのようで、啞然を通り越して呆然とする。

何なの、このふたり……！？ 仲悪くなかったよね？

そこへ第三の声、乱入。

「ポチ！ ちょっと」

入り口で杏子さんが呼んでいる。これで意味不明の緊張感から解

放される、と正直ホッとして立ち上がった。係長も会議に行くようだ。

しかし引っ張られるようにして連れて行かれた休憩室で、さすがに尋常でない事態に気づくことになる――すでにお馴染みとなった質問を繰り返されて。

「メールでも訊いたけどさ。念のためにもう一度訊くよ。金曜日の夜はちゃんと帰ったのよね？」

「何なんですか。係長と石津さんにも同じことを訊かれたんですけど」

「帰ったのよね？」

三人が三人とも同じことを訊く不可解さに首をひねったが、畳み掛けて訊く彼女の迫力に押されて、あの夜帰宅した経緯をぼつぼつと語った。

「遅くなるときはいつも兄が迎えにくてくれるんです。あの日も渋谷で電車を乗り換える前に兄から電話が来て、もう渋谷まで来てるからって。それで、車に乗ったら私そのまま寝ちゃって、朝起きたらベッドの中でした」

兄が服を脱がせたことは黙っておこう。

「よくできたお兄さんねー。ますます会うのが楽しみだわ。……それに比べて妹は、まったくもう。あの夜どれだけヒヤヒヤしたかわかってんの？」

彼氏持ちにもかかわらず弁護士たちとの合コンに向けて意欲的な彼女は、とろけるような笑顔から一転して厳しい視線をこちらに向けた。急に不安が胸に押し寄せる。

「私、何かやらしましたか……？」

否定されることを期待していたのに、彼女の返事は私をもっと不安にさせた。

「それだよ、その顔。それはヤバいって」

「ヤバいと言われても、今更顔は変えられませんよ！」

「いや、そうじゃなくてさ……まあ、聞きなさい」

そう言って杏子さんは、私の記憶の曖昧な部分をつまびらかに語りました。

すでに通常の酒量を超えて飲み過ぎていた私は、二次会が始まってまもなく心地よい眠りの園へ誘われた。隣に座っていた杏子さんにもたれかかって。しかもカラオケがガンガンかかる状況にもかかわらずぐっすり眠り込んで目を覚まさない。

杏子さんは私をそのまま寝かせておくことにしたが、自分が歌う順番が来て席を立つことを余儀なくされる。そこへちょうどミスチルを歌い終わった瀬尾係長がやってきたので席とついでに寝ている私の世話も交代することになった。

「係長、すいません」

「別に構わないよ」

係長が了解したことで、杏子さんは安心してマイクを手にとりカムを熱唱する。その間私は係長に寄りかかって引き続き夢の国をお散歩だ。ところが歌い終わって戻ってくると、なんと私は係長の膝枕でスースー寝息を立てていてではないか。

「げっ、すみません係長、この子ったらもう。席替わりますから」

「いや、いいよ、せっかく気持ちよく寝てるんだし、このまま寝かせてあげて」

「ひっ……膝枕!? ウソー! 私が係長の膝枕なんてあり得ないですっ」

「疑うなら他の人に訊いてみなさい。あの場にいた全員が見てんだからね」

ずうずうしくも憧れの瀬尾係長の膝枕で寝るなどという行為に女性社員たちは憤慨したが、係長本人がこのままでいいと言う以上、指をくわえて見ているしかない。

「いいなー、私もガンガン飲んで寝てやれば良かった」

「あたしには無理。寝顔を他の奴らに見せるなんて恥ずかしくてできないって」

「見てみなよ、あのポチの寝顔。罪のない顔しちゃって」

「絶対、お兄さんと合コンさせてやる」

結局二次会が終わるまで係長の膝枕で眠りこける。お開きになり、起こされても半分だけしか覚醒せずに、今度は杏子さんにベタッと抱きつく私。

「わっ。ポチ、苦しいっ。重いー」

「わー、いいにおーい」

哀れ、彼女は私を抱えて恵比寿駅までの道をよたよたと歩くハメになった。

「あ、その辺は何となく覚えてます。杏子さんの香水の匂いも一緒に……へへ」

「あんた、犬か。こっちはもう抱きつかれて重くて大変だったんだから。それでつい石津くんに代わってもらって」

「石津さん!？」

「やっぱ覚えてないんだ」

さすがに女一人の力には限界があり、杏子さんは抱きついた私ごとと倒れそうになったのだが、そこをとっさに支えたのが石津さんだった。

「あぶねーなあ。相沢さん、俺が代わりますよ」

私の腰に腕を回してしっかりと抱える。支えが強固なものに変わって安心したのか、私が次にとった行動は石津さんの胸に抱きつくことだった。

「ポチ、これじゃ歩けない」

「じゃあ、カニ歩きしましょー」

「ぎゃーっ。もうやめてくださいっ。これ以上聞いていられませんか！」

「まだまだこんなもんじゃないの！　ちゃんと聞け！」

なんとか無事に駅に到着すると、相変わらず石津さんに抱きついたままの私を誰が送るかという話になった。

「ポチ、家どこなの？」

「ふたもたままわ……」

「ニコタマか。じゃ、俺が送ってくわ。同じ田園都市線だしな」
名乗りを上げたのは工藤課長だった。

「タクシーで帰るか？　電車だとこの時間、すげー込むぞー。ラッシュ並みかもな」

「ヤダー、そんなのに課長と乗ったら妊娠するー」

嫌がって石津さんにますます強くしがみつく私を見て、課長は鼻白む。

「お前、酔ってるくせに、ボケてんのか……？」

「課長の本質を言い表してるじゃないですか。歩く種まき機」

石津さんの揶揄に私はどうやら興味を引かれたらしい。

「何の種をまくんですかあ？」

「子孫って種かなあ」

「しそ？　しその葉なら食べられますねえ」

そうだねー、と適当に相槌を打ちながら、さりげなく石津さんは私の背中に手を回す。

「石津、何かよからぬこと考えてないだろうな」

「いやー、こんだけくっつかれてると、いくらポチとはいえその気になっちゃうかも」

ニヤついた顔で際どい台詞を吐くものだから当然周囲はぎょつとした。しかし当事者である私は引き続き植物の話題だと思ったらしい。

「私がどの木になるんですかあ？　へへへ」

場が一気に脱力したところで、辺りを払う明晰な声で瀬尾係長が話を軌道修正させた。

「越智さんは僕が送って行くよ。僕の歓迎会の幹事をやって疲れさせちゃったんだし。ニコタマなら家近いから」

まさかの係長からの申し出に、石津さんは慌ててエロい表情を消した。

「わざわざ係長の手を煩わせることないですよ。もう乗りかかった船なんで、俺が送りますから」

やんわりとだが明らかな拒絶に係長は眉根を寄せて尋ねる。

「石津は家どこなの」

「中野です」

「じゃあ遠回りじゃないか。いいんだよ、こっちは。上司として責任もあるしね」

自分こそが適任だと言わんばかりに余裕すら見せて笑んだ係長だったが、石津さんは断固拒否の姿勢で相對した。

「俺も先輩なんで、後輩の面倒はちゃんと見ますよ」

「無理じゃなくていい。僕が送るから」

「無理じゃないです。俺が送ります」

「ちょ、ちょ、ちょっと待ってください。なんで私を送ることですたりが張り合うんですか？」

自分の言動に顔が赤らむ思いがしたが、そちらの疑問を解くのが先だ。

「だーかーらー、係長と石津くん、あんたがお持ち帰りされと思ってお互いに警戒し合ってたのよ」

「おっお持ち帰り!?!」

私には縁のない言葉を聞かされてもどうもピンと来ない。でも杏子さんの口調には冗談の影すらなかった。

「あんたってばとろーんとした目つきでヘラヘラ笑ってるし、やた

らとスキップ求めてくるしさ。あたしん家に泊まるかって訊いたら、明日は用事があるから帰りまーすって」

酔っ払いながらも秋田に帰ることを忘れてはいなかったか。そこだけは自分を褒めてやろう。それにしても『お持ち帰り』云々はどうも現実味が薄い。

「でも石津さんはともかく、係長は社内の女の子には手を出さない人ですよ？ 私は係長のタイプと全然違うし、いくらなんでもお持ち帰りは」

彼について情報収集したから自信を持って断言できる。しかも私は直属の部下なのだ。黙っていても女性が寄ってくるのに、後々面倒なことになるかもしれない部下と関係を持つなどあり得ようか。

しかし杏子さんは生暖かい目をこちらに向けた。

「係長、二次会である後どんなに勧められても二度と歌わなかったのよ。あんたを膝枕する役は渡さないゾ、みたいな。『子犬みたいだな』なんて言っちゃって、あんたの寝顔ずっと見てたし、なにげにあんたの髪触ってるし」

衝撃のあまり息が止まった。頭が沸騰して湯気が出ているんじゃないかと錯覚を起こすほど体温が一気に上がった気がする。

「よっぽどあんたのこと気に入ったみたいだったから、そしたら石津くんじゃなくてもみんな同じこと考えるわよ。もともと女関係派手な人だしね」

ぐおおお、とうなり声を上げて頭を抱えた。が、杏子さんが再び気になることを言い出したので顔を上げる。

「結局、間に入った課長があんたを送ることになったんだけど、それはそれでみんな心配でさ」

「なんでですか」

「みどりさん食っちゃった前科があるからね。みどりさんに似てるあんたもヤバいんじゃないかって。で、課長と係長と石津くんではばらく三すくみ状態。三人が三人とも自分以外は信用できないって

思ってたよ、あれは」

そ、そんなことがあったとは……………

ふと先ほどの係長と石津さんの様子を思い出した。

「じゃ、じゃあ、さっき石津さんの機嫌が良かったのって」

「あんたのお持ち帰りを阻止できて嬉しかったんでしようよ。モテモテの係長に一矢報いてやったつもりなんじゃないの」

「……係長が機嫌悪かったのは？」

「善意を誤解されたのが不本意だったのか、それとも本当にお持ち帰りを邪魔されたのが悔しかったのか——上司だしそれはないと思いたいけど、課長とみどりさんの件もあるからねえ」

……考えたくない。知りたくない。それ以前に、酔っ払って正体なくした事実をなかったことにしてしまいたい！

石津さんに抱きついた。係長の膝枕で寝た。金曜日の夜にもう一度戻れるのなら、誓ってそんな失態は犯さないものを……！

あの日やたらとお酒を飲んだのは、どうしてだったっけ？

ああ、そうだ。係長のせいで兄のことを話すハメになって、係長のせいで皆にからかわれて、係長のせいで……彼のことを思い出したんだ。

なんだ。全部係長が原因じゃないか！

杏子さんがくどくどとお説教をするのを聞きながら、今日もまた瀬尾係長を心の中で罵倒した。

瀬尾のバカ！ 不倫男！ 何もかもあんたのせいよ！ そもそもあんたが不倫なんかするから、回り回って私がこんな目に遭ってるんだからね！

頭の片隅では「それって八つ当たりでは……？」と理性が弱々しく訴えかけていたが、嵐のごとく猛々しい感情がそれを退けた。

そもそも係長が秘密を抱えているのがいけないんだ。彼が不倫の

恋を守ろうとするから、目撃した私がとばかりを食っているんだ。でもこれでよくわかった。不倫は周りの人間（私のこと）を不幸にする。

昨日からついたため息の分の幸せを返せ！

不倫をやめさせよう。係長の不倫も、課長の不倫も。心が決まったのはそのときだった。

第十三話 作戦開始

要約すれば『酒は飲んでも飲まれるな』という格言に行き着く内容のお説教と、『男性と二人つきりでの飲み』禁止令を杏子さんから頂戴した私がWEB事業部室に戻ると、まもなく始業時間だというのに女性の同僚たちが一ヶ所に集まってワイワイと騒がしい。

その中心にモニターがあることから、どこかのホームページが騒ぎの原因とみられる。

皆さん、すでにオンになっていたとは。私も仕事、仕事。

オフでの失敗はオンで取り戻せ。そんな社是がこの会社にあるかどうかは知らないが、「喜んで取り戻させていただきます！」という気になってきた。つくづく人生に失敗はつきものである。

「あ、ポチ！ どこ行ってたのよ」

小林さんが私に気づいて輪の中に引っぱ張った。杏子さんの話によると、『瀬尾係長の膝枕で寝た女』としてお姉サマ方はたいそうご立腹だったということなので、できれば距離を置きたいところなのだがそうもいかないらしい。

モニターの前に連れてこられると、画面上にはあまりにもよく知った人物の画像があった。爽やかに微笑む、我が変態王子の画像が。「何で今の今までお兄さんのこと隠してたのよ。こんなにオトコマエだったなんて」

「ねーねー、お兄さん彼女いるのー？」

「年収いくら？」

……なるほど。兄が勤める法律事務所のホームページを見ていたのか。思いつきりオフだったんですね……

「でもこのホームページ、どこの会社が作ってんのかな。なんかイマイチだよね」

「あたし、お兄さんに個人的にコンサルティングしてもいいなあ」

「あ、抜け駆けなしだからね」

そういうアプローチの仕方もあるのか、仕事が仕事だしね。

でも皆さん、先週までは瀬尾係長が断トツ人気だったくせに、変わり身の早い……

そうだ、すっかり忘れていたが、今こそお土産の出番だ。すでに兄の画像を見たことで、私に対する係長絡みの怒りは収まっているようだから、これをお姉サマ方にバラまけばダメ押しとなるに違いない。怒りの矛先を回避できるのなら、何だって利用してやる。

「あのーこれ、どうぞ召し上がってください」

いくつかの秋田銘菓を配ると、お姉サマ方はますます上機嫌になった。

「えー、秋田に帰ってたの？」

「うわー美味しそー」

「いやーん、このなまはげ、可愛いー」

なまはげクッキーを手に顔をほころばす彼女たち。内心でガッツポーズだ。伯母さん、ありがとうとおお。

そこに突然聞こえてきた、できれば聞かずに済ませたかった、あの人の声。

「美春ちゃん、久しぶりー、元気だったかい」

一難去ってまた一難とはこのことか。

久々に聞くこの能天気な声は、もちろん我がH&Amp;Gコミユニケーションズ社長のもの。アメリカ・台湾・香港・上海と視察に行ってくれていたお陰で、二週間ほど静かな日々を過ごしていたのに……チッ、もう帰ってきたのか。

「お久しぶりです、社長、お帰りなさい」

それでも、精一杯の営業スマイルを浮かべて社長を迎えた。

「早く美春ちゃんの顔が見たくて、会議が終わって飛んできちゃったよ」

ずっと来なくても良かったのに……

「専務の奴、分刻みのスケジュールなんか組むもんだから、美春ちゃんのためにゆっくりお土産を買う時間もなくてねえ」

別に欲しくありませんから。

「あつても香港でパンダクッキーだけはなんとか買えたから。皆さんも一緒にどうぞー」

可愛いパンダの絵柄のついた箱を差し出す社長。クッキーには罪はないのでそれだけはありがたくいただくことにする。

そこで私も社長に秋田土産を渡すことにした。何しろ伯母ときたら「上司の皆さんに渡しでけれ。おれこんなごどしがでぎねんども」と言って同僚用・上司用の土産を大量に用意したのだ。

「美春ちゃん、秋田に帰ってたのかい？」

「はい、この週末に」

ちょうど部長以下の役付きの面々が部屋に入ってきたので、部長、係長、二人の主任、最後に課長の順で土産を渡していった。

係長の前に立ったときには、被った迷惑に対する憤りと膝枕をしてもらった恥ずかしさが相まって、髪の毛が逆立つような錯覚に捕えられた。しかし『瀬尾係長にぎゃふんと言わせ不倫をやめさせる作戦』を発動させるから首を洗って待ってろ、と心の中で挑戦状を叩きつけることにより気を落ち着かせた。

課長を最後にしたのはもちろんわざとだ。

「へえ、秋田に帰ったのか」

「はい、新、幹、線で」

わざと切って発音してやった。「私は見たんだよ。申し開きできるのか？ できないよな？」というメッセージを言外に含ませて。課長の不倫をやめさせてやると決心した以上、思い悩むことはもう何もない。

『ブツ切り新幹線』は即効性があつたらしく、課長は眉根を寄せて

土産から私に視線を移した。私も目を細めてにらみつける。

そこへゆっくり近づいてきた社長が、ふいに爆弾を落とした。

「美春ちゃん、田舎で見合いでもしてきたの？」

シン……とした空気がすぐさま驚きの色に染まる。

「えええーっ！」「ウソー！」「何それ」

何バカなことを言ってるんだ、このオッサンは。

口々に叫ぶ同僚たちの前で、社長は悪びれる素振りも見せない。

「盆や正月でもないのに帰るなんて、見合いぐらいしか思い浮かばないんだけどー」

他にもいろいろあるでしょ！ 親戚の法事とか、友人の結婚式とか！ 憶測でそういうきわどい話題を口に出すなー！

「ポチ、本当にお見合いしたのっ！？」

案の定と言うべきか、鬼気迫る表情で詰め寄る女性陣。

何てこと言ってくれたのよ、このオッサン！ お姉サマ方は『結婚』『見合い』『婚約』ってキーワードに敏感なんだからーっ！

「してない。してません。お見合いなんかしてませんからっ」

ブンブンと首と両手を振って全力で否定したら、呆気に取られていた上司たちが私をイジり始めた。

「お前さん、正社員になったばかりでもう辞めるのか？」

「辞めませんから！」

「見合いから始まる純愛ってのはありなの？」

「純愛ネタはやめてくださいっ」

「お前を嫁にもらう奴ってチーター並の脚力がねえと無理じゃね？」

「そんな人がどこにいるんですか！」

課長と係長は無言でいたが、それぞれ異なった様子で私を凝視した。

課長は目を細め、首をかしげながら。

係長は冷たい光を目に灯して。

その様子は何か怒っているようにも見えて、顔が綺麗だけに怖

さも半端ではなかった。

席に着いて仕事に取りかかったが動きがどうも鈍重だ。朝っぱらから次々と身に降りかかる災難が、私を疲れさせている。酒の上での失敗を取り戻そうと、凧のようにグングンと上昇していたはずのやる気だって、社長が引っ掻き回してくれたお陰で超低空飛行になっているではないか。

これではいかん。頭を切り替えよう。

トップページをクリスマス仕様に変更する案件が幾つも来ている。私の心もクリスマスバージョンに衣替えするのだ。目をつぶればほら、クリスマスケーキが見える。チキンが見える。シャンパンも！……いや、酒はやめておこう。

午前の仕事が一段落し、昼休みに入るべく、お弁当を手に休憩室に向かう。

「お先でーす」

デスクで書類をチェックしている課長の前を、通りしなにチラッと見たら目が合った。即座に睨みつける。こうやってサインを送りつけてやれば勘の良い課長のこと、何かあると気づくはず。

名付けて『エロ課長の不倫強制終了作戦』、課長の方から先に始めるのには理由がある。何と言っても奥さんは身重の体、さっさとあの女と手を切らせ、彼女のもとへ帰さなければならぬからだ。課長が接触してきたら何を言うのが一番効果的だろう。一緒に旅行するぐらいなんだから相当のめり込んでいるのかもしれない。とすると私の説得などに果たして耳を貸すだろうか、あの課長が。どうも考えにくい。

その場合「奥さんにバラす」と脅しをかけてはどうだろう。結婚生活を犠牲にするつもりがなければ、あの女との関係を精算するのではないか。

この日のランチタイムは同僚とのお喋りもそこそこに、作戦の詳細について思案したのだった。

お弁当仲間の先輩ふたりは先に休憩に入っていたため、時間が来ると部署に戻った。私は淹れ直した熱いお茶をフーフーしながら、なぜか係長の顔を思い浮かべる。

寝ている私の頭を膝に乗せて、係長はいったい何を考えていたのかな。子供だなーとか思ってたんだろうな。髪の毛を触ってたって……それはセクハラ？ まさか本当にお持ち帰りするつもりじゃなかったよね！？

途端に顔が熱くなった。お持ち帰りされた私と係長のあれやこれやを想像し……

ぎゃーっ、何考えてんの、私！

ないないない。係長には大本命の彼女がいるんだから。誰にも秘密にしておきたい女性がいるんだから。

ふと、そこで何かが引かかった。

ちよっと待って。そしたらあの係長が急に私に興味を示すっておかしくない？

もう一回整理してみよう。

係長は何らかのきっかけで私がキス現場の目撃者だと知った。何としても口止めしておきたい。

そこで自らのゴシップを逆手にとって私に釘を刺した。電話での兄との会話を盗み聞きし、「証拠もなく噂話をするな」と更に念を押すのに利用し、ついでに部署の特に女性陣の注意を自分から逸らすのに成功した。

でもいつまでも私が黙っている保証はない。いつ気が変わって『昼休みに逢引する上司』というネタをばらまくかわからないのだ。

とすると、係長にしてみればもっと安心確実な方法を選ぶとはしないだろうか？

例えば弱みを握るとか、逆に味方につけるとか。

弱みって言ったって、私みたいに清廉潔白な人間にはそんなものないのだ。そこで手懐ける方法を探る。私に興味があるフリをし、近づいて、惑わす——自分の魅力を最大限利用して。

私が酔っ払ったあの夜は絶好のチャンスだったが、石津さんに邪魔された。今朝不機嫌だったのはそれが理由だ。

そういえばさっきも、ありもしないお見合い話を聞いて怒っているようだった。私に婚約者でもできたら、手懐けることができないから？

……………どうしよう、ピッタリはまっちゃったよ。私ってやっぱり探偵に向いているんじゃないだろうか。

「お前って、百面相だな」

「ぎゃっ」

工藤課長が入り口に立っていた。

本日二度目のいきなり声かけ。心臓に悪いったら……まったく、課長といい係長といい、不倫男は人を驚かせるのが趣味なのか？

「ちよっといいか？」

「どうぞ」

冷たい視線と返事を妻を裏切る男にぶつけてやると、彼はわずかに怯んで向かいの椅子に腰を掛けた。いつもの自信満々な『俺はできる男だぜ』な態度が消えている。多少なりとも後ろめたい気持ちがあるからなのか。

課長は気がかりなことを確かめたいかのような、だがあまり気の進まない様子で口を開いた。

「俺、朝からお前に睨まれてるように感じるのは気のせいかな？」

思ったとおり、早くも食いついてきたな。

「もちろん気のせいじゃありませんとも」

ここは強気で行くべし。

手招きして顔を近づけてきた課長の耳もとに、口を寄せてつぶやく。

「仙台」

途端にバツと口を押さえて彼は青くなった。

「やっぱり……東京駅のあれ、お前だったんだ……」

『あれ』って何よ。

「仙台から一緒だったのか？」

「はい、同じ車両でもうバツチリ」

う、ともう一度口を押さえる。

「最低ですね、課長」

思い切り軽蔑を込めて言っていると、彼は顔色を変えて否定した。
「違う」

課長としてはあっさりと認めるわけにはいかないのだろう。予想の範囲内の反応を無視して嫌みたらしく続けた。

「夫の最初の浮気は妻の妊娠中っていうのがパターンらしいですけどね」

「俺はそのパターンには当てはまらないぞ」

「えっ！　もう何度も浮気してるってことですか」

「違うわ！　ちゃんと説明させてくれ」

「別に説明なんか聞きたくありません。それにもう時間切れです」
休憩時間が終わろうとしていた。立ち上がって課長を見下ろす。

「これだけは言わせてもらいます。あの人とは別れてください」
身を翻すと小走りで休憩室を出た。これ以上彼の言い訳なんか聞きたくなくて。

課長に対する憤りで気が昂^{たか}ぶり、廊下を進む足取りが乱れる。

何を説明するというのか。それをすべきは私ではなく奥さんだろ！

独りで冷静になれる場所を求めて化粧室に急いだら、角を曲がったところで誰かとぶつかりそうになった。

「うわっ」

ほとんど相手の胸に飛び込む形になって、二の腕を掴つかまれる。

——瀬尾係長。

気が昂ぶったままの私は何も言えずに係長を見上げた。すると興奮する目の色に気づいたのか、ハッとして私の腕を掴む指に力がある。

「越智さん？ どうしたの？」

心配そうに私を見る瞳には優しさが溢れていた。

でも。違う。

頭の奥で警報が鳴る。——その優しさはニセモノだ——

「何でもないです」

係長から離れ、足早に化粧室へ飛び込んだ。明るい蛍光灯の下に見える鏡の中の自分は泣きそうな顔をしている。慌てて頬を両手でぴしゃっと打った。

お生憎さま係長。その手には乗りませんから。だって私はカン違いしたりしないもの。

五年前に聞いた彼女の声が鮮明に蘇った。

『カン違いせねで欲しんだ』

……そう。

私は、カン違いなんかしないもの。

第十四話 社長の愛人!?

「美春、お兄ちゃんに弁当くれ」

その瞬間、目の前が真っ暗になった。夕べから下ごしらえしてあったおかずと弁当用冷凍食品とを組み合わせ、伯母からもらった漬物を詰め合わせて会心の出来となった豪華弁当を、あっさり兄に奪われるなどあり得ない。

「今日は一日事務所で書類仕事。外に食に行く時間もほか弁買いく行く時間ももったいないから、可愛い妹が兄のために作った弁当が必要なんだ」

事務の人にも買ってきてもらえばいいのでは……?

「指定した弁当がなかった場合、いちいち電話で指示を仰いでくる奴だから面倒くさい」

あああ。私の血と汗と涙の結晶がああ。やっぱり電車で来ればよかった。

昨日一日で溜まったストレスを解消すべく、今朝は五時起きで走りに行った。週末は秋田に行ってたし、昨日は土産が重くて階段を上っていないから、身体が負荷を求めている。こんな気分ときは運動するに限るのだ。

充分なストレッチをして体を解してからみっちり走り込んだ。その後のシャワーの爽快なこと。思わずZARDの歌が口から漏れる。兄が東京へ進学した際にもらったお古のCDラジカセに残っていたのが、ZARDのベストアルバム。なにげなく聴いてみたら、軽快なメロディと心を打つ歌詞、それに大人の女性の可愛い歌声にすっかり魅了されてしまった。陸上の大会では走る前に必ず聴いて心を落ち着かせたものだ。

兄が自分で買ったのか他人から借りたのかは定かではないが、ど

うせ忘れているに決まっている、兄のモノは私のモノ、と勝手に頂戴した。

数年後に私が上京し、CDを見つけた兄が「お前が持ってたのか」と言ったときには心底驚いたが、返せとも言われなかったので正式に私のモノとした、曰く付きの(?) CDなのである。

そんなZARDを口ずさみながら、弁当を作り、朝食を済ませ、出勤態勢が整ったときに兄が声をかけてきた。

「今日はお兄ちゃんを送ってあげるよ」

兄はその日の仕事内容により、時折車通勤をする。雨がひどい日などは「そんなにお兄ちゃんの車に乗りたいのか? しょうがないなあ」と、こちらが頼んでもいないのに送ってくれることがしばしばあるが、今日は天高く馬肥ゆる秋晴れの日でいったいどういう風の吹き回しかと思ったものの、満員電車に乗らなくて済むという楽な道を選択したのが間違いの元だった。

弁当を強奪され、落胆して兄の車が走り去るのを見送った私は、足取りも重く建物に入った。兄の財布は現金残高が低く、千円しかもらえなかった。高給取りのくせに。

「忙しすぎて金を下ろす暇もない」などとのたまってくれた兄は、普段、買い物電子マネーかクレジットカードで済ます。一方、職業に比して案外アナログな私は、専ら現金決済だ。財布が札で膨らむ方がずっと嬉しい。

とにかく今日は千円でランチだ。何を食べようかな。非常階段を上る間、次々と昼のメニューを想像しては今日一日の活力を充電することに努めた。

オフィスに入ると、途端に昨日の工藤課長とのやり取りが脳裏に再生される。

落ち着いて一晩考えてみたが、私のような小娘に言われたくらいであのエロ課長がすんなり女と別れるとは思えない。また、本当に別れたかどうかを確かめる術は今のところ私にはない。

うーん、どうすべきかなあ。

「越智さん」

「ぎゃっ」

突然近くから声をかけられ飛び上がった。見ればすぐ横に瀬尾係長が立っている。

「またもやこのパターン。私の寿命を縮めたいのか、この男。ああ、心臓バクバク……」

深呼吸をしてようやく声を出す。

「……おはようございます、係長」

「おはよう。僕が入ってくる音にも気づかないなんて、何か考えごと？」

「そうです、ここ数日頭がハゲるほど考えごとをしているんです、あなたのせいで。」

「が、口に出してはこう言う。」

「別に何でもないです。今日のお昼何にしようかなって」

「……本当にそれだけ？ 何か悩みがあるんじゃないの？」

「悩みの原因に向かって言えるかい。」

「その……僕でよければ話を聞くから。ひとりで抱え込むのはよくないよ」

「どうやって不倫をやめさせるか、本人に相談しろってのかい！」

しかし係長の真摯な表情には、彼が私を手懐けようとしていることを知っていてさえも、強く心を打つものがあつた。それが彼の手だとすれば、その演技力には脱帽する。

でも係長、残念でした。あなたの意図に私が気づいていることを、あなたは知らない。

フフフフ。ホーツ、ホツホツホ。……実際にこんな高笑いをや

ってみたい。

「千円でデザートとコーヒーも付いてるランチって、どこで食べられますかね？」

「は？」

「目下のところ、それが悩みなんですけど」

冗談めかした返答を聞いて、彼は明らかに気分を害したようだった。自分の魅力と優しさが通用しない女は不愉快なのだろう。これ以上ここにいられても何かと厄介だ。彼にはさっさと会議に行ってもらおう。

「あっ係長、早く行かないと会議に遅れますよっ」

「越智さん、ちょっと待っ」

「ダメダメ、できる男は常に余裕を持たないと」

彼がまだ何か言いかけているのも聞かず、背中を押して無理やり部屋から追い出した。

そのうちに続々と同僚たちが出勤してきた。席について早速パソコンを起動した藤田さんを、本日のランチに誘う。

「いいけどさ、ポチ、先週お米買ったばかりなのにもう全部食べちゃったの？」

「なっ」

いくら私でも一週間で米十キロは消費できんわ！

「違いますよ、今日はお米がないからじゃなくて」

疑惑を晴らすべく兄によって弁当を強奪された事情を話していると、会議を終えた上司たちが部屋に入ってきた。課長はチラッと私に視線を走らせ、すぐにはずし、本日の伝達事項を皆に向かって伝え始める。

私はねめるように彼を見つめた。視線で人が刺せるものなら課長の全身は今、ハリネズミのように無数の視線の針が突き刺さっているはずだ。エロハリネズミ。略してエロハリ。妻を裏切った男には

これでも上等な呼び名だ。

ふと視線を課長から横に流すと、係長が目を細めてこちらを見ていた。さっき追い立てられて不首尾に終わったものだから、私への新たな懐柔策でも練っているのか？

そんな暗い情熱を燃やすくらいなら、不倫をやめろって。

始業早々、社内メールが一通届いた。差出人は課長である。

《話がある。昼、空けといってくれ》

振り返って彼にガンを飛ばしてから返信した。

《先約あり。おととい来てください》

なんで私に不倫の言い訳すんのさ。奥さんにしろっての。いや、実際にするのはまずいな。お腹の子に悪影響が出そうだ。もし男の子だったら、将来父親のようなエロハリになってしまうかもしれない。

《大事な話。仕事が終わったら会おう》

食い下がる課長に、今度はたっぷり時間をとってから嫌味なほどニッコリ笑ってやった。

《仕事の後は速攻で家に帰る予定が入っています》

《つれないことを言うな。メシおごるから》

《私に言い寄るしつこい上司がいるって、杏子さんに相談しようかな》

《それはダメ！ 相沢には絶対言うな》

《じゃあ、奥さんの許可をもらってから》

次に来たメールはこれまでとは一変した調子だった。

《お前に頼みたいことがあるんだ。一生、恩に着るから》

課長らしからぬ下手に出た内容に眉をひそめる。何か裏があるんじゃないだろうか。

でも一生恩に着せるのも悪くないと思直した。私に頭が上がるない工藤課長……

楽しそうな未来図に軍配が上がった。キーボードの上で指を踊らせる。

《わかりました。時間と場所は？》

どうせ不倫絡みに決まっているが、彼の頼みを聞いてやりつつ別れさせる道を模索できるかもしれない。『エロ課長の不倫強制終了作戦』の新展開に思わず顔が緩んだ。

さて、藤田さんとの楽しいランチタイムがやってきた。上司ふたりのドロドロ不倫で胸焼けがしていたから、久しぶりに悶絶必至の純愛エピソードを聞いて萌えたい。

場所は歩いて五分の定食屋。安くてボリュームがあるとあって昼時はいつも大賑わい、私たちが店内に入ったときにはすでに満席だった。

「空いてなさそうですねー」

「んー」

諦めて余所へ行くか、と、踵を返しかけたときに声をかけられた。

「藤田くん、ここおいでよ」

四人掛けのテーブルに座る二人の女性のうち一人が手を振っている。どうやら藤田さんの同期らしい。ランチの女神様は私たちに微笑んでくれたようだ。

「ポチ、構わない？」

「はい、もちろん」

二人はPR事業部二課の片岡麻里子さん、そして長野遙さんと名乗った。藤田さんの同期である片岡さんは以前、一課に所属していたので瀬尾係長の元同僚だ。私のことも二人に紹介してもらった。

片岡さんが私の顔をチラチラと見るのが気になる。顔になんかついてんのかな。いや、だったら藤田さんが言ってくれただろうし。やがて好奇心に負けたのか、彼女はおずおずと切り出した。

「越智さんて、あの越智さんだよね？」

あの？ とは？

含みのある質問に藤田さんも食いついた。

「何？ ソレ」

「いや、社長のお気に入りって専らの噂だから」

P R事業部にまで知られているのか……

「でも、ねえ」

「はい、思ってたのとちょっと……」

目を合わせてゴニョゴニョ言う彼女たちの仕草が何とも気になる。

何よ！ はっきり言ってよ！

藤田さんも同意見だったらしい。

「どういう噂になってんの？ そっちでは」

気心の知れた仲らしくアイコンタクトで会話を交わしたふたりは、やがて覚悟を決めたのか私に関する噂を交互に口に始めた。

「社長がしょっちゅうWEBに出入りしては越智さんにチョッカイかけてるとか」

それは事実です。迷惑してます。

「ランチやデートに誘ってるとか」

ランチはあるけどデートはないぞ！

「一緒に飲みに行ってるとか」

それはデタラメ！

「すでに愛人……わわわ」

「なんですってえ！」

気がついたらガタンと立ち上がって叫んでいた。店内の視線がすべて私に集まったが、んなもん気にしてられっか！

愛人！ 私が社長の愛人！？ あ、頭がくらくらしてきた。

「ポチ、ちょっと落ち着いて、ね？」

藤田さんがなだめてくれたが、憤激は収まらない。

この私に社長の愛人疑惑があるなんて知ったら、さぞかし両親は

草葉の陰で泣くことだろう。ああ、情けないったら！

ちようどそこに肉じゃが定食が運ばれてきたので、たっぷり汁の染み込んだじゃがいもを親の敵とばかりに箸でブスブスと刺す。しかし私が黒い熱情を定食に向けている間に、藤田さんは状況改善に乗り出した。

「確かにポチは社長に気に入られてるけど、愛人なんてとんでもないよ。WEBの連中ならみんな知ってる。PRでもそう言ってやってくれないかな」

藤田さん！ 大好き！ 胸の前で小刻みに拍手する。

「付け加えさせてもらうと、一緒に飲みに行ったこともないし、デートなんてたといえ誘われたって絶対行きませんよ。はっきり言ってそんな噂、大迷惑ですっ！」

愛人疑惑を払拭するため藤田さんに倣って私も身の潔白を言い立てる。すると真剣さが通じたのか迫力負けしたのかはわからないが、彼女たちは顔を引きつらせて私の主張を受け入れた。

「向井のときとはずいぶん違うのね」

向井？

ポツリとこぼれた片岡さんのつぶやきに好奇心がすかさず反応した。

向井里佳子。去年四月に入社した大卒社員。PR事業部に配属されるやいなや社長の目に止まり、気に入られてオン・オフ共に特別扱いを受ける。

彼女の教育係として社長自らPR事業部のエース、瀬尾主任（当時）を選び、彼が担当する案件にはすべからく関わらせてPRマンとしての教育を施そうとした。

終業後には食事に誘い、休日にはゴルフに誘う。常に瀬尾主任もお供させて。

「若い女性一人では気後れするだろう？ 君は教育係なんだから」

と、完全に公私混同の理由を付けては主任を引っ張り出す。

確かに向井里佳子は美人で研修中は男性社員の注目を浴びたものの、元々勝気な性格で、少しずつ社長の寵愛をカサに着始め、職場ではたびたび同僚と摩擦が起きるようになっていった。

これには上司たちも頭を悩ませたものの、ワンマン社長に苦言を呈する者はいなかった。

しかし職場の雰囲気次第に悪くなる中で急転直下、クライアーントである某食品会社社員と電撃結婚し退職。

去年の十二月のことだった。

「できちゃった結婚だったのよ。まあ辞めてくれてこっちはみんな助かったけど、新入社員だよ？ 無責任っちゃ無責任でしょ？ 一人の社員を育てるのにどれだけ時間と金がかかるかって話」

「瀬尾さんと組んで仕事やりたいって人は男女問わずたくさんいたのに、よりによってロクに仕事も覚えられない向井の教育係になって、こう言っちゃなんだけど、結局瀬尾さんの時間はすべて無駄になったってことですよ」

「瀬尾さんは何も言わなかったけど、オン・オフ両方で引っ張り回されて絶対迷惑してたよ。社長がいないときは向井とはあからさまに距離置いてたし。それがわかってたから周りも暴発しないでいたけど」

「『社長に直訴して会社辞める』って言った女の子がいて、瀬尾さんが『もう少し様子見てだめなら僕が社長に話すから、あとちょっと辛抱して』ってなだめたんですよ。主任がそう言うならってみんなとりあえず納得したんだけど」

片岡さんと長野さんは当時の怒りを思い出したのか、身を乗り出して興奮気味に語った。そういう事情で揉めごとが起きる様を想像して、彼女たちに同情する。

あのオッサン、こんなに不平不満を社員に抱えさせるなんて、は

つきり言って社長失格じゃないの？　だって企業のトップにいる人がひとりの社員ばかりえこ鼻^{ひいき}肩してたら誰もついて行かなくなるじゃない。やり手社長って言われてるのに、変なの。

向井さんの何がそんなに社長のお気に召したんだろう。ふたりの話では仕事のできる人ではなかったみたいだし。単に美人だったから？

それにしても、あとからあとから出てくる係長のエピソードには正直驚いた。

「係長って、ずいぶん人望が厚かったんですね」

片岡さんは興奮を静めると、元上司の話題に嬉しそうな顔で答えた。

「うん、ただ仕事ができるだけじゃなくて、先輩後輩関係なく周りに配慮できる人なんだよね。瀬尾さんがイライラして周りにあたるところなんて見たことも聞いたこともない。モテる人だからさ、プライベートが充実してるから仕事にいい影響が出るのか、仕事ができる人だからモテるのか、どっちなんだろうね。――WEBではどうなの？」

「さあ、来たばかりだし、よくわかりません」

私にとっては『不倫の恋を守るためには手段を選ばない男』なんだけど、上司としてはどうだろう。

瀬尾係長はWebPRを担当している。一方私はWeb制作のクリエイターだ。

私が指示を仰ぐとしたら佐久間主任や秦野主任だし、係長がWebデザインの範疇で具体的な指図をすることはない。

しかしWEB事業部の係長職として、一つ一つの業務をきちんと把握しようと努めているし、そのためにクリエイターとも積極的に会話をこなす。専門的なことでわからないことはわからないとはつきり言う。知ったかぶりしないのがいい。

部下への指示は簡潔で的確だし、皆をまとめることに長けてる。今朝は悩みがあるんじゃないかって訊いてくれたなあ。昨日廊下でぶつかったときに私の様子がおかしいと感じたんだろう。彼の迷惑が多分に絡んでいるとしても、部下を氣遣う気持ちは嘘ではないってことなのかな。

……あれ。ちよつと。なんか私、気持ち流されてない？

背筋を伸ばして姿勢を整え、流されかかっていた気持ちもきちんと立て直す。

『係長にぎゃふんと言わせ不倫をやめさせる作戦』遂行のためにはこれじゃダメダメ。

少なくとも半年以上は続く不倫だ。本気の相手なら係長だってそう簡単に諦めないだろう。作戦成功のためには私がもっとピシツとしないとね、ピシツと。

気合いが新たに入ったところで、片岡さんが再び口を開いた。

「一度は瀬尾さんと同じチームに入って一緒に仕事したかったんだけどなあ。WEBに異動しちゃってちよつと残念。まあ本人が希望したから仕方ないけど」

本人が希望した？ それは初耳だ。

「係長って、WEBに異動希望出してたんですか？」

「PRの二課でも係長のポストが一つ空いてね、一課か三課の係長職の中から一人が異動することになったんだけど、瀬尾さんはWEBを希望したらいいの。前からやってみたかったんだって」

ふーん。で、異動してみたら自分の不倫を知る女がいて、口封じにかかったと。

そこでふと疑問が頭に引っかかった。……ちよつと待って。

係長はいつから私のことを知っていたのだろう？

異動してすぐに気づいたってこと？ でも誓ってあの非常階段では私の顔を見ていないはずなのに、どうやって私だと知ったの？

いったいどうやって？

係長が異動さえてこなければ、私が気づくことはなかったのに。彼の存在すら知らないまま、キスを目撃した記憶も色褪せてしまっただろうに。

皮肉な巡り合わせに軽いため息が出た。

第十五話 課長の告白

指定された店は中目黒にある創作和風ダイニングだった。飲食店ばかりが入ったビルの上階の奥にあり、入り口は風雅な佇まいを見せている。

工藤の名前を出すと、年の頃二十代後半のウェイトレスが私に値踏みするような目を向けた。

本日の服装はキャミソールの上にブラウス、下はコットンパンツという出で立ちで全く普通のオフィスカジュアルのつもりなのだが、この店にはそぐわないとでも思われたのだろうか。

私は基本的にパンツルックで、足もとはスニーカーかヒールの低い靴を好む。だってスカートでは走れない。いつでもどこでも走る態勢を整えておくのが越智美春、なのだ。

案内された個室は処々に青竹を配した、清々しく明るくシンプルな内装で、木目の美しいテーブルの一端にはすでに工藤課長が着いて私を待っていた。

ウェイトレスがもう一度チラッと私を見る。

はーん、そういうことか。

何しろ課長は今年三十五歳の男盛り、ガッチリした体格を持ち、精悍な顔つきをしたオトコマエであると同時に大人の男の色気をムンムンと漂わせている。隣に侍らす女はお色気度百二十パーセントくらいの美女が相応しいとでも思ったんだろう。こんなオトコマエの連れが私みたいな色気なしの小娘で悪かったね。

課長の向いのソファに腰を掛けると、ウェイトレスから飲み物を尋ねられた。食事はすでにコース料理を注文してあったらしい。

「烏龍茶を」

酔っ払って醜態を晒したばかりなので今夜は酒を控えることにした。

ウェイトレスが下がると課長が口を開いた。

「遅かったな」

「迷ったんです」

「お前の方が先に出たよな」

「迷ったんです」

「交差点から目と鼻の先って言ったよな」

「迷ったんですっ！ それ以上追及したら帰りますよっ」

……だから初めての場所は嫌い。東京の街並みはどこもかしこも同じに見えるから。

「で、頼みというのは何ですか」

単刀直入に訊くことで、話題を強引に変えた。

「……その前にお前が見た女性のことなんだが」

「ダブル不倫の相手ですね」

「違うって」

「信じません」

「信じろ」

「ヤダ」

ここで前菜の盛り合わせが運ばれてきた。塩炒り銀杏・栗の甘煮・秋刀魚の酢漬け。秋の味覚である。

空腹だったので一気に食べてしまってから、話を元に戻した。

「……あんなの誰が見たって不倫旅行じゃないですか。他に何があるっていうんですか」

課長は冷酒を一口含むと静かにグラスを置いた。

「数年ぶりに電話がかかってきた。取り乱してて、心配になって仙台に会いに行った」

「誰なんですか、あの人」

「昔付き合ってた」

なんだ、やっぱりそういうことなんだ。

「で、昔の恋が再燃したんですね」

「してない」

「でも一緒に泊まったんでしょ」

「何もないぞ。お前が想像してるようなことは。ただ泣いて取り乱す彼女をなだめてただけだ」

エロハリがそれだけのためにわざわざ仙台まで行くなんて信じられない。

「それで？」

「力になるって約束した」

次に運ばれてきたのはお造りの盛り合わせ。こちらも全て平らげてから、課長に対して厳しい声音で迫る。

「何があったか知りませんが、どうして課長が力にならなきゃいけないんですか？ 奥さんに黙って元カノに会いに行くって時点で、すでに裏切りは始まってるんですよ。課長だってそれが後ろ暗いから奥さんに知られたくないんでしょう？」

「それは認める。俺が悪い。でもなあ、あんな風に電話で泣かれて、放つとくことはできなかったんだよ」

空を見つめる課長。懐かしい何かを思い出すように。

「恋人である以前に同僚だった。広告代理店にいた時の二期後輩だね。同じチームでしんどい仕事が多かったけど、モノを作り上げる苦労も喜びも一緒に分かち合った仲間とでも言うかな」

「どうして別れたんですか」

「『同僚』と『恋人』を使い分けでなくなったんだ。二人だけで会ってる時も仕事の話ばかりで喧嘩にもなったし、それなら恋人でいる意味がないって関係を解消した。嫌いになって別れたわけじゃない。俺が転職してから連絡先くらいは残しておいたから、お互いに結婚した時は祝いの品を贈り合った。——そういう関係だよ」

初めて聞く、課長の昔の恋。若くて、仕事に情熱かけてて、器用

には立ち回れなくて、自分も彼女も傷つけて……最後にはそれぞれ別の道を見つけた。そんな恋だったのかな。

課長は私たち部下にはボロクソ言いながら厳しく結果を求めてくる上司だけど、決して情のない人ではない。それが分かってるからみんな彼を慕ってついに行くんだと思う。

——そんな課長が昔の同僚で恋人だった人を捨ててはおけないだろう——
現在困った状況にあると分かっている。

「あの人、何があったんですか」

田中奈緒子、旧姓橋本、三十三歳。元広告代理店I社勤務。二十九歳の時に仕事で知り合ったイタリア料理のシェフと結婚。夫の独立・開業の際には独身時代に貯めておいた貯金を提供、広告代理店を退職し、レストラン経営を手伝う。二年前に長男が生まれるが同居の姑に預けることが多くなり、やがて嫁姑が長男の教育問題で対立する。

夫に苦情を言う妻。息子に愚痴をこぼす母。どの時代にも繰り返されてきた光景。

パートナーとは妻のことであり、自分たち夫婦が家族の基礎をなすと考えられる夫であるなら、母親に対して線引きできたであろう。だが夫と姑は母子二人で生活してきた時間が長く、夫に対する姑の影響力は大きかった。次第に夫との間に溝ができ、穏やかな家庭生活を送ることが困難になってしばらくした頃、奈緒子は相談に乗ってくれた店のマネージャーと関係を持ってしまう。酔った上での出来事だった。

このことを知った夫は離婚請求し、奈緒子は家を出る。

話を聞いてそれは辛いだろうなと思った。

どちらが一方的に悪いというものでもない。女の立場から言うな

ら、旦那さんが奈緒子さんをきちんと守るべきなのであろうが、母子二人で生きてきたという境遇を聞いたら、母親を無下にはできないのも理解できる。

自分の考えを述べると、課長は「ふーん」と意外そうに言った。

「女ってこういう時、旦那か姑を攻撃するもんと思ってたけど、お前は違うのか」

それは私自身が母と二人で寄り添って生きていたからだろう。父は死に、兄は遠く離れて、私たち二人強い絆で結ばれていたから。

「私が考える親子の絆って……うまく言えないんですけど、伸びたり縮んだりしながらもしなやかで強靱で絶対に切れたりしないんですよ」

「何となく言いたいことは分かる」

「でも夫婦の絆は何年もかかって太くなっていくもので、油断すれば簡単に折れる」

「それは同感だ」

だからこそ、年輪を重ねた夫婦が強く美しく見えるんだと思う。

「だから、課長も奥さんとの絆、ポツキリ折れないように気を付けないとねっ」

「お前は一言多いわ」

「ところでどうして仙台だったんですか」

「夫婦の思い出の場所なんだと。姑抜きで二人で話し合いたくて旦那を呼び出したけど、応じなかったんだな。それで俺に電話してきたんだよ、もう終わりだった」

それって辛すぎる。お姑さんのことは抜きにして、好き合って結婚までした二人がどうしてそんなことになってしまっただろう。

「奈緒子さん、どうするつもりなんですか」

「離婚には応じてもいいって。でも子供の親権は欲しい。それとな。レストランの開業に当たってあいつが金出してるだろ。その辺の権

利関係もあるから、話が複雑になりそうなんだ」

「なるほど」

「そこでだ。お前のお兄さん、紹介してくれ」

えっ。びっくりした、突然。

「課長だったら弁護士知り合いなんて、いくらでもいるんじゃないんですか。クライアントつながりとか」

顔広いもんなー、何しろ。

「そのクライアントつながりにいくつか紹介してもらった弁護士事務所の中に、お前のお兄さんのところがあったさ。こりやもう、運命だと思ったね」

課長みたいな現実主義の人間が口にする運命ほど胡散臭いものはない。そう思ったが、黙ったまま先を促した。

「あいつ今、人間不信っぽくなってんだよな。例のマネージャーってのが元々姑の紹介で入った奴で、関係を持ったのも姑の指図じゃないかって」

「げっ。それじゃ昼メロじゃないですか」

「弁護士なんて皆がみんな信用できるわけじゃないし、高い相談料取られて何も残らないんじゃないかと嫌だ」と

それなら課長を頼ったのも納得できる。今現在の奈緒子さんとは何の関わりもない、でも心から信用できる相手——それが課長なんだろう。

「で、何でウチの兄を？」

「あいつ自身は岩手の人間なんだけど、お袋さんが秋田の人でね。」

秋田は第二の故郷みたいなもんなんだよ。だからお兄さんなら、少しは警戒心も和らぐんじゃないかと思うんだよな。元々あいつって田舎をすごく大事にしてるヤツだから。で、お前もあいつに会ってやってほしい」

「どうしてですか？」

「話し相手になるだけでいいんだよ。お前見てたら十年前の自分を思い出して元気になるだろ、きっと。な？ 頼むよ、同郷のよしみ

で」

随分と広い「同郷」だな、それは。

しかしここまで話を聞いて、私自身も彼女を応援したい気持ちになった。

「分かりました。兄に話してみます。一生恩に着てくださいよ」

「それは絶対約束するから」

ふむ、これくらい恩着せがましくしておけばいいだろう。ふふふ。

「あ、あと一つだけいいですか」

「何だ」

「奥さんには仙台外泊の言い訳、なんてしたんですか」

「ポチ、顔がニヤけてる。……先週末はカミさん、高校時代の友達の結婚式で名古屋に行ってたんだよ。体を心配した両親も一緒にな」

「ふうーん」

「何だよ」

「妊娠中に家を空けるのは要注意ってことですね。いい勉強になりました」

翌日、朝イチで打った社内メールにて、昼休みに課長を呼び出した。夕べ早速兄に事情を話したのだ。

私が待ち合わせ場所に行くと、指示どおり課長が待っていた。よしよし。

「何だ、あのメールは」

「とっても分かりやすい指令だったでしょ？」

《本日、十二時十五分、裏の非常階段で待て》

「お前、俺は一応上司なんだが、待て、はないだろう、待て、は」

「このことに関しては私の方が立場が上ですからねえ」

腕組みをしてにこやかに課長を見上げる。弁当を持ったままなので今イチ様にならないが、この際良しとしておく。

「さて、兄からの伝言があるんですが」

「話してくれたのか」

「はい。えーっと、類似したケースをすでに扱ったことがあるので引き受けることに問題はないが、やはり御本人から一度詳しく話を聞き、方針を確認した上で費用を納得していただきたい。通常最初の相談から法律相談料を頂戴しているが、今回は愛する可愛い妹の上司の方からのお話なので、僕個人の裁量でお話を聞きましょう、とのことですよ」

うん、長かったが兄が言った内容に逐一間違いはない。

『美春の上司が絡んでるんじゃ、お兄ちゃん頑張らなくっちゃなあ。私の兄は日本一の弁護士だって自慢させてやるからな、美春』

ウザい台詞まで一緒に思い出してしまい、慌てて先を続けた。

「それで、兄は明日の夜なら時間が取れるがどうか、とのことですが、どうします？ それ以降だと再来週まで忙しいし、通常の業務時間となると相談料が発生してしまうそうですし、課長も一緒ってわけにはいかなくなりますけど」

「分かった、明日の夜だな。あいつに連絡しとく。お前も来るんだろ？」

「はい、ウチの兄、人見知りですし」

「……」

今後必要になる時もあるとうと、携帯番号とメールアドレスを交換しておいた。

「じゃあ、私お弁当食べに行きますから、課長はこのまま階段を下りて行ってくださいね」

「十階分下りろってか」

「食前運動ですよー。気持良くご飯が食べられますよ。はい、行っただ行っただ」

課長はムスツとしたが、言われたとおりに下りて行った。

立場が上って気持ちいいなー。

気持ちいいのはそれだけではない。課長が不倫をしていなかった

という事実、昔の恋人の力になろうとしている事実が私の心を暖かくしていた。一度は課長を軽蔑しかかっていたのだ。上司への信頼を取り戻したことが無性に嬉しかった。

ごめんなさい、課長。頭から疑ってかかって。……ま、これぐらい謝っておけばいいだろう。

ふと思いついて携帯を再度取り出し、課長の登録名を【エロハリ】と変えた。この呼び名が今や愛らしい響きを持って聞こえるのだから、人の心というものはつくづく不思議だ。せっかくだから、こっそりと上司をおちよくりつつ活用しようではないか。

裏口から再び社内に入り、誰もいない廊下を休憩室へ向かう。鼻歌が出そうなほど陽気に足取りも軽く角を曲がると、ギクツとして歩みが止まった。

うつむきがちに壁に寄りかかった人が一人。ゆっくりと顔を上げる。

「係長……」

何をやってるんだろう、こんな所で。

「あの、休憩じゃないんですか？」

私の問いには答えず、影を落とした目でじっとこちらを見る。

「係長？」

再度呼びかけると、彼はつと視線を外してボソツとつぶやいた。

「今から行く」

いつもの爽やかさや柔和さは完全に消え失せ、代わりに沈鬱な空気をまとわりつかせて、彼は私の前から去って行った。

何なんだ、アレ。

首をひねりながら休憩室に入ると、すでに食べ終わっていた弁当組の二人が何やら盛り上がっている。

「予想したとおりの展開で笑った笑った」

「あたしはあの演技力に笑わせてもらったわ」

どうやら昨夜の連続ドラマが話題のようだ。私は二人に挨拶しテーブルに弁当を広げて、お喋りの仲間に加わった。しかし、先程見た係長の様子がどうも気になる。

「あれがなんで『恋人にしたい女性芸能人』で二位になるの？ 男の評価って謎だね」

「隠れ巨乳だからじゃない？」

隠れ巨乳。いや、今は巨乳じゃなくて係長だ。

何があっただろう、あんな暗い顔をして。仕事は順風満帆、プライベートだって私を懐柔してでも守りたい、情熱的な恋をしているというのに。

その時、ふとある可能性が思い浮かんだ。

もしかして。……不倫の恋がうまくいっていない？

「俳優の水原丈と不倫してたんだよね。愛妻家って評判だったのに」

「童顔と巨乳のギャップは破壊力抜群だからねえ」

あの女も巨乳なのかな……だから巨乳じゃなくて係長だって。

彼にしてみれば、愛する女に夫がいるって状況は耐え難いだろう。いつまでもずるずると不倫を続けるつもりなのか。

あの日の光景が目の前に浮かび上がる。恍惚の表情を浮かべたあの女の顔。自分の夫にも、係長にも、あんな顔を見せているのだろうか。幼くも見える妖艶な表情で二人の男に笑み、時間差で愛を囁ささやいているのだろうか。やっぱ巨……これはどうでもいい。

急に腹が立ってきて、ガツガツとご飯を口に詰め込んだ。

さっさと離婚するなり、係長との関係を解消するなり、はっきりしなさいよ。

それは、初めてあの女に対して抱いた嫌悪感だった。

第十五話 課長の告白（後書き）

第十六話 社長VS係長

ハチ公前は祭りかと思まごうほどの人口密度であった。すでに陽も落ちて人工的な光が瞬く駅前を、家路を急ぐ人、遊びに出かける人が此方彼方で行き交う。

こんなにたくさんの中から課長を見つけられるのだろうか。体が大きいから目立つとは思うけど。

田中奈緒子さんは現在渋谷のビジネスホテルに滞在している。課長と待ち合わせて、これからそのホテルに向かうところだ。内容が内容だけに、ホテルの部屋の方が落ち着いて話せるだろうという判断からである。恵比寿で待ち合わせなかったのは、もちろん人目を避けるためだ。そして、兄とは直接ホテルで落ち合うことになっていた。

「あのースイマセン」

話しかけられて顔を向けると、私と同じ年頃の男性が恥ずかしそうにこちらを見ている。

「道玄坂の？？ってライブハウスに行きたいんですけど、場所分かりますか？」

私がライブハウスなんぞに行くように見えるのかね、君は。

「すみません、渋谷は詳しくないので」

渋谷どころか東京は全部詳しくないんだが。

「困ったなア。あ、地図は持つてるんすよ。でも僕地図見るの苦手です」

と言いつつ雑誌から切り抜かれたらしい紙片を私に見せる。まあ、地図があれば私にも分かるかもしれん。

「えーっと、ハチ公がここだから、こう見て、あー、あっち方向じゃないですか？」

実は大雑把な案内だが納得してくれるだろうか。

「え？ どっちですか？」

「えっと、あっち、あの道です」
背伸びをしながら指をさす。

「よく分からないなア。人が多くて。ちょっとそこまで一緒に来てもらえませんか？」

そう言いつつ私を促して移動する。仕方ないなあ。

もう一度二人で地図をのぞき込んで交差点の前まで来たところで、突然真横に大きな人影が現れ、言葉を発した。

「俺の連れに何か用か？」

課長だった。え、何、凄んでるよ、ちょっと。

「え、いや、何でもないっスよ」

慌てて青年は走り去った。反対方向に。だからライブハウスはそっちじゃないって。

ボケツと青年を見送ると、課長は呆れたように言った。

「何ナンパされてんだお前は」

ナ……ナンパ？ 違う、違う。

「道を教えてただけですよ？」

「さり気なく移動してただろうが」

「だから道が分からないって」

「流されやすそうな女の子見つけて、ちょっとずつ自分のペースに持っていくんだよ。なし崩しナンパ」

「流されやすいって……失礼なっ」

課長ってば自分がエロだからって、誰も彼もをそんな目で見なくたっていいのに。

「大体何だってハチ公前なんか待ち合わせ場所にしたんだ、こんな人の多いところ。見つからないから電話かけるところだったぞ」

「だって渋谷といたらハチ公じゃないですか。私はベタが好きなんです。それにね、ハチ公も秋田出身なんですよ。やっぱり同郷の犬を応援するのが人情ってもんじゃないですか。あ、課長知らなか

ったでしょ、ハチ公が大館からもらわれていったこと」

「もういい。行くぞ」

私のお喋りにウンザリした顔をして先に歩き始めた課長の跡を追った。

「お腹空いたなあ。ピザ取りましようね、課長の奢りおごで」

「分かった分かった」

スクランブル交差点の信号が青に変わる。一斉に動き出す、人、人、人。巨大スクリーンの音と光が降り注ぐ下、それぞれが目指す方向へ。しかし私は無秩序な人の流れに乗ることができず、まごつき、課長を見失いそうになる。

課長、ちょっと待って、課長！

思わず腕を伸ばし左袖を掴んだ。突然腕を後ろに引っ張られた課長は、目をパチクリとしてこちらを振り返る。

「ま……迷子になりますよ、課長」

マズい。「誰が」ってツツコミが来る。

が、課長はニヤリと笑っただけで再び歩き出し、私も彼の袖を掴んだまま半歩後ろをついて行く。

「お前もなー、もうちょっと素直にならないと、いつか幸せ逃すぞ」とにかくこの人混みを抜け出すことで頭がいっぱいだった私は、課長の言葉など気にする余裕もなかった。

ホテルは交差点から五分くらい歩いた場所にあった。外壁にパステルカラーを使用した、メルヘンチックな外観のビジネスホテルだった。

入り口の自動ドアが左右に開く。課長に続いて足を踏み入れた瞬間、背中にゾクツと寒気を感じた。

何……？

不自然な動きを課長も見逃さない。

「どうした？」

「いえ、ちよつと。寒気が」

「風邪は引き始めが肝心だぞ。気を付けろよ」

何でもないことのように言われて、私も三秒後にはすでに忘れていた。お腹の虫が鳴り、意識は全て食欲中枢へと向けられたのだった。

その夜ベッドに入ると、ホテルの部屋で見た奈緒子さんの表情が思い出された。

四人が一同に介し、それぞれの紹介を始めた時こそギクシャクした空気が流れてはいたが、私が秋田弁全開で喋り始めた途端、奈緒子さんの頬に赤みが差し、目には光が宿った。兄が「課長さんが置いていかれてるぞ」と言わなかったら、二人で何時間でも喋っていたかもしれない。

出身地が近いから。似たような言葉を話すから。でもそれは、ただのきっかけだったと思う。彼女はもうとくに準備運動を終えて、スターティングの位置に着いていた。あとはピストルの音が鳴るのを待っていただけで。

何故なら、兄に詳しい事情を話す間、彼女はもはや一滴も涙をこぼさなかったから。

とつくに覚悟を決めていたんだろう。強い女性なんだな、と思った。工藤課長と張り合って仕事をしていただけあるなあ。

最終的に彼女は兄に依頼することを決め、後日のアポイントメントまで取り付けた。

子供の親権を取るのには難しいのだろうか。旦那さんにももちろん言い分はあろうが、母子で暮らせるようになってほしいと心の底から願う。

奈緒子さんと私は個人的にまた会う約束をした。十歳も年下の私が手助けできることは何もないけれど、私と話していると元氣が出ると言ってくれた言葉は素直に受け入れられた。

ベッドの中で体を反転させ、目をつぶった。今夜はぐっすりと眠れる気がする。課長の不倫の件が片付いて、肩の荷が一つ降りたのだ。不倫は結局濡れ衣だったわけだが。

次は係長の番だ。明日になったら作戦をじっくりと練ることにしよう。

しかしそこで、影のある暗い表情が^{まぶた}瞼の裏にチラついた。昨日、一人壁に寄り掛かって物思いに耽っていた彼。今日になってもあの影は取り払われることなく、むしろ濃さを増してあの美しい顔から光彩を奪っていた。

私の危惧は当たっているのかもしれない。——つまり、あの女とうまくいっていない。

そうだ。いつそのことこのまま別れちゃえばいいんじゃない？

と、私はひどいことを考えた。

きっともう潮時なのだ。不倫は所詮不倫だ。長く続けることなんてできやしない。いい加減に目を覚まして、ちゃんと真つ当な恋愛をすればいいのだ。

そうなれば係長だって私を手懐ける必要はなくなって、放っておいてくれるだろうし、私だって面倒なことをせずに済む。手を汚さずに美味しいとこだけいただければいいのだ。ラクチンラクチン。

そうだよ、係長。別離だ。破局だ。それでいいこう。

実に建設的な方策を見つけて、私は眠りについた。

これが浅はかな考えであったと、思い知らされることになるかも知らずに——

「この企画書、結局趣旨が何だかよく分からない。書き直して」
地を這うような低くて暗い声が、今日何人目の犠牲者なのか分か

らない西嶋さんに飛んだ。同僚たちが目と目を合わせ、声にならない声を互いに聞き取る。

(怖えええ)

瀬尾係長が異動してきて以来初めて見せる、イライラして不機嫌な顔。

昨日まで色濃い影を落としていた顔に氷点下の冷たさが加わって、彼を見る者の心に一陣の寒風が吹きつける。

遠巻きに見ているだけならまだ良い。その冷気に直接当てられた者は背筋に悪寒を感じ、運が悪ければ氷の矢の視線と舌鋒をまともに受けて凍りつく。

一体彼に何が起こしたのだ。やはりあの女か。五階の受付嬢か。昨日彼女と束の間の逢瀬を楽しむはずがドタキャンでもされたか。はたまた離婚話をのりくらりとかわされたのか。

どちらにしても彼の恋が危機的状況にあるのは明らかだ。この先どういう結末が待っているのやら。

ただ一つ分かることは、係長は果報を寝て待つタイプの人間ではない、ということだ。可及的速やかにこの事態を打開しようと動くだろう。

折しも今日は金曜日。この週末が彼にとっては勝負どころ……いや、違う。

不倫カップルにとって「休日」はタブーだ。家族と共にいる相手を想って一人寂しく過ごす休日ってのが不倫のセオリーではないか。そんな歌詞を乗せたメロディを私はいくつも聴いている。ということとは、係長は彼女にも会えず不安な気持ちを抱えたまま、週末を悶々と過ごすのか。……痛ましい。

週明けの月曜日。

案に違わず係長は不機嫌を持ち越していた。やはりあの女とは会

えなかったのだろう。

「誤字脱字だらけだぞ。パソコンの漢字変換に頼りすぎなんだよ。相手に読んでもらおうって気があるのか？ 企画以前の問題だろ、これじゃ」

氷の礫が石津さんに襲いかかった。首をすくめて冷気をやり過ぐす彼に皆が同情の眼差しを送る。他人事ではないからだ。

自分がWebデザイナーで良かった。係長とは業務で関わることはあまりないから。とりあえず安全は確保できたと胸をなでおろす。しかし、私語を交わしていた女性社員二人がギロツとにらまれたので、考えが甘かったと悟った。WEB事業部員はもれなく八つ当たり攻撃の対象となるらしい。

そこへ工藤課長がちょうど部長のところから戻ってきたのを認めて、総務へ提出する備品申請の承認をもらいに近寄った。こんな仕事も部署で一番下っ端である私の役目だ。

課長、と呼びかけようとしたら強い視線を感じる。そちらに首を動かすと、まるで非難するかのようにじっと私を見つめる係長と真っ向から目が合った。

サボってませんよ？ これも仕事ですよ？ お喋りもしてませんよ？

心の中で必死に釈明を試みたが、怖かったのでつい課長の陰に隠れたら、今度はにらみつけられた。

私が何をしたというの――！

そうだ。PR事業部の片岡さんは瀬尾係長のことを何と言っていた？

『瀬尾さんがイライラして周りにあたるとこなんて、見たことも聞いたこともない』

同姓同名の別人の話か？ ——そんな訳ないだろ！

つまり滅多にお目にかかることのない、瀬尾係長の八つ当たり攻撃。超レアモノだからと言って嬉しくも何ともない。

しかしこんなものは嵐の前兆に過ぎなかった。この日の午後、と

ある出来事がWEB事業部を震撼させることになる。

現在抱えているM社案件はサイトの全面リニューアルで、トップページを三通り作って提出することになっている。二日後にはクライアントとの打ち合わせがあるため、できれば今日中に全て終わらせたい。すでにプランAとBは出来上がっていたが、プランCの作成に産みの苦しみを味わっていた。それでも何とか形が整い、パソコンに打ち込みを始めたその矢先、緊張感を一気に失わせる声が聞こえた。

「美春ちゃん、いるかい」

先週まさかの「見合いしたのかい」発言をしやがって以来姿を現さなかった――きつと本業が忙しかったのだろう――社長が、愛用のノートパソコンを持っていそいそとやってきた。これは一番嫌なパターンかも知れない。

ちよっとお喋りをするとかお茶をする程度ならば適当に話を切り上げさせることもできようが、パソコンの使い方を教えてくれなどと言われた日には私の貴重な時間が奪われることは必至だ。

「何かさー、動作が重くて遅いんだよー。ちよっと思ってくれないかなー」

いい年こいたオッサンが語尾を伸ばして喋るな。

「あの、三沢課長は？」

三沢課長とは社長専任秘書である三十代後半の男性だ。我が社の重役には専任秘書はつかない。「自分のことは自分でしよう」と社長が掲げた方針によって、高給を取っている分働かされている感がある中、唯一社長にだけは秘書がついている。

三沢さんは総務部秘書課の課長なのだが、重役会議で社長以外の全員一致でつけられた秘書というよりお目付け役だ。この人がいないと社長がフラフラとどこかに行ってしまうからって……徘徊するのか、このオッサン。

社長は空いていた椅子を引っ張ってくると、私の横に居座る態勢を整えた。

「三沢くんは今書類作成に忙しくてそれどころじゃないって言われちゃってさ。僕のことなんか後回しでいいと思ってるんだよね、ヒドイでしょ」

それどころ？ 秘書がそんなことを言っているんだろうか。

「社長はそのノートブックで何をなさりたいんですか？」

「ほら、視察旅行で撮った記念写真を見ようと思ってー」
そら、後回しにするだろ。

「えっと、最近新しいソフトを入れましたか？」

「うん、入れたねー」

「そのソフトがパソコンのスペックに比べて重いとか、相性が悪いのかもしれないよ。一旦アンインストールして……」

「三つも入れちゃったんだよー。全部しなくちゃ駄目なの？」

三つも？ おいおい、こんなことに付き合ってたら、仕事終わらないよお。

こういう時に社長を追っ払う役の杉本前係長はもういない。が、すぐに天啓がひらめいた。

工藤課長だ！ 私に一生恩に着ると言った言葉、証明してみせて！
課長。課長はあ？ 課長どこよ！

隣の藤田さんに口の動きで所在を訊く。

（か・ちよう・は？）

（しょう・だ・ん）

うぬぬぬぬ。こんな時にい。

そこにヒンヤリとした声が響いた。

「社長」

いつの間にか私の背後に立った係長が、頭上から声を落とす。
「私が社長のお手伝いをしますよ」

もしかして杉本前係長から、オッサンを追っ払う役目まで引き継いでいたのだろうか。しかし社長を適当にあしらうことなど、若い瀬尾係長には荷が重いと見た。オッサンも取るに足らないことのよ
うに、あっさりといなす。

「あれ、瀬尾主任、じゃなかった係長だったっけ？ 悪いけど僕、美春ちゃんにお願いしたいんだ」

「越智は業務中です。ご遠慮下さい」

空気を切り裂くかのような鋭い声に慄いた私は、振り返って係長を見上げた。

私だけではない。藤田さんも、隣のシマにいる杏子さんも、その他の同僚たちも、まるで競技場のウェーブのように次々と係長に視線を集中させていく。

「そもそも社長が個人でお楽しみになられるものにWEBの人間が係わるいわれはありません。三沢課長の業務が終わるのを待たれるべきでしょう」

今やWEB事業部全体が彼の一举手一投足を息を潜めて見つめている。この若き係長が我が社のトップにいる人に向かって、正論ではあるが歯に衣着せぬ物言いをする姿を。

「僕はWEBの人に頼んでるんじゃないんだよ。美春ちゃんに頼んでるの。僕たち仲良しだからね」

仲良しじゃない！ しかもそんな屁理屈……子供か！

「彼女はWEBの人間であり、WEBの業務が滞ることを見過ごすことはできません。勤務時間中は業務を優先させていただきます」
係長はあくまで正論を振りかざし一步も退こうとしない。しかも
声音がますます冷たくなっていく。が、社長も子供のように我を張る。

「僕は今すぐ写真を見たいんだ」

「そんなことは私の知ったことではありません」

――冬の落雷の音を聞いたような気がした。背中がゾクリとし、総

毛立った。

さすがの社長も呆氣に取られているではないか。マズイ。何とかしないと。

「あ、私、パソコンちよつと見てみますね？　きつとすぐに直りま

「越智さんは黙っていなさい」

ひいひい。ギロツとにらみつけるその顔、超弩級にコワすぎる！

「君は僕の部下だ。僕の言うことに従ってもらう」

そう吐き捨てるノートブックを取り上げ、社長の腕を取って強引に連れ去って行った。

嵐が過ぎ去った後のWEB事業部は、しばし沈黙が支配していたかと思うと一転、蜂の巣を突付いたような騒ぎになった。

「係長、どうしちゃったの？」

「朝から超機嫌が悪かったけど、やり過ぎじゃねえ？」

「よくあそこまで社長にたてつけるよな」

私は同僚たちの声を聞きながら頭を抱えていた。そもそも私が騒ぎの発端であるだけにやり切れない。だが係長をこんな行動に駆り立てているのは、恐らく暗礁に乗り上げてしまった彼の不倫なのだ。

苦しい恋が彼を鬼にしている。若手ナンバーワンの出世頭、できる男でいい男な彼が、恋に狂っている。

彼をそこまで追い詰めている女。あの女は一体何者だ。ひよつとしてあれが世に言う。

――魔性の女？

ブルツと体が震えて鳥肌が立った。

……係長。別れちゃえばいいなんて思ってしまったってごめんなさい。

別れるのナシ！　別離も破局もナシナシ！　ナシってことで！

魔性の女と添い遂げる方向で……あれ、添い遂げたら魔性ではないのか？

！
ああもう、魔性でも巨乳でも何でもいい、係長をなんとかしてえ

第十六話 社長VS係長（後書き）

美春の妄想が止まりません……作者の手を離れて勝手に動いています。そのせいか、ずいぶん長くなってしまっ。分割しようかとも思いましたが、ちょうど半分くらいで切れるところがなくて一気に載せてしまいました。

第十七話 決戦は金曜日

「美春ちゃん、仕事はもういいからお茶にしよう。ほら、今日は手焼き煎餅を買ってきたんだ」

「ありがとうございます。でも今、この作業を置いとくわけには……」

「いいからいいから。今日は社長室でゆっくり話がしたいなー。最近いつも邪魔が入るしね」

「邪魔をしているのはあなたの方です、社長」

「おや、瀬尾くん今日もいたのかい。またそんな仏頂面して、それじゃ女の子にモテないぞ」

「社長がお帰りになれば元に戻りますからご安心を。さあどうぞ」

「じゃあ美春ちゃん、行こうか」

「越智さんはここにいなさい」

「瀬尾くんの言うことなんか聞かなくていいんだよ。社長がおいでと言ってるんだからね」

「直属の上司がここで仕事をしろと言ってるんだ。社長の気まぐれに付き合う必要はない」

この二週間余りというものの係長は不機嫌か良く言って無愛想、お陰で職場に暗雲が垂れ込めているのだが、雷を呼ぶのは決まって社長が私に会いにくる時だ。

彼の来訪は係長に負の刺激を与えるらしく、二人のバトルは我々にとってありがたくない恒例行事と化してしまった。こういう時によく使う比喻でハブとマンダースの戦いというものがあるが、まさにそれだ。実際に見たことはないんだが。さしずめ係長がハブで、社長がマンダースといったところか。

週に二、三回のペースで私の邪魔をしに来る社長を、係長は今の

ところ十割の確率で追い払っているが、その際の二人の舌戦は間に挟まれる私にこの上もなく居心地の悪い思いをさせている。せめて係長がもう少し柔らかい言い方をしてくれば心臓にも悪くないと思うのだが、社長に対して全く容赦しないものだから、私だけでなくWEB事業部全体に緊張感が付き纏まとっているのだ。

このまま社長にたてついていたら、近い将来良くて左遷、悪くて解雇が待っているのではないか――？

社長が手焼き煎餅を置いていったので、職場の雰囲気や和らげるためにお茶を淹れることにした。WEB事業部ではお茶汲みの仕事はないが、私の立場を少しでも向上させるのに利用させてもらう。あの二人のバトルの原因は私にあり、同僚に対しても居た堪れない気持ちでいるからなのであった。

社長を連行していった係長が戻ってきたので、デスクにお茶を持っていった。

「どうぞ」

私を一瞥いちべつした係長は素っ気なく礼を言う。

「ありがとう」

この場を借りてそれとなく注意を喚起してみよう。

「あの、社長のここのところありがとうございます。でもあの、大丈夫ですか……？」

そう言った途端、顔を上げた係長から切れ味鋭い視線が私に向かって放たれた。

「何が」

コワイっ！

「いえ……何でもないです……」

「ならいい」

あえなく撃沈した私を藤田さんがよしよしと慰める。

「ポチ、ナイスファイト」

係長の負の波動は、ランチの誘いにやってくる瀬尾ファンに対しても向けられている。

異動当初のように毎日誰かしらが訪れることはなくなっていたが、彼が全く誘いに応じないにもかかわらず、めげずに足を運ぶ姿はむしろ健気だ。気晴らしに彼女らとランチに行けばいいものを、頑なに毎回断る彼はしかしどこか奇異に見える。

彼女らに対しては精一杯譲歩しても無関心といった態度で、諦めきれずに食い下がろうとする者には冷ややかな言葉でもって拒絶する。

今日もまた哀れな瀬尾ファン二名が部屋の入り口で断られているのを見ていたら、一人と目が合ってしまった、美しく描かれた眉がピクリと上がるのを認めてすぐさま視線を外した。

断られていい気味だとは露ほども思っていないが、何がしかの誤解をして不快を感じさせたかもしれない、係長から誘いを断られ続けている不満も合わせて、その心情を推し量ることは難しくなかった。私は言わば無責任な傍観者に過ぎないが、彼女らにしてみれば事情は異なるだろう。

瀬尾係長と同じ部署にいる女。近くで彼の声を聞き、彼に話しかけることのできる女。彼女らの知らない彼の姿を日々目にするることのできる女。

これは無論私一人ではなく、WEB事業部の女性社員全員が受ける視線であり、実際に所用で階下に赴いた杏子さんが廊下ですれ違った瀬尾ファンから睨まれたというエピソードからも、彼女らの不満が危険水位にあると見て間違いはなかった。

瀬尾係長と仲の良い佐久間主任はこの事態を解決しようと動いた一人であるが、徒労に終わったことをこっそりと私に打ち明けた。「飲みに行こうって誘ってもあいつ、『そんな気分じゃない』つつ

って乗ってこねえんだよ。何があったか知らねえけど、仕事でトブル抱えてるはずないし、あいつに限って女絡みってことも考えにくいんだよな。そもそも一人の女に執着する奴じゃねえしな。

まあ、社長との間に挟まれてお前も辛いかもしれないけどさ、もうちつとガマンしろ。そのうち瀬尾だって自分で何とかするだろ。最年少の係長はだてじゃねえよ」

どんなに仲が良くても、不倫相手に執着していることは秘密にしておきたいらしい。

しかしこれで、係長がどれだけ彼女に本気であるかが分かった。彼をよく知る主任が「一人の女に執着しない」と評するほど刹那的な恋を重ねてきた彼に、漸く現れた本気の恋の相手が人妻であるとは、なんとも皮肉なことだ。

工藤課長はどう思っているんだろう。

以前PR事業部に所属していた時も二人は上司と部下の間柄だったのだから、気心は知れているはず。苦しい胸の内を課長に明かしているかもしれない。仮にそうだとして打ち明けられた内容を課長が私に話すとは思えないけど、社長の出方が気になるのは彼も同じなのではないか。

奈緒子さんと三人で会う機会があり、待ち合わせ場所へ行く際に訊いてみた。

「あの、係長は大丈夫なんでしょうか？」

「社長絡みで大丈夫かって意味なら、心配すんな。仕事ができる社員を簡単に辞めさせたりしないよ。社長が一番嫌うことは会社の不利益になることだ」

そう言いつつも眉をひそめて軽く溜息をつく。

「でも瀬尾が今置かれてる状況ってのが、俺にもさっぱり分からななんだよなあ。あんなにイライラしたあいつ見るの、初めてなんだよ。普段はこっちがムカつくほど感情をコントロールできる奴なんだけどな。職場の雰囲気悪くしてるぞって注意したら、『気をつけ

ます』とは言ったけど、全然俺の方を見ようもしないんだよ」

課長に対してもそんな態度とは……

その時、一人で全てを抱え込んで出口の見えないトンネルを進んでいる係長の姿が見えたような気がした。

最初に会った時に思ったとおり、奈緒子さんは強い女性だった。

まずは仕事と寝る所と言って、就職活動に励んでいる。不況の折厳しい風に晒されているのは間違いないけど、生活の基盤を整えて息子さんを迎えに行ける日が一日でも早く来てほしいと願わずにはいられない。

「私ね、焦ってたんだと思う。三十歳前になって仕事ばかりの自分でいいのかなって。女だもの。結婚もしたいし子供も産みたい。それはわがままなことでも何でもないと思う。そんな時に夫に出会ってこの人しかいないってカン違いしちゃったのねえ。母親を心から大切に思っているあの人を素敵だなんて思ったのよ。夢と一緒に叶えたいと思ったから資金も出した。

ただ、あの人とは理想とする家族の有り様が違ってたんでしょね。そんなの結婚する前にもっと良くお互いを知るべきだったんでしょうけど、盛り上がってる時ほど何にも見えないものなのねえ。美春ちゃんも気をつけるのよ。あ、これは大きなお世話かあ」

そう言って笑う奈緒子さんの顔には影は認められなかったけれど、旦那さんへの想いはきつとそう単純に表現できないものなのではないか、と感じた。

螺旋らせんのように絡み合った想いは、断ち切ったつもりでも断面から溢れ出してくる。次から次へと、一度は止まっても、忘れたと思っても、何度でも溢れ出してくる。そんな気がしてならない。

そして私にそう思わせているのは他でもない、瀬尾係長なのだ。もしも二人の恋が破局に向かいつつあるのなら、私は何もせずに

いればいい。「不倫をやめさせる作戦」は発動せずに終了。係長ももはや秘密を守ろうとして躍起にならずに済むし、私のことだって放つといってくれるだろう。

でも、それでいいのか自分、という心の声が聞こえていたことも事実だ。あれだけ人望があり感情を制御することに長けていると言われる人が苦しんでいる姿を見て、私はなぜ平気でいられるのだろうか？

ここ二週間余りの間に彼が笑った顔を見せたのはたった一度だけ。対メディアマネージメント部の竹内係長が結婚が決まったと知らせにきた時だけだ。工藤課長、瀬尾係長と共に以前PR事業部で働いていたという彼の慶事に、かつての同僚として、後輩として、不機嫌な顔で応じることはできなかったのだろう。

あの歓迎会で見せた笑顔。どこまでも柔らかく優しい笑顔を見たと思った。彼にもっと笑ってほしいと思った。

そして彼を笑顔にできるのは、あの女だけなのだ。

どんな人なんだろう。あの係長がそこまで惚れ込む女性。……見たい。知りたい。

好奇心がムクムクともたげてくるのが分かる。いけない。私の悪い癖——思い立ったら即行動——これで何度失敗したか分からないのに。

でも知りたい。そして言ってみよう。「さっさと係長を幸せにしてあげてよ」と。

あのキス現場に居合わせた私に、偶然にも彼の部下になってしまった私に、巡ってきた役回り。他の誰でもない、私にだけできるとだ。

今、ある決意を胸に秘め私は壁に掛かるホワイトボードに目を遣った。

決行の日は金曜日とした。この日は係長が外回りで帰社は午後三時以降になることが分かっていたからだ。念には念を入れるに限る。段取りはすでに決めてあった。

まず午後一時まで集中的に仕事を片付ける。昼休みの時間をずらすためだ。お腹が空いて死ぬかと思ったが計画のために必死で耐えた。時刻が一時になり速攻で弁当を平らげ、化粧室に入る。この時点ではほとんどの社員は休憩が終わっている。

そして、家から用意してきたダサイサロペットを履いてパーカーを羽織り、髪を左右に二つに分け三つ編みにする。長靴でも履いていたらまるで農場の娘だ。更に黒縁眼鏡を掛けて顔の印象を変え、化粧室を出た。

すでに午後の業務が始まったフロアを一人進み、誰にも見られずにエレベーターホールに着くと、脇にある階段——普段私が利用する非常階段とは反対側に位置する——を五階まで下りた。

あの女が勤めるオフィス機器リース会社。曇りガラスのドアの前に立つ。いよいよだ。

衝撃のディープキス目撃事件から半年。あの女に再び相まみえることになるうとは予想もしていなかった。彼女は私を覚えているだろうか？

息を一つ吸って扉を押した。すぐ左手に受付があり二人の美しい女性が座っている。

「いらっしやいませ」

にこやかに微笑む受付嬢たち。が、どちらもあの女ではない。ひょっとしてまだ休憩中なのだろうか。それならそれで彼女についての情報収集をするチャンスだ。早くも変装が役に立つとは、自分の用意の良さに背筋がゾクゾクする快感を覚えた。

私がここで演じるのは、人探しをする田舎娘だ。そのために都会

人が抱きがちなイメージのベタな格好をした。

「あんのお、ちょっとお尋ねします」

ここは思い切り訛る。なま

「受付の方は他にいらっしやいませんか？」

「はい？」

怪訝そうな面持ちで訊き返す長い巻き髪の受付嬢。

「はい、実は——」

半年ほど前に、このビルを出た所とある若い女性に大変世話になった。初めての東京で右も左も分からずしかも財布を紛失した私を、交番まで案内してくれ、あろうことか五千円も貸してくれた。

その女性は名前を名乗らなかったのもその後お礼もお金を返すこともできなかった。ただこのビルの五階で働いていると言っていたので、今日、半年ぶりに東京に来ることができ、何が何でもあの時のお礼をしたいのだが——

美談に人は弱い。受付嬢たちは田舎娘の力になろうと、人物特定に協力し始めた。

「その人は受付の者に間違いないのですか？」

「はい、お二人とお同じ制服を着てました」

顔を見合わせる二人。

「今受付にいるのは私たち二人だけですけど……」

「でも半年前っていったら、もしかして本田さんかな……そういうタイプじゃないけど」

「二十歳くらいの若い方でした。明るい茶髪の」

そして恐らくは魔性の女であり、かなりの確率の高さで巨乳の持ち主。しかし未確認情報であるため口にすることは避けた。

「じゃあ、本田さんですよ、きっと。彼女なら七月で退職しました

けど」

退職？ 不倫相手と同じビルで働く方が会うのに都合がいいだろうに。それとも簡単に会えなくなったことが二人の関係が悪くなった原因なのか？

「どこに行ったらお会いできるか、ご存知ありませんか？」

「寿退社だったんですよ。今は専業主婦してるはずです。私たちプライベートで仲良かったわけではないので、連絡先まではちょっと……」

寿退社？ 嘘でしょ？

私の驚愕を目当ての女性に会うことが叶わなかった失望と受け取ったのか、受付嬢たちは申し訳なさそうに言った。

「すみません、お役に立てなくて」

エレベーターホールでしばし立ち止まった。考える時間が必要だったのだ。

やはりあれは不倫だった。ただ、私が思っていたのと違う。

係長の恋の相手である受付嬢A子は七月に結婚退職している。ということとは私があのかをキスを目撃した四月の時点では現在の夫と婚約中だった可能性が高い。

……ちよつと待ってよ。あの女、婚約者がありながら係長とも付き合っていたっていうの？

思ってもみなかった状況にすっかり腹を立てた私は、心の中で女を罵倒し始めた。

人妻の身で他の男と付き合う感覚も理解できないけど、こっちはもっと理解できない。結婚した後も係長と関係が続けるのなら、最初から結婚なんかしなきゃいいじゃないよ！

係長も係長だよ。今こんなに苦しむくらいだったら、何で結婚をやめさせなかったのよ！ 祭壇の前で新郎と共に立つ彼女を、他の男のためにウエディングドレスを着た彼女を、奪って逃げるぐらい

のことしてみなさいよっ！

想像の翼を広げて、係長が手に手を取って女とチャペルから逃げ出すシーンを脳裏に描いた。

係員の制止を振りきって開かれるドア。参列者が一斉に振り向き、新郎新婦は目を丸くする。ざわめきの中を祭壇に向かい、新婦の前に立つ係長。

——おいで。

見つめ合う二人。互いの目の中に揺るぎない愛情を確認し、どちらからともなく伸びる手と手。その二つが重なりあった時、彼らの未来が決まる。その場から駆け出す二人。後に残るのは新郎の叫び声。

そして、チャペルを飛び出した瞬間から二人の前には新しい世界が広がり——

……似合う。似合い過ぎるよ、係長。

妄想にどっぷり浸かりながらエレベーターのボタンを押した。

さて、これからどうすればいい？ 女にたどり着く線はもうない。あの会社には連絡先ぐらいいは残っているだろうが、個人情報をも身元の怪しい女に渡すとは思えない。

あの女——旧姓本田某は今どこに居るのか。

係長の苦しみも知らずに。WEB事業部の緊張感も知らずに。社長と係長の間に挟まれて身の置所のない私の思いも知らずに。

エレベーターの箱が昇ってくる。もう昼休みもお終いだ。変装ままでして探偵の真似事をした私の努力は実を結ばなかったのだ。

鏡の扉に徒労感を肩に乗せた田舎娘が映っている。存外似合うその姿をしげしげと眺めていると、チンという音と共に扉が開いた。

——二十二年の人生でこの時ほど自分の行動を悔いたことはない。

いつも階段を使う私が、どうして、よりによって、この時使わなかったのか。

エレベーターの中には、大きく目を見開いた瀬尾係長が立っていた。

第十七話 決戦は金曜日（後書き）

今回のサブタイトルは、作者の遊び心です。でも若い方はご存じないかもしれませんね（苦笑）。

第十八話 連行 1 (前書き)

長い話なので二つに分割しました。

第十八話 連行 1

逃げろ！

頭の中で警報が鳴り響き、本能に従った私は一八〇度回転して走りだそうとした——ところを捕えられた。腕を掴まれエレベーターの中に引き摺り込まれるかと思いきや、瀬尾係長は私を押してホールに出る。

そして一言も発することなく脇にある階段に向かい、六階との間の踊り場上がり壁際まで私を引っ張っていったところで、やっと腕から手を離れた。

さぞや怒り狂っているだろうという予想を裏切り、至近距離で見える彼は口の端に笑みさえ浮かべて、まるでこの状況を楽しんでいるかのような顔だった。

「五階で何をしていたの？」

「……落し物を届けに」

「その格好は何？」

「……コスプレです」

佐久間主任言うところの「だてじゃない最年少の係長」がこんな言い訳を信じるとも思えないが、嘘がバレなければ良いのだ。それより彼にいろいろと考える時間を与えないためにも、この場から直ちに脱出しなければ。

「か、係長は随分早いお戻りですねっ」

「商談が思ったより早く終わった」

「さっすが係長、やっぱりできる男は違うなあ。私も係長を見習って仕事のスピードアップを図りたいと思いますっ。それでは失礼します！」

「ちょっと待って」

動こうとした先を長い腕で遮られた。そのまま壁に掌をつけて更

に近づく彼から私は半歩後退する。しかし壁に背中が触れ、逃げ場を失ったことを知った。

彼は私の心中を探るような目で見ていたが、やがてフツと笑みをこぼした。

「携帯」

「はい？」

「ちよつと携帯貸して」

電話をかける用事でもあるのか？　なら自分のを使ってよ——とは怖くて言えなかったので、言われるがままに渡した。

「これ預かっておくから」

「はあ？」

「返してほしかったら、今夜仕事の後付き合って」

彼女と会えないもんだから、代わりに私をいたぶるつもりか！嫌だ。八つ当たり攻撃を受けるのはお断りだ。それに五階で何をやってたのか責め立てられるに決まっている。

「嫌です」

怒りが炸裂するかと身構えたが、彼は悪戯を思いついた少年のようにニヤツと笑った。

「そうか、じゃあ、君は昼休みにコスプレをして楽しむ趣味があると、噂をばらまいてやろう」

「ええっ」

「君が自分でそう言ったんだから、無責任な噂じゃないよな」

「いや、えと、それは」

「それと君の携帯にかけてきた相手に、『彼女なら今シャワーを浴びている』と言ってやってもいいな」

「ちよちよちよちよ」

泡を食う私を係長が見下ろしている。黒い笑みを浮かべたその顔は、勝ったな、と言っているのが明白だ。

なんと不敵な。なんと狡猾な。「だてじゃない最年少係長」の本

領発揮か。

「今日は報告書を上げるのに三十分ほど余計に時間がかかるかもしれないが、ちゃんと待っているように」

完全になら目線、命令口調でございますよ。そりゃまあ上司だけだ。

「返事は？」

「……分かりました」

渋々了承すると、彼はフフンと鼻を鳴らした。

「タイムカードは押しておくんだよ。残業はつけないから」
最後に上司として釘を刺しておくことも忘れなかった。

変装を解いて部署に戻ると空気が変わっていることに気づいた。

杏子さんの後ろを通った時にそっと訊いてみる。

「何かありました？」

「係長のご機嫌が戻ったみたいよ。よっぽど商談がうまくいったのかしらね」

見ればご本人は佐久間主任と何やら話しているが至って友好的な雰囲気、それどころか相好を崩してさえいるではないか。

なんというあからさまな男だ。これほどまでに態度がコロッと変わるとは。そんなに私をいたぶるのが楽しみなのか。嗜虐的性癖の持ち主、早い話がSか。

しかし、周りを見渡すと同僚はすべからずホッとした表情で彼に眼差しを送っている。

違う。違うんだよ、みんな！ 係長はねえ、今夜いたぶる相手ができる喜んでいただけなんだ。どうせまたすぐ不機嫌に戻るんだよ。私が何をやっていたかを知ったら。

私をビビらせ脅しつけていた係長はもはや王子様でも何でもなかった。あれが彼本来の姿だとすれば、とんでもないワルだ。不倫の恋が破局に向かいつつある今、私を手懐ける必要もなくなり、王子

様の仮面をかなぐり捨ててもいいと思ってるんだろう。

逃げたい。とっとと逃げてしまいたい。できるものなら。

午後六時。昼休憩までに馬車馬のように働いたお陰か、残業もなくタイムカードを押した。このあとのことを考えるとむしろ残業がある方が良かったぐらいだ。

杏子さんに飲みに誘われたが先約があると断った。そういえばこしばらく飲んでいない。係長なんか放つという飲みに行きたい。手持ち無沙汰なので机の上や引き出しを片付ける。デートだ飲み会だと三々五々散って行く同僚たちを横目に自分の浅はかな行動を悔いた。五階に行かなかったら、いや、あの時エレベーターボタンを押さなかったら、係長と遭遇することはなかったのに。

ふと顔を上げると彼と目が合った。顎をしゃくって、行けと促される。

何様のつもりだ。だてじゃない瀬尾様か。

残っていた数名に挨拶し、のろのろと部屋を出た。

エレベーターホールで待っていると軽やかな足音と共にその人はやってきた。すでに目が笑っている。どうやって私をいたぶるか、あれこれ思い描いているに違いない。これから待ち受ける苦難を想像してげんなりした。

「お待たせ。行こうか」

上がってきたエレベーターに乗り込む。係長が操作盤の前に立ったので、私は奥まで進んで距離を置いた。二人きりでいる箱の中は圧迫感を伴った空気に包まれているようで息が詰まる。うつむいて床に視線を落としたら、動き出した箱がすぐに止まり、振動が身体に伝わった。

扉が開いた途端に耳障りな黄色い声が響く。

「瀬尾さん！ 今帰りなんですかあ？」

そういえばランチのお誘いに来たことがある女子のようだ。パッチリとメイクを施したその顔は、これから遊びに繰り出すわよと言わんばかりだ。甘ったるい声で話しかける彼女に、係長は適当に相槌を打った。

再びエレベーターが動き出したがすぐに八階で止まり扉が開く。ガヤガヤと現れたのは若い男女数名からなるグループだった。

「あー、瀬尾さんだ」

「ホントだ、瀬尾さん、お久しぶりです」

P R事業部の社員、しかも瀬尾シンパのようだ。彼らが乗り込んできると否や九階の女子は押しやられ文句をブツブツ言っている。係長を中心にして彼らの間で会話に花が咲き始めた。私は箱の角に少しずつ移動して自分の気配を殺す。眼鏡を掛けた魔法使いくん所有の、姿が消えるマントがあつたらどんなにいいことか。

「どうですか。WEBは」

「うん、まあ何とか。そっちは？ 内海課長は相変わらず？」

「はいもう、全然変わりませんよ、困ったことに。瀬尾さんがいないから上手くあしらう人が誰もいなくて……」

「ははは、そうか」

王子様モード全開の彼はかつての同僚たちと実に楽しそうに会話を続ける。私の存在など忘れてしまったかのように。別に構わない、忘れてもらっても。

ビルの外に出ると十一月上旬の風が頬をなぶった。少し冷たい。駅の方角に向かう、P R事業部瀬尾シンパ及び九階女子一名の集団から少し離れとぼとぼと歩く。

お腹が空いた。この空っぽの胃袋をどうすればいいのだ。私を責めるならとつと責めて解放してほしい。私は御飯が食べたいんだ。「瀬尾さん、俺たちこれから飲みに行くんですけど、一緒に行きませんか？」

「あ、賛成！　行きましようよ、瀬尾さん」

係長は口々に誘う彼らから離れて道に体を乗り出すと、通りかかった空車のタクシーを手を挙げて止めた。その動き一つ一つがいちいちサマになっている。認めるのは悔しいが。

「悪い。今日は先約があるんだ」

「そっか。金曜日ですもんね。デートですか？」

「まあね。……じゃあ、行こうか」

後半の台詞が一体誰に向かって言われたのか、分かった者はいなかった——係長の視線の先が彼らを飛び越えて更に後ろに届いていくと知るまで。

一斉に向けられた集団の視線に串刺しにされ、凍りついて足が動かない。

「ほら、乗って」

再度促されて、漸く呪縛が解けた体が動き出した。軽く会釈をし、集団の外側を回ってタクシーに歩み寄る。皆の視線が痛い。

（誰？　この子）

（今までいたっけ？）

声に出さずとも聞こえてくる。

係長は私を先に乗せると、「それじゃ」と別れの言葉を残してタクシーに乗り込んだ。

第十八話 連行 2

「なんてことしてくれたんですか、係長。誤解しましたよ、あれ、どうするんですか」

タクシーのドアが閉まるや否や私は係長を非難した。心に怒りと不安と怖れの嵐が吹き荒れていたのだ。

「中目黒をお願いします」

「私、殺されますよ、係長のファンに。背中から刺されるかも……どうしてくれるんですか」

車が緩やかに滑り出し道端にいる彼の後輩たちが視界から消えても、心の中で荒れ狂う暴風は治まりそうになかった。

数日前に瀬尾ファン女子から投げつけられた鋭い視線を思い出して、身がすくんだ。係長と同じ部署にいるというだけですでに妬まれているのに、彼とデートをしたなどと誤解されたらどれほどの悪感情を向けられることか。

私は彼の不用意な行動を心底呪った。私の心がこんなにも大騒ぎをしているというのに、その原因を作った本人はシートに背中を預けのほほんとこちらを見ている。

くつろいでる場合か！

「責任とってあげてもいいよ」

責任？ どうとってくれるんだ。私をすんなりと敵認定から外させ、彼女らに不満を抱かせなくする方法なんてあるのか？

私は急ぎ考えを巡らした。あるとすれば一つだけだが、これまでの彼の行動を鑑みて実行に移すとは考えにくい。――即ち、これから毎日彼女らとランチに行く。

あれだけ頑なに毎回誘いを断っていたのだ。理由は分からないが、断固たる意志でもってそうしていたに違いない。それを今更覆すなどあり得ようか。

「本当ですか。本当に責任とってくれるんですか？」

「もちろんだよ」

彼は嬉しそうに目を細めた。

なぜだ。ファンとのランチはやはり嬉しいものなのか？ ならばなぜ、毎回断っていたのだ。……怪しい。この表情の裏には何かある。一体何を企んでいるのか、瀬尾係長。

「だてじゃない最年少係長」との頭脳戦。望むところだ。

彼の真意が測りかねるものである以上、ファンについてはやはり自分の身は自分で守るべし、と決意したところでハタと気づいた。そうだ携帯。

「携帯っ。携帯返してください、ホラホラホラ」

「ああそうだったね」

上着の内ポケットから取り出されたそれをむしり取った。

「まさか履歴を見るなんてことしてませんよね？」

「僕がまさかそんなことをするわけないじゃないか」

わざとらしい笑みに引かかるものを感じる。

「見なくていいの？」

何を？ ……ああ携帯か。もう兄にはパソコンメールで連絡してあるし……

「……いいです、もう」

何だか疲れた。それよりもお腹が空いた。係長と食事なんて遠慮したいが、空腹を抱えていては頭も回らない。彼の追及をかわし、頭脳戦に勝つためにも、まずは食事だ。

タクシーは何やら見覚えのある場所で止まった。そういえば中目黒って言ってたっけ？

「こっちだよ」

数メートル先のこれまた見覚えのある建物に入る。ちょっと、あの、ここは。

エレベーターで上がった先は三階。冷や汗が出てきた。このまま行くと私が中目黒で唯一知っている店に到着することになるんだけど……

「う……ここ？」

三週間余り前に工藤課長と来た創作和風ダイニング。何で、ここ？ 食事をする場所は星の数ほどあるというのに！

「ひょっとして前にも誰かと来たことがあるのかな？」

私の様子を不審に思ったようだ。でもまさか課長と来ましたとは言えない。

「いえ」

「この店、ある人に教えてあげたことがあるんだ、ゆっくり話ができるってね。……まあ、いいや」

何がいいのかよく分からなかったが、この話題が打ち切られたことに安堵した。

私たちを出迎えたのはまたしてもあのウェイトレスだった。課長の連れとして来た私を値踏みするような目で見た女。彼女は係長の姿を見るなり瞳を輝かせ、後ろに控える私に目を遣ると表情を曇らせた。……気づいたか。

三人の間で視線が交錯し係長が私に向かってフンと笑った。やっぱりね、といった表情で。先程あっさり引き下がったのはこういうことだったのか。

彼女が再び値踏みする視線を送ってよこしたので、一体いかほどですかね私は、と嫌味の一つも言ってやりたくなった。ひと月と間を置かないうちに全く違うタイプの二人のオトコマエと食事をしにくる女は、彼女にとっても嫌味な客なんだろう。

だからどうした。それでも客は客だ。

案内された個室に入ると私は阿呆のように口を開けてポカンとし

た。

何だこの部屋は。

前回課長と食事をした部屋が、自然の素材を生かしたシンプルで明るいこれぞ和テイストな趣だったのに対し、ここは赤と黒を基調に装飾されたモダンで妖しい雰囲気。

黒光りする長方形のテーブルと左手の壁に備え付けられた深紅のソファ。そしてテーブルの上には二人分の箸やらグラスやらがセッティングされていた——隣合わせで。

「な、な、な、な……」

口をパクパクしている私をソファに押し込んで座らせると、係長も横にやってきた。

ち、近いっ！ 奥はもう壁、これでは逃げたくても逃げられない。飲み物を注文してウェイトレスが下がったところで、彼はソファに寄りかかって体を半分こちらに向けた。

「ここ、カップル専用個室。こういうのは初めて？」

初めてに決まってんでしょうが！ こいつ、分かってて面白がってる。性格悪いっ！

飲み物と前菜が運ばれてきた。前回とは違う内容だ。それだけでも良かった。

「君は飲まないの？」

見れば係長が手にしているグラスにはにがり酒が。う、そそれる。しかし、ここは黙って烏龍茶を手取る。

「もしかして警戒してる？」

してるに決まってんでしょ！ これから私をいびろうとしている相手と一緒に酒なんか飲めるか！

「はい乾杯」

何に対する乾杯なのかツツコミたかったが、それよりも食べる方が先だ。

「……いただきます」

あつという間に前菜を平らげ、ふと横を見ると係長が微笑んでこちらを見ている。

「何ですか」

「いや、美味そうに食べてるなあ」と

「美味しいですよ、係長は違うんですか」

なにげなく言ったつもりだったが、彼は戸惑った様子で曖昧に答えた。

「うん、そうだな。うん……美味しいかもしれない」

かもしれない？　どういう意味だ。

次に運ばれてきたお造りをつつきながら、五階のことをどう言い訳したらいいかと考えた。どう言ったところで嘘にしか聞こえないだろうし、それならばいつそのこと真実を言ってしまおうか。あなたの不倫相手に一言文句を言ってやりたくて探偵の真似事をしていたんです、と。

一旦そう考えると、それが一番良い方法のような気がしてきた。一人で思い悩んでいる係長に発破をかけてやりたくなったのかもしれない。

思い立ったら即行動だ。たとえ何度失敗しようとも。

「あの係長」

今日のことなんですけど。

「インターハイ」

「へ？」

「インターハイで四位に入賞した子が今同じ職場にいるって、自慢したんだ。高校で陸上やってた友達に」

不意打ちの話題に心を覆っていた殻がポロッと取れた。彼があんまり嬉しそうに話すものだから、不覚にも私まで嬉しくなってしまうった。

「そいつも四百メートルやってたんだ。四百の苦しさは走った奴にしか分からない、が口癖だったな。次上京したら会わせろよって言

われた。そいつ今、神戸にいるんだけどね」

柔らかな声は懐かしさと暖かさで溢れ、友人への、ひいては彼と共に過ごした時代への思いまでが、私自身の思い出への感慨と重なるようにして想像できた。

「陸上部ではどんな練習してたの？」

「何度もビデオに撮って比較研究しました。脚の上げ方、運び方、腕の振り方、いろいろ試してみて、でも考えながら走ると余計わけ分かんなくなっちゃうんですよ。結局私が一番気持ちのいい走り方に落ち着いて」

「越智さんらしいな。でもどうして陸上続けなかったの？ 大学とか実業団チームとかで」

「陸上部の顧問の先生からは続けた方がいいって言われたんですけど、私は一応の成果が出たことで満足しちゃったんですよね。全く新しいことをやりたくなったというか」

「どうしてそれがWebデザイナーだったの？」

「顧問の先生が反対しようにもできなかったんですよ。どんな職業かイメージできなくて」

その瞬間、彼の笑顔が弾けた。

それは、私がずっと見たいと思っていた笑顔だった。

うまくいかない恋が彼の顔を暗くさせていたと思っていたけど。

彼を笑わせることができるのはあの女だけだと思っていたけど。

今、彼を笑顔にしているのはこの私。彼が笑顔を向けているのはこの私だ。

この笑顔をもっと見たい。そう思った。

陸上部の話が出尽くしてしまうと、次は私の田舎を話題にして会話が続いた。生活習慣、天候、食べ物、東京で失敗したエピソード。

田舎の話は退屈ではないのかと訊いたら、

「いや、すごく面白いよ。頭の中に映像が浮かんでくるみたいだ」

その言葉はお世辞ではないようで、時折内容を確認し、茶々を入れ、声を上げて笑った。彼にもっと笑ってほしくて、私も調子に乗って話し続けた。

そしてデザートが出てくる頃には私の心はすっかり解れて、今なら何のわだかまりもなく穏やかな気持ちで、幸せな恋をしてくださいと言えと思った。

「係長にずっと言いたかったことがあるんです」

そう告げると少し戸惑ったようだったが、表情から彼の心もまた私と同様風いであることが窺^{うかが}えた。イライラして不機嫌な彼はもうどこにもいない。今の彼なら、私の言葉も正面から受け止めてくれるだろう。

彼はこちらに体を向けると和らいだ瞳で私を見た。

「実は僕もなんだ」

恐らく彼女のことを黙っていてほしいと言うのだろう。脅すとか手懐けるとかそんな方法ではなくて、私を信用して自分の恋について語る準備ができたのだ。

私は彼を安心させてやるつもりだ。決して誰にも話しません、と。でも、どうしてもこれだけは言っておきたい。

係長と私は息を吸い込むと、それぞれが互いに「言いたかったこと」を口にした。

第十八話 連行 2 (後書き)

第十九話 対決

「不倫はやめなさい」

「不倫はやめてください」

私の気持ちが彼の心に真っ直ぐ届くことを願って、二人の間に引かれていた最後のカーテンをさっと開けた時に聞こえてきたのは、自分が音にしたものと語尾は違えど同じ言葉だった。

そして、これに対する二人の反応もまたそっくり同じときていた。

その一、目を瞬かせる。

その二、ハ行の音で不可解さを表す。

「は？」

「へ？」

その三、主語を明確にする。

「誰が？」

「誰がですか？」

カップル専用個室とかいう不届き千万な部屋で、カップルでもない瀬尾係長と私が見つめ合っている。

内装ばかりか照明まで妖しい光で演出されたこの部屋は、通常は甘い空気が満ち満ちて数え切れないほどのハートがふわふわと浮かんでいるのだろうが、現在甘味ゼロの空気の中で踊っているのは疑問符のみだ。

誰が？ 不倫？ 誰と？

口火を切ったのは係長だった。

「ちょっと待って。君は僕に向かって不倫をやめろと言っているのか？」

この部屋に他に誰がいる——とツツコミそうになったが、そんな

場合じゃないと思い直した。私に不倫をやめろとは何の冗談だ。

「係長こそ。私が不倫してるって言うんで——あ！」

「何だ」

そうか、そうだったのか。自分がそこまで見損なわれていたとは。矢も盾もたまらなくなり、私は係長に悔しさをぶつけた。

「ひどいですよ、係長。あんな噂信じてたんですか」

「噂？」

「知ってるんですよ、P R事業部で私が社長の愛人じゃないかって言われてるの。でも係長は、私が社長のことウザがってるの知ってて追い払ってくれてるんだとばかり……心の底では愛人だって思ってたんですか！ ひどい！」

あんまりだ。そんな風に思われてたなんて。ショックというより、屈辱だ。

ワナワナと震える私に、しかし係長は冷静に応じた。

「ちょっと落ち着いて。違うよ。確かにP Rではそういう噂があったよ。でも異動してきてすぐにそんなのはデマだと分かった。WE Bではそれが常識になってたし、第一君を見ればすぐに分かることだ。僕が言ってるのは社長じゃなくて」

彼はそこで一旦言葉を切ると、苦々しげに吐き出した。

「工藤課長だよ」

……………今、何と言いましたか？

たっぷり五秒間まじまじと係長を見てから、念のために訊き直した。

「工藤課長と言いましたか？ 聞き間違いでなければ」

「言ったよ」

どっから出てくるの、課長が。

「あの……何を根拠にそんな」

突拍子もないことを言われて呆然とする私の問いかけに、係長は忌々しそうに答えた。

「僕の歓迎会の日、本当は課長にお持ち帰りされたんだろ。金子チヤンは妊娠中だし、彼女に似てる君に課長が手を出してもおかしくない。あとはなし崩しに愛人関係。あの人にかかったら、ウブな君なんてイチコロだろうしな」

よ……よくもまあ、そんなことをズケズケと……言ってて恥ずかしくないのか、この男。

「それは邪推というものです」

「証拠ならある」

彼はおもむろに携帯を取り出すと、目も眩む速さで操作してとある画像を私に見せた。それは疑いようもなく、課長と私が例の渋谷のメルヘンチックなビジネスホテルに入る瞬間を捉えた写真だった。何だってこんな写真が。いやまさか。

「あの……まさか……跡をつけたんですか？」

「君たち二人の様子がおかしいことは気づいていたからね。面白いものを見せてもらったよ。すんでのところで課長が君をナンパから救ったり、スクランブル交差点で腕を組んだりとかね」

寺の鐘がごとんと頭の中で突かれたような気がした。

道徳から外れた行為をしておきながら、自慢げな顔をする係長が苛立たい。

「何だってそんなことをしたんですか……ああっ！」

「大きな声を出すなよ」

「分かりましたよ、弱みを握ろうとしたんでしょ。私を手懐けることができないもんだから」

「はあ？」

彼の恋がうまくいくことを心から願ったというのに、自分がどんなにお人好しであったかを思い知らされ、私の心は悔しさと真っ黒になった。ずっと飲み込んでいた思いが喉元にせり上がり、気づいたら叫んでいた。

「人の気も知らないで、よくもそんなこと……もおおお、すつごくムカつく。そこまでして彼女を守りたいんですか！　ただけ魔性に魅入られてるんですか！　そんなにいいモノなんですか、巨……」

「きょ？」

いけない。怒りに我を忘れ、あやうくお下品なことを口走るところだった。危ない危ない。

「魔性とか意味がよく分からないんだけど、なんで君を手懐けなきゃならないんだ。それに彼女って誰のことだよ」

この期に及んでしらばっくれようとしてる！　もう我慢できない、言ってやる！　全てはあそこから始まったんだから。

「だからあの！　非常階段の！　ディープキスの！　旧姓本田さん！　ですよ」

「うっ」

係長はさっと顔を赤らめ、口を手で押さえた。ケケケ、ざまあみろ。

「どうして君はそんなことまで……今日五階にいたのはそのためか」
ご名答だ、だてじゃない瀬尾くん。

「それにしてもなんで僕と彼女が不倫をしなきゃならないんだ。一体どうしたらそんな考えができるのか教えてもらいたいね」

そこで私はことの次第を語り始めた。

係長がああキス現場を目撃した私を是が非でも口止めしようと企んでいる、それは秘密の恋、つまり不倫であるからに他ならない。その他の女性関係は本物の恋を隠すための隠れ蓑^{みの}で、更に私の口封じをしようと弱みを握るか懐柔するかを考えた――

身振り手振りを交えて私が苦勞して構築した推理をぶちまけた。推理小説最大のヤマ場、探偵が犯人を追いつめる場面だ。完璧なまでに論理的な思考を見事な滑舌で披露した。

よし。これでいい。これでさっぱりした。

黙って聞いていた係長は、プツと吹き出したかと思うと肩を震わせ次第にゲラゲラ笑い始めた。今夜一番の大爆笑だったと言ってもいい。

こんなに笑ってくれて私も話した甲斐が——あるわけないだろう！
「ご……ごめ……でも、可笑しくて……ぶわははは」
謝るなら笑うな。

「よく……そんな……カン違い……ぶぶっ」
いつまで笑うつもりだ。

「それで魔性って……け、傑作……くくくく」
だから笑うなって！

つい先刻まで彼にもっと笑ってほしいなどと思っていたことも忘れ、私は心の中でひたすら「笑うな！」を繰り返した。

目尻の涙を拭って漸く落ち着いた彼は、私の推理をこき下ろした。
「今時そんな設定昼メロにだってないよ。大体隠れ蓑ってなんだよ。そんなことしてたら体が幾つあっても足りないじゃないか。まあよく考えついたよなあ」

今、私の顔には屈辱の二文字が貼りついている。当然だ。自信満々で述べた推理を全否定されたのだ。大笑いされたのだ。これが屈辱でなくて何だというのだ。

悔しくてふくれっ面をした私を、係長は優しい笑みを顔に浮かべて眺めていたが、やがて静かに唇を動かした。

「誰にも話さないって誓える？」

その声にはまるで魔力のように私を引き込む力があつた。

「僕が不倫をしているなんて君に思われたままでは嫌だ。だから本当のことを話す。その代わり誰にも言うなよ。——僕たちだけの秘密だ」

秘密。彼がその言葉を舌に乗せた瞬間、微かな戦慄が体を走った。

最後のカーテンを開けたと思っていたその場所には、彼だけしか存在を知らない箱が置いてあり、私は今、そのふたに手を掛けようとしている。彼の目の前で箱を開けようとしている。その中身が何であれ、私は――全てを受け入れるだろう。

体内でうごめく好奇心を満足させてやることと引き換えに。

喉の渴きを覚え冷水で湿らせると、私は彼に向かいコクリとうなずいた。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

あの日彼女に呼び止められたのは、ほんの偶然からだった。

担当するクライアントの製品がテレビ番組で取り上げられることになり、その打ち合わせのためにテレビ局に向かうところだった。下りのエレベーターに乗ってしまうと段取りを頭の中で整理するのに夢中で、五階から乗ってきたやけに目立つ茶髪の女のことなど気にもとめようとしなかった。

「あの……」

声をかけられて振り向く。受付嬢らしき制服を着たその女は、年の頃二十歳そこそこでわりと可愛い顔をしていたが、ずるがしこそうな口元から漏れた言葉は聞き捨てならないものだった。

「前に、一緒にいましたよね、山下新菜と」

山下新菜。人気急上昇中の若手女優。当時僕が担当していたR食品とCM契約を交わしていた人物だ。ちょうどこの頃俳優の水原丈との不倫疑惑が持ち上がり、連日マスコミを賑わせていた。

「今夜、会ってもらえませんか。写真があるんです」

「……いいよ」

山下新菜とは新製品キャンペーンのイベントで出会った。僕に言わせれば顔と体がいだけの大して演技力もない大根女優だが、これも仕事だ。完璧な営業スマイルでそつなく対応した。おだてもした。その女優のご所望とやらでマネージャー付きの食事にも付き合った。二人きりで酒も飲んだ。

イベントは何度か行われる予定だったから、ご機嫌を損ねるわけにはいかないだろう？

だから誘われるままにホテルに行って関係を持ったことも仕事の一環だ。女優とヤツたなんて喜びはこれっぽっちもなかった。向こうだって交際の俳優の気を引きたくて僕をわざと誘っただけなんだから。

五階の受付嬢——本田沙織とはその夜のうちに関係を持った。彼女の目的が金ではなく僕だということが分かった以上、こんな楽な仕事はない。彼女を手懐けて黙らせておけばいい。ホテルに入るところを撮られた写真を消去させるのも造作ないことだった。

「実は前にエレベーターで見かけた時からいいなと思ってたんだ。これって運命かな」

女って奴は純愛だの運命の恋だのが大好きときてるから、彼女にもそう錯覚させてやったんだ。

マスコミが僕のことを嗅ぎつけなければそれでいい。PRマンがマスコミの餌食になったりしたら笑い話にもならない。山下新菜の不倫騒動が一段落するまでは彼女に夢を見ていてもらおう。

実際、目を開けて夢を見ているんじゃないかという女だった。

——社内恋愛禁止の会社だから、同じビルに恋人がいることも善い顔をされないだろう、だから僕たちのことは絶対秘密だ——よく考えればおかしいと気づくだろう嘘を彼女は頭から信じた。秘密の恋というシチュエーションに酔った。非常階段での逢引に心ときめかせた。おめでたい女だったよ。

彼女と会う時は抜かりなく防犯カメラの死角に入り込んだ。社外で付き合う女とはやたらと噂を立てられる僕だが、あんな馬鹿女と一緒にいるところを見られるのは御免だったからね。

だから誰も来ないはずの非常階段に突然人が現れたことは誤算だった。どうやら八階に逃げ込んだらしいと気づいて正直まずいなと思った。ウチの社員だ。逃げ足の早い女で姿は見えなかったが、八階の社員なら当然僕の顔を知っているだろう。ゴシップのネタを提供してやったようなものだ。

「ねえ、ゴールデンウィークなんだけど」

こんな時に何を言ってるんだ、この女は。

「うちの両親に会ってくれないかなあ」

何だと？

「一緒に田舎に帰って会ってほしいの」

こいつはどこまでカン違い女なんだ。まあ、カン違いさせたのは僕だけだ。

「ちゃんと休みを取れるかどうか分からないけど。考えておくよ」早くこの女から解放されたい。すでに策は考えてあるが、早めに動いたほうが良さそうだな――

翌週、実に自然な形で彼女をある男に引き合わせた。僕が営業部にいた頃に契約を取った某IT企業の若き社長だ。

現在三十四歳の彼の好み――若くて可愛い女の子。でもそんな女は彼の周りには腐るほどいることは分かっていたから、別の切り口で勝負するしかないだろう。彼ら二人は出身地が同じ町だったんだ。いわゆる同郷のよしみってヤツ？

すぐに打ち解けた二人は僕のことなどお構いなしに内輪ネタで盛り上がった。ほどよく時間が過ぎたところで急用ができたと言って先に帰る。種は蒔いたから、あとは勝手に育ってくれるだろう。彼が駄目なら別の男を用意すればいい。

彼女が僕に求めていたのは自分を一段高く見せるためのブランド

バッグと同じようなものだったから、更に高みを求められるよう、豪奢なダイヤのネックレスを紹介してやったというわけ。何しろ社長だからな。

予想どおり二人は交際を始め、いつの間にか彼女は僕から離れて行った。作戦終了。

非常階段の噂はさっぱり聞こえてこなかった。僕だと分からなかったのか、僕を知らないのか、噂好きの女ではないのか、いずれにせよこちらにとっては好都合だ。

ところが思いもかけない方向から揺さぶりが来た。

IT社長と婚約寸前までいっていた女性がいたことを僕は知らなかった。それは、一期上の先輩である白川有希さんだった。

本田沙織とIT社長の突然の婚約に白川さんはひどいショックを受けた。僕はPR事業部一課、彼女は三課の社員で、共に仕事をしたことはなかったがもちろん顔は見知っていたし、悪い印象を持ったことはなかった。彼女に対して慙愧さんきの念に堪えなくなった僕は、少しでも早く失恋の痛手から立ち直ってもらおうと決心した。

そこで白羽の矢を立てたのが、対メディアマネージメント部の竹内係長だ。彼がPR事業部にいた頃から白川さんを好きだったことを知っていたし、誰の目から見ても真面目で穏やかな性格のこの先輩を僕も尊敬していたからだ。

僕はさりげなく二人を引っ張り出し会う機会を重ねさせ、奥手の係長を叱咤激励して時にはアドバイスを与えた。彼も次第に自信を持って口説くようになり、彼の誠実さに少しずつ白川さんも惹かれていった。つい最近係長がプロポーズして彼女が受け入れたことを知った時は、心から安堵したものだ。

竹内係長は例のIT社長のことをひどく怒っていた。お蔭で昔から好きだった白川さんが手に入るかもしれないのに、彼女の心を傷つけたのは許せないと言っていた。そういう感情は伝染するのか、

職場全体が彼に対して嫌悪感を持っていた。

そして結婚相手が五階で働いていた受付嬢だと知った時には、全く接点のないように見える二人がどうやって知り合ったのか噂で持ちきりとなった。まさかこの僕が紹介したなどとは口が裂けても言えない。

IT社長の足がウチの会社から遠のくことは予想できた。白川さんへの気まづさだけでも充分な理由だが、僕に対しても平常心ではいられないだろうさ。「自分が奪った女の元恋人」だからな。

だからIT社長の線からバレる心配はない。本田沙織もすでに退職した。

僕と彼女のことを知る人物は誰もいない。

たった一人を除いては――――

第十九話 対決（後書き）

非常階段のキスの真相でした。瀬尾ってこんな奴だったんです、はい。

お気に入り登録500件、一日のユニークアクセスが3,000人を超えました。この場を借りて皆さまにお礼申し上げます。

この先もお付き合いただけると嬉しいです。

第二十話 破局

私は頭を抱えていた。ひどい悪夢を見ているようだった。道ならぬ恋ではあっても、彼女を純粹に愛する係長の姿をまず基本に思い描いていたのに、この告白はショック以外の何ものでもなかった。

「つまり係長あなたは」

何かめまいもしてきたぞ。

「やり手ババアよろしく女性に相手を見繕ったと」

汚い手を使って自分に近づいてきた女を遠ざけるために。その結果失恋させてしまった先輩への責任をとるために。

あの竹内係長の婚約には背後で瀬尾係長がうごめいていたなんて……善意からではなく、罪の意識から二人をくっつけようとしただなんて！

私の呆れ顔など頓着もせずに、係長は心外だという顔をした。

「やり手ババア……男女の出会いをプロデュースしたと言ってほしい」

「言い方を変えればいいってもんじゃないでしょう！」

信じられない……私の常識の範疇では収まらない、この男。策士だ。腹黒だ。しかも「同郷のよしみ」を利用するところ、課長とい係長といい、何か間違ってる！

それでもって山下新菜って……あの隠れ巨乳……！ あああ、なんてこったい。

「でもどうやって私だって分かったんですか？ 顔は見なかったでしょ？」

「ああ、あれね」

と言ったその顔ときたら。……随分楽しそうだな、おい。

「君、七月に階段ダッシュしたでしょ」

すでに忘却を決め込んでいた過去の失敗を目の前に突き出され、

私は瞬時に固まった。

「社内通達が出たんだよねえ。『非常階段では走らないようにしましょう』って。小学校かってツツコミ入れたくなかったけど。なぜそんな通達が出ることになったのか、役付きは皆知ってるんだよ、越智美春さん」

い、今更ながら、自分がやったことが悔やまれる。

「それで君が日常的にあの非常階段を使っていることを知った。君ならあの逃げ足の速さも納得できる。僕を知らないんだろうから噂も流れようがない。そういうこと」

まるで出来の悪い生徒に噛んで含めるかのような言い方が気に障ったが、係長はつと真面目な顔つきになると、これこそが最も重要だと言わんばかりに迫った。

「白川さんと竹内係長は今、すごくうまくいつてる。今更あの話を蒸し返したくないんだ。分かるよね？」

分かりますよ。分かりますとも。ええ、誰にも言いませんとも。係長の思惑どおりに動かされたとはいえ二人が今幸せであるならば、その幸せの根幹を掘り起こすことなどできるわけがない。

「さて、僕の話はこれでお終い。僕が不倫をしていないことはよく分かってくれたと思うけど」

「ハイハイハイ、よく分かりましたよ、よ——く」

「でも君はそうじゃないね？ 君は、工藤課長とは別れるべきだ」

また、ここに戻るのか……

「だから課長とは付き合ってません」

「じゃあ、あの写真はどう説明するの？」

彼にとっては動かぬ証拠というわけか。……いやでも、ちょっと待て。

「その前に人の跡をつけて写真を撮った説明は？」

「僕も同じことをされたからねえ。結構簡単にできるもんなんだな」
「そういうことを言ってんじゃないんです！」

この男、自分のやったことを恥じ入る気持ちはないのか。何の権限があつてそんなことをするのかと言つてゐるんだ。

「じゃあ、変装して五階をコソコソ嗅ぎ回つたことをどう説明する？ やつてゐることは結局君も同じじゃないか」

全然違ふわ！ 私があんなことしたのは、もとはと言えば係長のためなんだからね！

「同じじゃありません！ 私、あの人に言つてやりたかつたんです。さつさと離婚して係長と幸せになりなさいよつて。できないならスツパリ別れろつて。いつまでもダラダラ中途半端な関係続けるなつて。」

だつて係長、ずっと機嫌悪いしムツツリしてるし、WEBの皆だつてすごく気を遣つてゐるんですよ？ 社長にもキツイ言い方して、どれだけ私がハラハラしたか分かつてゐるんですか？ 分かつてないでしょ！」

私の切々たる訴えを聞くと、彼は目に見えてシュンとなった。

「自覚はしてただけだね……どうにもムシクシヤして。悪かつた。その……君がそんな風に思つてくれたとは知らなかつた。ありがとう」

「あれ、でも不倫で悩んでたんじゃないんなら、どうしてあんなに機嫌悪かつたんですか？」

仕事上のトラブル？ それとも中間管理職ならではの悩みか。ひよつとして課長からひそかにプレッシャーかけられていたとか。……あり得る。

じつと窺うと、彼は目を逸らした。心なしか顔が赤い。

「それはまあ……置いといて」

そして咳払いを一つすると再び真面目な表情に戻つた。

「越智さん。君が僕のためにいろいろ考えてくれたように、僕も君のことを考えたんだ。僕は君を責めてゐるんじゃない。悪いのは全部課長だよ。君が男慣れしてゐないことにつけこんだんだ。僕は課

長の昔の行状をよく知ってる。あの人の手練手管にかかったら、オチない女性はいなかったからね」

係長にここまで言わせる課長って、ある意味スゴいな。さすがエロハリ。

「君だって若い女の子なんだし、恋愛したい、彼氏が欲しいって気持ちも分かる。でも課長は駄目だ。ただの気まぐれでちよつとつまみ食いしてるみたいなんだよ」

私はつまみ食いされてるのか。ひどい言われようだな、それも。

「僕は他人の恋愛沙汰には元々興味はない。それが不倫であっても僕が口を出すことじゃないと思ってる。でも今回のことは他人事じゃないんだ。課長は上司で君は部下で、奥さんは同期だった金子ちゃんだよ？　もうすぐ子供も生まれるっていうのに、彼女が悲しい思いをするのを黙って見過ごすわけにはいかないよ」

それは課長が不倫していると信じていた時に私も思ったことなので、自然と受け入れられた。係長は係長なりに心配していたんだな。

「だからね、課長とは別れなさい。君が拒めばそれで済むはずだ。課長だってもう気が済んだだろう」

係長の言葉は説得力に溢れ、文句のつけようがなかった。それだけにここまで確信している彼にどうやって潔白を証明すれば良いのか思案に余る。

でも信じてもらうしかない。誠意を込めて話せば、彼だってきつと分かってくれる。

「越智さん。僕は――」

「係長」

私は真っ直ぐ彼を見つめた。

「係長が言いたいことはよく分かりました。でも違うんです。私は課長と不倫なんかしていません」

真剣に訴える様をどう捉えたのか、彼は探るような目でこちらを見た。

「課長とホテルに行ったことは本当です。でもそれは大事な話があったからで、決して不倫関係だからじゃありません」

「どんな話」

「それは……」

正直なところ、打ち明けてしまいたかった。彼がそれで納得してくれるのなら。でも課長の昔の恋や余所の家庭のこと、課長の奥さんでさえ知らないようなことを私が勝手に彼に話すなんてできない。腐っても弁護士の子だぞ！

「課長には話せても僕には話せない？」

口をつぐんでしまった私に、心情を込めた声音で彼は更に迫った。「僕は話したよね？　僕にとっては都合の悪いことも。できれば君には知ってほしくなかったようなことも。それで僕に対する君の見方が変わることになっても、誤解されたままにいるよりはずっとマシだ。なのに君は何も話してくれないの？」

そうだ。係長は本来私が知らなくていいことまでさらけ出してくれた。自分は決して不倫をしていないと私に納得させるために。勝手に誤解した私に釈明する義理も理由もそもそもないのに。私も彼に誤解されたままにいるのは嫌だ。

でも、それでもやっぱり、私の口から言うべきことじゃない。

「あの……課長に訊いてもらえますか？」

それが最も道理に適っていると思った。課長は係長のことを信頼しているし、自分の不倫疑惑を解くためならきつと話してくれるだろう。

しかし彼は諦めてはくれなかった。

「君の口から聞きたいんだ」

「ごめんなさい。……課長に訊いてください」

うつむいて声を落とした。これ以上はもう堂々巡りだということが分かっていた。

係長は息を一つ吐くとソファに寄り掛かり、苛立たしげに言った。

「課長に下駄を預けようってわけ？ 彼ならうまい言い訳を考えてくれるとでも？」

その冷たく意地悪な言い方に耳を疑った。ついさっき私の田舎の話を声を上げて笑って聞いてくれた人だとは思えないほど、彼の態度は豹変していた。

「僕が動くことでおおごとになって、二人が離婚すればいい、なんて思ってる？」

膝の上でぎゅっと握った拳が震える。誤解していると分かつてはいても、容赦ない責めは私の胸をえぐった。

「それとも課長のことは最初から遊び半分か。ちよつと大人の世界を覗いてみたかっただけか。保険も掛けてあることだしな」

吐き捨てるように言われて腹が立ったが、最後の言葉に聞き捨てならないものを感じ、怒りを抑えて尋ねた。

「保険って何ですか」

「田舎で見合いましたんだろ？」

見合い？ あの時社長が言ったこと、真に受けてるの？

「してませんよ！」

「どうかな。向こうでは着々と話が進んでるんじゃないの？ それなら安心して火遊びもできるよな」

「お見合いなんかしてません」

悔しくて声が震える。もっと反論したいのに、叫び出したいのに、言葉が出てこない。

「じゃあどうして田舎に帰ったんだよ。言ってみろよ」

彼の口調が少しずつ乱暴になっていく。もう退けないところまで来ているんだろう。

でも言いたくない。言ったら、彼はきつと私のこと可哀相だっと思うようになる。先刻みたいにはもう、笑ってくれなくなる。

「言えよ。そんなことも言えないのか。俺には言いたくないのかよ」
彼はなぜ、ここまでするのだろう。思いつめた子供のような顔を
して。

言ってしまったら、彼だつてきつと後悔するに決まっているのに。引きつった顔で微笑むようになるのに。

「嘘でもいいから言ってみたらどうなんだよ。俺の不倫話を作り上げたその頭なら、嘘の一つや二つ言えるだろうが！」

「……………両親のお墓参りです」
これで満足ですか、係長？

自分でもようやくと聞き取れるぐらいのか細い声だった。こんな情けない声しか出てこないなんて。彼にはちゃんと聞こえたんだろうか。

ああでも、心配する必要はなかったみたい。目を丸くして青ざめた顔をしている。ちゃんと聞こえたんだ。

私は声が震えないように精一杯抑えて、次に続く言葉を搾り出した。

「…………九年前に父が自然災害で、五年前に母が病気で亡くなりました」

「…………越智さん」

係長、不味いことを言ったって顔をしている。でももう遅いよ。

「二人は同じ命日なんです。係長はそんなのただの偶然だって思うんでしょけど、私はそれを二人が強い絆で結ばれていたからだっと思ってます。そう思いたいんです」

「越智さん、ごめん」

後悔の念が顔に出てる。でも残念だね。今更謝られても、もう取り消せないよ。

「そういう私の気持ちなんか、係長には分からないでしょうね。人の気持ちを好きないように操ろうとする人には分かるわけありませんよ。…………まあ、私にはどっちだっていいことですけどね」

「越智さん」

声の成分が憐れみに変わっている。やっぱり私のこと可哀相だっ
て思ってるんだ。

どうしよう。視界がぼやけてきた。係長の姿が涙の膜の向こうで
揺れてる。でも涙を零したくない。この人に涙を見せたくない。

私はバッグを掴むと、テーブルの下に潜り込んで向かい側に出、
部屋を飛び出した。

「越智さん！」

彼がどんな表情でいるのかは分からなかったが、もうどうでもよ
かった。

あのウエイトレスが意地悪な笑みを浮かべているのが目に入った
が、これまたどうでもよかった。

駅に向かって走る私を通り過ぎる人が振り返って見ても、とこと
んどうでもよかった。

ただ早く家に帰りたいかった。

二子玉川駅からとぼとぼと家へ向かう頃には気持ちちは落ち着いて
いた。夜風が少し冷たかったが、こんな最悪の気分の中にはむしろ
ちょうどいいのかもしれない。

マナーモードにしていた携帯が着信を知らせている。今は電話に
出る気分ではないので放っておく。どうせ兄だろう。もうすぐ家に
着くからいいや。

できれば思考停止しておきたかったが、月曜日からのことを考え
るとそうも言っていられない。そうだ、私にはやらなければならな
いことがある。

するとまたもや携帯が震える。が、これまた放っておく。考える
方が先なのだ。それに今電話に出たら、相手に思い切り八つ当たり
しそうだった。

それでもしつこくコールが続く。いい加減止まれ、携帯。一体誰
だ、しつこい。

バッグから携帯を出すと発信人は【瀬尾達也】となっている。なんじゃコリヤ！

あああ、あの男、勝手に自分の番号登録しやがった！ そんなこと（履歴を見ること）はしていないと言っていたが、こんなことはしていたのか。許せん！ どこまで人をバカにすれば気が済むんだ。ふと気づくと【瀬尾達也】からの着信はすでに十一件。ストーカーかお前は。電車の中では興奮しすぎて気づかなかったのだな。

さっさと削除してやろうかと思ったが、向こうは私の番号を把握しているわけだし、こうして電話がかかってくる以上それは意味がない。しかしあの男の名前が私の携帯にあるのは許せない気がした。そうだ、名前を変えてやろう。あの男に相応しい黒くて陰湿な名前がいい。

すぐに思いついた。ハブってのはどうだ。社長とのバトルであくまで比喻として彼に使ったハブであったが、こんなに相応しい呼び名は他にあるまい。

あの男は毒蛇だ。突然襲いかかって噛みつき、毒を与える。名を体で表す模範例だ。

「はぶ」と入力して「波布」と変換する。沖縄のハブは漢字で書くとは波布であることを実は最近知った。最新の知識を活用できて嬉しいぞ。

そうこうするうち波布からまたもやコール。当然出てやらない。いつそのこと着信拒否にしてやればすつきりするだろうか。いや、今は波布のことは放っておこう。それより先にやることがある。

私はある人に電話をかけた。すでに十時はずっと回っていたが鉄は熱いうちに打つ方がいい。

「もしもし、こんな時間にすみません。今大丈夫ですか」

奥さんとイチャイチャしていたとしたら続きは後にしてください、という意味が言外に含まれていたのだが、理解してくれただろうか。「私に一生恩に着るって言いましたよね？ その言葉を証明してほしいんですが」

家に着くなり風呂に直行し、湯船に浸かって少し泣いた。これぐらいなんてことない。少し泣いて、それでまた顔を上げればいい。でも涙が止まらなかった。悔しくて堪らなかった。思い出す度に怒りが蘇った。

彼に信じてもらえなかったことが。真実を言えなかったことが。ひどい言葉を投げつけられたことが。

そして何よりも、彼が私を可哀相だと思っていることが。

もしもこの先彼が私に笑顔を見せてくれることがあったとしても、それはあの明るくて優しい笑顔ではなく、憐れみのこもったそれに違いないから。

風呂から上がって冷たいお茶を飲んでいたら、キッチンにやってきた兄に顔を覗き込まれた。

「目が赤い。どうした？」

ギョツとしてコップを落としそうになった。目ざといな、もう。

「なんも。シャンプー入っただけだ」

兄は「ふーん」と言っただけでそれ以上追及しなかったが、別の問いを投げかけた。

「今夜は誰と一緒にだったんだ？」

へ……返答しづらいことを……

「男？」

「性別で言ったら、男だべな」

「会社のヤツか」

もうやめてくれ。思い出したくないんだから。

「そいつのこと好きなのか？」

変態なりに私を心配しているようだ。専門学校時代は「男女交際禁止！」って喚いていたぐらいだからなあ。

「……そうゆんでねえがら、あんちゃん心配すな」

しかし兄は予想外の言葉を繰り出した。

「好きならその男と付き合ってもいいんだぞ？」

「はあ？」

何なの、いきなり。

「お前だってもう二十二歳なんだし、好きな男の一人や二人いたっておかしくないよ」

真剣な顔で真っ当なことを述べる兄を見るのはいったい何年ぶりだ？ おかしい。この兄がこんな理解のある台詞を吐くはずがない。何か企んでるだろ、おい。

そう思ったら案の定。

「一度『妹の恋路を邪魔する兄』っていうの、やってみたかったんだよなあ」

心の中で二歩よろめいたが、目の前で妄想に浸る兄に冷たく水を差すことにした。

「最終的には『妹の恋を暖かく見守る兄』さなるのがパターンだけだね」

ところが兄は不気味に笑って、

「『不実な男に騙されて泣く妹をそっと抱きしめる兄』っていうのも王道だぞ」

……再び妄想に突入したようだ。もう変態は放っておこう。

疲れ切った私は自室へと向かった。

第二十話 破局（後書き）

忘れておられるかもしれない方のために。美春の階段ダッシュは第四話に出てきます。

第二十一話 女の戦い 1 (前書き)

恐らく予想されていたネタかと思うのですが、またまた長くなってしまい、分割します。申し訳ありません。

第二十一話 女の戦い 1

「ポチ、おはよう」

JR恵比寿駅の改札口を出ると、鈴の音が鳴ったような軽やかな声が耳に届いた。

「あ、小林さん、おはようございます」

「今日ちよっと遅いね、珍しい」

「電車逃がしちゃって」

私の嘘には気づくことなく、小林さんは人懐っこい笑顔を向けた。一期上の先輩である小林亜矢さんは、私の目の高さの身長に少しぽっちゃりした体型のおっとりした女性だ。わずかにウェーブのなかったショートカットがすごく似合っていて、見る度に可愛いなあと思う。

おやつ仲間でもある彼女とはしょっちゅうスイーツを分け合っているが、「ダイエットしなきゃー」と言いつつ甘い物を頬張る仕草が大好きだ。色白の彼女はまた肌がきめ細かくて柔らかく、時々「ほっぺ触らせてくださいっ」と言ってはムギユツとさせてもらっている。杏子さんの次に仲の良い女性の先輩でもある。

「今日のおやつ何にします?」

「生クリーム系」

「私はみたらし団子」

そんな会話を交わしながらビルのエントランスホールに足を踏み入れるや否や、「あ、あれじゃない?」と甲高い声と共にパラパラと三人の女が寄ってきた。

「WEBの越智ってアンタ?」

いきなり呼び捨て・アンタ呼ばわりかよ。

「そうですけど」

「ちよっと来て」

通勤時間真っ最中、ホールにはたくさんの人目があるにもかかわらず、三人の女は私をエレベーターへと引っ張って行く。小林さんは「先に行ってください」と言う私の声は聞こえないかのようになり、腕を絡ませて離れない。心なしか震えているようだ。

いずれは来るかと思っていたが予想外の早さだ。土日を挟んだだけでこのリアクション。瀬尾ファン、恐るべし。

三人はいずれも目元を強調した濃いメイクと艶やかグロスが目を引き、容姿には自信あるわよ系な女たち。係長の周りにいる女性は美人が多いらしいが、彼女らもその範疇に入るだろう。自信があるからこそ彼に近づくのだとも言える。

箱の中で一人が誰かに携帯で連絡をとった。

「今から行くから」

他にもいるの？ ……これはいよいよ集団で吊るし上げか。なんというベタな発想なんだ。となると次に来るのは何だ。

『バカ』と書かれた紙を背中に貼る。——古典的すぎる。

バケツで水を引っかける。——この時期には寒そうだ。

弁当を足で踏み潰す。——絶対に許さない。

連れて行かれたのは予想どおり女性用化粧室。ベタな展開にワクワクしてきたぞ。これはやはり「バケツに水」の線か？ ただ、PR事業部のある八階ではなく九階なのが意外だった。この女どもはどこ所属なのか？

内部では更に三人の女たちが待ち構えていた。一人には見覚えがある。あの日、九階からエレベーターに乗ってきた女子だ。

六人の女たちは小林さんと私を半円形に取り囲んだが、集団の力で一人を威圧しようとする心根が透けて見え、恐れを抱くことはなかった。むしろ私にはこの状況を楽しむ余裕さえあったが、一方で腕に絡む小林さんの体からは緊張感が伝わってきた。

「金曜の晩、瀬尾さんと一緒だったわよね」

例の女が口火を切ると、猛々しい口撃が次々と襲いかかってきた。

「アンタ、瀬尾さんとデートしたの？」

「してませんけど」

「瀬尾さんはそう言ったんでしょ」

「聞き間違いじゃないですか」

「私はちゃんと聞いたわよ！」

「記憶にないですね」

「ふざけないでよ！」

「ふざけてませんけど」

実は大いにふざけているのだが、正直に言う必要もないだろう。それにしてもこの居丈高な態度は何だ。社内の女が係長とデートしたってことがそんなに気に入らないんだろうか。あんたらそれじゃ係長に嫌われることはあっても、絶対に好かれないだろ。まあ信じるかどうかは別としてとりあえず言ってみるか。

「あれはデートでも何でもないですよ」

「当たり前でしょ！」

へ？

「瀬尾さんがアンタみたいなのと好きでデートするわけないじゃん」

「どうせ社長に頼んで瀬尾さん引っ張り出したんでしょ」

「向井の時と同じだよ」

「最っ低。社長に気に入られてるからって」

話が増えてもみなかった方向に進み面食らった。どうしてここに社長の名前が出てくるのかさっぱり分からない。

しかし向井というのが、去年PR事業部において社長のお気に入りとなったことから少なからぬ騒動を巻き起こした人物の名前であることを思い出した。確か瀬尾係長が指導役になったが、その後できちゃった結婚で退職した女性社員だ。

「向井は瀬尾さん狙って、社長に頼んで連れ回してたんだから。瀬尾さんはすごく嫌がってたのに社長命令だから仕方なく一緒にいた

んだよ」

「じゃなかったら瀬尾さんが社内の女と付き合い合わないんだから」
「アンタ、瀬尾さんに迷惑かけんのやめなさいよ！」

「……なるほど」

社長のお気に入りである私が係長とデートした↓係長は本来社内の女性とは付き合わない↓私が社長に頼んでデートを強要した。
三段論法だな。

私があの日聞いた話では、社長の方が係長を引っ張り回したってことだったけど、人によってはそういう見方もあるのか。

「何かなるほどよっ！」

「アンタ、ふざけるのもいい加減にしなさいよ！」

「社長に色目使ってるくせに！」

「カラダ使って正社員になったんでしょ！」

「愛人ならおとなしく囲われてなさいよ！」

瀬尾ファンによる罵詈雑言の波状攻撃を浴びて、私の戦闘モードにもスイッチが入った。これほど無礼千万なことを言われて黙っているつもりはさらさらない。反撃開始のために息を吸い込んだ。が、これは突然横から邪魔が入り不発に終わる。

「失礼なこと言わないでよ！」

私の前に一歩進み出た小林さんが——先刻まで震えていたはずなのに——頭から怒気を発していた。

「ポチはそんな子じゃない！ そんなことしてないわよ！」

小林さんは足を踏ん張り両方の拳をぎゅっと握り締め、六人の女から私をかばい、声を限りに叫んだ。私は信じられない思いで彼女を見つめ、感動のあまりぼうっとした。

いつもおやつをニコニコと頬張っている彼女が。おとなしい彼女が。私のために、こんな大声を出してくれている。

ところが女たちは攻撃の矛先を今度は小林さんに向けた。

「デブは引っ込んでよ！」

「あんた関係ないじゃない。瀬尾さんと同じ部署にいるからって、調子に乗ってんじゃないわよ！」

体温が急激に下がるのを感じた。指先が冷たい。体内の血液循環が急に止まったかのようだ。しかし心には雪嵐が吹き荒れ始めて、それまで辛うじて残っていた自制心を追いやるうとしていた。

「瀬尾さんだって部下じゃなければ、あんたみたいなのに話しかけることだってないんだからね！」

「少しは鏡でも見て、身の程を知りなさいよ！」

次から次へと口汚く罵られ、さすがに小林さんも青ざめた。嫉妬に狂った女が見せる醜さを集約しているかのような発言の連発に、私はとうとうキレた。

お前ら。私を怒らせたな。本気で怒らせたな。

小林さんの肩に手を置いて今度は私が前に出る。腕組みをして仁王立ちになり、この女どもを罵るためにもう一度大きく息を吸い込んだその時。

「一体何をやってるんだ！」

ガクッ。またしても不発かよ。

飛び込んできたのは騒ぎの原因——瀬尾係長。なんであんたが来るのよ。

彼は私の姿を認めると目を大きく見開いた。私は目を合わせないように視線を逸らす。

週末は波布からひっきりなしに電話がかかってきたが、私は一度も応じることなくついに電源を切った。今朝遅い電車に乗ったのは、職場に一番乗りで来たところを彼に待ち構えていられては堪ったものではないからだ。彼の話など聞きたくもなかったし、二人つきりになるのも嫌だった。

「私たち、先輩としてこの人に注意してたんですう。瀬尾さんに迷惑かけるなってえ」

「瀬尾さんからもはっきり言ってやってくださいよお。社長に頼んだって無駄だってえ」

甘ったるい口調で語尾を伸ばして話す彼女らは、まるで別人だ。突然の係長の登場にもうろたえることなく、素早く切り替えるその技は一体どこで習得したのだろうか。

係長はと言えはいつもの余裕が失われているのか、困惑を隠そうともしない。

「何を言っているのか分からない」

「だって無理やりデートさせられたんでしょう？ 向井の時みたい」

「違う、それは僕が」

「相乗り！」

バカ正直に答えようとする係長を大声で遮った。遅れてやってきた人物の姿を後方に認めて胸を撫で下ろす。

「タクシーを相乗りしただけです。——ね、課長？」

「おう」

遅い！ 主役登場とばかりに優雅に現れるな。

「俺が瀬尾に頼んだんだよ。ポチを送ってやってってくれってな」

課長が昔の仕事仲間に最近偶然会う機会があり、ひょんなことからその人が私の実家の近所に住んでいたことが判明、課長の仲介で何年かぶりに会うことになった。私は東京の地理に疎いので、心配になった課長が同じ方向に行くという係長に私を送ってもらうよう依頼した——

あの夜、私が電話で課長と相談して作った筋書きだ。あの時は万が一誤解された場合にはフォローしてほしいと頼んだのだったが、まさか私が社長に頼んでデートを強要したと考える輩がいるとは予

想だにしなかった。課長を巻き込んで良かった。でかした、自分。

「というわけで、あの夜ポチが会っていたのは黒田健一さんって人。瀬尾は送ってやっただけだ。お前ら納得したか？」

黒田健一さんは実在の人物で、兄と同様東京の大学に進学して以来ずつとこちらに住んでいる人だ。兄も世話になったそうで、今でも時折連絡をとり合う間柄である。もちろん課長とは面識はない。

課長が断言したことで、瀬尾ファン女子たちは納得したのか矛を収めた。

「さあ、もうすぐ始業時間だぞ、解散しろ」

この言葉を合図に女たちは引き上げ、馬鹿げた言い争いも終わるはずだった。しかし私は先程ぶちまけようとして叶わなかった怒りを声に滲^{にじ}ませて、彼女たちの足を止めた。

「ちよっと待ってよ」

このままじゃ終わらせない。火を点けた責任はとってもらう。

「何か言うことあるでしょ」

女たちは互いに目を見合わせた。

「謝ってよ、小林さんに」

「君たち小林さんに何をした」

私の一步も譲らない強い態度に感じるものがあつたのか、係長が女たちに詰め寄った。が、さすがに彼の前で先程の悪態を繰り返すことは憚^{はば}られるのだろう、互いに返答を押しつけあう素振りを見せる。

二度にわたって不発に終わったが、私はここで暴発することに決めた。

「さっさと謝れ！ この化粧お化け！」

こんな罵声を浴びるのは恐らく初めてなのだろう、女たちは目に見えて色をなした。

「けっ」

「ひど……」

「何ですってえ」

第二戦の始まりだった。

第二十一話 女の戦い 2

「化粧お化けだから化粧お化けって言ったんだよつ。あんたらの場合、恥の上塗りもしてるからすごい厚みになってんじゃないの？」

一度定規当てて測ってみな！ この塗り壁が！」

「よくも言ったわね！」

ついに本格的な衝突が始まったここ、九階女子化粧室。本来いてはならない存在であるはずの男性二名は勢いに圧倒され、瀬尾ファン六名対私の睨み合いを前になす術もなく立ちつくしている。

私は腹の底から響いてくるような声を出して、更に苛烈な毒舌を浴びせかけた。

「ああ言ったよ。そんだけ塗りたくつてりゃ、冬が来ても寒くないだろ！ 化粧品の新しい使い方だな。『防寒は顔から』ってPRして売り込め！ あんたらのビフォー・アフターの写真があったら説得力も倍増するだろ！」

女たちは怒りでワナワナと震えていたが、攻撃の糸口を見つけたらしい一人が反撃に出た。

「先輩社員に向かってその口の利き方は何よ！」

ほおー、言うに事欠いて先輩社員ときたか。

わざとらしくフフンと鼻で笑ってやった。もちろん、女たちの怒りが増幅されるのを計算してのことである。そして一気に突き落としてやれば彼女らの自尊心にも加速度的にひびが入るというものだ。私も大概悪辣だ。だから何だ。今の私を止められる者は誰もいない。

「先輩っていうのはねえ、自分は全然関係ないのに、怖くて震えながらも傍を離れようとはしないで、いざとなったら後輩かばって、大声出して弁護してくれる小林さんみたいな人のことを言うんだよ！ 集団で一人を吊るし上げるような発想しかできない低脳ぞろい

が、先輩ヅラすんな！ 分かったか、このすつとこどっこい！」

息もつかせぬ糾弾に女どもは青ざめた。

どうだ、反論できるならしてみろってんだ。ナメてかかるからこういうことになるのだ。私を誰だと思っている。だてじゃない変態弁護士の妹だぞ。

私の勢いに力を得たのか、今度は小林さんが声を上げる。

「ポチ、私のことはいいから。そりゃ他人から言われれば腹立つけど、ある意味本当のことだし。でもポチは違う。あんたたち、ポチに謝ってよ。あんな侮辱許せない」

日頃おとなしい彼女が声を荒げる様子に、課長も尋常でないものを感じたようだ。

「お前ら何を言ったんだ」

口を開こうとしない女たちに代わって小林さんが答える。

「社長に色目使ってるとか、カラダ使って正社員になったとか、おとなしく囲われてるとも言ったよね」

「な……」

係長の顔が引きつるのが目に入ったが、私は再び視線を逸らした。

「ほら、早く謝ってよ」

それでも口をつぐむ女どもに、とうとう小林さんがキレた。

「とっとと謝れ！ この厚塗りお化け！」

少し盗用されたようだ。今度著作権を取っておいたら良い小遣い稼ぎになるかもしれん。それにしても小林さんのキャラがすっかり変わってしまったているんだが、本人は気づいているのだろうか。

そこに辺りを払う威厳に満ちた声が響いた。

「君たち、謝りなさい」

現れたのは川嶋真一郎常務取締役人事部長。正社員契約の時に挨拶を交わしたので私も知っている。

某国内電機メーカーでずっと人事畑を歩んできたが、半田社長の

社長就任と同時に引き抜かれ、以来人事権を一手に握って現在我が社では最も影響力のある取締役の一人だ。

また、社長の大学時代の友人であり、彼を操縦できる数少ない人物の一人でもある。工藤課長はこの人に口説かれて転職を決意したとかで、信頼度から言えば社長よりも上なのだそうだ。

そんな川嶋常務の登場はこの場の空気を一変させた。形勢不利となっていた瀬尾ファン六名ばかりか、怒涛の勢いで押しまくっていた小林さんと私、工藤課長や瀬尾係長までもが背筋を伸ばして彼の発言を受け止める。

「根拠のない言いがかりをつけただけでなく、侮辱したとあれば謝罪して当然だ。——君たち、この二人に謝りなさい」

やはり常務クラスの人の言葉は重みが違う。年齢を重ねた人だけが持つ重厚さとも言おうか、他者を静かに圧倒し従わせる強さがそこにはあった。

川嶋常務の介入で事態はやっと収拾に向かった。私と小林さんに謝罪すると、女たちは逃げるように去って行った。

気がつけば常務の後ろにも部課長クラスと思われる方々が顔を覗かせている。いつの間にかやられらい騒ぎになってしまったようだ。

私はまだ少し興奮しているらしい小林さんに向き直り、声をかけた。

「小林さん、ありがとうございます。あんな風に言ってくれてすごく嬉しかった。それと、どうもすみませんでした。巻き込んでしまった……」

彼女にとってとはとばかり以外の何物でもなかったはずだ。あんな侮蔑を受ける理由などどこを探したってない。

しかし彼女はいつもの人懐っこい笑顔を見せて言った。

「もう平気。それよりもこんな修羅場に立ち会ったのって生まれて初めてなの。ねえポチ、このことブログネタにしてもいい？ もちろん実名は出さないから」

ズ、ブログネタ…… その場で脱力した。

化粧室を出ると待ち構えていた杏子さんと藤田さんが駆け寄ってきた。二人だけではない。WEB事業部の全員がこの場に勢ぞろいして、私たちを出迎えてくれた。

「お前ら大丈夫か」

「心配したよ、もうー」

「女っておっかねえよなあ」

その傍らにはいつぞや昼休みの定食屋で一緒になったPR事業部の片岡さんが、安堵した表情で立っていた。エントランスホールで連行される私を目撃し、会議中の瀬尾係長と工藤課長のもとに赴き、その足でWEB事業部に知らせてくれたのだそうだ。

「十階の会議室まで行ったはいいものの、さすがに会議に割り込むことはできないし、すごく焦ったの。早めに会議が終わってくれて良かった」

「どうもありがとうございました」

心から礼を言っ頭を下げた。

後々聞いた話だが、私を吊るし上げた連中は九階の総務部・経理部を中心とした若手社員だという。

「PRの女子は、もちろん瀬尾さんファンって多いけど、どちらかと言うと先輩とか上司として慕っている面が大きい。一緒にチームじゃなくてもアドバイスくれたり、仕事の面白さを教えてくれたっていうかね。」

同じフロアで接してる時間も長かったから話すチャンスもそれなりにあったけど、あの子たちは一緒に仕事してるわけじゃないし、フロアも違うじゃない？ なかなか会えないぶん変に盛り上がったって、前から鼻につくところってあったのよ」

十階に戻ると同僚たちは部署へと向かったが、工藤課長は私と瀬尾係長を打ち合わせ用の小部屋へ連れて行った。奥に課長が、机を挟んで左に私、右に係長が並んで座る。金曜の夜を思い出して心がざわめいたが、係長を視界の中に入れないようにすることで平静さを保った。

「しかし大変な目に遭ったなあ、ポチ。お前も負けてなかったけどな。負けるどころか相当やり返してたっていうか……すつとこどっこいなんて台詞も久々に聞いたぞ」

苦笑いしながら私の戦いぶりを振り返る。が、一転して渋い顔つきになり声のトーンを落とした。

「今日は部長が出張でいないから、代わりに俺が話をするが、本来俺はプライベートに口を出すのは本意ではない。だが社内であんな騒ぎになったら話は別だ」

課長の表情は、全くこんくならぬことで説教させやがって……と言っているようで、こうして意見すること自体が彼の気質にそぐわないのだろうと推察された。

「瀬尾、お前もつと自分の立場をわきまえろ。皆の見ている前でかつさうようなマネをしたら、誤解されたって仕方がないだろ。ポチが機転利かせて俺にフォロー頼んでこなかったら、どうなったと思う」

「……それは確かに軽率だったかもしれませんが、仰るとおりプライベートなことです。他人からどう見られようと、自分の行動にはきちんと責任をとるつもりでいました。ただ、向井のことを持ち出されるとは予想していませんでした」

彼の言葉は明瞭でよどみがなかった。あの日タクシーの中でも「責任をとる」と言っていたのを思い出したが、今となってはもうどうでもいいことだ。

「向井なー。あれは俺も詳しくは知らんけど、お前は被害者だったって聞いている。でも今回の被害者はポチだぞ。吊るし上げた連中はお前のファンだし、もともと、お前がポチに相乗りしてけって言っ

たんだろ？」

係長がこちらを向く気配がし、右半身に視線を感じた。しかし私は前方を見続ける。この空間には彼など存在しないかのように。

あの夜課長には、たまたま帰りが一緒になって雑談をしていたら、方向が同じだから係長がタクシーの相乗りを勧めた、と嘘をついた。彼と私との間で起きたことなど誰にも話したくはなかったし、これからも話すことはないだろう。

「お前が原因で誤解されたんじゃ、ポチだって………違うのか？」
係長と私の表情に何か気づくところがあつたのか、課長が心持ち眉を上げた。こういう時、勘の良い上司を持つと困る。

あの日のことは言いたくない。もう早くここから脱出したい。

「………だんじゃな………すよ」

「え？」

喉がカラカラで干からびた声しか出てこなかった。唾を飲み込んでもう一度口を開く。

「冗談じゃないって言ったんです。係長との仲を誤解されるぐらいだったら、社長の愛人だって言われる方がずっとマシです！」

立ち上がって課長を凝視した。恐らく私は今、みつともない顔をしているだろう。

「もう行っていいですか、課長？」

「あ………ああ」

呆氣にとられる課長を尻目に身を翻し、部屋を出た。

結局最後まで係長と目を合わせることはなかった。

第二十一話 女の戦い 2 (後書き)

第二十二話 千客万来

目の前のテーブルにはお馴染みの玉子スープや海老のチリソース煮、青椒肉絲から名前の知らない一品まで、色とりどりの料理が盛られた皿が並べられている。

ここ、恵比寿にある高級中華料理店。私一人では絶対に入ることのない店のランチバイキングに、できれば一緒に来たくはなかった御方と今、共にいる。

H&Gコミュニケーションズ社長、半田暁氏と。

「さあさあ、美春ちゃん、たんとおあがり」

言われなくても食べている。バイキングに来たら元を取るのが鉄則だ。……ここは社長の奢りだけど。

しかし私は口と手を動かしながら、目の前にいるオッサンに心の中で文句を言った。

こうして一緒に昼食を摂っているのも元をたどれば女子化粧室での騒動が原因で、あの騒動の一因となったのは自分のとった行動であるというのに、全く自覚もなくヘラヘラしているのは一体どういう見なんだ。

九階女子化粧室事件（と勝手に命名）の起きた日の翌日、事の次第を聞いた松永部長から朝イチで呼び出しを受けた。

「お前さんの名前が会議で出る度に恥ずかしい思いをするのは俺なんだ。もうちっとおとなしくしてくれんもんかね」

部長があまりにもウンザリした顔をするものだから、私は自己弁護を試みた。

「今回私は巻き込まれただけですよ……?」

「その割にはタンカを切る声が威勢良かった、あれはケンカ慣れしている、普通六人の女に取り囲まれたら男だってホールドアップだ、

と今朝の会議で散々当てこすりを言われたんだ。俺も工藤も瀬尾も穴があったら飛び込んでいたぞ。特に瀬尾なんか頭を抱えてこっちが見ていて気の毒になるほどだった」

……知るか、そんなもん。

続けて私を呼び出したのは川嶋常務。騒ぎを起こした瀬尾ファン女子六名から事情を詳しく聞いた上で口頭注意したとのことだった。彼女らの話では、瀬尾係長はランチだけは月に数回は一緒に行ってくれていたのが、WEB事業部に異動になって以来全く応じてくれなくなった。自分たちでさえ仕事の後に食事や飲みに行くことなど一度もなかったのに、私が二人きりでデートしたと聞いてすぐに社長と結びつけて考えたそうだ。

「しかし君は元気だねえ。君の声が廊下まで聞こえてきた時は、どっちがどっちをシメているんだと思ったよ。まあこれに懲りて彼女らも二度と君には近づかないだろう。瀬尾くんは瀬尾くんできちんと彼女らの対処をするだろうし、それは期待していてもいいと思うよ」

常務は親しみを込めた口調で更に続けた。

「社長がいつも迷惑をかけていてすまないね」

「それが分かっているのなら、常務のお力で何とかしてくださいませんか」

彼はクスクス笑うと長年の友人でもある社長をこう評した。

「社長の愛情表現はちょっと変わってるんだ。でも悪気はないんだよ」

悪気があったらどついてるわ。

「もし何か困ったことが起きたら僕のところに来なさい。いつでも力になるからね」

そしてその日の午後、「悪気はない」社長がお茶を誘いにきたのだった。

私はあのくだらない騒動を早く忘れるためにも仕事に打ち込みたかった。実際、その日は残業がすでに確定するほど作業が詰まっていた、相手をする時間など一分一秒たりとも惜しかった。社長の能天気な誘い文句とは裏腹に、私の態度が段々イライラしてきたとしても致し方あるまい。

それと察した係長が助け船を出しにきたが、先週までの勢いはもはや彼にはない。

「あれあれ、瀬尾くん、追っかけがいるなんて人気者は羨ましいねえ」

などと嫌味を言われると、あっさりと土俵際に追い込まれ寄り切りでマンガースの勝ちとなったのであった。

「うるさい」

「え？ 何なにー、美春ちゃん？」

「うるさいって言ったんです！ 人の頭の上でゴチャゴチャと！ 仕事なんだから静かにしてくださいっ！」

私はマンガースに怒鳴りつけた。一度キレた人間に怖いものなどない。そう、実はマンガースにとって天敵はハブではなく人間なのだ。

「社長！」

「は、はい」

「明日のお昼ヒマですかっ」

「はいっ、ヒマですっ」

「じゃあランチに一緒に行きますから、今日はもう帰ってくださいっ。私は忙しいんですっ！」

「わ、分かったっ。明日ランチねっ」

私の剣幕に恐れをなしたのかじりじりと後ずさって行く社長に、もう一言付け加えるのも忘れなかった。

「豪華ランチですよ！ もちろん社長の奢りですからね！」

さて、高級中華バイキングを堪能した私のかねてよりの疑問を口に出した。向井里佳子という元社員のことだ。なぜ社長ともあろう人が、一人の新入社員を肩入れするようなマネをしたのか？

社長は初め居心地悪そうに黙っているだけだったが、あの騒動の遠因が彼の向井さんへの偏愛にあったことを挙げて詰め寄ると、渋々と口を開いた。

「僕にも失敗はあるんだよー、美春ちゃん」

「えこ聾^{ひじき}肩^{ひじき}したことが失敗だったとは分かっているんですね」

「じゃなくて人選に失敗したの」

人選？ 何の？

社長は悪戯を見つけられた子供のように視線をあちこちに泳がせたが、やがて諦めてボソツとつぶやいた。

「息子のお嫁さんになってもらいたかったんだー」

スプーンを口に運びかけていた手が止まり、杏仁豆腐が落つこちた。が、口をあんぐりと開けたまま、私は穴のあくほど社長を見つめた。

「僕の息子ってば、僕に似ないで女の子が苦手なんだよー。ちゃんとともに恋愛したこともないの。親としてはやっぱり心配でしょ？ だから代わりに僕が相手を見つけてあげようと思ったんだよねー。それで、ゆくゆくは結婚もしてほしいなーって。でね、向井くんならいいんじゃないかなと思ったんだー」

「……いいと思った決め手は何だったんですか？」

「ん？ 顔！ 顔が僕の好みだった！ あと気が強いところ」

「アホですかあなたは！ 結婚するのは息子さんでしょっ！」

私からアホ呼ばわりされても気にならないのか、社長は夢見る乙女のような顔をして後を続けた。

「だってさ、僕、娘いないから憧れだったんだよねー、一緒に買物

とかデートとか。どうせなら理想の義理の娘が欲しいと思ったの」
私は頭を抱えた。ここにも一人、自分の理想を無理やり現実化しようとする愚か者がいたとは……

「結局向井くんは人選ミスだったし、焦ってやり方も失敗したけど、今度こそ間違いなく大本命だからねー、美春ちゃん」

「へ……？」

「だからあ、君だよー。君が息子のお嫁さん候補っ」

「……」

「君は将来の義理の娘っ」

「……」

「なんなら明日からお義父さんって呼んでくれてもいいよー」

あなたが舅になるという時点ですでに嫌です。

「というわけで、間違っても彼氏なんか作らないでね。まあ『社長の愛人』を彼女にしようって奴もいないと思うけどねッ。そうだ、今度一緒に歌舞伎でも見に行かない？」

ピキッとこめかみが鳴った気がする。一度殴っておいた方がいいかもしれない、このオッサン。

疲れた。せっかく美味しい料理を頂いたというのに、くたくたに疲れた。それなのにこのオッサンは、なぜこんなにもツヤツヤとした顔をしているんだ？

「社長って本当にお若いですねー。女子高生も真っ青になるぐらいピチピチしちゃって、とても結婚適齢期の息子さんがいるようには見えませんよ」

この嫌味、甘んじて受け取ってくれ。

「あ、僕の長男ね、十七歳、高校二年生。陸上部だからきつと話が合うよー。君のことインターハイで四位だったって話したら、『マジ、ヤバい、俺、ちょー、リスペクト！』だってさ」

「……」

似合わぬ若者言葉を恥ずかしげもなく使うこのオッサン。一度と

は言わず、二度、三度と殴ってやりたい。高校生だと？ 何が嫁候補だっ！ バカにして！

超低気圧を背負って昼食から戻った私を恐れて、しばらく近づく者は誰もいなかった。

しかし冷静さを取り戻すとみずみずしい脳細胞が活発に動き始め、誰も話しかける者がいないのを幸い脳内探偵活動に没頭した。

嫁候補などというヨタ話を私は信じていない。高校生の息子に何が嫁だ。だがさすがにやり手社長と言われるだけあって一筋縄ではいかぬ相手、口を割らせるのは容易ではない。真実を暴くのは後日に譲るとして、今推理したいのは向井さんが退職することになったいきさつなのだ。

周囲と摩擦を繰り返すにもかかわらず社長のお気に入りであるため職場でその扱いに困り果てていたという彼女の、あまりに都合の良いタイミングでの結婚退職。それを歓迎しながらも無責任であるとか片岡さんは憤慨していたが、その裏に、ある人物の思惑が動いていたとしたら？

ある人物——言わずと知れた瀬尾係長だ。

五階の受付嬢本田さんやPR事業部の先輩である白川さんに結婚相手を見繕ったように、向井さんにも同じことをしたとは考えられないだろうか。この場合順序としては向井さんが先になるわけだが、結婚という、誰に対しても角の立つことのない理由で退職に追い込み丸く収めた。これなら社長だっていくらお気に入りであろうがどうにもできない。

向井さんの結婚相手は取引先の会社の社員だという。これは彼女の指導役であった係長が担当していた会社とみて十中八九間違いない。入社半年にも満たない新入社員である彼女が単独で担当を受け持つはずがないからだ。

あの腹黒男ならやる。職場に平和をもたらすために、彼女に気のありそうな男性をうまいことあてがい結婚に持ち込ませる。ただ彼女が妊娠したことも係長の計算どおりだとしたら――

それは確かに妊娠したとしたら結婚を決意させる充分な理由になるだろうし、相手の男性が望めば退職の方向に話を持っていくのも難しくはない。入社半年ではまだまだ仕事の面白さもわかっていなかっただろうし、愛着も持ち得なかったかもしれない。――でも、普通そこまでやるか？

疑問に答えられる人物はたった一人。しかし私は彼にそれを確かめることはできない。

あの騒動以来、私は瀬尾係長と必要最小限の会話しか交わさず、しかも決して目を合わせようとはしなかった。その理由を、係長の軽率な行動が原因で彼のファンによって吊るし上げられ、侮辱までされたことを激怒しているからだ、同僚たちは信じていた。私にとってはその方が都合が良かった。

一方瀬尾係長は傍目からも分かるほど落ち込んでいた。できる男であるが故に業務には決して支障を来さないが、深海にも匹敵するほどの深い深い溜息を何度もついている。これについては、これまで周囲から絶大な信頼を寄せられ良好な人間関係を築き上げてきた彼が、初めて経験する取りこぼしに精神的再建をなかなか果たすことができないのだと、同僚たちはみなしていた。

課長と係長の前で「社長の愛人の方がマシ」発言をした後も、波布からは毎晩電話がかかってきたが私は無視を決め込んだ。彼が謝罪をしたがっていることは明らかだったが、受け入れることも話を聞くことも御免だった。メールも読みもせずに削除した。

あんな騒動があった直後では社内外で二人で会うことなど論外だ

ったから、彼にしてみれば電話しか手段はなかったのだろうが、それでも私は拒否し続けた。

「何も知らなくてごめん」「ひどいことを言ってすまなかった」「ご両親がいないなんて思ってもみなくて」

そんな言葉を伝えれば、罪悪感が払拭されてきつと彼は満足するのだろう。そしてより一層優しく接してあげなくては、と使命感に燃えるのだ。それが私をどんなに惨めにさせるかも知らずに。

どうせあと数日もたてば諦めるだろう。彼は将来を嘱望されたエリートだ。私のようないつでも取り換えのきくWebデザイナー一人に頭を悩ますことなどバカらしいと、計算して答えを出すに決まっている。

しかし週末になっても波布は携帯の着信音を鳴らした。放っておくと数時間後に再びかけてくる。その繰り返しにまたもや電源を切ってしまった。

これでもう彼だっかけてこなくなるはずだ。そう確信しながらも胸の中にはモヤモヤしたものが居座っているのを認めないわけにはいかなかった。

そんな気分ではないというのに日曜日には無理やり兄に連れ出され、近隣のショッピングセンターへと出かけた。妄想に片足を突っ込んだ兄がやがて好みのショップを見つけ、私の意思などお構いなく何着かの服と共に試着室に押し込む。着替えながら耳を澄ますと、兄と店員とのやり取りが聞こえた。

「こちらのフレアスカートはいかがですか？ 先程のトップスにも合わせやすいですよ」

「うん、それもいいね。妹に似合いそうだ」

この上まだ着せる気か、いい加減にしろ。どうせなら私の好みの服を買わせてくれ。タンスには兄の選んだ服が肥やしになっているのだから。

結局兄が選んだコーディネートはベージュのニットワンピース、茶色のロングブーツ、革紐と天然石を施したシルバーのネックレスの組み合わせ。

店員が微笑んで「お優しいお兄様ですこと」などと言うのを片頬に受けてひきつり笑いを返す。店を出る頃には何着にも及ぶ試着でぐったり疲れていたので甘いモノを所望すると、耳を疑う言葉が兄の口から飛び出した。

「これ、金曜日に着て行けよ」

「金曜日？」

「合コン。お前のとこの女性社員と俺の弁護士仲間。やりたいって言ってたろ？」

なにいいい？

明けて月曜朝、弁護士軍団との突然の合コン開催のお知らせはWEB事業部のお姉サマ方を狂喜乱舞させた。

師走に入ると忙しくなるし、新年まで先送りするのも申し訳ない、今週なら都合がつく者が七名集まったが、そちらは何人来ていただいても構いません、場所は恵比寿で結構です——との兄の言葉を、あの、皆さん、聞いていらっしゃいますか？

「ポチ！ 良くやった」

「祝合コン開催with弁護士！」

お祭り騒ぎの女性陣に比べて、男性諸氏は一様に面白くなさそうな顔つきだ。

「やだねー、弁護士っていうだけで興奮して」

「ホントホント」

部長や課長、秦野主任は既婚者の余裕からか、「お前らしつかりゲットして、お持ち帰りしろ」などと女性陣に発破をかけている。お願いだから、お下劣な言い方はやめてほしい。お持ち帰りされる兄……いや、それはないだろ。私も付き添いで参加することだし。

そう。この合コンにおける私の役割は幹事で付き添い。合コンメンバーではないのだ。もちろん兄による厳命である。

「妹がいつも世話になってる先輩方への兄からの感謝の気持ちとして開く合コンだぞ。お前は端っこでチビチビ飲んでなさい」

それはないだろ、と文句を言ったら「家長の命令だ」と久々に家長風を吹かせ私の抗議を抑えつけた。

こうして異様にテンションの高い独身女性陣と、彼女らを冷たい目で見える独身男性陣という図式が出来上がったある日、私は課長に呼ばれた。

打ち合わせ用の小部屋で今回は課長と二人きりである。私に椅子を勧めると彼はやけに優しい目をして深みのある声を出した。

「なあポチ……俺はお前の味方だ。そりゃ男だからあいつの気持ちも分からなくはない。でもやっぱりお前の気持ちが一番優先なんだよ。お前にだって心の準備ってもんがあるもんなあ」

何の話をしてるんだ、一体。

「このことを知ってるのは今は俺一人だけど、こんな状態が続けば他の奴らもいずれは気づくぞ。だからな、そろそろ許してやってくれないか？」

このこと？　こんな状態？

「あいつもすごい反省してるみたいだし……お前だって分かるだろう？　あいつの落ち込みようときたら……今週に入ってますますひどくなってる」

「あいう、あいつというのは、係長のことでしょいか？」

「他に誰がいるんだ」

俺は何もかも分かっている、だから安心してぶつかってこい——みたいなアニキ的表情で私を見つめる課長。まさか係長はあの時のことを全て話したのだろうか。課長と私との不倫疑惑から、両親のこ

とまで。

「か……係長は、何を言ったんですか？」

ごつくん。唾を飲み込む音が妙に大きく聞こえる。

「分かってる。お前は何も悪くない。俺じゃなくたって誰だってそう思うだろう。あいつも言ったよ、『悪いのは全部僕なんです。彼女に対してあんなことをしてしまった自分が恥ずかしい』って」

やはり彼は課長に全てを話したのだ。私を追い詰め両親の死について無理やり言わせたことを。バカ。係長の大バカ野郎。

「お前が男慣れしていないことにつけこんだんだ。悪いのは全部あいつだよ」

「………男慣れ？　ちょっと待て。似たような台詞をどこかで聞かなかったか？」

「あいつも二十代後半になって今までとは違うタイプに興味を持っただろう。真っさらなお前だったら自分の好みに仕立て上げられるとかな。まあそれも一種男の夢というか……いやだからと言ってあいつのやったことが正当化されるわけじゃない。大切なのはお前の気持ちだから。でもそろそろ許してやってくれないか？」

あと一歩で怒髪天を衝くところだったが忍耐を総動員して抑え、敢えて質問を放った。

「……何を許せと？」

「え？　だから……あいつ、お前を押し倒したんだろ？」

「アホかあああ！」

なんだってそういうエロい発想しかできないんだ！

課長を一睨みすると私は何も言わずに化粧室へ直行した。鏡の中の自分に目を遣ると、怒ったような泣いたような、いろんな感情がごちゃ混ぜになった顔をしていた。

私ってこんな顔だったっけ？　二十二歳にもなって情緒不安定か。

……原因は分かっている。波布からのコールが鳴り続けるからだ。

心が、揺らぎ始めていた。

第二十二話 千客万来（後書き）

今回、いろいろと放り込んだためにまた長くなりましたが、最後は課長のカン違いで締めさせていただきました。

さて次回、瀬尾は美春の怒りを解くことができるのでしょうか……

第二十三話 揺れる

「初めまして。越智悠人と申します。いつも妹が大変お世話になっています。普段なかなか接することのない職種の方とのお話を楽しみにしております。どうぞ宜しくお願いします」

変態王子の如才ない挨拶と共に、WEB事業部女性陣と弁護士軍団との合コンは始まった。

恵比寿にある某ダイニングバー。幹事となった私は合コンキングの石津さんの知恵を借りてこの店を予約した。が、合コン自体には参加できないので食べるか飲むかしかできない。兄の言いつけどおり、おとなしく端っこで梅サワーを飲んでいた。

様子を窺うと、お姉サマ方はすでにうつとりした表情で弁護士軍団とのお喋りに興じている。兄が集めてきた面子はそろいもそろつていい男ばかりだったのだ。こりゃ、腕によりをかけて選んできたな。

いざ合コンへ出陣、という段になって私はお姉サマ方に申し入れた。職場での私の言動をチクってくれるな、特に先日の女子トイレでの一件は他言無用です、と。

そんなことを知ろうものなら、あの兄はまた余計な妄想を働かせて面倒くさくなるに決まっている。私だって一社会人として立派にやっていることを、ぐうの音も出ないほど兄にアピールせねば。それでお姉サマ方が沈黙を守ってくれるのなら、喜んで一人酒を楽しむさ。

とはいえ、実際はちつとも楽しんでいなかった。考えたくないのに考えてしまうから——瀬尾係長のことを。

波布は諦めることなく毎晩私に電話をかけてきた。その度に電源

を切ったが、どうして彼がここまでするのか理解できない。何度も拒絶しても、拒絶し続けても、コールをやめない彼に私はそろそろ罪悪感を抱き始めていた。これではまるでこっちが悪者のようではないか。

着信拒否にすれば良かったのかもしれない。そうすれば彼だっけとつくに諦めていただろうし、私もこんな気持ちを抱かずに済んだ。しかし今更それをするのは私が負けを認めるような気がして退くにも退けなかった。

いつまで彼はドアを叩き続けるつもりなのか。私は開けるつもりなんてないのに。ドアを開けて彼が謝罪して、それで彼の気は済むかもしれないが、もう以前と同じではあり得ない。

彼の網膜に映る私の姿は「両親を亡くした可哀相な女の子」なのだ。気を遣い不自然な優しさで味付けされた笑顔を見せ、薄皮で包んだような言葉を選ぶ。彼との間には再び幾重にもカーテンが引かれてしまった。それらが開けられることはもうない。

ふと目の前の人影に気づいて顔を上げると、兄の大学時代の先輩である溝口弁護士が立っていた。彼は兄より二歳年上だが司法試験突破に五年かかっているので、弁護士としての経験はまだ浅い。

「一人で退屈じゃない？」

そう言って、向かいに腰を掛ける。

「大丈夫です。溝口さんはちょっと休憩？」

「あはは。そうだね、僕、元々合コンって苦手で……」

苦笑いしたその顔に掛けた眼鏡が知的な印象を与えている。これは手塚さん辺りの好みか。

「もしかして兄に無理やり連れて来られました？」

「半強制だったね」

「すみません、本当に」

「それはもういいんだけどね。『弁護士だって営業しろ』がお兄さ

んの口癖だから。こういう機会に名刺配りまくって仕事を増やす努力しろって」

確かにそれは兄の持論だ。いずれは弁護士が淘汰される時代がやってくるから、生き残るためには営業活動が必要だって。しかし先輩に対してエラソーだな、おい。

「実際、越智くん個人で顧客数相当持つてるって言うからね。それで事務所のボスが独立引き止めてパートナーにしたって。不思議なんだよなあ、なんでそんなにたくさん顧客持つてんのか」

そんな逸話があったとは知らなんだ。田舎出身の兄には知己も人脈もなかっただろうに、どうやって多くの顧客を獲得したのだろうか？

——そういえば、営業に必要なのは粘り強さでも交渉能力でもなくルックスだ、とうそぶいたこともあったが。

それにしてもなぜ突然の合コン開催となったのだろう。

先輩方との合コン話を持ち掛けたのは係長の歓迎会の翌日、秋田行きの新幹線に乗るために家を出ようとする直前だったのだが、

「してもいいけど、美春、制服着て『お兄ちゃんお願い』って子犬みたいな目で訴えてごらん？」

と言われて話を速攻で打ち切った覚えがある。それから今の今まで合コンのこの字も出てこなかったのに、突然なにゆえ？

溝口弁護士に疑問をぶつけてみた。

「兄は前から私の職場の人との合コンの話をしていましたか？　こういう合コンがあったら来るか、みたいに誘ったり」

「いや全く。突然来週の金曜日空けといてってメールが来てさ。営業活動に協力してやるからって」

急に胸にざわめきを感じた。何かある。

「あの、兄がメールを寄越したのはいつですか？」

「先週の月曜の朝。出勤して一番に来たメールだったからよく覚えてる」

先週の月曜日。瀬尾ファンとの騒ぎがあった日。——というよりも。

瀬尾係長と会った日の後、だ。

兄的には妹と会社の「男」が会った日、なんだけど。そういえば、風呂上りに泣いて赤くなった目を見られた。いやまさか。まさかね。考え込む私に溝口さんはクスクス笑って続けた。

「越智くんって美春ちゃんのこと可愛くて仕方がないって感じだよ
ね」

答えに詰まって笑って誤魔化した。変質的いや偏執的(?)に可愛がられても嬉しくないのだよ。

「だって今日のメンバー全員、妹には手え出すな、メルアド交換も厳禁だって釘刺されたんだよ。僕たち苦笑いするしかなかったよ」

ああああ。また恥ずかしいことを……

「あ、ヤバイ、お兄さんこっち睨んでる。僕もう向こうに行くね」
私が兄の方を見遣ると、隣りに座る杏子さんと完璧な王子様スマイルで歓談していた。

合コンはつつがなく終わった。帰宅する者、有志による二次会に参加する者、それぞれの方向へ別れていく。

兄と私はタクシー乗り場へ向かいながら酔いを覚まし、夜の恵比寿の喧騒をやり過ごしていた。すると前方から酔っ払ったサラリーマンの集団がやってくるのが見える。兄は私と場所を入れ替わって、彼らと通り過ぎる際に私を遠ざけた。

考えてみれば兄と出歩くと、私に車道側を歩かせることはないし、上りのエスカレーターに乗る時は私を必ず先に乗せる。それはもはや自然で当たり前前の所作だ。

なぜなら、兄にとって私を守ることは基本中の基本だから。

そんな兄ならば妹の様子を不審に思っ、あの夜一緒にいた男について探り出そうとはしないだろうか？

それが合コン開催の理由かと推理したのだけれど。

そんな心配ご無用だよ。瀬尾係長とはきっともう二度と、二人で話をするこゝもなければ、目を合わせるこゝすらないんだから。

いづれ諦めて電話だつてかけてこなくなる。これ以上歩み寄るのはバカらしいと、幕を引く時がきつと来る。

いくら叩いたつて開かないドアの前で、いつまでも待っているはずはないから――

だからね。私は傷つかないから。ドアのこちら側にいれば大丈夫だから。彼がどんな目で私を見るか、知らずに済むから。

心配しないでいいんだよ。

自宅へと向かうタクシーの中で、私は兄に寄りかかつて眠りに落ちた。兄の隣なら、傷つくこゝもなく安心して眠れるこゝとは分かつていた。

「ブラコン」

「はい？」

今、耳を疑う単語が杏子さんの口から飛び出したような気がする。

「ブラコンと言つたの。ポチ、あんたが」

なんですと？

週明けの月曜朝、合コンに参加したお姉サマ方に取り囲まれて、

私はあらぬ疑いをかけられているこゝを知つた。

「分からないでもないけどさ。あれだけ完璧なお兄さんと一緒にいたら」

「あんなお兄さんを見た後じゃ、周りにいる男はみんなカスに見えるわ」

彼女たちは喧嘩を売るつもりなのか、しっかりと周りを見渡した。

見渡された男性陣が無然としてこちらを見る。

しかし彼らは朝から元気がない。妙に陰鬱というか。売られた喧嘩を買う兆しが一向に見えてこないぞ。

反対に女性陣は熱を帯びた口調で次第にテンションを上げていく。

「しょっちゅう食事に連れて行ってくれるっていうし」

「雨の日は車で送り迎え」

「休日デートで服とか買ってくれるし」

「それでもってモデル並みの容姿」

「そんなに甘やかされてたら、普通の恋愛じゃ絶対満足できない」

「あんたに彼氏ができない理由ってそれだわ」

彼女らが知るはずもないことをまくし立てるのを聞き、すぐにピンと来た。あの合コンか。兄よ、一体全体何をやらかしてくれただ。

「あの、兄とは一体どういう話をしてたんですか？」

「あんたが職場できちんとやってるかって訊かれてさ。でもあんたから何もチクるなって言われてたから、妹さんはとっても真面目で品行方正、清純かつおとなしいってヨイショしたのよ」

しすぎだろ、ソリヤ！

「そしたら『何しろ田舎者で世間知らずなものですから、兄としては心配で。僕の目が届く範囲ではできるだけのことをしてやってるつもりなんです』って言って、普段あんたに何をしてあげているかとつらつらと並べられて。つまりさっき言ったようなこと」

出た！ 十八番「理想の兄」の演技！

「そんなに可愛がられているんじゃ、妹さんに好きな人ができたら大変ですねって言ったたら、『妹はあれで僕の面倒を見ているつもりのように、僕が結婚するまでは傍にいますからって言うんですよ。昔からお兄ちゃん子なんですよね。お恥ずかしい話ですが』って本当に恥ずかしそうに言うのよ」

大ウソだ！ そんなことを言った覚えはない！ それは兄の「理

想の妹」像だから！

「それでね、『でも僕にしても、妹がちゃんと好きな人を見つけて幸せになるまでは結婚なんてできませんし。やっぱり妹のことを大切にしてくれて、絶対に泣かせたりしない人がいいんですが』なんて言うのよお。あんた、どれだけお兄さんに愛されてんのよ！羨ましいったら！」

よくもそんな歯の浮いた台詞が……弁護士廃業して役者になれ。変態の演技は地でいけるぞ。

「なるほど。ポチはブラコンか。そんな立派なお兄さんじゃ、ポチを好きになる男も大変だなあ」

「ぶ……部長！」

いつの間にか役付き上司たちが部屋にいて、話に耳を傾けていたようだ。

「ブラコンじゃありませんから！ ええ全く！ 一ミリたりとも！」
しかし私の主張をまともに受け取った人は誰一人としていない。
兄よ。よくもやってくれたな。私を心配するあまり合コンを開いたのかと思いきや、ブラコン疑惑を職場に広めてどうするんだ！

直ちにパソコンからメールで文句をつけたら、折り返し返信が来た。

《妹の恋路を邪魔したいって言っただろ？》

アホかあ！ そもそも恋路なんかないわ！

ふと視線を感じて顔を上げると、係長がえも言われぬ悲しい目をしてこちらを見ていた。わずか一秒にも満たぬ短い時間に交錯した視線をしかし私はつとはずした。

週末に何度もかかってきた電話を、やはり私は無視していた。もう二週間にもなるというのに、なぜ彼は諦めないのだろう。

根比べでもしているつもりなのだろうか。いつか私が折れて謝罪

を受け入れることを信じて。

もうやめて。お願いだから。もう電話をかけてこないで。

揺れている自分がいることは分かっていた。ドアのノブに手を掛けて、ためらっている自分。

声を聞きたい。でも聞いちゃいけない。

声を聞いたら、またあの笑顔を求めたくなってしまうから。

もう前と同じ笑顔ではないのに――

「ポチ、ちよつといいか」

その日の業務終了後、珍しく真面目な顔をした佐久間主任に呼び止められた。休憩室で自販機から温かい缶コーヒーを買ってよこした彼は、私の向かいに座ると渋い顔で口を開く。

「金曜の夜な、飲み会やったの。女子は合コン、男子は慰め会ってな。……瀬尾の」

係長の名前に緊張を伴って反応する私を見て、恐らくわざとなのだろう、場の雰囲気解そうとぞんざいな調子で語りかける。

「んな顔すんな。あいつさあ、すげー落ち込んでんの。あの騒動にお前を巻き込んだこと、すげー反省してんだよ。でもお前ずっと瀬尾のこと無視してっから余計落ち込んでさあ。それで俺たち慰め会やったんだけど、暗えー奴と酒飲むもんじゃねえ。いくら飲んでもあいつ酔わないし、溜息しかつかないし、こっちは全員気分が沈んじまって悪酔いするし……昨日までずっと気分悪かったんだぞ」

男性陣が朝から元気がなかった理由がそれで分かったが、主任の話がどこに向かおうとしているのかを予想して不穏な影が心をよぎった。

「あいつ、お前に謝りたいのに謝る機会も与えてもらえないって言うてんだよ。目も合わせてくれないのは辛いつて。なあ、お前が怒る気持ちは分かるけど、もう二週間もたつんだしそろそろ許してや

れよ」

やはりそういうことか。私が電話に出ないもんだから第三者を介入させてくるとはね。どうあっても自分は悪者になりたくないというわけか。

「せめてあいつに謝罪させてやってくんねえか？　きちんと誠心誠意謝るからさ。な、ポチ？」

「係長が頼んだんですか、主任に仲介してくれって」

「いやあいつは何も言ってるねえけど」

「でも係長がそんなことを言えば、二人は仲良しなんだし、主任自ら動こうって気になるでしょ？　結局同じことですよ」

「そんな嫌味な言い方すんなよ」

佐久間主任はあくまで穏やかに私をなだめようとしたが、それが分かっていても、いや分かっているからこそ、反発しようとする気持ちを抑えることはできなかった。

係長が叩き続けたドアの前で、今やノブから手を離そうとしている自分がいた。

「謝ってどうするんですか？　謝れば係長の気が済むから？　罪悪感から逃れたくて謝るんですか？」

「そうじゃない」

手を離して一歩後退する自分が見える。

「私、別に係長のこと怒ってませんから、許すも許さないもないです」

「怒ってるだろうが。目も合わさない、ロクに会話もしない」
ドアに背を向ける自分。

「怒ってるんじゃないんです。嫌いなんです」

「は？」

「係長が嫌いなんです」

——もうこれで終わりだ。

「嫌いってお前、そんなこと言うなよ。仲直りしろよ、な？」

「主任が言ってるのは」

ここまで言ったら私って最低の人間だな。……それでもいいや。最低でも何でも。

「ヘビを嫌いな人間に向かって好きになれ、と言ってるのと同じことですよ」

「ポチ！」

主任の目は私を通り越して後方を見ていた。振り向くと入り口に石津さんに連れられて来たのだろう、瀬尾係長が立っていた。——傷ついた少年のような顔をして。

誰もが身じろぎ一つしない僅かな時間を沈黙が支配する。その張りつめた空気を破って最初に動いたのは係長だった。彼は踵を返すと大股で私たちの前から去って行った。

「言い過ぎだぞ、ポチ」

「分かってます」

でももう言ってしまった。もう取り戻せない。もうどうしようもない。

彼は私のことを嫌うだろう。彼にとって私は忌避すべき存在になったのだ。

これでもう二度とドアは叩かれない。私が揺れることもなくなる。

彼が私を可哀相だと思うことはもう、ない。

——その日を境に波布からのコールはぴたりとやんだ。

第二十三話 揺れる（後書き）

更に距離を広げてどうする！との声が聞こえてきそうです……

でも次回は事態の改善、お約束します！

第二十四話 鍋を一緒に

十二月の第一日曜日。

工藤課長の自宅に招待された私は、田園都市線鷺沼駅に降り立った。黒いリブ編みのセーターを着た課長が車で迎えにきていた。スーツ姿よりかなり若く見える。

本日のお招きは課長の奥さんによるものだ。奈緒子さんの件で世話になったからという理由で、昼食に招待してくれたのだ。まさか課長が全て打ち明けるとは思っていなかった私は、心底仰天した。

「『何か隠してるでしょ』って詰め寄られてな……洗いざらいぶちまけた。したら今度女と外泊する時は事前に許可を取って言われた……参ったやもう」

さすが課長の奥さんだ。しっかりと旦那の首根っこを捕まえてるわ。

課長の自宅は元は奥さんの実家だったが、二人の結婚を機に二世帯住宅に建て替えて一階部分に奥さんのご両親が、二階に課長夫妻が住んでいる。

課長が実はマスオさんだったとは。プンプ。奥さんに頭が上がるのもうなずける。

玄関口では大きなお腹を抱えた奥さんが出迎えてくれた。

「いらっしやい、美春ちゃん。あ、美春ちゃんって呼んでいい？」

「はい、じゃ私もみどりさんって呼んでいいですか？」

何てことのないやり取りで場が和むのも、小さな命を宿したみどりさんから出る幸せオーラのお陰だろう。聞けば出産予定日は三週間後とのこと。クリスマスに生まれたりしてね、なんて楽しそうに言っている。

「ウチの両親、今インフルエンザに罹っていてね。うつしちゃいけないからって私に会おうともしないのよ。だからご挨拶は遠慮しま

すって」

そりゃ妊婦さんには最大限に気を遣うだろうなあ。ご両親にとっても初孫なのだし、新しい家族の誕生には万難を排したいところだろう。

「食事に呼んどいて何なんだけど、お鍋でごめんね。この体だともてなし料理を作るのも大変で」

「私、お鍋大好きです。一番好きな食べ物なんですよ。課長からお鍋だって聞いてたから、ほら、きりたんぽ持ってきました」

「うわ、嬉しい」

「良かったな。ポチはよく食うから、材料が足りるかどうか実は心配だったんだ」

キッチンには材料があらかた切られて大皿に並べられており、その横には手作りのお惣菜——じゃがいもの明太子マヨネーズ和えやらかぼちゃの煮つけやらが皿に盛り付けてあり、食欲がそそられた。持参したきりたんぽを適当な大きさに切っていると玄関のチャイムが鳴り、冷蔵庫からビールを出していた課長が応対しに出て行く。

「宅急便かな」

「お歳暮じゃないですか」

時刻は十二時半。すでに空腹を覚え始めてかなりの時間がたっていた。早く食べたいがために率先してキッチンから皿を運ぶ。鍋、鍋、鍋……ムフフ。

思いもかけない声が聞こえたのはその時だった。

「越智さん……」

リビングの入り口で目を丸くして立つ瀬尾係長を、私はポカンと見つめた。なんで係長がここにいるの？

まさかと思いダイニングテーブルを見ると、四人分の食器がセッティングされている。

……そういうことか。謀ったな、工藤夫妻。

「私、帰りま」

「美春ちゃん」

辞去を表明しようとした――早い話が逃げ出そうとした――私を、いつの間にか横に来ていたみどりさんが遮った。

「大人の対応。できるわよね？ 瀬尾くんも」

そう言って入り口で身動きできないままにいる係長に微笑む。

「瀬尾くん、お鍋で良かった？ 今更嫌だって言われても困るけど。」

あ、美春ちゃんはね、お鍋が一番好きな食べ物なんですって」

私が好きなのは気の置けない人と食べる鍋だ。係長と一緒になんて、味が分らないかもしれない。

彼は息を一つ吐くとみどりさんの前にやってきた。ネルチェックシャツに細身の黒いデニムと、初めて見るスーツ以外の服に身を包んだ彼は、半ばパニックになっている私とは対照的にリラックスして見えた。うつむく私の視界で小型の紙袋が差し出される。

「これ、ロールケーキ。金子ちゃん、好きだったよね？」

「自由が丘の？ ありがとう。後でみんなで食べようね」

「何だお前。ケーキなんかより酒持ってこいよ。気が利かねえな」

「金子ちゃんに恨まれると、後が怖いですからね」

三人の会話を横で聞きながらどういう態度をとるべきなのか分からず、私は運んできた皿を黙ってテーブルに置いた。そんな私を見て、みどりさんはやけに明るい声で言った。

「じゃあ始めましょうか。みんな座って」

ここでもわざとなのか私と係長は隣同士だ。彼が右で私が左で。この近さは気になるが、向かいに座るみどりさんと課長を見ていれば、彼の顔を見なくて済むのはありがたい。だって本当にどういう顔をしたらいいのか分からなかったから。

あの休憩室での一件から二週間がたった。

あの時のことは佐久間主任と石津さんが口をつぐんでしまったの

で他の同僚たちの知るところとはなっていなかったが、決して皆無ではない係長と私との業務上の短い会話の中に孕^{はら}んだ緊張感を皆も感じており、二人が近づく度に交わされる冷ややかなやり取りが注目の的となっていることは私にも分かっていた。

杏子さんと藤田さんも私の頑なな態度を時にはなだめ時には非難したが、最近ではもはや諦めたのか何も言わなくなってしまった。こうして二人の気持ちは決して交差することなく時が流れて行くんだろう、それも私が自分で選んだことなのだから、と心の中で言い聞かせていたのだった。

鍋の具に火が通り、テーブルに大きなお腹がつかえてしまうみどりさんのために、私は小皿に具をよそった。そうすると流れで係長や課長にも、ということになってしまう。

「……どうぞ」

「ありがとう」

視線をはずして係長にも具を盛った皿を渡す。

車で来たという彼は一杯だけと言ってビールのグラスを取った。こういう場での慣例としてとりあえず乾杯はしたが、ぎこちない雰囲気はさすがに否定できなかった。

しかしその空気もみどりさんのまさかの発言で一変する。

「美春ちゃん、女子トイレで大立ち回りましたんですって？」

……この人は空気を読めないのだろうか？ それともわざとやっているのだろうか？ この面子でそれを話題にするとは。

「あの……大立ち回りはしていませんが。できればその話題はやめていただきたい……」

「えーっ、なんで？ 実はその話を聞くのをとっても楽しみにしていたのよお」

天然な妻を持った責任を問うべく課長をギロツと睨んだ。よくも余計なことを喋ってくれたな。

しかし彼は慌てて無実を訴える。

「俺じゃないぞ。相沢だ」

「杏ちゃんがねえ、あんなに興奮したのは私の父が乗り込んだ時以来だって、それは楽しそうに言うもんだから」

杏子さん、実は楽しんでたのか。今度お昼奢らせてやる。

「金子チャン、できれば僕もその話題は……あの時のことを思い出す度に胃が痛くなるというか……」

そのあまりに弱々しい発言について隣にいる係長をまじまじと見てしまった。私の視線を感じたのか、彼もこちらを見る。近距離で目が合って慌てて前を向き、白菜を急いで口に入れた。熱っ。

係長の様子を見て、みどりさんは弄る相手を変えることにしたようだ。

「情けない。あの完璧瀬尾くんのそんな姿を見ようとは思ってもみなかったわよ。へへへ、ザマアミロ」

「嬉しそうだなあ、みどり」

「だってね美春ちゃん、聞いてよ。私と瀬尾くん、新入社員研修で同じグループだったんだけど、瀬尾くんは何やらしても完璧にこなすのよ。私は失敗ばかりでね。PR事業部の研修で同じことやっても瀬尾くんにはできるのに私にはできなくて、この人がね」

と課長をあごで指し、

「『やっぱりお嬢ちゃんには無理だったか』って言ったのよお」

「うわ、課長、最低」

「でしよう？ 私、悔しくて悔しくて『次は絶対失敗しませんから！』ってこの人に怒鳴っちゃったの」

おとなしい深窓のお嬢様なのかと思っていた彼女の意外なエピソードに、私は興味をそそられた。

「あれには僕もびっくりした。当時のPRのエースに向かって新入社員が怒鳴りつけたんだからね」

係長は当時を懐かしむような色を声に滲ませる。一方私は違う視

点から食いついた。

「課長ってその頃からみどりさんのこと、目つけてたんですか。イヤラシイ」

「イヤラシイって何だ」

「せっかくWEB事業部で平和に暮らしていたのに、三年後にこの人が課長になって異動してきて、正直お先真っ暗って思ったの」

「お前、んなこと思ってたのか」

「そうよお」

場の空気が笑いで弾けた。私は順に視線を水平に動かして、またしても係長と目が合ってしまった。慌てて再び顔を前に向けて豆腐を口に入れる。うっ、熱い。

みどりさんが次に変えた話題はまたもや私絡みだった。

「美春ちゃんは社長のお気に入りなんですって？」

杏子さん、どれだけWEBの内情を喋ってるんだろう。みどりさんの目ときたら好奇心満々じゃないか。

「一緒にお昼ご飯も食べるんでしょう？　すごいわねー、あの社長とどんな話するの？」

「あ、それは俺も興味ある」

どんな話って……思い出した。嫁候補で、息子は高校生で……バカにしやがって。

「あのオッサン……」

憎々しげなつぶやきにみどりさんが喜色を浮かべて食いついた。

「えっ、何なに？」

期待に満ちた二つの目を前にしては、諦めて全てを語るしかなかった。

「……というわけなんですよ。バカにしてるでしょ？　高校生の息子ですよ？　よっぽどその場で張り倒そうかと思いましたよ」

課長もみどりさんも呆氣にとられている。係長の表情は見えないがきつと同じに違う。

「それ……本気なのかしらね」

「本気なわけないでしょうが！ 絶対他に理由があるんですよ、その向井って人のこと」

「瀬尾、お前関係者だろ。何も聞いてないのか」

「いや、僕は何も……初耳です、全く」

嫁候補のお供をさせられていたとなれば、いい気分はしないだろう、係長だって。

「ねえ、じゃあ美春ちゃんのことは？」

「それだって口から出任せに決まっています。だいたい何なんですか、『社長の愛人』を彼女にする奴はいないだなんて、全く腹の立つ。社外の人にはそんな噂なんか関係ないってんですよ」

思い出し怒りのためつい興奮してしまったが、みどりさんは同調することなくサラリと尋ねた。

「美春ちゃん、彼氏いるの？」

この人はまたどうしてド直球で攻めてくるのだ。

「いないだろ、それは」

「なんで課長が断言するんですか！」

「そうよ、あなたは黙って。……で、彼氏いるの？」

そんなに真剣な表情で訊かなくてもいいのではないかと思ったが、口には出さず、質問に答えるのみにとどめた。

「……いないですよ、残念ながら」

半分ふて腐れて言うのと、みどりさんはニッコリ笑い、視線を私の隣に移した。

「ですってよ、瀬尾くん」

「ぐふっ」

いきなり話を振られた係長は喉を詰まらせた。慌ててビールで流し込んでいる。深呼吸をして漸く落ち着いた頃合いを見て、課長が悪戯っ子のような笑みを浮かべた。

「この間の合コンはどうだった、弁護士軍団との。お前やけに可愛い格好して行ったじゃないか。彼氏になりそうな奴はいなかったのか」

「私は一人で飲んでただけですよ。ウチの兄が『俺がお前の先輩方のために選んだ優良物件だから』って言って、メルアドの交換すらさせてもらえなかったんですから」

私のブラコン疑惑を広めるための合コンの場にいたことすら腹が立つ。

「お兄さん、すごく素敵な人なんですってね。杏ちゃんが言った兄のことまで喋っていたのか。そのうち弁当のおかずの内容まで知られるんじゃないだろうか。タコさんウィンナーの足が四本しかないこととか。」

戦々恐々としていると、スパイの元締めに向かって夫が異論を唱えた。

「俺はすげー切れ者だって印象を持ったけどな」

「工藤さんは会ったことがあるんですか」

これまでほとんど口を挟まなかった係長が徐ろに尋ねた。

「ああ、ちよっと知人が世話になってな」

「知人じゃなくて元カノ」

妻の顔に戻ったみどりさんがチクリと訂正した。

「……お前やっぱり怒ってるだろ」

「怒ってないもーん」

「ホ、ホラホラホラ、皆さん手が止まってますよっ。食べましょうねッ、ハイ！」

夫婦喧嘩は未然に防げ。再び具を小皿によそい、ついでに新たに具を鍋に足して蓋をした。

さっきからずっと係長がこちらを見ているような気がする。何か感づいたのかもしれない。だからと言って何が変わるわけでもないのは分かっている。私はもう彼に嫌われているのだから。

それでも見られていると思うと居心地が悪くてたまらなかった。

この状況を変えたくて、みどりさんに話題を振ることにした。そういえばずっと私のことばかり訊かれていたのだ。

「お腹の赤ちゃん、性別は分かっているんですか？」

「うん、でも訊いてないの。楽しみにしておこうと思って」

「女の子だといいなあ。それで課長が『娘は絶対に嫁にやらん』とか言うの。ぎゃーっ、可笑しいっ！」

「ちゃんと門限作って外泊禁止にしてください。それで初めて朝帰りした時に、僕、工藤さんの顔見にきます」

「てめっ。嫌味かそれは」

ひとしきり笑い声が起こり、それぞれの顔を見合わせて——再び係長と目が合った。まずい。またもや慌てて視線を逸らして次の話題を振る。

「名前はもう考えました？」

「候補は幾つかあるんだけど、あとは顔を見て決めようって言うの。——ねえ、美春ちゃんの名前のいわれは？」

私の名前はもうでもいいんだけどな、今。

「あー……私、三月生まれなんですけど」

「三月何日？」

勢い込んでみどりさんが日にちを確認する。いきなり話の腰を折られた私は引き気味に彼女を見た。

「……三月四日なんですけど、私の田舎はその頃って雪が深くてまだまだ冬なんですよ。だから春が来るのが待ち遠しいんです。で、私が生まれたのは春が来たのと同じぐらい待ち遠しくて嬉しいことだったからって……それで『美春』」

「ふうーん、いい話ねえ。ね、瀬尾くん」

「……そうだね」

「私もそういう物語性のある名前にしようかなあ。女の子だったら、

私、お花が好きだから花に因んだ名前とか。あ、美春ちゃんほどの花が好き？」

「……なんで私に訊くんだろうか。」

「……ひまわりです」

「ひまわり！ 美春ちゃんらしいなあ。何か、いつもお日様を向いてる感じが。ね、そう思わない、瀬尾くん」

「……そうだね」

みどりさんがさっきからやけに係長に振っていることが私を困惑させている。きっと彼と私を仲直りさせたいと考えているのだろう。が、ここではお互い「大人の対応」をしているだけなのだ。彼も困って「そうだね」としか言えないではないか。彼にとってもありがた迷惑でしかないのに、天然も度を過ぎると凶器になるぞ。

このままでは凶器一直線な天然妻を何とかしろと夫を見ると、今にも吹き出しそうな顔をしている。

「何が可笑しいんですか、課長？」

「いや……『情報というのは活用して初めて意味がある』と言ったのはどこの誰だったかなと思ってさ」

「それ、何か笑える話なんですか？」

ついにこらえ切れなくなった課長がぶははは、と笑い始めた。つられてみどりさんもお腹を抱えてケタケタ笑い出す。なんなの？ 隣を見ると係長は口を左手の甲で押さえて右側を向いている。少し顔が赤いようだがその表情は私には見えない。

きっと三人にしか分からない昔の話なのだろう。む。私だけ除外された気分だ。

その後、食事は進み話は盛り上がって、しかし私と係長は何度か目を合わせるも直接会話することなく時間は過ぎていった。

隣同士にいながらとてつもなく遠い二人の距離は縮まることこそ

なかったが、間にびっしりと生えていた茨が刈り払われたような、でこぼこだった道が平らになったような、そんな錯覚を覚えたことを私は驚きと共に受け止めた。

そしてそれは、同じテーブルに集う人々を自然と仲良くさせてしまふ、鍋の不思議な力のせいかもしれないなかった。

お茶を淹れるわね、と言ってみどりさんが立ち上がる。

「私やりましょうか」

「いいのいいの、ちょっと動きたいし」

重たそうなお腹を抱えてキッチンに向かうみどりさんをなにげなく目で追っていると、微かにバチツという音が耳に届いた。瞬時に動きの止まった彼女の足元がみるみるうちに濡れてゆく。

まるで時が止まったかのように、この場にある全てのものが静止した。

第二十四話 鍋と一緒に（後書き）

やっぱり鍋はいいですね……今の季節には逆行してますが。

さて、瀬尾くんが情報を活用できるのは一体いつになるのでしょうか。

第二十五話 和解

「みどりさんっ」

驚きの色に染まる空気の中で、一番最初に動いたのは私だった。

「あ……え、嘘、これ……破水？　なんで？　まだ三週間も」

軽くパニックになっている彼女のもとへ駆け寄り、優しく声をかける。

「もうすぐ赤ちゃんに会えますね、みどりさん」

「え、あ……もうすぐ……」

みどりさんは言葉を反芻^{はんすう}すると瞬きを繰り返した。

「楽しそうな声が聞こえてきて、赤ちゃんも待ち切れなくなったんですよ、きつと」

「生まれるんだ……今から」

「服、濡れちゃいましたね。着替えましょうね？　——課長、何ボ

ケツと突っ立ってんですか、着替えとタオル！」

夫の方には厳しく声を飛ばす。とりあえずやることができた課長は、脱兎の如く駆け出してすぐに戻ってきた。

もう一人、呆然としたままでいる人物に向かって私は声をかける。

「係長は外に出てください。妊婦の着替えを見る趣味がないのなら」

「あっえっ」

「ぶぷっ」

慌ててリビングから出て行く係長の姿に、みどりさんが吹き出した。うろたえる完璧瀬尾くんは彼女にとってツボらしい。すでに落ち着いた様子を見て私も安心した。

課長に着替えを手伝わせ、私は掃除道具の場所を訊いて濡れた床を拭いた。みどりさんはしきりに恐縮したが、困った時はお互い様です、と返した。

みどりさんは着替えが終わると羊水がこれ以上漏れ出るのを防ぐ

ために横になり、課長がリビングの外で待っていた係長の中に呼び入れる。こちらも少しは落ち着いたようだ。

「貴文さん、病院に電話して。破水したから今から行くって」

「するけど、でも大丈夫なのか。破水しちまって、その、子供は」しどろもどろの課長なんてらしくないなあ。ここは少しからかってやろ。

「血の膜被ったまんま頭がニューっと出てきたら怖いですよねえ。そんで課長の方に顔向けて目をパチっと開けたら『ハロー、パパ』なんて言っちゃったりして」

「うっ」

エグい想像をしてしまったのだろう。男性二人が口を押さえて青い顔をしている。

「やめろ、ポチ。さっき食ったもん吐く」

「吐くなんてもったいないことしないでくださいっ」

みどりさんはゲラゲラ笑っているので、男性限定で急所を突いたようだ。

病院に連絡をとると、すでに入院準備のできていたバッグを手にもって、課長が訊いた。

「お前らはどうする？」

これはもう考えていたので即答する。

「私はここを片付けてから、病院に伺います」

「でも、美春ちゃん」

みどりさんがまたもや恐縮するのでスパッと言い返した。

「困った時はお互い様ってさっき言いましたよね？」

彼女には一刻も早く病院へ行ってもらいたいのだ。無駄な論争をしている場合ではない。

しかしそこに口を挟んだ人がいた。

「僕も手伝う」

ギョツとして声の持ち主を見た。冗談じゃない。係長とこの家に

二人きりになんてなりたくないぞ。

「いえ、一人で大丈夫ですから」

きっぱりと断ったが彼は聞き入れようとしなかった。

「二人でやれば早く終わるよ」

「正論だな。じゃあ、二人に任せるから」

課長が勝手に話をまとめて移動を始めたので、私の反論は口の中に消えた。

そして心の水面には波が立ち始めて、再び風が戻ってくるかどうか心もなかった。

初冬の風が吹き抜ける中、車に乗り込む二人を見送る。私でさえ新しい命の誕生にワクワクしているのだから、親となる二人の思いは如何ばかりか、と胸中を察した。

みどりさんは陣痛がまだ本格化していないからか、表情には余裕がある。病院に着いてからが大変そうだ。

一方、課長はやはり相当緊張しているようだ。係長と私がビールにほとんど手を付けなかったので、ホスト役である彼がアルコールを率先して摂取するわけにもいかず素面ではあるものの、運転大丈夫かと心配になってくる。

「美春ちゃん、ありがとう」

「みどりさん、頑張ってくださいね」

「悪いな、ポチ」

「大丈夫です、課長が生まれ変わった後も恩に着せますから。それより事故起こさないでくださいよ」

「もし事故起こしたら去勢しましょうか」

にこっと微笑んで怖いことを言うみどりさんに、全員が引きつり笑いを返した。やはり母は強い。

車が走り去るのを見送ると、くしゃみが出た。さすがにコートな

しでは寒かった。

「……入ろうか」

係長と二人つきりになる気まずさに考えが及んで、いつそのことこのまま逃げ出したい衝動に駆られた。

しかし片付けを始めてしまえば多少は気が楽になる。皿やコップをキッチンに運び、残り物はラップに包んだり、タッパーに入れる。その間なるべく彼が視界に入らないように頭や視線を動かした。

「鍋は少し残ってるけど、どうしたらいいかな」

「小鍋に移し変えておけば、課長が今夜食べるんじゃないですか」

「えっ、今夜も鍋？」

「御飯を入れればおじやになりますよ」

普通に会話しているようだが、実際は作業をしながらなので目を合わせていない。このまま何とか乗り切りたいと切実に願った。

私は洗い物を始め、係長は布巾を手を持ち隣に立った。意識すまいとは思っても緊張して、体ばかりか心まで硬くなってしまふ。

「君があんまり落ち着いているんでびっくりした。僕なんかオロオロするばかりだったのに」

「他人ごとだからです」

素っ気ない言い方に彼が怯んだのを見て、さすがに気がとがめた。

「……高校生の時に近所でベイビーラッシュがあったんです。里帰り出産も含めて六人。先に破水した人もいたし、自宅で産んだ人もいました。私、手伝いに行つてずっと妊婦さんの手を握っていたんです。いきむ時に掴まる物が何もなく、すごい力で手を握られて……骨が折れるかと思いました」

「それはすごい体験だね」

「もしWEBデザイナーになっていなかったら助産婦さんになっていたと思います」

「……君がWEBデザイナーで良かった」

「……」

どう返答して良いか分からず、押し黙った。もうこれ以上会話をするのが怖い。早く終わらせて病院へ向かおう。それともこのまま帰ってしまおうか。

頭の中でぐるぐると考えを巡らせていると、係長が皿を拭く手を止めて言った。

「越智さん、少し話を聞いてくれないかな」

心臓がビクンと飛び跳ね、心が右往左往する。

「君に謝りたい」

「係長、手が止まっています」

話を聞きたくないという意思表示はしかし無視された。

「謝れば僕の気が済むからって言われても仕方ないと思う。でも謝らないと先に進めないんだ」

彼も緊張しているのか、耳に届く声はいつもより硬質だった。私は早く会話を打ち切りたくて、早口で謝罪を拒絶した。

「もういいです。あの人たちに言われたことなんか屁とも思っていないし、あんなことで私は傷ついたりしません」

「僕が謝りたいのは、あの夜のことだよ」

スポンジを握った私の手も止まる。うつむいたまま動けなかった。

あの夜彼が私に投げつけた言葉、追い詰めて言わせた言葉、彼の歪んだ顔、全てが思い起こされた。

でも自分でも意外なことに、それらはまるで映画でも見ているみたいに作りごとのように思えた。彼が信じてくれなかったことも、ひどい言葉で傷つけられたことも、ずっと昔の思い出みたいに胸の中で風化していた。

彼がしたことを私はとくに許していたのだと思う。どんなに無視されても諦めずに何度も電話をかけてきた彼を、謝罪の言葉など聞かずとも許していた。

それを受け入れようとしなかったのは、私のわがままだ。自分が惨めな思いをしたくなかったばかりに、可哀相と思われたくないプライドにかけて、彼の謝罪したいという気持ちさえ否定して、拒絶した。あまつさえ彼を傷つけた。

謝罪される資格なんて私にはない。

「本当にもういいんです。もうあの時のことは……」

その先をどう続けるべきなのか迷った。忘れたというのも、何とも思っていないというのも、正しくないような気がした。あの夜見た、感情を剥き出しにした彼の姿はこの先もきつと忘れられないと思う。

これまで抱いていた印象を全て覆した、彼が築き上げてきたイメージを粉々に打ち砕いてしまった、負の塊のようだったあの姿もまた、彼という人間の一部分だ。むしろ忘れてはいけないのではないかとさえ思うのだ。

言葉に詰まったことをどう受け取ったのか、彼は苦渋に満ちた声を上げた。

「本当にひどいことをしたと思ってる」

「係長、私――」

最後まで言わずに彼は懺悔を始め、私はそれを受け入れまいとした。

「課長とのことを疑った」

「それはお互い様です」

「君を信じようとしなかった」

「それは仕方のないことです」

「君を傷つけた」

「傷ついていません」

「君を泣かせた」

な――――！

「泣いてなんかいませんよ！ 私、泣かなかったですよ！」

絶対に涙は見せていない。それで謝罪されるなど、とんでもない。何がなんでも否定したくて、顔を上げ彼を正面から見た。

「あの場ではね。でも君のことだから、家に帰ってから一人で泣いたんだろ？ ベッドの中とか、風呂の中とかで」

み、見破られている……どうして？

私の動揺を見て確信を得たのか、彼の目に力がこもった。そして中心に細い鋼の糸が一本ピンと張られたような強さを持つ声に、哀切と悔悟の情を滲ませて彼は言った。

「君はきつと一人で、声を押し殺して泣いたんだろうって思った。あの場で、僕の目の前で泣くよりもずっと辛いことを君にさせてしまったと思った。だからどうしても、どうしても謝りたかったんだ」それがずっと電話をかけ続けた理由だというのか。

啞然としていると、彼は目元を緩ませ少し声を和らげた。

「やっそこっちを見てくれたね」

ハッとして慌ててシンクに向きを変えた。視界に入ったスポンジや泡のついた皿に、焦点がぼやけたまま意味もなく視線を固定させる。

いろんな感情が交錯して胸の中で諍いを起こしていた。その中で最も新しく、強く、恐れを伴う感情に私は突き動かされた。

——彼に私の気持ちを知ってほしい。

ずっと抱えていた思いをぶつけようと決心し、それでもやはり怖くてうつむいたまま私は口を開いた。

「係長が、私のことを可哀相と思ってるから、目を合わせたくなくなっただんです」

「可哀相？」

「両親のいない可哀相な子だって、憐れみのこもった目で見るから。そんな子には優しくしてあげなきゃいけないって思ってるから」

「それは違う」

間髪を容れずに、彼は打ち消した。

「君を可哀相だなんて思ったことは一度もない。憐れむなんて冗談じゃない。『優しくしてあげる』？ そんな偉そうなことを言う奴がいたら、君より先に僕の方から反論する。『越智美春にはそんなものがない』って」

ほとばしる思いを懸命に抑えるかのような激しさと深みが拮抗するその声が、私の心を震わせた。

そして今度はゆっくりと、だが一語一語に力のこもった言葉が音になって伝わる。

「君は、ちつとも可哀相なんかじゃない」

ちつとも可哀相なんかじゃない――

その時初めて知った。本当はずっと誰かにそう言ってもらいたかったのだということ。自分でそう思っているだけでは足りなくて、誰かの強い言葉が、私を認めてくれる言葉がずっと欲しかったのだと。

フーッと大きく息を一つ吐き、意を決して顔を上げ、彼を見た。彼の目を。

そこには私がずっと恐れていた憐れみなどはなく、ただ意志の強さが現れていた。

「ごめんね、越智さん。本当にごめん」

謝罪の言葉を口にする、彼は私に頭を下げた。目の前の光景が信じられずに息を飲み込む。

五歳も年下の部下に向かって頭を下げる彼。肩書きや年齢など気にも留めず、ただ真摯な謝罪の気持ちをぶつけてくる彼を見て、私はもう充分だと思った。

「お願いです。顔を上げてください」

再び元の高さに戻った瞳はまだ不安に揺れていたので、かけるべき言葉を探したが、結局見つからなかった。

だから代わりに笑った。すると彼が全身で安堵するのが分かった。そして、彼もまた頬を緩ませた。

あの夜からひと月ぶりに見る笑顔——私がずっと見たかった笑顔だった。

第二十五話 和解（後書き）

ようやくここまで来ました。

次回は舞台を病院に移して話が続きます。

工藤夫妻に生まれるのは男の子でしょうか、女の子でしょうか？

第二十六話 位置について

病院に着くと、額に汗を浮かべ苦悶するみどりさんが、ストレッチャーに乗せられて分娩室に向かうところだった。

「え？ もう？」

犬並みに早いんじゃないか？

「着いた時にはもう子宮口が四センチ開いてたんだよ」

工藤課長は痛みに耐える妻の腰をさすりながら呆れて言った。

「笑いすぎて腹が張ってるのにも気づかなかったって、どういう天然だ」

陣痛の波の間で一息ついた彼女が「だあってえ」と不満げに言うも、またもや波が襲ってきて「いたーいっ」と叫ぶ。

「頑張れ、金子ちゃん」

瀬尾係長の励ましに彼女は口を一文字に引き結んでうんうんとうなずき、二人は分娩室の扉の向こうに消えた。

ここまで来たら赤ちゃんが生まれるまで待とうということで見解が一致したので、私は兄に電話をかけにいき、その後は家族用の待合室に向かった。

みどりさん以外には分娩前後の妊婦さんはいないようで、廊下にも待合室にも家族らしい姿は見当たらず、病棟を行き来するのは病院関係者ばかりだ。時折遠くから新生児が泣く声が聞こえるだけで、待合室は静寂に包まれていた。

自販機で缶の紅茶を買いソファに並んで腰を掛ける。今から私は気の進まない宿題を片付けなければならない。

体を半分係長の方に向け、おずおずと口を開いた。

「係長。私も謝っていいですか？ その……ひどいことを言いました」

彼はじつと窺うようにこちらを見た。

「あのへび云々てヤツ？」

「はい……」

「確かにあれは少し……かなり効いたかもな」

罪悪感と自己嫌悪で胸が痛い。人を傷つけるのは簡単だが自分にも跳ね返ってくる。私は自身の言葉により痛みを受けているのだ。いっそ最低の人間になってしまえと思ってみても、なりきることはできやしない。これも自業自得だ。

「その……係長はきつと謝ればそれで終わりかもしれないけど、私はこれからずっと可哀相だっと思って思われるのかって、そういう目で見られないのなら嫌われた方がマシだっと思ったんです。あの、本当にすみませんでした」

言い終わると同時に頭を下げた。数秒後にそろそろ顔を上げると彼は缶を弄びながら何やら考えているようだったが、やがて思い切ったように顔をこちらに向けた。私は何を言われても受け入れようと背筋を伸ばす。

「君は激しい人だな」

「はい」

「負けず嫌いだし」

「はい」

「それに頑固だ」

「はい」

「プライドも高い」

「はい」

「口は悪いし」

「……はい」

「自分や仲間が攻撃されれば倍にして返す」

「……」

「常に白か黒かで、曖昧を許さない」

「……」

「それから」

「あのー」

際限なく続くかと思われ、つい言葉を遮ってしまった。

「どこまで欠点をあげつらうのでしょうか？」

実は根に持つタイプか？　ヘビというのは言い得て妙だったかも。

係長は片頬を上げてニヤリと笑うと、意味ありげな視線を送ってきた。

「褒めてるんだけど」

「はあ？」

「君の長所だろ？」

違うだろ。絶対嫌味で言ってるな。

「……じゃあ次のボーナスの査定に加えてください」

むくれて言ったら、彼はククツと笑った。しかしすぐに笑いを収めると穏やかな表情に戻り、つぶやきを口から漏らす。

「『嫌われた方がマシ』……か」

さっき私が口にした台詞だ。

彼は力をたたえた目で真っ直ぐこちらを見ると、この先二度と忘れることのできないであろう言葉を静かに紡ぎ出した。

「君を嫌いになんかならない。君が何をしても。何があっても。嫌いにはなれないよ、絶対に」

彼の目の奥に見つけた確信に満ちた光が、これまでのいざこざも、行き違った思いも、全て消し去ってくれる気がした。

もういいんだ。私は安心していいんだ。この人は私という人間を欠点も含めて認めてくれて、信頼してくれて、心を開いてくれる。

口先だけで誤魔化さず、嘘はつかずに、私に相對してくれる。

私は安心して彼を信じていいのだと、その時悟った。

互いにマイナスの部分を知り、許し合って認め合ったら、これから向かう先はプラス方向だと自然に思えた。

絶対に嫌いにはならない——それがどんなに力強い意味を持っているか、彼は分かっているのかな。私にとってそれは、最後まで味方であるということだから。

わだかまりがなくなつて、心が暖かくなって、目が合えば笑つて——私たちはこれから、きっと新しい関係を築いていけるだろう。というより、スタート地点に戻つたのかな。

そう、きっと私たちは今、スタートラインに立つたところだ。新しくスタートをやり直すために。

「お父さんはどうして亡くなつたの? ——差し支えなければ話してくれないかな」

その声音には気負いもてらいも感じられなかったから、私もごくごく自然に語り始めた。

父の仕事。事故が起こつた経緯。私や家族の悲しみ。母と共に過ごした時間。母の発病。そして死。

考えてみたら不思議な光景だった。新しい命が生まれようとするその傍らで、私たちは死について語り合っていたのだから。

「強いご両親だったんだね」

「強い?」

「毎日毎日、ただひたすら同じ仕事を繰り返すというのは、強い意志を持ってなくちゃできないよ」

私が子供の頃からずっと誇りにしてきた両親の姿を、彼ならではの表現で褒めてくれたことが嬉しかった。

「ありがとうございます」

「君が強いのも道理だな」

さっき欠点を並べられたばかりなので、初めてお褒めの言葉をもらったような気になり、心が弾んだ。

「私って強いですか？」

「強いじゃないか、ケンカに」

……そういう意味かよ。

「瀬尾、ポチ」

私たちを呼ぶ声が聞こえて立ち上がった。興奮を押し隠そうとして失敗している課長が待合室の入り口に立っていた。

「生まれた。……女の子だ」

もたらされた吉報に体が熱を帯びる。

「おめでとうございます」

「おめでとうございます」

「ありがとう」

「みどりさんは？」

「大丈夫。母子ともに健康」

それだけでもう後は言葉が続かなくなる。何も言わなくても、彼がたった今手に入れたものがすでにどれほど大きな存在となっているかが、痛いほどに伝わってきた。

小さなベッドが並ぶ新生児室をガラス越しに三人で覗き込む。私たちによく見えるように、この世界に到着したばかりのお姫さまが一番近いベッドに連れてこられた。

「可愛ーい」

「うん」

「小さーい」

「うん」

「可愛ーい」

「うん」

「小さーい」

「他に言うことねーのか」

「みどりさんに似て可愛い」

「ポチ、悪意はないよな？」

父親になったばかりの課長は早くもだらしない顔で娘に視線を送っている。係長に目線でそのことを伝えたら、彼はすぐに理解して吹き出しそうになるのをこらえた。それもすぐに課長の気づくところとなり、横目で軽く睨む。

「何だよ、瀬尾」

「工藤さん、明日その顔で出勤すると、みんなに弄られて大変なことになりますよ」

「どんな顔だ」

「若い女の子に溺れてるおじさんの顔」

うん、確かにこれ以上若い女の子はいないな、生後一日目なもの。からかわれた課長はしかめ面を作ると、意味ありげな視線を係長に寄越した。

「……お前もじきにそうなるんじゃないの」

「僕はまだおじさんじゃありませんよ」

何だ、この会話は。若い女の子って……ええっ!?

「係長、もうすぐ子供が生まれる予定でもあるんですか？ それともまさか女子高生と付き合ってるんですか!？」

これは大スクープか。情報料にしたらいくら取れるか——と胸算用を始めたところで係長が呆れた声を出した。

「なんでそうなるんだ」

「だって若い女の子って」

「若すぎるだろ!」

「違うんですか？　なんだ、口止め料としてケーキ奢ってもらおうと思ったのに」

「別に口止めなんかしなくても、ケーキぐらい奢ってあげるよ」

「本当ですか？　後からあの話はナシって言ったら、ストライキ起こしますよ?。」

「言わないって」

見返りを要求せずに奢ってくれるとは、腹黒なのがいいところあるなあ。しかも嬉しそうにしちゃって、人に奢るのが好きなのか？

太っ腹だな。そんなにいいお給料もらってるんだろうか。

「やっぱり溺れそうだな」
私たちのやり取りを黙って見ていた課長が小さくつぶやいた。

みどりさんは無事に出産を終えたが、出血の処置がもうしばらくかかりそうとのことで、直接祝いの言葉を述べるのは諦めるしかなかった。

「じゃあ、僕たちはそろそろ失礼しようか」

「はい」

「悪かったな、長時間つきあわせて。まあ、お前らにとっても悪いことばかりじゃなかったみたいだけど？」

和解したことを暗に指摘され、二人で顔を見合わせると自然に笑みがこぼれた。

外に出ると凍てつく空に光る星が私たちを迎えた。冬の星座の定番、オリオン座を見上げて、真っ白な息を吐く。

「お腹空いたなー」

「僕もだ。何が食べたい？」

「ラーメン」

「了解」

まるでずっと前から仲良しだったみたいに言葉のキャッチボールを交わして、私たちは車に乗り込んだ。

太っ腹な係長がラーメンを奢ってくれ、ケーキは時間的都合もあって後日必ず、と約束して帰宅の途に着く。最寄り駅まででいいと言う私の意見を押しわけ、係長は自宅まで送ってくれた。

「また電話してもいいかな。……もう無視しないよね？」

別れ際に言われて、ひどく恐縮する。

「すっ、すみません。もうしません」

彼は笑って許してくれたが、胸にチクチクと突き刺す痛みを感じた。

さすがにあれだけ無視されたら、ヘコむよな、普通。でもそれだけ強い謝罪の意志を持って毎日電話をかけてきたのだ。私に頭を下げることも厭わないほどの強い意志で。

心の中で何かが生まれたような気がした。

上司としての信頼、尊敬。瀬尾達也という人間に対する興味。

スタート地点に戻った私たちがこれから進んでゆく道に思いを馳せた。きっと期待を裏切らない楽しいものになるだろう。

「送ってくれてありがとうございました。おやすみなさい」

「おやすみ。また明日」

寒いからいいと言っても、わざわざ車外に出て見送ってくれた係長の姿が、閉まる扉が狭めてゆく外の景色と共に消えた。

最後まで絶やさなかった笑顔も一緒に。

部屋に着くと早速彼からメールが届いた。

《今日君と僕を呼んでくれたこと、課長にお礼しようと思うんだけど、昼飯奢るんでいいかな？ それともワインか何かがいいと思う？》

ちよっと考えてから返事を打つ。

《『父親の心得』についての本》

すぐさま返信が来た。

《君には敵わない。了解》

長かった一日が終わろうとしていた。でもこれはゴールじゃない。明日新しいスタートを切るために――今。

位置について。

第二十六話 位置について（後書き）

これで第一章大いなるカン違い編（とはどこにも銘打っておりませんが）完結です。ここまで読んでくださった皆さま、本当にどうもありがとうございました。

二十六話もかけてようやくスタートラインに立った二人。いよいよ恋愛モードに突入でしょうか……？

第二章（とはどこにも記載されませんが）はカン違い小技繰り出し編となる予定です。美春のカン違いはまだまだ続く！

第二十七話 新しい関係（前書き）

お待たせしました。第2章スタートです。

第二十七話 新しい関係

一日中人けのなかった部屋はそれでも寒い十二月の夜、更に冷え冷えとした空気を伴って私を迎えた。すぐに風呂を沸かしにいく。こんな日は冷えた体をゆっくり温めたい。今日の入浴剤は何にしよう。炭酸風呂がいいかなあ。

師走に入って会社全体が忙しく残業があることも珍しくない。今日は日中かなりの作業をこなしたつもりだったが、それでも一時間の残業は免れなかった。

忙しいのは兄も同じで連日帰宅が遅く、今月家で食事をしたのは数えるほどだ。せめて週末ぐらいはちゃんと料理したものを食べさせないとなあ。

リビングに行き暖房をつけたちようどそのとき、携帯が鳴った。ある人の顔がすぐに浮かんで、発信者の表示も見ずに通話ボタンを押す。

「はい」

へもしもし、瀬尾だけど、今大丈夫？
やっぱり。自然に笑みがこぼれた。

みどりさんが出産し私たちが和解したあの日、また電話してもいかと尋ねた係長はその言葉どおり、電話やメールを寄越すようになった。しかも頻繁に。

某社に提出したデザイン良かったとか、今日鼻声みたいだったけど風邪引いてないかとか、特になんてことはないが私を思いやつてくれる内容が多い。

PR事業部の片岡さんが言っていた、後輩や部下に対しても配慮を怠らないというのはこういうさりげない気配りを指しているんだろう。加えて私に対してはあの時のことを未だに悪かったと思って

いるらしく、余計に気を遣っているように見える。

「今日のカンファランス、どうでしたか？」

お疲れ様ですと挨拶を返したあとに問いかけた。午後に行われたWEBメディア向けのカンファランスのために、係長を筆頭に数名の社員が出払って直帰となっていた。

「質疑応答がすごく盛り上がってね、予定時間をだいぶオーバーしたよ。PR事業部のときに世話になった記者に向こうで会って、軽く飲んで帰ってきた。君のほうは？」

電話の向こうから聞こえてくる声は明るくて楽しげだ。今日の仕事の手応えのあるものだったんだろうな。

「T社案件、向こうの要望と仲々噛み合わなくて、山本さんにアドバイスしてもらいました。結局残業になっちゃったんですけど、上りが山本さんと一緒になって、ふたりで御飯食べて帰ってきました」

山本さんは私と同じく中途入社の人で、WEBデザイナーだが、グラフィックデザイナーから転身した人で、その色彩感覚たるや私など足許にも及ばない。だからデザインに煮詰まると時折彼に助言を求めている。

ただし彼がパソコンの技術面に弱いことは確かなので、私も補助に回ることもあってギブアンドテイクの関係と言ってもいいだろう。三十歳という年齢相応の落ち着きを見せるかと思うとデザインについて熱く語る面白い人だ。あれでエロでなければ言うことないんだが……

「山本さん？　大丈夫だったの？」

係長の不安げな声が受話器から漏れた。大丈夫？　……ああ、そうか。

「私の財布の心配だったら無用ですよお、奢ってもらいましたから。へへへ。いい人ですよー、山本さん。エロいのが玉に瑕ですけど」

「……………」

「でね、お好み焼き食べたんですけど、すりおろした山芋が多めに入っててもう、トロットロに柔らかいんですよ」

「……………」

「マヨネーズが自家製でこれまた美味しくてえ、大ぶりに削った鰹節をふわっと載せたときに踊る様子がまた食欲をそそるんですよ。……係長、話聞いてます？」

臨場感溢れる話にお好み焼きの映像が頭にチラついているのだろうか？　きっとその知り合いの記者とはあまり美味しい物を食べてこなかったに違いない。

「……君こそ人の話をちゃんと聞いているのか？」

さっき聞いた明るい声は別人だったんじゃないかと思われるほどの低くて暗い声がした。

「まさか飲んでないよな？」

「ビールを少々……」

雲行きが怪しくなってきたぞ。

「飲んだのか！？　君が酔っ払うとどうなるか、ビデオを見せたのはつい一週間前だぞ！」

まずい、忘れてた。というより、箱に仕舞って鍵を掛けて忘却という名の海中に沈めておいた。

「これだから直帰なんてするもんじゃないんだ、全く」

苛立ち紛れの声が耳に響く。私はまた失敗したことを悟った。

忘年会の日は杏子さんの家に泊まるという条件の下、各方面から飲酒の許可が出た。

そもそもあれっきとした成人女性がなんで酒を飲むのに許可がいるのか納得しかねるのだが、兄はもとより杏子さんや藤田さん、係長までもが当初一様に反対したところを見ると、こと飲酒に関して私はとことん信用がないらしい。

一度醜態を見せると信用回復に時間がかかるのは世の常だが、酒

の席で周りが飲んでいるにもかかわらずお預けを食らうなどもつての外だ。しかも年に一度の忘年会だ。年忘れだ。今年起きた様々を忘れてパーッと騒ぐのに酒は不可欠だ。

そう主張して杏子さん宅に泊まるのと引き換えに各人の首を縦に振らせたのだった。

忘年会当日は出張のため迎えにくることを断念していた兄は、しかしそれだけでは足りないと思ったのか、更に合コンでメルアド交換した私の先輩社員たちに一斉メールを送ってよこした。

《年に一度の忘年会、妹も日頃の憂さを晴らしたいでしょうが、ハメを外し過ぎないように、注意していただけると大変助かります》

憧れの弁護士王子様にこんなふうに頼まれたら、嫌とは言えないお姉サマ方である。かくして私は一次会二次会と最初から最後まで彼女らに囲まれて好きなだけ酒を飲み、カラオケではZARDを熱唱した。

ここ数週間の係長との冷え切った関係がもたらしていた緊張感から解放されたのだ。多少酔っぱらいはしたが実に久しぶりの良い酒だった。

が、衝撃は週明けの月曜日にやってきた。冷ややかな目で係長が携帯を差し出し、とある映像を私に見せたのだ。再生されたビデオには小林さんの首に腕を巻きつけてハグをする私の姿が映っていた。

『小林さん、しゅきでしゅー。ほっぺにチューしていいー?』

『やめろー、ポチー』

呂律が回らないながらもしっかりと聞こえるその声は間違いなく私のもの。周りが大爆笑する中、一人赤面した私は係長だけでなく同僚みんなを逆恨みした。

何だってこんな恥ずかしいビデオを撮るんだよっつ!

即刻削除を要求した私に係長はこともなげに言った。

「これはね、君を弄ってるんじゃないくて教育的指導だよ。『酒は飲んでも飲まれるな』の良い見本、いや悪い見本か」

嘘だ。これはあのときの仕返しに決まっている。根に持つタイプだからな。

私は数日前に見た彼の表情を思い出した。

係長と私との関係が修復されたことを同僚たちは皆喜んだ。あれほど頑なに和解を拒絶していた私の突然の変心を彼らは訝しみ、理由をしきりと訊きたがった。彼らにも長いこと緊張状態を強いていたことだし、お詫びも兼ねて冗談を提供することにした。

「だって係長ってば子供みたいに泣いて謝るんですもん。あんなに泣かれたら私だって鬼じゃありませんからね、『もう怒ってないから泣かないのよ』って頭を撫でてあげたんですよ。そしたら『ホントだね？　ホントに怒ってないね？』ってひっくひっくしながら言うもんだから、私もつい情にほだされて」

「——って言ってますけど、係長？」

ぎょっとして振り返ると私を見下ろす二つの目と視線がぶつかった。

「実に面白い冗談だな」

目はちつとも笑っていないのに片頬だけが動くのを見て、背筋を冷たいものが流れたのだった——

へ……そもそも君にとっていい人の基準って何だ。奢ってくれたらみんなそうなのか？　そうやって食べ物に釣られて男にホイホイついて行くから無防備だっていうんだ」

係長の永遠に続くかと思われる説教にウンザリした私は反論の一つもしてやらねばという気になった。

「男って言ったって山本さんですよ？　何かあるわけないじゃないですか。向こうはもう三十歳の大人なんだから、そもそも私みたいな子供眼中にありませんよ」

へそんなこと分からないだろ。それに僕の誘いは断るくせにどうし

て山本さんとは食事にいくんだ」

ひょっとして拗^すねているのだろうか。だとしたら理由をはっきり言うべきか。

「だって係長は特別だから」

「え？」

ちょうどそこに玄関のほうで兄の帰宅した気配がした。風呂が沸いた頃合いを見計らって帰ってきたか。やるな、兄。

「へそれ、どういう意味？」

「あ、すみません、もう切りますね。おやすみなさい」

かなり疲れた様子の兄はリビングに入ってくると、私が手に収めた携帯を見て尋ねた。

「電話してたのか。……男？」

「性別で言ったら男だな。でもそゆんでねえがら。先にお風呂入る？」

「うん、入りたいな。美春、お兄ちゃんの背中——」

「却下」

朝食用の米を研ぎながら係長の拗ねた口調を思い出してつい笑みがこぼれた。

係長ってば案外可愛いところがあるんだな。異動してきた頃に抱いていたイメージがどんどん崩れてきてるんだけど。

彼は電話やメールで気遣うだけでなく、時々食事にも誘ってくれる。私に詫びたいという気持ちがそうさせているのであろう。餌を与えれば喜ぶと思われるのが微妙なところではあるが、この時期はお互いに残業で時間が合うほうが珍しく、まだ一度も実現していない。

しかしそうでなくても断わるつもりでいる。何しろ彼は特別な人なのだから。問題は彼がそれをどうも自覚していないらしいことだ。そこに風呂を上がった兄から、入っていいぞ、と声がかかった。

「あー、気持ち良かった。なあ美春、お兄ちゃんがお前の背中——」

「却下！」

翌日もまた多くの業務にWEB事業部は追われた。明日が祝日であるためその分今日にシワ寄せが来るのは当然として、明後日のクリスマスイブには絶対に残業をしたくない心理がみんなのやる気を倍加させているような気がする。たとえ恋人がいなくても、予定などなくとも、クリスマスイブに残業って……嫌だ。

私はよし、と気合を入れて髪をバレッタで留め直し集中した。あんまり集中しすぎて空腹を感じたときにはすでに十二時半を過ぎていた。周りを見渡すと残っている同僚はもはや誰もいない。なんてこったい。

弁当を手に休憩室へ行くと、同じ弁当組の倉田さんと大森さんはすでに食べ終わったらしくお喋りに興じていた。

「あー、やっと来たか」

「声ぐらいかけてってくださいよ」

恨みがましく口に出すと、大森さんがカラカラと笑って言う。

「かけたよ、ちゃんと。でもあんた、完璧に『入って』たんだもん」
いったん気持ちが入ってしまうと集中しすぎて周りの音が聞こえなくなるのはいつものことだが、昼休憩の時間には適用外としたい。ふたりとおかず交換するのを楽しみにしていたのに。

飲み物を自販機で買って倉田さんの隣りに座ると、からかい混じりの声が飛んできた。

「ポチはクリスマス独りで何すんの？」

私が独りだという前提での質問に無然としたが、今更見栄を張ったところで仕方あるまい。

「予定なんか何もないですよ、どうせ」

「拗ねないのー」

「ハハハ」

気を取り直して弁当箱の蓋を開けた。今日のおかずは日曜日に作り置きしておいた筑前煮をメインに卵焼き、インゲンのベーコン巻き、ひじきとちりめんじゃこを添えてある。箸でレンコンをつまもうとしたそのとき、大森さんが声を上げた。

「あれっ、係長」

彼女の視線を追って後ろを振り向くと、瀬尾係長がコンビニ袋を持って入ってくる場所だった。

「一緒にいいかな？」

「どうぞ。珍しいですね、係長がお弁当なんて」

「遅くに出たらどこもいっぱいだね。待ってる時間がもったいなくて弁当にした」

係長は確か今朝からずっと会議だったっけ。

私の向かいに座ると、照焼きハンバーグ弁当のプラスチックの蓋を開ける。が、手をつけずに私の弁当をジッと見て片方の口角を上げた。嫌な予感がする。

「それ美味そうだな。僕のと交換しよう」

「はあ？」

こちらの了承も待たずに勝手に私の弁当を取り上げて食べ始めた。「返してくださいよ！ 私のお弁当はコンビニ弁当なんかとじゃ引き合いませんよっ」

「もう遅い」

左腕で弁当箱を隠してかつ食らっている。ムカー。これが上司のやることか？

倉田さんと大森さんは笑いながら、

「係長、すっかりWEBの空気に毒されてますねー」

「朱に交わってもはや赤黒くなってる」

ふたりとも、笑ってる場合じゃないでしょうが！ 私のお弁当っ！

休憩時間が終わった先輩ふたりが引き上げていった。やがて弁当箱を空にした係長は「ごちそうさま、美味しかったよ」とご満悦の様子だ。私はブスツとしたまま照焼きハンバーグ弁当を全て平らげ「どうもお粗末さまでした、ふん!」と嫌味ったらしく言っていた。

毒されるとか赤黒いとか、そういうところばかりWEBの色に染まらなくていいのに。

ブツブツ心の中で文句を言っていたせいか、係長が微笑みながら「弁当のお礼に」と言った内容をちゃんと聞いていなかった。

「……今何て言いました?」

「クリスマス、一緒に食事に行こう」

目尻を下げて甘い言葉を吐き出す彼に、私は不可解な目を向けた。そんなに手作り弁当がツボにハマったのだろうか。彼を狙う女性たちにこの情報売ってやろうか。

「何が食べたい? イタリアンでもフレンチでも君の好きな物にしよう。クリスマスにこだわらないんなら和食でも中華でもいいよ。そうだ、きちんとした服装しておいで。たまにはそんなのもいいだろう?」

「ちょ、ちょ、ちょっと待ってください」

「クリスマスディナー計画」を次々と一人で決定していく勢いの係長にやっと待ったをかけた。

「係長、あのときのことならもういいんですよ? 私本当に気にしてませんから」

「え? 何ソレ?」

反応が鈍い。この人、無自覚なのか? 「詫びとして私に食事を奢れ」という脳内指令が意識の表層下にまで行き届いていると見える。

「だーかーらー、未だに私に悪いと思ってるでしょ? それで食事に誘ってくれるんなら、そんな気を遣わなくていいって言ってるん

です」

「そんなんじゃないよ」

こういう否定の仕方はたいがい肯定だと相場が決まっている。「それに私WEBで一番年下だから面倒見てやらなきゃって思ってるでしょ？ でもいくら部下や後輩思いだからって、クリスマスディナーはやり過ぎですよ。もし誰かに見られたらどう言い訳するんですか？」

「……誰にも言い訳しないでいいんじゃないかな」

やはり自覚がないのだ、この人は。困ったもんだな。

そこで私は彼の周りを取り巻く状況について分析してみせた。

あれから瀬尾ファンたちがランチのお誘いにWEB事業部に来ることはピタリと止んだが、それは私に対する気まずさからであることは推測できる。

仕事帰りはもちろんのこと、昼にも誘えず所属フロアも違うとなれば、彼女らと係長との接触時間などほとんどないと言ってもいい。総務や経理とのやり取りは基本的に社内メールで行うから、就業中に遭遇する可能性も低い。

そんな状況でまたもやこの私が彼と噂になろうものなら、彼女らの不満は爆発し何がしかの騒ぎになるかもしれない。

私は別にシメられようが吊るし上げられようが痛くも痒くもないが、係長にとってはダメージとなることは避けられない。若手ナンバーワンの出世頭で上司からの覚えもめでたい彼が、業務とは関係のないことで再び騒ぎになって、ライバルから足を引っ張られたり上層部から睨まれたりするかもしれないのだ。

彼女らが起こした行動は勇み足で係長のあずかり知らぬことだったとはいえ、二度も続けばさすがにそうも言っていられなくなる。

そういう彼の立場をファンならば理解すべきだが、一方で熱く思うあまりに馬鹿な行動を起こすのもまたファンというものだ。

だから誤解を生むような行為は私たちはすべきではない。

「係長のファンを無駄に刺激するなど言いたいんです、私は。もしまたあんな騒ぎが起きたらどうするんですか。係長の華麗なる経歴に傷がきますよ？」

これで少しは自分の立場を自覚したか？

しかし彼はポカンとしたまま反応が薄い。仕方ないな、もう。

「デート現場を撮られた芸能人だってファン心理を考慮して、ただの友人ですってコメント出すじゃないですか。ファンあつての職業ですからね、大切にしなければいけないんです。係長だって同じですよ。今はキャーキャー言ってるだけでも、ゆくゆくは係長を支えてくれるスタッフになるかもしれないんですから、蔑ろにしちゃいけないんですよ。はい、分かりましたか？」

ファンの取り扱いについてのレクチャー料が欲しいぐらいだ。まあ、ここまで噛み砕いて教えてやれば人気者の宿命ってもんを少しは理解してくれただろう。

彼は小さく息を吐くと、ゆるゆると口を開いた。

「……それが僕が特別だっている意味？」

「他に何があるって言うんですか。もう、本当に何も分かってないんだから、係長は」

やれやれ、エリートのかせに女の感情の機微にまでは頭が回らないと見える。完璧瀬尾くんの弱点か。

「……分かってないのはどっちだよ」

「はい？」

「いや……何でもない」

昼休みが時間切れとなった係長は休憩室を後にした。背中から哀愁を漂わせて。

私の弁当を食べて補充したエネルギーはどうしたのだ。

無然として、私はひとり休憩室に残った。

第二十七話 新しい関係（後書き）

相変わらずカン違いしまくっている美春、「特別」と言われて舞い上がった瀬尾係長、そして疲れてストレスが溜まると変態度の上がる兄と共に、第2章が始まりました。

笑える胸キュンラブストーリー（笑）を目指して作者は頑張るつもりです。最後までおつきあいいただければ嬉しいです。

第二十八話 素顔を見せて 1 (前書き)

また長くなりました。前半部です。

第二十八話 素顔を見せて 1

……目立つ。目立つよ、この人。

柔らかな照明がさほど広くない空間に暖かみのある光を照らす。ログハウス調に施された内装のあちらこちらの壁に美しい山の写真が飾られたカフェの一角。

香ばしい挽きたてのコーヒーの香りもいつもなら楽しめるのに、メニューに顔を半分隠して周りを窺う状況ではそれどころではない。私がこんなに困惑しているというのに、目の前に微笑みながら座る瀬尾係長は、周囲から――特に女性たちから――浴びる視線など全く構いなしだ。

兄と一緒にいれば見られるのには慣れているし、しよせん兄であるという事実が見られることには無頓着にさせるのだが、この人は兄ではない。当たり前前だけど。

係長と社外で会うのはこれで三度目、最初は個室レストラン、次は課長の自宅で、不特定多数の目を気にすることはなかった。

予想以上だ、この周囲の反応。格好良すぎるんだよ、係長は！ ケーキに釣られた私が浅はかには違いないが、休日でしかも近所であることでつい油断してしまった。

クリスマスも終わり、新年を数日後に控えた日曜日の午後。

世間は正月の準備一色に染まり、我が家でも簡素ではあるがお飾りやおせち料理を用意するため、買出しに来ていた。その間兄は部屋を掃除中。引っ越してまだ三か月と少し、大して汚れてないんだから文句を言わずにやれっての。

スーパールの入り口にて買い物かごに手を伸ばしたちょうどその時、携帯の着信音が鳴った。兄からの買い物物の指示だろうと予想し、発

信者を確かめずに電話に出る。

「あんちゃん、何？」

「へもしもし、瀬尾だけど。……あれ、今、外？」

係長？　どうやら人のざわめきや店内放送が筒抜けになっているようだ。

「近所のスーパ―です。どうしたんですか？」

「今、二子玉川に来てるんだけど、会えないかなと思って。お茶でもどう？　もちろんケーキ付き。奢るって約束、延ばし延ばしになつてただろ？」

時計を見ると二時半。早めの昼食だったのですでに小腹が空いていた。

「二つ食べてもいいですか？」

「好きなだけ食べなさい」

よっしゃっ。この三か月の間にチェックしておいた店を思い浮かべてにんまりする。

場所を打ち合わせ通話を切り、小走りで目的地へ向かった。

注文を終えてしまうとメニューを持って行かれ、途端に所在なくなる。そんな私を余裕の笑みで眺める係長が口を開いた。

「さっきから何キョロキョロしてるの？」

「あー……会社の人はいないだろうな、と思って」

私の返事に何度か大きく瞬きすると、プツと吹き出す。

「またそんなこと気にしてる」

そんなことって……いったい誰のために心を砕いてると思ってるのさっ！

「それにこんな所で会うわけないよ」

至って呑気な面持ちで偶然を過小評価する彼に、実例を挙げて忠告を与えることにした。

「思わぬ場所と思わぬ人に出会う確率って結構高いんですよ？　前

の会社にエッフェル塔で元カレに遭遇したって人がいたんですから」
「へえ。お互いに連れは別のパートナーで？」

「そうそう。素知らぬフリして通り過ぎようとしたら、相手の女性に写真撮ってくれて頼まれて」

「本当に？ で、どうしたの？」

「断るわけにもいかないじゃないですか。それでデジカメ構えて『はい、チーズ』……ってどうでもいいんですよ、その話は」

どうしてもっと自覚してくれないのか。一人涼しい顔しちゃって。

今日の係長は細身のグレーのVネックセーターにジーンズ、髪の毛は前に下ろしたラフな格好。課長宅で見た私服もそうだったが、何を着ても似合うんだな。さすがは王子様。

一方の私は前開きの黒のパーカーにジーンズ、どこから見ても普段着だ。

ケーキセットが二つ運ばれてきた。二つとも私が食べるつもりで選んだベークドチーズケーキと白イチゴのタルト。係長はコーヒード私はミルクティー。二つのケーキを前にして、周囲の視線への気後れも会社の人に遭遇する懸念も吹き飛んだ。

チーズケーキを口に頬張るとコクのあるほのかな甘味が口に広がる。

「美味しーい」

「それは良かった」

コーヒード一口すすった係長は、「君がいろいろと気にしてくるのは嬉しいんだけどね」と前置きすると少し真面目な顔になって話を続けた。

「心配するようなことは何も起きないよ。例の彼女たちは二度と君に手は出さないし、騒ぎも起こさない。WEBにも来ることもない。僕がちゃんと話はつけた」

そういえばあの騒動の後で川嶋常務に呼び出された時、そんなこ

とを耳にした覚えがある。

「あんな騒ぎを起こされて黙っていられるほど僕だってお人好しじゃない。僕は僕のやり方で始末をつけようと思った」

声は柔らかいが冷たさと鋭さを言葉の端々から漂わせている。不穏な影が胸をよぎり、恐る恐る訊いた。

「……何をしたんですか？」

係長は不敵に笑うと『瀬尾ファン始末記』を語り始めた。

女子化粧室での事件の翌日のこと。

九階の小会議室に私を吊るし上げた六人を呼び出した係長は、それぞれに椅子を勧めた。ただ淡々と書類に判を押す一連の作業のよう。

「弁解したいことがあるなら、一応聞いておくよ」

口調は穏やかながら内容は糾弾以外の何物でもない。一瞬怯んだ六人だったが、ボス格の女がおずおずと口を開いた。

「早とちりしてあんなことをしてしまったのは申し訳ないと思っています。でも瀬尾さん、最近WEBの人たちとばかりお昼に行ってるし、私たちだってずっと我慢してたんですよ」

他の女たちも次々と主張する。

「瀬尾さんが社内の子とデートするわけないんだから、あの子と二人でいたら何か理由があると思っちゃうじゃないですか。あの子社長のお気に入りだっていうし」

「だいたい向井はやり方が汚かったですよ。あんなの瀬尾さんだって可哀相」

「WEBのあの子だって今回は違っても、いつそういうことするか分かんないでしょう？ 一日中瀬尾さんと一緒にいるんだし、バカな夢見るぐらいならむしろ釘刺しといって良かったですよ、瀬尾さんのためにも」

口々に自己弁護する彼女らの言い分を一通り聞くと、係長は静かに言葉を吐き出した。

「言いたいことはそれで全部かな？　じゃあ僕の番だね。」

僕が社内の女の子とは付き合わないっていった誰が決めたんだ？　確かにこれまで社内恋愛をしたことはないが、僕の口からそんなことを言った覚えは一度もない。僕は付き合いたいと思った女性と付き合うよ。

……ああ、でもそんな期待した顔をするなよ。たとえ社内の女性が君たちだけになったとしても、そんな可能性は万に一つもないから。『バカな夢見るぐらいなら釘刺しといった方が良い』だろ？　僕もね、『やり方が汚い』女の子は嫌いなんだよ。例えば集団で一人をシメるとかね。

そうそう、今度のことは社長もすごく胸を痛めていてね。知つてのとおり彼が最も嫌うのは会社の不利益になることだ。あの騒ぎで社内の空気が浮き足立って、業務に支障が出たらどうするだろう。君たちと『WEBのあの子』、それから僕の三者を秤にかけて処分を下すかもしれないね。

僕はそれなりに会社に対して貢献をしている自負があるけど、君たちはどうなの？

え？　『WEBのあの子』？　彼女は社長のお気に入りだよ？

でも君らはそうじゃない。危険な火遊びをするんなら、自分に火の粉が降りかかってくるリスクも負うべきだよな？

火の後始末は自分たちでしろよ。何をすべきなのか、よく考えろ。考えても分からないような奴はこの会社にとって不利益でしかないからな」

係長が彼女たちに放ったあまりの毒舌に、ケーキを口に運ぶ手が止まったままだし呆然とする。そんな私を見て彼はニッコリ笑ったかと思うと、空いていたフォークを手に取り私の食べかけのチー

ズケーキからひとかけすくって口に入れた。

「ふーん、結構美味しいね。ケーキなんて普段食べないんだけど、これあんまり甘くないんだな」

「はい、甘さは控えめでレモンの香りが程良くて……じゃなくて係長、そんなことしたら駄目ですよ」

「一口ぐらいいいだろ」

ボケるなっ！

「ケーキじゃなくてっ！ 係長がそんなひどいこと言っただって広まって、嫌われたらどうするんですか。人気急落ですよ。せっかく後輩みんなから慕われてるのに」

イメージダウンだ。好感度も下がる。ファン離れが起きるぞ。

しかし彼は私の心配など無用とばかりに、決然と言い切った。

「全ての人間にいい顔なんてできない。僕のことを信頼してくれる奴はそれでもついてきてくれるさ。僕のイメージを勝手に作り上げて、思ってたのと違ったからって、それは僕の責任じゃない」

あの日私に謝罪した時と同じ、何があろうと揺らがないう強固で盤石な意志。彼の目にそれを認めてこれ以上の口出しは無益であると思われた。私が何をどう言ったところで覆ることなどないのだろう。とはいえ、女というものに対して注意を怠るべきでないことは、教えてあげないと。

「でも気をつけた方がいいですよ。女を敵に回すと怖いですから。もし係長のことを嫌いな人が部下になったらどうします？」

少々不安を煽りつつ発した質問に、彼は毅然として答えた。

「どうもしない。嫌われる上司はどこにだっているよ」

「お茶に雑巾絞って入れられても？」

さすがにこのベタな嫌がらせの方法には恐れを抱いたのか、少し眉根を寄せて考え込む素振りを見せる。

「……それは困るな。そんな部下がいたら、お茶汲みは禁止にしよう」

真面目な顔で軽口を叩く彼にプツと吹き出すと、彼も笑顔になった。

第二十八話 素顔を見せて 2

会社ではない場所なら、普段話せないようなことでも口が滑らかになるらしい。

係長と佐久間主任が初めて顔を合わせた時には互いに虫が好かないと思っていたこととか、PR事業部に異動して工藤課長の部下になった時にいきなり「俺より目立つな」と言われたとか、上司たちの昔のエピソードを彼は披露してくれた。

ぎゅっと固く結んでいた紐をすっかり解いてしまったような表情を見て、ふと思った。

今ならあのことも話してくれるかもしれない。

私は顔を少し係長に近づけると「訊きたいことがあるんですけど」と言って、ずっと胸にしまったままでいたある疑問をぶつけてみた。

「向井里佳子という元社員の結婚退職には、係長が絡んでいるんじゃないんですか」

彼は突然の質問に驚き、ついで困ったように笑った。それはつまり肯定か。

「参ったな……話すのは構わないんだけど」

困惑する理由が分からず首をかしげると、彼はおずおずと口を開いた。

「その話をしたらまた君に嫌われるんじゃないかと思って」

ついさっき「嫌われる上司はどこにでもいる」なんて迷いなく口にした自信は消え失せたかのように、不安を顔に浮かべてこちらを見る。

私はあの夜自分が口走った言葉を思い出した。

『人の気持ちを好きなように操ろうとする人には、私の気持ちなん

か分からない』

彼もまた私の言葉で傷ついたのだろうか。今更取り消すことはできないが安心させてやることはできるかもしれない。

「嫌いになったりしませんよ。係長と同じです。何があっても嫌いになりません」

彼を真っ直ぐ見つめはつきりと告げると、瞳が大きく動いた。

一度信頼すると決めた以上、どこまで行っても信頼する。それが私のやり方だから彼にも信じてほしい。

「一度約束したら必ず守ります。最後まで私は係長の味方ですから」
「越智さん……それって」

半信半疑といった眼差しを向ける彼を見て、もう一言付け加えることにした。

これなら納得してくれるだろう。だって私は。

「弁護士の妹ですからね」

彼が目の前でガクツと崩れた。何だどうした。しかしすぐに引きつった笑みと共に顔を上げて小さくつぶやく。

「……それは心強いな」

そうだろうそうだろう。さあさあ、私を信頼して全部話しなさい。心強い味方を手に入れた係長は、覚悟と諦めがないまぜになったような表情で口を開いた。

思ったとおり向井さんの結婚をお膳立てしたのは係長だった。

担当するクライアントに新入社員だと紹介した時から彼女に目をつけた男性がいて、飲みに誘うなどして協力したのだそうだ。自分の推理が正しかったことが証明され、溜飲が下がった。

係長の不倫疑惑において思い切りこきおろされた屈辱を忘れてはいなかったから、リベンジを果たしてやった気分だ。ウヒヒ。やるな、私。

「なんか随分嬉しそうだな」

不可解な目を向けられ慌てて顔に張り付いていたニマニマを消し去り、残っていたもう一つの疑問を口に出す。

「でも係長は向井さんの妊娠まで企んだんですか」

少々非難を込めた言い方だったせいかな、彼は慌てて否定した。

「まさか。そこまで鬼畜じゃないよ。結婚してくれさえすればよかったんだ。退職するかどうかは本人次第で」

「でもそれだけじゃ、職場の問題解決にはならないんじゃないですか」

「社長の興味は間違いなく失せただろうね」

「どうしてですか？ 結婚してようがいまいがお気に入りはお気に入りでしょ？」

まさか本当に息子の嫁候補だったなんていうんじゃないかな。

「他の男のものになった女をお気に入りそのままにしておくと思う？」

未婚女性の方がいいに決まってるじゃないか」

薄笑いを浮かべる係長を見て、そういうものなのだろうかと自問した。どうもすっきりしない。

「じゃあ向井さんの妊娠は本当に偶然だったんですか？」

「んー、偶然というか……相手の男性が意図的にやっちゃったというか……」

当時三十一歳で結婚願望の強かったその男性は、なかなか色よい返事をもらえないことに業を煮やし、酒に酔わせてお持ち帰りをしてしまったのだという。

一夜明けて呆然とする彼女を大人の余裕で優しく口説き、体の関係を持ったことで情がわいた彼女も彼を受け入れる。……彼が避妊をしなかったと知るのは妊娠が分かってからだだったが。

「それに係長はどう関わったんですか」

「その彼に頼み込まれて三人で飲む機会をセッティングしただけだ

よ」

「本当にそれだけ？」

「……彼女の飲むペースが速まるように多少協力したけど」

「それは充分鬼畜の手下ですよ！」

場所をわきまえ小声ではあったがとがめると、バツの悪そうな目でこちらを見た。

「やっぱり嫌いになった……？」

まるでお仕置きを言い渡される子供みtainな表情が可笑しい。私は笑いながら、

「なりませんよ。約束したでしょ？ でも次に策を練ることがあったら私も一枚噛ませてください。鬼畜じゃないやり方で協力しますから」

彼は少し目を見張ったが一瞬後には輝くような笑顔を見せた。周囲の視線が集まるのも目に入らないかのようにだった。

「頼りにしてるよ」

「年末年始は田舎に帰るの？ 伯母さんがいるんだったよね？」

思いついたように係長が尋ねた。

「いえ、こっちにいます。伯母さん家は従兄弟一家も帰省するし、手狭な家なので。係長は実家に帰るんですか？」

「いや、実家には帰らないよ。越智さん、こっちにいるんなら一月二日、課長の家に年始の挨拶に行かない？ 飲みにこいって誘われてるんだ」

課長の家……正月休みまで上司の顔を見るのか。微妙だな。一月二日は毎年箱根駅伝をテレビ観戦するんだが。

「上司の顔じゃなくて、真由ちゃんの顔を見に行くなって思えば？」
考えていたことを読まれて思わず両手で顔を挟むと、係長はニヤニヤしながら言った。

「越智さんって分かりやすい顔してるからね」

「失礼なっ」

工藤夫妻に生まれた赤ちゃんは真由と名付けられ、すくすくと育っている。

生まれた当初、職場では変わらずクールに振舞っていた課長だったが、家庭では娘にデレデレであることがみどりさんを通して杏子さんから暴露されて以来、子煩悩ぶりを隠そうともしなくなった。

三十三歳で二児の父である秦野主任と「ウチの子自慢合戦」を繰り広げ、携帯に保存してある画像を見せ合っては「お、その帽子可愛いな」だの「この哺乳瓶使いやすそうだな」だのとやっている。

WEB事業部の独身男性たちから『牙を抜かれたエロ狼』の称号を賜り、「オスとしてはもはやライバルではない」と佐久間主任から一刀両断されても気にならないようだ。人間、変われば変わるものだな。

そんな娘への溺愛ぶりを見て、からかってやるのもいいかもしれない。

一月二日ね。……一月二日？ あれ、その日って。

「金子ちゃんともあれ以来だろ？ 行こうよ」

熱心に誘う係長のニコニコと笑う顔を見て返事をした。

「分かりました。みどりさんと真由ちゃんに会いに行くんですよ？」

係長と別れ、私はスーパーに戻って買い物始めた。正月用の食品を物色しながら、先程見た様々な彼の表情を脳裏に再生する。

ファンの人たちに辛辣な言葉を吐いたかと思えば、再び私に嫌われることを心配して子供のような顔を見せる。どちらも彼の素顔の一つだ。そしてあの夜私を傷つけ感情をぶつけたのもまた、普段物腰の柔らかい彼とは落差が激しすぎたが、内面の一つなのだろう。

彼はあとどれほどの表情を隠し持っているのだろうか。王子様の仮面の下に。

それをもっと見たいと思う自分がいる。

ちよつとぐらい意地悪でもいい。拗ねてもいいし、愚痴を言ったり構わない。策を巡らしているならそれでもいい。彼と一緒に知恵を絞るのは楽しそうだ。

彼と約束したから。何があっても嫌いにならないと。最後まで味方だと。

そしてそれは彼も同じだ。私を絶対に嫌いにならないと言ってくれたから。

心の中に未来を予測する鮮やかな心象風景が広がる。

私たちが進んでいる方向には幾つかの道があって、更に枝分かれしてとんでもない場所に行ったり元の道に合流したりするとして、支点に着くたび彼と私はどの道を取るかで本音で意見を交わす。

選んだ道が遠回りだったり、高低差が激しかったりして互いに文句を言い合うかもしれないけど、道端に咲く可憐な花を見つけたり、変わった角度から見ると山のもともと違う美しさを発見したりして、この道も悪くはないねと失敗だったことを忘れてしまうだろう。

道の初めは何でもないふうを装って仮面をかぶっていても、疲れてきたり、休憩で気の緩んだ瞬間に彼の地が出てくる。それが頻繁になり時間が長くなって、彼自身がそのことに気づかなくても、きっと私は笑って受け入れるに違いない。

道すがら、彼はいつもあの笑顔を見せては、私を安心させてくれるだろう。

それだけは間違いようなない未来だと、確信している。

第二十八話 素顔を見せて 2 (後書き)

第1章では明らかにしていなかった瀬尾ファンのその後と、向井さんについての美春の推理(?) 顛末記、でした。

第二十九話 納める日

十二月二十九日。

仕事納めのこの日、業務を早めに切り上げた石津さん、小林さん、そして私のWEB事業部若手三人組は、会社が入っているビルに最も近いコンビニで買い物をしていた。業務終了後に簡単ではあるが納会が行われるので、飲み物やつまみを買いにきたのだ。

おでんの匂いに気を取られつつも買い物の算段をする私と小林さんから離れ、石津さんはひとり雑誌コーナーで何やら物色している。どうせグラビアアイドルの水着写真でも見ているのだろう。

荷物持ちとして連れてきただけなのでエロい先輩は放っておくことにし、女二人で次々と品物を買った物かごに放り込む。役付き上司たちのポケットマネーが軍資金の出どころであるため、酒を買うのも気分が良い。

会計が終わり、グラビアに目を輝かせている石津さんと呼ぶ。そこに私の携帯がメールの受信を知らせた。兄からである。

《早く上がれることになった。仕事が終わる頃、そっちに迎えに行く。着いたら連絡する》

「げっ」

こちらの都合など構いなしの一方的な内容に、思わず拒絶反応が声となって口から漏れた。小林さんが聞きとがめて、どうしたのと尋ねる。

「兄が迎えにくるって」

思いつきり嫌そうに言った私とは対照的に、小林さんは目を輝かせた。

「えっ、本当？」

そんな彼女に何か違和感を覚える。小林さんは弁護士軍団との合

コンに参加はしたが、テンションの高い他のお姉サマ方とは違って傍観者というか、常に一步引いて眺めているようなイメージがあったのだ。おとなしい彼女ならではの挙措と納得していたのだが、この反応はどういうことなのだろう。

その疑問は部署に戻ってすぐに氷解した。両手に重いコンビニ袋を下げて部屋に到着するやいなや、小林さんは同僚たちに向かって声を上げた。

「皆さん、大ニュース！ 悠人さまがポチを迎えにくるんだそうです！」

悠人さま！？ 何じゃそりゃ！

キヤーツと悲鳴が上がったWEB事業部は一時騒然とし、呆れた工藤課長が「お前らちよつと落ち着け」と冷静さを呼びかけるも、お姉サマ方の興奮はなかなか静まらなかった。

それを見て小林さんが「ブログネタ、ブログネタ」とほくそ笑んでいるのを横目に捉え、私は壁に寄り掛かって衝撃と脱力をやり過ぎたのだった。

悠人さま。あの兄がさま付けで呼ばれている。

その事実には困惑以外の何物でもなかったが、一方で私はとある決心をしていた。

――兄が変態であることを決して知られてはならない。

身内の恥を晒してはならん。この秘密は墓場まで持っていくのだ。そう心の中で決意を固め、買ってきた酒やつまみを部屋の一角に置くと、近くにいた瀬尾係長が声をかけてきた。

「すごい騒ぎだな」

他人ごとのような言いぐさに、ムツとして言い返した。

「係長のせいじゃないですか」

「なんで僕？」

「歓迎会で兄のこと暴露したでしょうが」

「そうだったっけ」

もう忘れてんのか！ 根に持つタイプのくせに自らの所業に関しては都合良く健忘症になるなんて……

間もなく始まる納会の準備に、紙皿につまみを分けていると係長がポツリとつぶやいた。

「僕も会ってみたいな」

「誰にです？」

「君のお兄さん」

真意を測りかねて返答に詰まった。のぼせているお姉サマ方とは違い、係長は至って冷静に兄を観察しそうな気がする。その何もかも見透かすような目で。

もしかしたら彼には兄の変態性を見破られてしまうかもしれない。それはまずい。

私は彼の興味を逸らそうと、身内を卑下する作戦に出た。

「別に係長が会うほどの者じゃありませんよ」

「何、謙遜してるの。弁護士先生だろ」

「まだまだ半人前なんです。それに弁護士だったら他にもたくさんいるじゃないですか」

「別に弁護士に用があるわけじゃない」

「じゃあ、なんで会いたいんですか？」

「それは――」

「ポチー！」

杏子さんから呼ばれて視線を向けると、隅にいるお姉サマ方と共においでおいでと手を振っている。犬か幼児のような扱いに内心ブツブツ文句を言いながら赴いた。

そして、兄から到着したとのメールをもらったら、先に彼女たちが下に降りていく段取りを無理やりつけさせられた。

やがて納会がゆるゆると始まった。さっきコンビニで買ってきた缶ビールをクワーっと飲む。……タダ酒は美味い。

同僚たちも皆顔を緩めてビールやチューハイを手に取り、WEB事業部は一年間の仕事が終わった解放感に溢れた。^{あふ}

そこに半田社長が突然乱入し、場の空気を乱す。

「みんな、お疲れ様ー。差し入れだよう。ほら、美春ちゃん飲んで飲んでー」

仕事納めの日にまで来るとは。

思えば今年、さんざん仕事の邪魔をされたウザい社長だが、解放感のなせる業なのかおおらかな気持ちで彼を迎えた。差し入れのビールを飲んで社長という厄を落とすのもいいかもしれない。

ビール缶に手を出すと、社長が探るような眼差しを向けているのに気づいた。内心で彼を厄呼ばわりしたのがバレたか、とドキリとする。

しかし彼の口から出た言葉は私の意表をついた。

「美春ちゃん、クリスマスは楽しかったかい？」

なんでクリスマス？

眉をひそめると、更に彼は意図不明な言葉を重ねた。

「だって女の子にとって、クリスマスは大きなイベントでしょー？」

「恋する女の子にとってはそうかもしれないですね」

あくまで範囲限定だよ。それ以外にちょっと体ばかりか心まで寒くなる冬の一日に過ぎないんだよ。終わったとたんつきものが落ちたみたいに世間からは忘れ去られて、次にやってくる正月というイベントにとって代わられるんだよ。

少々意地悪くクリスマスというものを心の中で定義していると、社長は不思議そうな目で私を見る。

「美春ちゃんは恋する女の子じゃないのかい？」

ビールを噴き出しそうになり何とか口の中で抑え、間接的に否定する。

「……だったら何か問題でも？」

ところが社長は可笑しさを堪え切れなかった表情で応じた。

「いやいや、全然問題なんかないんだよー。そうかそうか、そうなのかー」

何が「そう」なのだ。何が可笑しいのだ。私に彼氏がいないことがそんなに笑えるとも言うのか。彼氏を作るな、なんて言っただけに！

社長はすつと私から離れると、部長や課長がいる輪に近づいていた。意味不明な言動に首をひねっていると、ずっと隣にいて会話を聞いていた藤田さんが苦笑して口を開く。

「ポチは恋してないの？」

「……何ですか、突然」

彼のほうから恋の話など珍しい。

「好きな人いないの？」

重ねて訊かれ、私はおどけて答えた。

「私は藤田さんが好きって、前にも言ったじゃないですかあ」
しかし彼はわずかに微笑んだだけで、私の軽口を流した。

「そういうんじゃないよ。ポチが本当に好きな人」

眼鏡の奥から深く優しく注がれる眼差しが、心の奥底に仕舞っていた記憶を引っ張り上げ、唇の間から外に連れ出した。

「前にはいましたけど……」

「今はもう好きじゃないの？」

あらためてそう問われれば、そんなことはない、という気持ちが前に出る。昔の想いの有効期限は分からないけど、変わらずに私の

中で生き続けているのだから。

「好きですよ。ずっと好きだったから。すごく好きだったから……今でもそうだと……」

言っているうちに尻すぼみになってしまった。自信のなさが表れているようで、これでは彼だって得心しないだろう。

ところが藤田さんはもっと深く切り込んできた。

「俺はたまたま十年続いてるけど、皆がみんなそんな恋愛するわけじゃないよ。情性になってるだけなら、それは好きっていうのと同じかなと思うな」

情性と言われ少し傷つく。ずっと変わらない「好き」の気持ちは純愛ではないのか。たとえ相手がそばにいらなくても。

それとも藤田さんの言うとおり、ただの情性なんだろうか。五年間も私の中で変化をしないままの恋心は。

ずっと触れないように閉じ込めていた感情に向き合わされ戸惑う私に、藤田さんは優しく目を細めた。

「年も新しくなることだし、リセットするのもいいかもしれないよ？」

にっこり笑って視線を動かした先では、社長が今年最後のバトルを係長に仕掛けていた。

「あれあれ、瀬尾くん。何かスツキリしない顔だねえ」

「そんなことはありません。老眼が進みましたか、社長」

「今年やり残したことがたくさんあるんじゃないかい？」

「いいえ、充実した一年でしたよ、お陰さまで」

「まーた、やせ我慢しちゃってー。できないことを認めるのも、できる男の条件だよ」

「いったい何をおっしゃっておられるのやら。いよいよ本格的に老化が始まりましたか。引き際を見極めるのもできる男の条件だと思いますが」

……今日はバトル納めか。あの二人、来年も舌戦を続けるのだろうか。

納会が終わり、兄の到着を待つ私と先輩女性社員がグダグダと時間をつぶす横で、なぜか佐久間主任を始めとする数人の独身男性たちも便乗して残っている。

藤田さんの話では「コワイもの見たさ」に近い心情らしい。兄の完璧な王子様ぶりに、後で自分と比べてショックを受けるかもしれないが、やはり一度は目にしておきたい……のだとか。

なぜこうも過大評価を受けることになったのか、申し訳ない気持ちでいっぱいだ。中身はただの変態なのに。

まるで珍獣扱いされている兄からようやくメールが届き、お姉サマ方は嬉々として、男性たちは期待と不安を混ぜ合わせたような顔をして移動した。

部屋に残ったのは係長と私の二人だけで、いきなり訪れた静寂に私たちの舌もしばらく動かずにいたが、それも彼が先に沈黙を破った。

「一月二日、電車で行くことになるけど構わない？ 課長と飲むって約束だから、車はさすがに無理だな」

「はいもちろん」

「二子玉川の駅のホームで待ち合わせしよう」

「はい。――あ、そうだ、お菓子の手土産は私が用意しますから、ご心配なく」

「そう？ じゃあ僕はワインでも持って行こうかな」

幾ばくかの時間がたち私たちも移動を始めた。エレベーターに乗ると、係長がさりげなく問いかける。

「さっき、藤田と何話してたの？ 深刻な話？」

「……見てたんですか？」

「ちょっと気になって」

「係長って本当に心配性ですね」

彼はそれには答えず、曖昧な笑顔を向ける。

何と言うべきか迷ったが、とりあえず彼の心配を取り除いてやろうと思った。

「大したことじゃないんです。リセットしたらって言われて」

「何を？」

「……いろいろです。仕事のこととか」

つい嘘が口をついて出た。

「そうか」

彼はそれ以上追求せずに視線を階数表示に向けた。

一階に到着しドアが開くと、ざわめきが耳に飛び込んできた。エントランスホールの端ではお姉サマ方に取り囲まれて、にこやかに応対する我が兄が立っている。その輪から少し離れてまじまじと皆を観察をする小林さん、更に離れた場所に男性の同僚たちが呆けた顔で視線を送っていた。

係長と私は佐久間主任の隣に立った。

「何かすげー威圧感。顔つきは穏やかなのに、触ったら切れそう」主任が兄をそう評するのを聞いて、人によって与える印象を変える兄の得意技が出たか、と内心独りごちた。

そつと係長を見上げると、表情を消して兄を凝視している。変態であることを見破られたらどうしようと焦った。

兄がこちらに気づき、お姉サマ方に「失礼します」と断って輪か

ら抜け出した。

「美春」

流れるような歩みで近づき私たちの前で立ち止まる。通り過ぎる人が振り返らずにいられない印象的な笑顔で。

私は兄と上司二人の間に立ち、三人をそれぞれ紹介した。すかさず名刺交換をする男性たち。

「瀬尾係長さんと佐久間主任さん……ですか。妹がいつもお世話になっております」

「いえ、こちらこそ」

兄と係長、会釈をした二人が顔を上げて正面から互いを見た。

背後で小林さんが「王子様二人そろい踏み！」と小声で言っているのが聞こえたが、この場の注目を集めていることは間違いなかった。

身長はほぼ同じ、見目麗しく、流麗な立ち居振る舞いも互角。

この二人が正面を切って魅力的な微笑みを相手に向けている。

しかしそれが作りものの笑顔であることを知っている私の頭をよぎった言葉は。

——キツネとタヌキの化かし合い。

二人が一瞬睨み合ったと思ったのは気のせいかな。

「三人とも歳が同じなんですよ。話が合うかもしれないですね」

咄嗟とつさに発したどうでも良い情報は、係長によって「そうか」の一言で片付けられてしまい、この後をどうすりゃいいんだと焦ったところに兄が「じゃあ失礼しようか、美春」と辞去を促した。

なんだかホッとしたのも気のせいかな。

「良いお年を」

四人が同様の言葉を口にし、兄と私は出口に向かう。他の同僚たちにも同じく挨拶を残して、一歩先に行く兄の後ろについた。

センサーが兄の姿を捉えて自動ドアが開いた瞬間、誰に向かって言っているのか背後から主任の声がかすかに聞こえた。

「お前、受けて立つの？」

それに対する答えなのかどうか分からないが、突然往来から飛び込んできたクラクションの音と重なって辛うじて聞き取れた声は、係長のものであった。

「当然だろ」

第二十九話 納める日（後書き）

兄VS係長、第1ラウンド。二人が感じたことは果たして？

お気に入り登録が1,000件を超えました。こんなに多くの方がお気に入りにしてくださっていることに大きな喜びを覚えるとともに、身の引き締まる思いがします。皆さま本当にありがとうございます。

第三十話 新年の抱負

新年を九時間後に控えた大晦日の午後、私はとある洋菓子店にいた。年越しそばを食べた後空腹になると見込んで、スイーツを買いにきたのだ。

甘い香りが充満する店内は私と同じ発想をする人が多いのか、陳列ケースをのぞき込んで選択に悩む客がそこかしこにいて、微笑みを誘われる。

私はケースの向こうにいる店員に声をかけ数点のケーキを選び、この店が新年は二日から営業することを確認すると、ある物を注文し要望を伝えた。

レジには清算中の母子がいて、カウンターに並んでいた袋入りのクッキーを手になだる五歳ぐらいの男の子から、母親が袋を取り上げている。それを見てつい二日前の光景を思い出し眉をしかめた。

瀬尾係長との今年最後の毒舌戦を終えた半田社長が、相変わらず意味不明な含み笑いを顔に貼り付けたまま退出すると、解放感に溢れていたはずの納会の場を妙な脱力感が襲った。同僚たちはこれを飲んで忘れることにしたらしく、次々とビール缶を開ける軽快な音が聞こえてきた。

私も右へ倣えとばかりに缶に手を出そうとしたら、杏子さんが鷹のような目付きで尋ねる。

「あんたそれ、何本目？」

まるで狙われたうさぎのような心境になったが、嘘をつくことで何とか逃げおおせようと画策した。

「まだ二本目ですよ」

兄に会えることで他のお姉サマ方と共にテンションを上げていた杏子さんが、カウンントしていたはずはない。そう確信したから、疑

惑の目を向けられても構わず再び缶に手を伸ばした。

すると今度は背中に冷たい視線を感じる。何だよ誰だよと、視線の出どころを見ると……係長だった。『飲むな』と美しい顔に凄みを利かせて私を睨みつけている。が、無視して缶を手にとった。納会だよ？ 仕事納めだよ？ タダ酒だよ？ 飲まずにいられますかって。

プルトップをプシュッと開けて一口飲んだところで背後に寒気を感じた。肩口から腕がニュッと降りてきて右手に収まっていたビール缶を取り上げる。

「ちよっ、泥棒！」

慌てて叫んで振り向いたら、係長が右手にビール缶、左手に携帯を持ってヒラヒラさせていた。

「『教育的指導』見る？」

恥ずかしい映像を見た日の記憶が瞬時に蘇った。まだ消去していなかったのか、この上司は！

「はい、ポチの負けー」

杏子さんが勝ち誇ったように笑う。私はブーブー文句をたれながらおつまみに手を出したのだった。

三月中旬からこの会社で働き始めてはや九ヶ月。

社長のことさえなければ、ただ楽しくて居心地の良い職場だったのが、今では一体感を伴った空気に絶えず支配されて、自分がこの場にいることを誇らしく思えるまでになった。

その原因は間違いなく瀬尾係長だ。

異動してわずか三ヶ月の間に八面六臂の活躍を見せ、WEB事業部になくはない存在になった。

企画書の書き方を全員に見直させその結果競合プレゼンの勝率が上がった、受注システムを作り替えて顧客にとってより明確で分かりやすい料金体系を作り上げたり、契約した顧客からのニュース

リリースを掲載・配信するWebPRサイトを立ち上げたりと、『できる男』の面目躍如たる仕事ぶりだ。

そんな彼を上司である工藤課長も実にうまく使い、さすがにかつてPR事業部で師匠・弟子の間柄だっただけあって、息の合った連携プレイが随所で見られるのだ。

WEB事業部が瀬尾係長を中心にして一つにまとまっている。そして私もその一員であることがこの上もなく嬉しい。

同僚たちの輪の中心にいる彼をチラと見る。談笑するその表情は明るく朗らかだ。

不機嫌さや苛立ちを見せたり、私とのがあって落ち込んだりと負の感情を表に出すこともあったが、良い意味で期待を裏切って皆の好意を逆に集めた。人間臭い方がより身近に感じられるのは自然なことだ。

彼がビールを口に行っているのが人垣の間から見えた。……あれはさっき私から取り上げた缶じゃないか？

——融通がきかなくて口うるさいところだけはいただけない。

私は自分が飲むはずだったビール缶の行く末を名残り惜しく見守ったのだった。

クッキーを欲しがる子供を適当にあしらう母親を横目に、会計を済ませ出口に向かう。洋菓子店を出ると寒風に身が縮こまった。真冬の切り裂くような空気が肌に痛い。

家路を急ぎながら、私は係長のことを考えていた。

瀬尾係長はこれから何を目指すのだろう。どこに行き着くのだろう。

仕事ができるというのも一種の才能だとすれば、彼の实力は疑いようもなく他から抜きんでているものだ。もっと上を、そう、一番を目指せるほどの。

彼自身はあまり意識していないように見える。関心が薄いのかもしれない。良い業績を上げていたら昇進が付いてきたというのが一番近いような気がする。

でも彼はきつと一番になれる人だ。

確信に近い思いが私を支配した。

お墓参りで帰郷した折に訪ねた母校で、陸上部顧問の根津先生が口にした言葉を思い起こした。

才能のある人間が開花するのを傍で見て、その成功に寄与できたことは幸せだった――

懐かしい熱が蘇る。高校時代に、一番を目指した熱。先生や部員の皆と一緒に、一つの目標に向かって熱くなっていた日々。

もうあんな熱を感じることはないだろうと思っていたけれど、今、係長を見るたびに心の中に沸き立つ想いはあれと同質のものだ。

――彼を応援したい。

その想いは自然に、そして当然のように私の中で生まれ出た。

根津先生と試行錯誤しながら自分の走りを見つけていったように。部員の皆が全員で私を支えてくれたように。

今度は私が応援する側につきたい。彼が一番になるのをこの目で見たい。

もう一度あの熱を感じてみたい――

生まれたばかりの新鮮な願いを胸に秘めて帰宅すると、待ち構えていた変態の兄がケーキの箱を分捕った。

「ちようど甘い物が欲しかったんだよ。持つべきものはお兄ちゃん

思いの妹だな」

せっかく気分良く帰ってきたのに……何個か買っておいてよかった。

兄妹だけあって私に勝るとも劣らない甘い物好きの兄である。係長とカフェで会った日曜日、帰宅すると即座に匂いをクンクンと嗅がれ「ケーキ食べてきただろ」と凶星を指された。

全部取られないうちに自分の分を確保して冷蔵庫に入れてから、おせち料理を重箱に詰め始めた。これが終われば年越しそばの支度をして……新年までの残り数時間は無為に過ごそう。

我が家は年越しそばを夕食に食べる派である。天ぷらを添えてボリュームを出す、夜中までにはいつも空腹を感じてしまうので今日はスイーツを購入したわけだ。

兄と二人で向き合って年越しそばを食べるのは六度目。思えば今年は今会社に派遣され、正社員になって、転居もして……出合いの年だった。嫌なこともあったけど、それ以上に良いことがたくさんあった。

感慨に耽っていたら、兄がニヤニヤしながら声をかけてきた。

「お前、少し前まで上司とケンカしてたんだって？」

ブフツと口に含んでいたつゆを吐き出し、汚いなー、ととがめられる。

「な、なして……？」

「ネタ元をバラすわけないだろ」

お姉サマ方の一人か。誰だよ、全く！

「上司とケンカなんて、やるな、美春。さすが俺の妹」

「別にケンカじゃないし」

「痴話ゲンカか」

「だからそゆんでねえって！」

兄は愉快そうに目を細めると、とある質問を投げかけた。

「対人関係で心理的に優位に立つにはどうしたらいいか知ってるか？」

「より多くの情報を持って」

「正解」

こんなことは何度となく兄から聞かされた。しかしそれを妹にも実践するとは。職場の先輩から情報収集なんかして、全く、油断も隙もない。

内心で憤慨している私をよそに、兄は講演で持論を展開する講師のような口調で続けた。

「だから立場が弱い方がより多くの情報を握るべきなんだよ。上司と部下の関係でも、男女関係でも、それは同じ」

「でも手に入れた情報をどう使うかは自由だべ？」

「普通は自分の利益を追求するために、ここぞという時の切り札に使うもんだけどな」

やはり兄は発想が弁護士なのだな、と思った。他人より優位に駒を進めることが重要なのだ。常にアドバンテージを取り、相手の陣地を奪う。逆綱引きと表現しても良いか。

でも私は昔からただ真っ直ぐ走るだけの人間で、気づいたら相手の陣地深くに入り込んでいる。

ちゃんと目的地を見つけることもあれば、迷って回り道をしたり、結局すぐごとと元きた道を引き返したりするけれど、太陽が昇って沈むまでは大体の方角が分かるから、いつも空を仰ぎ見ていれば自分のいる位置を不安に思うことなんかない。

「でもお前は、そういうんじゃないんだよな。明かしてもいい情報なら惜しげもなくばら撒く。自分のためだけじゃなく」

兄も分かっているのだ、それは。

「それが『越智美春』だから。それでいいんだけど……お兄ちゃん

としては複雑な気分になることもある」

何が複雑なのだろう。しかし兄がすぐに放った問いに思考は遮られた。

「で、ケンカした上司って、あのいい男の方？ 瀬尾係長だっけ」
そこまで分かっているのなら誤魔化しても無駄だと思い、諦めて白状した。

「だからケンカじゃないけど……うん、まあ」

口の端に意味ありげな笑みを見せ、兄は言った。

「楽しみだな、あいつとの勝負」

あいつ呼ばわり……いやそれよりも、何を勝負するつもりだ。いい男合戦か。WEB事業部女性社員による人気投票か。

兄はチラと私に視線を動かすと、ニヤリと笑った。

「まあしばらくはあいつ、土俵にも上がれなさそうだけどな」

何の話をしているのか、変態の思考回路は常人と違ってついていけない。

「どっちにしても、情報収集は怠るんじゃないぞ」

もちろん抜かりはない。でもそれを兄に言う気にはならなかった。手に入れた情報をどう使うかも。

年が変わる瞬間がやってきた。兄と共にカウントダウンをしてシヤンパンを開ける。二人で迎える新年もこれで六度目だ。

毎年私たちは年が明けると新年の抱負を述べることにしていて、昨年は兄が「事務所でパートナーとしての確固たる地位を築く」ことと「愛する妹の健康を心配するあまり口うるさく退職を言い続ける」、私が「何と言われようとも絶対に会社を辞めない」だった。

結局前の会社は辞めることになったが、お陰で現在の職場を手に入れた。人生ってどう転ぶか分からない。

今年もまた抱負を兄に訊かれ、少し躊躇したが答えた。

「『身近で頑張っている人を応援する』ってとこだなあ」

係長を応援したいという気持ちも、抱負と言っていいだろうと思
ったのだ。すると兄は声を震わせた。

「そんなことを言われたら、お兄ちゃん感激してむせび泣くじゃな
いか」

……まあいいや。正月だし、このままカン違いさせておこう。

兄の抱負は「妹の健康と安全と幸せのために粉骨碎身する」だそ
うだ。勝手に言ってる。

そうこうするうち、携帯にどしどしメールが来て、兄は返信に追
われた。私も新しい抱負ができて気分も一新、当人にあげおめメー
ルを送ることにした。

《あけましておめでとうございます。昨年はいろいろありましたが、
今年一年また頑張りますのでよろしく願います》

打ち終わって改めて読んだら、私らしくないので入力し直した。

《あけましておめでとうございます。昨年はいろいろな苦労されたよ
うですので、今年は女運が上昇すると良いですね。でも非常階段は
ナシですよ。今年もよろしく願います》

送信ボタンを押してから、彼が年末年始は実家には帰らないと言
ったのを思い出した。

年越しを一人で過ごしているのだろうか？ ……それは寂しすぎ
る。

いやいや、彼のことだ。一緒に過ごす女性など両手の指の数ほど
いるはずだ。

手の中の携帯が鳴った。係長からであることを確認し、自室に移
動しながら通話ボタンを押す。

「はい」

〈あけましておめでとう〉

「あけましておめでとうございます」

〈メールありがとう。今どこ？〉

「自宅です」

「今日は……じゃない、昨日か、何してたの？」

「お正月の準備と……あとはダラダラ。それと……新年の抱負を考えてました」

隠しておけずについて言ってしまった。

「へえ。どんなの？」

少し笑いを含んだ、それでいて興味深そうな声だった。

「もったいないから今は言いません。……でも係長にも少し関係あることですよ？」

少しどころか全部彼に関係することなんだが、本人には黙っておこう。

秘密めかした言い方に刺激を受けたのか、係長もいたずらっぽい声を出す。

「……僕にも新年の抱負があるんだけど、大いに君に関係あるんだ」
私に関係ある？ 何だろう。

期待に胸がワクワクしたが、ふと不愉快な光景が瞼の裏をかすめ、正月早々心が真っ黒になった。

「お断りします」

「え！？」

なぜ驚く。そんなもん、断るに決まってるだろうが。

「何と言われようと絶対に嫌です」

ここは頑として突っぱねてやる。

「……嫌、なの……？」

まるで一瞬にして花がしおれたかのように生気のなくなった声で確認する彼に、にべもなく返事をする。

「当たり前です」

「……話だけでも聞いてくれないかな」

話をすれば自分のペースに持ち込んで翻意させられると思っているのか。その手には乗らん。

「ご期待には添えられません」

〈今すぐでなくてもいいんだ。僕は待つつもりだから〉

厳しくはねつけてやったのに、引き下がらない。諦めが悪いぞ。

「無駄です。他を当たってください」

〈……他なんてないんだよ、僕には〉

そんな悲しげな声を出したってダメだから！

「知りませんよ、そんなこと」

〈越智さん……〉

だからそんなに切なく名前を呼ぶな。ほだされてしまいそうになるじゃないか。

流されかかった心をむんずとつかみ引き戻して、私は高らかに宣言した。

「係長が何と言おうと、私は今年もお酒を飲みますから！」

〈………酒？〉

「飲酒をやめさせようたって、そうはいきませんからねっ」

はつきりと「今年も飲酒継続宣言」を叩きつけてやったのに、なぜか受話器の向こうからはホッとした声が聞こえてきた。

〈そうか……〉

そこに突然聞き慣れない声が飛び込んできた。

〈達兄、誰？ オンナー？〉

まだ大人になりきっていないような若い男性の声。続けてくぐもった声で、うるさい、あっち行つてろ、と聞こえる。

〈ごめん。今、親戚の家にいるんだ〉

親戚。何だ、そっか。係長、一人じゃなかったんだ。

「良かった」

……マズい。最後の一言だけつい声に出してしまった。何とか誤魔化

せ。

「……ですね、紅組が勝って」

〈勝ったのは白組だよ〉

大晦日ならではのネタを使って我ながらうまいと感心したのに、まさか係長が紅白を見ていたとは。ここは潔く撤退することにした。

「それじゃ、あさって、あ、もう明日ですね」

〈越智さん〉

「はい？」

彼は少しの空白を置くと、弾んだ声を出した。

〈僕は新年の抱負をきくと現実に見てみせるよ〉

はあ？ 飲酒はやめなと言ってるだろうが！

「係長、しつこいですよ」

うんざりした声で言ったら、彼はクスクス笑った。

へうん。しつこく行くことにしたから、覚悟しといてね。今年もよろしく〈

「……よろしくお願いします」

通話を終えて無然とする。

……しつこくて融通がきかなくて口うるさいところだけはいただけない。

第三十話 新年の抱負（後書き）

美春を振り向かせることと、酒をやめさせること、どちらが難しいでしょうか（笑）

そして、美春が手に入れた情報とは……？

第三十一話 笑顔が見たいから

待ち合わせ場所に現れた私が手に提げた袋をのぞいて、瀬尾係長が目を丸くした。

「ホールケーキ買ったの？ 正月なんだし和菓子にするかと……」

課長宅を訪問するに当たりこちらで用意すると言っておいした土産に、いちやもんをつける。

下りのホーム。折よく到着した電車が起こした風になぶられた髪を押さえ、私は言い返した。

「係長ってベタですよね」

「君ほどじゃないけどね」

「どうせほとんど私が食べるんだから、私の好きなモノを持ってい
く方がいいじゃないですか」

扉が開いて降りてきた乗客に場所を空けながら、係長が苦笑して
つぶやいた。

「それって手土産って言うのかな」

凍りつくような冷たい空気の中に真冬の太陽の光が煌めく、寒さと暖かさが同居するような新年二日目の午後。

課長の自宅へ向かう道を係長と並んで歩く。駅前はずでに営業を
始めた店がちらほらあって、中途半端な活気に溢れていた。

前回は課長が車で迎えにきてくれたため、街の様子を観察する暇
もなかった。物珍しげにキョロキョロしていると、係長が口を開い
た。

「今日はお兄さん、何してるの？」

その問いの裏に単純でないものを感じ、つい口元が緩む。

「大学時代の友達と会うって言ってましたけど……係長も気になる
んですか？」

「僕『も』って？」

「ウチの兄、係長に対抗意識燃やしてるんですよ。勝負とか何とか」
彼は黙ったまま前方を見つめ、私は喋り続けた。

「オトコマエ同士ってライバル意識が強いんですかね。両雄並び立たず、ですか？」

「さあな」

「もしWEB事業部で人気投票をやるんなら、私の清き一票は係長のものですから、ケーキ付きで。あ、この手は小林さんにも使えるかも」

「そのどこが『清き』一票なんだ」

「杏子さんにはどの手でいきますか？ みどりさんの知らない課長情報かな」

「それなら僕はいくらでも知ってる」

「じゃあこれで三票獲得ですよ」

「君は選挙対策委員長か」

「だって係長に勝ってほしいですから」

「……本当に？」

そこで妙に感情のこもった声を出し、こちらをじっと見る。妹が兄の応援をしないのは奇妙に感じられるのだろう。

「本当ですよ」

職場での妹の言動をこっそり探るような変態兄をこれ以上調子に乗らせないためにも、係長には勝ってもらわないと。それに私は彼の応援をすると決めたのだし。

力強い返答を受けて係長は安心したように笑った。ライバルの妹が自分の側についたことがやはり嬉しいのだな。

正月特有の静けさが包む住宅街に差し掛かると、門や玄関に飾られた様々な松飾りやしめ縄に目がいく。

「雪のないお正月って変だと思ってたけど、慣れればそうでもないですね」

「田舎に帰りたくはない？ 友達に会ったりしたいんじゃない？」

係長はこうして時々、さりげなく優しい言葉をかける。私を思いやってくれていることを感じて、嬉しくなる。

「それでもないですよ。時々電話で話してるから」

「もしかして」

彼は顔を前方に向けたまま、変わらず自然な口調で続けた。

「会いたくない人がいる？ 好きだった人とか」

足が止まり、顔が固まった。いつもならパツと思い浮かぶ切り返しも、なぜか出てこない。突然急所を突いた係長を恨みがましく思った。

振り返って優しく微笑む彼に、私は唇を尖らせる。

「ずるいですよ、係長は」

「そうかな」

「ずるいです」

優しいって思ったばかりなのに。……係長のバカ。

玄関で私たち二人を迎えたのは、みどりさんの朗らかな声だった。

「いらっしゃーい、おそろいで」

おそろい？ どういう意味だ？

「おう、来たか」

みどりさんに続いて奥から課長も現れたので、四人で新年のあいさつを交わす。

彼女はやや寝不足気味の顔ではあるが元気そうだ。新米ママとして頑張っているに違いない。実の両親が近くにいるのだから、子育てに関してこれ以上強い味方はいないだろう。

みどりさんにキーキの箱を託して冷蔵庫に入れるように頼むと、私はリビングに向かった。その一角では工藤家のお姫様、真由ちゃ

んが小さな布団の中で目を開けている。今は授乳が終わったばかりでご機嫌らしく、彼女の小さな手が私の人差し指をぎゅっと握った。

「まーゆーちゃん」

可愛いなあー。

「え！？ まだ？」

突然みどりさんが大きな声を上げた。振り返ると課長、係長と共に固まってリビングの入り口に立っている。

「……何がまだなんですか？」

三人は互いに目を見合わせたが、苦笑した課長が私の問いに答えた。

「瀬尾がまだ初詣に行っていないって」

それがそんなに驚くようなことか？ それとも東京の人は必ず元日に初詣に行くものなのだろうか？

私は昨日兄に連れ出されて行ってきたが、あまりの人出の多さに疲れきってしまった。できれば三が日は避けることをお勧めするよ。

「あ、お茶淹れるねー」

みどりさんがそくさとキッチンへ向かったので、初詣について私の見解を述べるタイミングを逃してしまった。……まあいいや。真由ちゃんを抱っこさせてもらおうと。

小さな身体を抱き上げソファに移動した。赤ん坊特有の甘い匂いが鼻と心をくすぐる。

思えばあの日みどりさんが産気づかなかったら、係長と私は和解には至らなかったかもしれない。この無垢な存在の前では、争いごとをする自分たちの愚かさをあらためて思い知らされる。

チヨイチヨイと指の腹で優しく頬をつつく。可愛いーい。頬ずりしたいがわずかでも化粧をしていたことを思い出してやめた。

隣に係長がやってきて小さな顔をのぞき込んだ。彼もまた同じ感

慨を抱いたのかもしれない。私は赤ん坊の視界に彼が入るように身体の向きを変えた。

「ほーら真由ちゃん、パパの弟子のおじさんですよお」

「おじさんって言うな」

「何の弟子かは大人になったら教えてあげるねー」
ギョツとした男性二人が慌てて口を差し挟む。

「おいポチ」

「ちよつと」

「あれあれー、二人とも今何を想像したのかなー、ねー真由ちゃん」

お茶を淹れて持ってきてくれたみどりさんが吹き出した。

「完璧瀬尾くんも美春ちゃんの前じゃ形なしね」

「うん、参るよ、ホント」

「その割には嬉しそうだぞ」

「工藤さん！」

そこでふと楽しい悪戯を思いついた。係長にさっきの仕返しをしてやろう。

「はい、係長も真由ちゃん抱っこして」

「え、僕？ い、いいよ」

あたふたする彼に命令口調で迫る。

「ダメです。師匠の娘ですよ。ホラホラホラ」

半ば無理やり彼女を渡した。おっかなびっくり赤ん坊を抱える係長。

「うわ、似合わねーなー、瀬尾と赤ん坊」

「工藤さんには言われたくありませんよ」

師匠と弟子が心温まる会話を交わす間に私は携帯を持ち出し、「係長！」と呼んで彼が視線をこちらに向けたところで写真を撮った。

「越智さん、何、写真撮ってんの？」

私は画面を三人に向け、水戸黄門の印籠のように携帯を掲げた。

「突然『あなたの子よ』と赤ん坊を渡され目を白黒させる男の図」

「なっ……」

「わ、笑えるっ、美春ちゃん、それ」

「瀬尾、身に覚えあるだろ」

しばらくの間、笑いの渦の真ん中で、係長は苦虫を噛み潰していた。

ようやく真由ちゃんから解放された係長は、ホッとしたのか舌の動きが滑らかになり、ブツブツと文句を言い始めた。

「冗談じゃないよ、全く。最近はすっかりおとなしくなったんだからね」

ここでも私は彼をやり込める手を緩めない。

「そうですね、WEBに来てからは前日と同じスーツだったことってないですよね」

「えっ」

「それで朝、後輩にネクタイ買いに行かせたりとか」

「なっ」

「来る者拒まずで付き合ってたら、デートをダブルブッキングしちゃって代わりに後輩に行かせたりとか」

「ちよっ」

「今カノ元カノの誕生日を取り違えて覚えて、慌てて後輩に花束買いに行かせたりとか」

「……………」

マシンガンのごとくに繰り出す過去の女ったらしエピソードに、本人は手も足も出ない模様。ムフフ。してやったり。

これが私なりの、手に入れた情報の使い方である。

「まあまあ、美春ちゃん、あんまり瀬尾くんいじめないであげてよ」
口を手で押さえ赤くなってそっぽを向く係長のために、みどりさんが弁護に回る。

「昔はともかく、今はちゃんと落ち着いた恋愛したいと思ってるのよね、瀬尾くんも」

「それはまあ」

「外見だけ見て言い寄ってくるような女の子じゃなくて、瀬尾くんが自分から好きになった女の子と付き合いたいよね」

「うん」

「でね、そういう女の子って案外近くにいるものなのよ、美春ちゃん」

「へーえ」

みどりさんって同期だっただけあって、係長のことよく分かってるんだな。

「じゃあ、去年の夏にアパレルD社のマーケティング課とPホテルの広報部の女性二人から言い寄られたのに付き合わなかったのって、好きな人がいたからなんですか？」

ダメ押しの暴露にもはや為す術もなくなったのか、ポカンとした顔で彼が尋ねる。

「あの……さっきから君は何だってそんな情報を」

実を言うとあの女子化粧室での騒動以来、片岡さんを始めとする数名のPR事業部社員と交流を持っており、そこからネタが上がってくるのだが、もちろんネタ元をバラしたりはしないさ。

「クライアントの人ですか？ それともPR事業部の人？ だったらWEBに異動してきてあんまり会えなくなっちゃったんじゃないですか？ うっ、気の毒だなー、係長」

三人は顔を見合わせ、そろって溜息をついた。

「瀬尾、前途多難だな、お前……」

前途多難な恋。なかなか会えないとそうなってしまいうのか。でも、

会えない時間が愛を育てる、なんて言葉もあることだし。係長、頑張って！

私はひそかに彼にエールを送った。

酒宴が始まり、お歳暮で贈られたという岡山産の酒が振舞われた。みどりさんお手製の酒の肴と共にいただく。

係長が見ていない隙を狙ってグラスを傾け芳醇な香りと味を楽しむも、さりげなく酒瓶は手の届かない位置に置かれてしまった。恨めしげに見ていたら、そういうえば、と課長が思い出したように口を開いた。

「竹内と白川の結婚式、六月に決まったって聞いたか？」

係長が暗躍して仲を取り持った二人だ。私は素知らぬふりで話に耳を傾けた。

「六月にしたいようなことは聞いてましたけど……決まったんですか、良かった」

「お前が縁結びしてやったんだろ。絶対スピーチ頼んでくるぞ」

苦笑いする係長の内心を私は推し量った。事情が事情だけに祝福のスピーチをするのは複雑な心境だろう、いくら腹黒といえども。

課長は隣に座るみどりさんに向かい、更に話を続けた。

「常務の奥さんが仕切るらしいぞ」

「えっ、本当？」

「常務の奥さんって？」

口を挟むと、みどりさんが少し高揚した調子で語り始める。

「川嶋常務の奥さんってね、ウエディングプランナーなの。VIPの結婚式なんかも手がけるすごい人なのよ」

川嶋真一郎常務取締役夫人——川嶋佐和子さんは業界では有名な

ウエディングプランナーで、政界や財界人ばかりかスポーツ選手や芸能人の結婚披露宴もプロデュースし、合間には講演もこなして全国を飛び回っている人なのだそう。

常務の口利きで転職することになった縁もあって、課長夫妻の結婚式を手がけたのもこの川嶋夫人なのだという。

「自分で会社を興して大きくして、それでいてちゃんと家庭も持ってるの。確か美春ちゃんと同じぐらいのお嬢さんがいるのよ。ある意味、女性の憧れかもね」

確かにそれはすごいことだと思う。キャリアアップを図る女性にとって、出産や育児は時として歩みを遅らせる要因になるだろうか。夫の協力だって欠かせないだろう。

「川嶋常務は今でも奥さんにベタ惚れでさ、机に写真なんか飾ってあるんだよ。年上女房なんだけど、美人なんだ、これが」

あの女子化粧室で威厳を漂わせていた常務が、私生活では奥さんにベタ惚れで仕事も応援して——男の人って分からないものだなあ、と思った。

みどりさんが結婚式のアルバムを見せてくれた。

Aラインのボリュームのあるスカートが特徴的なウエディングドレスが、彼女の可愛さを引き立たせている。隣に立つ課長もオトコマエ全開だ。

結婚披露宴は美しい庭園を持つ邸宅を貸切にしたハウスウェディング形式で行われ、二次会を行わない代わりに多くの人を招いたのだとか。

正装したWEB事業部の面々があちらこちらに写っていた。日付を見ると一昨年の五月十八日とある。約一年半前か。

「いい季節で、お天気も良かったのよね。庭園の花がそれはもう見事で」

「竹内も俺達の式を見て気に入って、常務に話を持っていったんだ。でもまさか奥さん自ら仕切ってくれるとは思ってなかったらしい」

私は係長が写っている写真を見つけ、声を上げた。

「係長が写ってますよ、ほら、新郎よりも目立っちゃって」

しかし彼はかすかに頬を動かしただけで、顔には何の感情も現れていなかった。むしろ、意図して表情を消しているように見えた。

そういえばさっきからずっと黙ったままだ。心配になってじっと窺うと、気づいた彼は「どれ」と言ってアルバムをのぞき込んだ。

「あのとき工藤さんに脅されたんだよな。『今日の主役は俺だぞ』って。大人げないというか、呆れてものが言えなかったよ」

「そのあと『普通、主役は花嫁の方です』って言い返したじゃねえか」

いつもの彼に戻ったが、どうも気になる。竹内係長の結婚式の話は、彼にとってやはり複雑な感慨を呼び起こすものなのかもしれない。

彼に笑顔になってもらおう。冷蔵庫の中で出番を待っているものは、きっと彼に笑顔をもたらしてくれる。

そう考えた私は、キッチンに向かうみどりさんに続いて立ち上がった。

この夜みどりさんはすきやきを用意してくれた。準備を手伝う傍ら持参したケーキをそっと見せる。

「美春ちゃん、これって」

ニカーと笑ってうなずいた。

タイミングを見ながら課長もこっそり巻き込み、家の中を見せるという名目で係長をリビングから連れ出し、全ての用意が整った後

二人を呼び戻した。明かりを消して暗くなった部屋の入口に立つ係長の戸惑っている姿が、廊下から入る光の中に浮かんでいる。

「え？ 何？」

「ハッピーバースデイトゥーユー、ハッピーバースデイトゥーユー」
みどりさんと私が歌いながら、驚いている彼を奥に導く。テーブルの上には二十八本のロウソクに火を灯したバースディケーキ。

歌い終わって拍手と共にお祝いの言葉を述べる。

「おめでとう」

「おめでとうございます」

ずっと呆然としたままでいた係長は、ようやく「ありがとう」と口に出した。

「はにかむなよ、大の男が気色悪い。ホレ、さっさとロウソク吹き消せ」

からかい混じりに課長に促され、恥ずかしがりながらもふうーっと大きく息を吐いた。二度吹いて全ての火が消えると、再び拍手。課長が照明を点けたので照れてる係長の顔が良く見えた。

「これ、もしかして越智さんが持ってきたケーキ？」

「はい。だって誕生日にはケーキとロウソクでしょ？ 私の方がベタだって言ったの係長ですよ？」

おどけて言ったら、眩しそうな笑みを見せる。

「ありがとう。でも何で知ってたの？」

「情報屋はネタ元バラしませんよお」

もちろんこれもPR事業部の人から聞いたのだ。と言っても係長の誕生日を知っているのはほんの一部の人たちだけというから、私がこの情報を得たのはラッキーだったと言えよう。

彼に一本のフォークをはい、と渡した。

「主役が最初にどうぞ。係長仕様に甘さ控えめですから」

ホールのケーキから直接フォークですくって口に入れた彼は、満

面の笑顔を見せた。

「美味しい」

みどりさんと私がまた拍手すると、再びすくって口に入れる。

「美味しい」

そしてまた笑顔になって私を見た。

「オチた」

課長の小さなつぶやきに係長がすぐに応じる。

「とっくにオチてます」

何が落ちたの？ ケーキ？

「係長、ケーキこぼしたんですか？」

子供じゃあるまいし、こぼすな。そう思ったのだが、三人とも声を上げて笑い出した。

何だ何だ。完璧瀬尾くんがケーキをこぼしたことがそんなに笑いの琴線に触れたのか。ウチの変態は皿まで舐める勢いで食べるから、今更可笑しくもなんともないけど。

目論みとは違ったが、用意したケーキが笑いをもたらしたことに変わりはないから、まあ良しとするか。

そっと心の中でつぶやく。

ねえ、あんちゃん。私はやっぱり、手に入れた情報をこんなふうに使ってしまうよ。

だって、係長を応援するって決めたから。

彼が笑ってくれると嬉しいから。

彼の笑顔が、見たいから。

第三十一話 笑顔が見たいから（後書き）

第三十二話 息子登場

「やあみんな、あけましておめでとぉー」

新年早々語尾を伸ばしたお馴染みの声がWEB事業部に響いた。後ろに松永部長以下のWEB事業部管理職の面々を従えて部屋に入ってきた半田社長に、あけましておめでとうございます、と挨拶を返し頭を下げる我々。

ドラマで見た医学部教授の回診さながらの登場である。

「お、美春ちゃん、おいでおいでー」

早速指をクイクイと動かして私を呼ぶ。犬じゃないっつーの。

「年末年始は会えなくてつまらなかったよお。やっぱり会社に来るのが一番だなー。美春ちゃんに会えるからー」

あんたは何しに会社に来るんだ、オッサン。

「でね、年始祝いをしたいんだけど、今日美春ちゃんをランチに招待しても構わないよねえ、松永部長？」

「構いませんが」

「工藤課長？」

「問題ないですね」

「瀬尾係長？」

「……そうですね」

「はいっ、異議ありっ」

手を挙げて反対をひとり表明する。なぜ私の意見を最初に訊かないのだ？

「私はお弁当を持ってきましたので、お断りさ」

「あー、お弁当ね」

全て言い終わらないうちに社長が私を遮り、同僚たちを見回して声を上げた。

「ひとり暮らしの独身男性は手を挙げてー」

手を挙げた数名の中から一番近くにいた斉藤さんを選び、肩にポンと手を乗せる。

「君、喜びなさい。今日のお昼は美春ちゃんの手作り弁当だよ！

減多に味わえないよー。希少価値高いよー」

私の弁当が本日収まる胃袋を勝手に指定すると、今度は係長に向かって口を開いた。

「あれあれ、瀬尾くん、そんな羨ましそうな顔してー。美春ちゃんのお弁当、食べてみたかったー？」

湿度の高い口調で係長を挑発したものの、純度の高い爽やかさでもって応じられる。

「いえ別に。越智さんの弁当なら食べたことありますから」

この発言に「えええーっ」とざわめく同僚たち。私は頭を抱えた。事実だが言葉が足りなさすぎる！

「コ、コンビニ弁当と交換したんですよねっ。倉田さん、大森さん？」

無用の誤解を防ぐために、その場にいた証人に話を振った。

「うん、係長、ポチのお弁当分捕っちゃったのよね」

「そうそう、そうだった」

先輩二人の証言により場が静かに収まる。やれやれと息をつく間もなくオッサンが能天気な声を発した。

「ふうーん、まあいいや。じゃあ美春ちゃん、十二時に迎えにくるからねー。楽しみに待っててねー」

そう言ってスキップでもしかねない陽気さで、足取りも軽く部屋を後にした。

……新年早々、社長が引っかき回してくれたお陰で脱力するWEB事業部。

「お前さんもつくづく大変だなあ、ポチ」

同情の目で部長が私を見る。

「そう思うんなら部長の力で何とかしてください」

同情するなら金を……じゃなくて社長排斥運動でもしてくれ。

しかし部長からは残念な答えが返ってきただけだった。

「俺には瀬尾みたいな度胸はないよ。……思っただが社長、ポチにかこつけて実は瀬尾と張り合いたいだけなんじゃないか？」

それは穿った見方であるかもしれない。何かと係長を挑発する態度から見ても、その可能性は高い。

「でもどうして係長と？」

「いい男への嫉妬だろ」

「なるほど」

面白くなさそうな表情で自分の席に向かう係長を見ながら、うんうんとうなずく同僚たちであった。

予告どおり十二時に迎えにきた社長とともに呼びつけたタクシーに乗り込む。しかし五分もたたないうちに到着し内心ずっこけた。そんな近距離でタクシー使うな！

すでに予約がしてあるらしいその店は、高層ビルの展望レストラン街にある日本料理店だった。高級感漂う店構えに少し気後れしたが、ピシッと背筋を伸ばして腹に力を入れる。

私の意見などお構いなく連れてきたからには豪華ランチを食べてやる。そこんとこ遠慮はしないからね！

社長が名前を告げると店員が心得たと言わんばかりに微笑んで先導する。東京のパノラマが一望できる窓際のテーブルの一つに案内されると、そこには先客がいた。

立ち上がって「こんにちは」と微笑む、まだ十代と思しき若者。

思いがけない第三者の登場に戸惑いながらも挨拶を返す。

社長はニコニコしながら彼の正体を明かした。

「美春ちゃん、紹介するね。これ、僕の長男の光^{ひかる}」

驚きのあまりポカンとしている私に、社長の息子はあらためて名乗った。

「初めまして。半田光です。いつも父がお世話になってます」

「……初めまして」

「さっ、美春ちゃん、座って座って。お腹すいたでしょー？」

席に着き、社長と店員が注文のやり取りを交わす間、隣同士に座った父子をしげしげと眺めた。言われてみれば、目もとが似ている。笑った口もとも。

――突如として思い出す、息子の嫁候補の話。

あの話は冗談にしろ、これが件の息子なのか、高校生の。今はまだ冬休み中なのだな。しかしなぜ私と会わせようとしたのだろう。

注文をとり終えた店員が去ると、半田ジュニアが人懐っこい笑みを浮かべた。

「親父ね、家で美春ちゃんの話ばっかするんですよ。美春ちゃん足すごく速いんだぞー、インターハイ四位だぞー、可愛いんだぞーって。もうウザいぐらい」

自宅でもウザがられてるのか。

「だから俺、美春ちゃんにどうしても会ってみたくなくて、親父に会わせてよって頼んだんです。あ、ゴメン、親父が美春ちゃん美春ちゃんって呼ぶもんだから、つい俺も…… 美春ちゃんって呼んでもいいですか？」

親しげだが押し付けがましくない話し方に好感を持ち、了承した。「俺も陸上部なんですよ。だからすごい尊敬します、美春ちゃんのこと」

「いえそんな」

照れるじゃないか、少年。

「光……くんは種目は何をやってるんですか？」

「中距離です。好きなのは千五百メートル」

「秋には都大会でイトコまで行ったんだよねー」

嬉しそうな顔で自慢する父親に向かって、息子は顔をしかめた。

「インハイ四位の前で都大会に出たぐらいで自慢すんなよ、恥ずかしいだろ」

わざとぞんざいに口を利く様子が微笑ましくて、ついクスクスと笑ってしまう。

「ほら美春ちゃんだって笑ってんじゃん」

「だってそれぐらいしか自慢することないじゃないかー、光くんはー」

「光くんって呼ぶな、恥ずかしい」

「あはははは」

本気で笑ってしまった。あのおちゃらけ社長が、ここではひとりの普通の父親で。高校生の息子からウザがられていて。何だかすごくいいなあと思ってしまった。

豪華に昼のしゃぶしゃぶコースを注文して上質の肉を堪能する私たちの間で、会話は更に盛り上がった。互いに陸上部ということで話題には事欠かない。練習方法を初めとして、身体のメンテナンスとか、試合に臨んでどう集中するかとか。

私がレース前に集中すると、完全に「入って」しまっただけが見えなくなると言うと、陸上部の仲間にもそういうタイプがいると教えてくれた。

そして、陸上を始めたきっかけが憧れだったことも。

「本当は俺、ハイジャンやりたかったんだ。子供の頃に見て、すげーカッコイイって思ったの。でも中学の時に向いてないって分かって、中距離に転向したんだ」

そういう挫折は誰にでもあることだ。でもそこで陸上部を辞めたりしないで他の種目に転向したというのは、彼が柔軟な考えを持ち合わせていたからだろう。陸上競技が好きで、部員の仲間も好きだ

ったんだろう。

そんなふう想像して彼が陸上を続けてきた軌跡を思い描いた。学校生活についても楽しそうに語るのを聞いて、久しぶりに自分の高校時代を思い出した。光くんは明るくて話が面白くて、きっと学校でも人気者なんだろうなと思われた。

会話が弾んでお腹もいっぱい、満ち足りた気分になった頃、社長の携帯がブーツと震えた。

「三沢くんだよー。もう帰ってこいって。うるさいんだから、ホント」

慌てて時計を見るととっくに休憩時間は終わっている。

「私も帰らないと」

ところが社長は私を制して立ち上がった。

「君たちはまだデザートが残ってるでしょ。光くんにもうちよつと付き合ってたげてよ。美春ちゃんの上司にはちゃんと話しておくからー。ね？」

確かにまだデザートが来ていなかった。食べずに帰るのは惜しい。社長がそう言うのならと、ありがたく残ることにした。

社長が去り、デザートが運ばれてくると、光くんは少し真面目な顔つきになった。

「女の子ってたいいてい甘いモン好きだよね」

「うん」

「例えばデートに行ってスイーツの店に入るとするでしょ？ 彼女と一緒にスイーツ食べる男と、彼女一人に食べさせて自分はブラック飲んでる男とどっちが好き？」

恋の相談か？ 可愛いつ。

「一緒に食べたら嬉しいかも……甘いモノの話で盛り上がると楽しいですよね」

「やっぱそうだよね」

破顔して抹茶アイスあん・生クリーム添えを頬張る。私も同様に口に入れて濃厚な抹茶の香りを楽しんだ。

「美春ちゃん、社長の息子だからって俺に敬語使わないでよ」

だいぶ打ち解けていたにもかかわらず、私は依然として敬語で話をしていた。年上なのは私だから、一方的にこちらだけが敬語を使うのはおかしいのだが。

「いやー、目の前に御曹司がいるのかと思うと、つい敬語になっちゃって」

「お、御曹司……」

「だって生の御曹司なんて見るの初めてだから」

あまりにアンポンタンな物言いに、光くんは声を上げて笑った。

「御曹司はやめてよ。俺の父ちゃん、サラリーマン社長だし。世襲じゃないんだから、俺がああ会社継ぐわけでもないよ」

言われてみれば確かにそうだが。

「それにそんな器でもないし、やる気もないもん。『たえ社長になれる器があったって、本人にその気がなかったらどうしようもない』って、父ちゃんいつも言ってるよ」

しかしこの言いようには納得しかねた。十代の若者が何を言うか。「まだ高校生なのに、自分から器を小さくしてどうすんの。それにやる気なんて人によって出てくる時期は様々なんだから、今から未来を限定しちゃダメだよ」

年長者として未来ある若者を力づける言葉。私っていいこと言っ
なあ。

「走る以上は一番を目指すのが鉄則でしょ？ 走る前から諦めてたらベストタイムだって出せないよ？」

光くんはじつとこちらを見ると、小さくつぶやいた。

「……なるほど。うん、あり得るかも」

自分の未来への可能性に気づいてくれたか。私の言葉が一人の若

者にとって人生のターニングポイントとなったかもしれない。十年ぐらいたったら彼に感謝されるぞ、きっと。

一つの明るい未来を想像して私はにっこり笑った。

美味しい食事をいただき、社長父子の暖かな関係を知り、光くんのピュアな人柄に触れるなど、様々に実りあるランチタイムを過ごして社に戻る。仕事始めの日にこんな幸せな思いをして、なんと幸先の良いスタートを切ったことだろう。

しかしそう思ったのはほんの束の間だった。職場に足を踏み入れた途端、待ち構えていたかのように同僚たちが好奇心丸出しで私を取り囲む。

「どうだった？ どうだった？」

どうだったとは？　しゃぶしゃぶランチのことを訊いているのか？

「そりゃ美味しかったですよ、とっても」

ひえええ、とお姉サマ方が口々に叫ぶ。

「そんなにオイシイ男だったの？」

男？　光くんのことを言っているのか？

「で、この話受けるの？」

この話ってどの話？　いかん、全く見えていない。

ポカンとしていると、杏子さんが詰め寄ってきた。

「この見合い話、受けるのかって訊いてんの！」

見合い！？　何じゃそりゃ！

「ポチ、ちよっとちよっと」

藤田さんが手招きして私を呼んだ。

「その様子じゃ、何も知らされてないんだろ。あのね」

光くんと私を残して先に社に戻った社長は、WEB事業部に寄る

と工藤課長を見つけてこう言った。

「あ、工藤くん、美春ちゃん少し遅れるけどっ。戻ってきてても叱っちゃだめだよー、これ社長命令ねっ」

「はあ……承知しました。あの……越智はひとりで何をやってるんですか？」

工藤課長との会話ではあるが、よく通る声で、部屋にいた全員に話は聞こえている。

「ひとりじゃないよー。お見合い中だからー」

「は？」

恐らくその場にいた全員が耳を疑ったに違いない。

「あとは若いふたりでってねー。今ごろ意気投合してるかなーっと。あれ、瀬尾くんもいたんだー。ププププ。そういうことだからね、美春ちゃんを叱らないように。分かったね！」

私はガックリと机に手をついて身体を支えた。

あのオッサン。どうしてもいつもみんなを誤解させるような爆弾発言をしてくれるのだ。私に何の恨みがあるのだ。せつかく愛のある父親として好感度アップしたというのに。

私は見合い疑惑を晴らすため、社長とタクシーに乗った時点から詳細にこのランチタイムの様々を語った。一通り聴き終わると、杏子さんがあらためて確認する。

「高校生の息子？」

「そうです。陸上の話で盛り上がっただけで、見合いでも何でもないんですよ」

これでみんな納得してくれただろう。社長流の冗談だったということが。

しかし、私を見る同僚たちの目はなぜか一様に冷たい。いったい何なのさ。

一同を代表して石津さんが口を開いた。

「若いオトコと、昼からしゃぶしゃぶねえ……いいご身分だな、お前」

げっ。そ、そこにツツコミがくるとは。ヤバい。何と言えよ。

言葉を探して焦っていたそのとき、私を救う天使の声が聞こえてきた。

「みんな、そろそろ越智さんを解放してやって」

係長の魅惑のテノールが同僚たちを渋々仕事に戻らせる。

私は心の中で彼に礼を述べた。口には出さないがこのキラキラした目を見れば、感謝の気持ちは通じているはずだ。

彼はこちらに向き直るとふんわりと微笑んで名前を呼んだ。

「越智さん」

「はいっ、何でございました」

「今日、一時間十五分居残りね」

「へ？」

黒い笑みに変わった美しい顔で私を見下ろす。彼がこういう顔をする時、良くないことが起きるのは経験済みだ。

「休憩時間オーバーした分はちゃんと居残って働いてもらうから」

「えええっ！」

ブブブツと周囲に笑いがさざめく。

「でもだって、それは社長が」

必死の反論はしかし冒頭だけで遮られた。

「社長には君が遅れたことは叱るなど言われたただだよ。僕が言ってるのは労働時間はきちんと守ってもらうってこと。言い訳は認めない。オーバーはオーバー」

鬼！ 融通きかねえ！

「か……課長おお」

課長に助けを求めてみたが、「俺に異論はない」と冷たく取り合おうともしてくれない。が、顔の前にかざした書類を持つ手が小刻

みに震えている。

笑っているなその顔は！ ザマアミロと言ってるだろう！ クッソー、恩を仇で返しやがって。

周囲を見回すと同僚たちは一様に「異議ナシ」という顔をしている。

「当然よね、しゃぶしゃぶだもん」

………今日は仕事始め。初日から居残り労働って何じゃそりゃ！ 幸先良いスタートを切ったはずだったのに………こんなんでも一年やっついていけるのだろうか。

午後七時十五分。パソコンの電源を落とし、机周りを片付ける。

そしてただ一人残っていた係長のもとへ報告。

「係長、終わりました」

彼は私を見上げてニコツと笑うと、ねぎらいの言葉を口にした。

「はい、お疲れ様」

本当にそう思ってるんだろうか。私がちゃんと仕事するかどうかが監視のために残ってたんじゃないかと疑ってかかる。鬼め。

昼に食べたしゃぶしゃぶなどとくに消化が終わって、胃は新たな食物を求めている。早く帰って御飯を食べよう。

訴えかける胃の辺りをさすってなだめつつ帰り支度を始めると、背中に優しい声がかけられた。

「お腹すいただろ？ 御飯食べに行こう」

振り向くとあの優しい笑顔が私を見つめている。

「か……係長お。後光が差して見えますうー」

鬼だなんて言っでごめんなさい。手を合わせて拝んだ。

「大げさだなあ。何が食べたい？」

「カレーライス」

「了解」

白い息を吐きながらカレー屋に向かって並んで歩いた。

「寒くない？」

「大丈夫です」

係長が右で、私が左で。

少し右を見上げると彼の顔が見えるこの位置が、妙に心地良かった。

第三十二話 息子登場（後書き）

第三十三話 私をデートに連れてって!?

「で、どんな奴だったの、社長の息子」

カレーライスを注文するといきなり係長が尋ねた。その口調ときたら口述試験を行う教官のようで、針の先ほどの誤りも見逃さないぞという体で私の返答を待ち構えている。

「どんな奴って……普通の高校生ですよ。私のこと尊敬します、なんて目をキラキラさせて言うんです。真っ直ぐというかピュアかどうか、可愛かったですよ?」

昼間の光くんの様子を思い出して微笑みながら答えた。しかし係長は何が気に入らないのか、すうっと目を細めて言い放った。

「真っ直ぐでピュアで可愛い? んなわけないだろへ?」

「思ったとおりだね。全く君は騙されやすいというかは?」

「そんなもん、演技に決まってるじゃないか。君が安心して気を許せるように」

言葉を失った私が呆然としていると、係長はテーブルに身を乗り出し、少し小声になって続けた。

「その年頃の男が考えることなんてたった一つだよ。目の前にいる女とヤレるかヤレないか」

「なっ」

身も蓋もない言い方に身体が仰け反った。

「か、か、か、係長!」

「こんなこと言われたぐらいで赤くなって、だから危ないんだよ君は」

舌打ちまでして忌々しそうに唇を動かす。お腹がすいただろうとか、寒くはないかとか気遣ってくれたさっきの優しさはどこに行っ

てしまったのか。

彼についてきたのは間違いだったかもしれない、と不安が心をかすめた。

顔の火照りを冷ますためにお冷やを飲んでいると、注文したカレーライスが運ばれてきた。

このカレー専門店では客の好みの辛さが選べるようになっている。私は普通の辛さのきのこカレーを、係長は五倍の辛さのロースカツカレーを注文したのだが、見るからに色と粘度が違う。食に対する飽くなき探究心がこの五倍カレーを口にしてみたいと私にささやきかけていた。

「ちよつと一口食べてみてもいいですか？」

「どうぞ」

彼の皿からスプーンで一口すくって口に入れる。うん、美味しい……うぐつ。

衝撃は五秒後にやってきた。口から火が吹き毛穴という毛穴から汗が出始める。

「水、水、水！」

自分のコップの水を一気に飲み干し、係長のコップにも手を出した。舌を出してハアハアと浅い呼吸を繰り返し、おしぼりで顔の汗を拭く。

「か……係長、いつもこんなに辛いのが食べてるんですか……？」

「うん。中学のときから友達と競って辛いのに挑戦してね。あんまり辛すぎると体に異常を来すから、試してこの辛さに落ち着いたんだけど」

そう言って激辛カレーを口に運び始めた。背広を脱いでいるが汗をかくこともなく、至って冷静にいつものように涼しげに。

「係長ってなんか、味覚がおかしくないですか……？」

「そう？」

甘いモノは食べないくせにー。

ふうと息を吐いて、私は自分の「普通に辛いカレー」を口に入れ始めた。

ペロツと激辛カレーを平らげ水を飲んでいた係長に、携帯電話が鳴っていると指摘された。食べることに夢中になっていると、マナーモードの音には気づかないことがある。バッグから取り出した携帯帯を操作すると、一通のメールが届いていた。送信者は――半田光。「誰？」

「え、えーと」

さっきの係長の態度を思い出しつい言葉を濁していると、彼の眉がピクリと上がった。

「……社長の息子？」

「……はい……」

「良く知りもしない男にメアドを渡したのか君は！　しょうがないな。で、何だって？」

考えてみたら私宛てに來たメールの内容を係長に話す義務などないにもかかわらず、迫力に押されてつつい声に出して読んでしまった。

「《今日はどうもありがとう。とても楽しかった。陸上部のみんなにも美春ちゃんのこと紹介したいんだけど、今度の日曜日練習が終わったら会ってくれない？》……陸上部の練習ですって。青春ですねー」

顔を上げた私が見たものは、目を細めて静かに怒る彼の顔だった。寒気を感じたのは錯覚ではあるまい。

「甘いな」

「へ？」

「ふたりっきりだと警戒されると思って陸上部なんて餌を撒いたんだよ。無邪気に信じた君がこのこ出かけていってもどうせ他には

誰もいないよ」

係長……黒いよ。

「わずかなチャンスに喰いつくのが男ってもんだ。あの手この手で君を誘い出す。若さ特有の押しの強さで攻める。情にほだされた君が押し倒される。まあこのパターンだな」

「あのー、自分の高校生の頃を基準に考えてませんか？ 誰も彼もが係長と同じじゃありませんよ」

「僕が高校を卒業して十年になるんだぞ。今どきの高校生なんてもっとタチが悪いに決まってる」

彼のいびつな考えを少しでも改めたいと、私は光くんの擁護をすることにした。

「係長、悪く考えすぎですよ。恋の相談みたいのされたんですよ、私。デートに行って一緒にスイーツ食べてくれる男と、彼女ひとりに食べさせてコーヒーだけ飲んでる男とどっちが好きかって。光くんは甘いものが好きだから、一緒に食べたい派なんですって。ね、可愛いでしょ？」

ほのぼのとした話に彼の顔つきも変わる。光くんの純な一面に興味を持った様子だ。

「ふうーん。で、君はなんて答えたの」

「え、一緒に食べる人の方が話が盛り上がって嬉しいなって」

途端に暗い影が彼の顔をさつとよぎり、いつもより低い声が這うように耳に届いた。

「……悪かったね、甘いモノが苦手で」

うわわわわ。なんか係長から黒い瘴気が出てる気がするっ。

「あつてもっ係長とだったら、スイーツふたり分食べられるからお得ですよねッ！」

慌ててフォローを入れると、スイッチが切り替わったみたいにニコツとした。

「そうだろ？」

……なんで私がこんな気を遣わなきゃいけないんだ。

「あの、そろそろ……」

疲れを感じて係長に帰りを促すと、待ったをかけられた。

「メールの返事はどうするの？ 早く断りなさい」

断りなさいって……拒否権ナシですかい。でもさすがにこれだけ言われると多少は警戒すべきなのかもという気にはなっていた。だけど社長の息子だし、無下に断るのも……

迷っていると再び返信を催促されたので、助言を求める。

「何て言ったら角が立たないですかね？ 一応社長の息子さんですし……」

「『日曜日は用事がある』でいいだろ？」

「嘘つくんですか？」

それには何となく気が進まないでいると、彼は表情を柔らげて優しく言った。

「嘘じゃないよ。嫌味なく誘いを断る方法。何回か続けて断れば、向こうだって諦める」

でも本当に陸上部絡みの話だったら、嘘についてまで断るのは失礼ではないか。

ためらっていると係長は私の携帯を手に取り、「見本を見せてあげるから」と言って入力を始めた。

《今度の日曜はデートです。学生は真っ直ぐ帰ってお勉強しましょう》

「デ、デートってまるつきり嘘だし、もろに嫌味じゃないですか！」

「いいのいいの、これで」

そう言ってピッと送信ボタンを押す。

「あっちゃっ係長！」

「最初から望みなしと思わせてやった方が彼のためだよ」

仮にも社長の息子に対して取る行動なのだろうか、これが。私は

もはやあ然とするしかなかった。

そこへ折り返し返信が来た。

《デートじゃ仕方ないな。でもまた誘うから絶対会ってね》

係長は私の携帯に鋭い視線を投げかけていたが、思いついたように口を開いた。

「……コイツ簡単に諦めそうもないな。またコイツからメールが来たら僕に転送して。君の代わりに返信してあげるから」

「はあ？」

「君に任せておくと、押し切られてふたりっきりで会うハメになりかねない。どこその有名スイーツを食べにいきましょうなんて誘われた日には、尻尾を振ってついていくだろうからな、君は」

……否定できないのが悔しい。

「大丈夫、僕に任せなさい。君の上司として、大人の男として、青少年に誠意を込めて諭してあげるからね。もちろん、社長の息子ってことも配慮するよ。君だって言っただろ？ 僕は目下の人間から慕われるって。だから何も心配しなくていいんだよ」

優しくそう言われて、つい分かりましたと返事をしてしまったものの、上手く丸め込まれたような気がしないでもない。

係長が私の分までカレーライス代を支払ってくれたので、ニヘラーとしながら「ごちそうさます」と頭を下げる。ところが顔を上げると、ニッコリ笑った彼の口から思いがけない台詞が飛び出した。

「日曜日、ドライブでいいよな」

「はい？」

「デートだよ。嘘つきたくないんだろ？」

意味が分からん。ちゃんと説明してくれ。

「誘いを断る口実。本当にデートすれば嘘ついたことにならないじゃないか」

どうだ名案だろ、と自慢げに言う。順序が逆、とツツコミをいれていいか？

「でもなんで係長となんですか」

「メール送ったの僕だからね、当然責任は取らせてもらおうよ」

「でっでもっ、なんかちよつと違うような……」

「気のせいだろ。じゃあ日曜日、君の家まで迎えにいくから」

「え、ええ？ 本当に？」

……なぜこうなってしまったのか、後から考えてみてもよく分からなかった。

兄が日曜日に映画を観に行こうと言い出したのは、金曜の夜のことだった。

デートもせずに真っ直ぐ家に帰ってきた兄は、映画鑑賞の連れなと困るはずもないのになぜか妹を誘う。

「スリラーはお前と観たいんだよな」

変態なりのこだわりらしい。しかし日曜日は先約があると断った。

「誰と会うんだよ」

「……瀬尾係長」

「デート？」

「誘いを断るためのね」

眉をひそめた兄に「深く考えなくていい、大したことでねえがら」と添えて説明を回避する。話が長くなりそうで面倒だったのだ。

すると兄は得心した顔でうなずいてみせた。

「あいつ、モテそうだな」

……どうやら、係長が女性からの誘いを断るためのデートだと勘違いしたようだ。しかし私はあえて訂正せずに調子を合わせた。

「そりゃもう、モテモテ。言い寄られてばかり」

「……そんなにモテるのか」

なぜか顔を曇らせる。モテ度でも勝負したいのか、兄よ。

そこで私は係長がどれほどモテるのかということを、かつて集めた情報を元に教えてやった。じっと聴いていた兄は、怪訝そうな顔で声を上げる。

「付き合うタイプは決まって美人でキャリア志向、もって数ヶ月、幕を引くのはいつもあいつか。――変態？」

変態はそっちだ。

「じゃなかった、変人？」

味覚は変だけど。

「でなけりゃ、病人――心の」

「あんちゃん、何言ってるんだ？」

「勝負したら面白そうだと思っただけど……病人は困るなあ」

「だから病人でねえって」

係長のために否定したが、兄は何やら考え始めてそれ以上口を開こうとはしなかった。

対抗意識を燃やすあまりライバルを病人扱いするとは、変態の頭の中はどうなっているんだ。

成り行きデートをすることになった日曜日がやってきた。

下に着いたという連絡をもらい、自宅マンションを出て見覚えのある車に近づく。私の姿を認めた係長が、わざわざ運転席から出てきて助手席のドアを開けてくれた。

初めてこの車に乗ったときもそうだったが、これをしたら女の子が喜ぶというポイントを押さえているのはさすがだ。私にまでその特技を遺憾なく発揮してくれなくても良いのだが。

彼の車は藍色のステーションワゴン。居住性が高く、乗り心地が良い。三年ほど前に自動車ディーラーの営業をやっている友人に頼

み込まれて買ったのだそうだ。

ちなみに兄の車はシルバーのセダンだ。こちらは勤め先の事務所にやってきた営業マンと一週間に及ぶ交渉の末、従来の価格から大幅に値引きさせて購入したいきさつがある。

ドライブの目的地については「ベタなデートスポットだよ、君のために」としか教えてくれなかった。そうすることで彼自身が楽しんでるみたいで、「成り行きと責任」だけでデートの相手を務めている割には、車内の空気は暖房とは違う暖かさで満ちていた。カーラジオから最新の洋楽が流れてくる中、今日もまた彼が尋ねる。

「お兄さんは今日何してるの？」

なぜ彼らはこうも互いを意識するのか、不思議で仕方がない。係長を病人扱いした兄は「美春がいらないんじゃないから、彼女と出かけてくる」と、こっちの方がよほどアブナイ発言をかまして外出した。

「兄もデートです」

「モテるんだろうな」

彼もまたモテ度を競いたいのか。私はややウンザリして返答した。「そりゃあもう、モテますよ、係長と同じで。でもね、たいがいフられるんですよ、係長と違って」

「どうして僕を引き合いに出すんだ」

幾分とがめて言う。私は嫌味の成分が混じった言葉でかわした。

「係長が自分を見つめ直すお手伝いをしてるだけです」

「遠回しに非難してるだろ」

「あっ、分かります？ 鋭いですね、係長」

「……君ほどじゃないけどね」

そうかな。私ってそんなに鋭いかな。いや、参ったなもう。

褒められて内心有頂天になっていたら、係長がボソツとつぶやいた。

「――課長の家でも言ったけどさ」

やけに神妙な顔つきで彼は言葉を継いだ。

「今はもう違うから。本当に、誓って、そういうんじゃないから」
一つ一つ区切って強調するところに、つい笑いを誘われる。

「別に私に誓ってなくてもいいですよ」

取っ換え引っ換え女性と付き合っていたことを殊勝にも反省しているのだろうか？

「君が信じてくれることが、僕にとっては何より重要なんだ」

ハンドルを握る彼の横顔は真剣そのもの。……しかしまさか、そんなに重要だったとは思わなかった。軽く考えていた自分を反省する。

「係長って負けず嫌いなんですね」

「え？」

「心配しなくても大丈夫ですよ、人気投票は兄じゃなくちゃんと係長に投票しますから」

そう言った途端、車がいきなり蛇行した。

「係長！ 危ないじゃないですか！」

「ご……ごめん」

高速を走っているというのに、なんて危ない運転をするんだ、この人は。

私はラジオのボリュームを下げ、彼を安心させてやるつもりで言葉かけた。

「信じますよ、係長がそう言うんなら」

「え？」

「係長がそうだって言うんなら、そうなんですよ？」

しかし彼は厳しい目でしばし前方を見つめ、苦い声を出した。

「例えば僕にとって不利な状況証拠があっても、僕の言うことを信じる？」

状況証拠って……何だ。

「それでも越智さんは僕を信じる？」

冗談で返すのは許されない雰囲気がこの場を支配している。少し思いつめた横顔が救いを求めているかのように見えた。

もしかしたら、過去のどこかで誰からも信じてもらえなかった出来事があったのだろうか。親しい人でさえ、彼を信じてくれなかったことが。

でも私はあの日、私たちが和解した日に、彼は信じられる人だと思った。安心して彼を信じていいのだと思った。いったん信じたらどこまでも信じる。彼を疑うことは自分の決意までも汚すことになってしまいうから、私の答えはもう決まっている。

だけど、と横顔に浮かぶ不安を見て思う。

彼が望んでいる言葉は何なのだろう。ただ信じる、と一言言えばそれで満足してくれるのだろうか。それとも装飾過剰な言葉を連ねて信用していることを示せば良いのだろうか。

思いを巡らせても正しい答えなど分からない。私は結局、余計なものを取り去って残った、私自身が望む気持ちを彼に尋ねた。

「係長の言うことを信じるって言う私を、係長は信じてくれますか？」

じっと前方を見据える彼の口から、一呼吸分置いたあとで静かに返事が滑り出る。

「——うん、信じる」

「じゃあ同じです。係長が私のこと信じてくれるから、私も信じます。私はそれだけでいいです。それだけあれば」

状況証拠だの周りの意見だのはどうでもいい。お互いに信じてるって気持ちだけあれば、それだけでいい。

彼は言葉で応じようとはせず、何かに耐えるようにただハンドルを握る手に力を込めた。そして熱のこもったような声でつぶやく。

「……なんで今、運転中なんだろう」

「なんでって、係長がどこかに連れてってくれてって言ったからですよ」

直近のことさえ忘れてしまうとは、重度の健忘症なのか？ 仕事に差し障りが出ないか心配だな。

再びラジオのボリュームを上げると、軽快な音が耳に飛び込んできた。

冬の陽光が差す車内から空を見上げる。

——暖かい一日になりそうだった。

第三十三話 私をデートに連れてって!?(後書き)

第三十四話 遅れて来た真実

ドライブの終点は横浜市にある、全体がレジャー施設からなる人工島だった。

車を降り、鈍い色の海を遠くに見やって息を大きく吸い込む。

駐車場から彼方を見ると、アトラクションらしき大型遊具が目についた。遊園地か。確かにベタなデートスポットだが。

実を言うと絶叫マシンは苦手だ。地に足がつかないとどうも不安になる。

「ああいうの、苦手？」

グレーのウールコートに袖を通しながら、瀬尾係長が尋ねた。顔色を読み取られたのだろうか。しかし弱みを見せたくない私は虚勢を張った。

「全然平気です。ウエルカムウエルカム。カモンベイベ、ですよ」

時刻は午前十一時を回ったところで、少し早かったが先に腹ごしらえすることになった。飲食店が集う建物に向かい、南国風に意匠されたレストランにて二名から注文可能というシーフードグリルを頼む。

店にしろ料理にしろ、私が選ぶものを係長はニコニコしながら承服するだけで、決して自分の希望を口に出そうとはしなかった。仕事中は意見を戦わせたり、自分の意志を曲げないことが多い――柔和な顔と口調で手厳しくやり込められる、と石津さんがたびたびボヤいている――ので、こういう場では他人の意見を全部採り入れてくれるのだろうと、私なりに解釈した。

彼が唯一希望らしきことを述べたのは、名前で呼んでほしい、ということだった。

「会社じゃない場所で『係長』なんて呼ばれたくないな」

「もう『係長』が名前みたいなものじゃないですか」

そう言うとき少し拗ねた表情をするのが可笑しかった。

海の上に突き出たこのレストランで、食事ばかりか景色も楽しんで贅沢な時間を過ごした。香草を使って料理されたエビやマグロなど海の幸を、彼も「美味しい」と言ってがつつりと食べていた。

食事の合間のお喋りはもっぱら私が担当した。子供の頃にやらかしたいたずらや最近話題のミステリー、何を話しても彼は楽しそうに聴いてくれる。すると私も嬉しくなってますます舌が滑らかになるのだ。

私はもともとお喋りな人間だが、誰に対してもというわけではない。話好きな人の前では聞き役に徹して相づちを打つだけのこともある。でも聞き役としての係長は、まるで満点を取れるくせに故意に間違った解答をして教師を困らせる生徒のようだ。

私に好きなように話をさせておいて、わざと核心部分で先回りしたり、変な方向に逸れると軌道修正してくれたり、そのたびに驚かされる。優しいのか意地悪なのか分からないのだ。

私ばかり話してつまらなくはないかと訊くと、彼は首を横に振って答えた。

「話をしている君の顔を見ている方が面白いから」
面白いのか……私の顔？

レストランを後にすると早速チケット売り場に向かった。入園料は無料で、施設の利用者がそれぞれ目的に合わせたパスを購入するようになっている。

食事代は全て払ってもらったのでせめてチケットぐらいは自分で買うと主張したが、係長は笑って取り合おうとしなかった。自分から言い出したデートだから責任を感じているのだろう、きつと。

チケツト売り場が入っている大きな建物は水族館だった。確かにこれもベタなデートスポットではあるが、言ってくれればシーフードグリルは頼まなかったのに。私はそれほど繊細な人間ではないが、魚を食べたあとに魚を見るって……いや別に見る魚を全て食用と捉えているわけではない。

でももし絶叫マシンに乗ることになったらどうしようと心配していたので、これでひと安心だ。水族館で心が癒やされる方がずっと嬉しい。もしかして係長は、私が苦手なのを見抜いてここに入ろうと言ってくれたのかもしれない。察することの上手い人だから。

館内に入りアザラシやホッキョクグマなど海の動物たちを順に見ていくと、やがてパノラマの大水槽から漏れるブルーのきらめきが目に飛び込んできた。無数の魚たちが泳ぐ迫力に圧倒され、思わず感嘆の声を上げる。

「美味そうな魚はいる？」

私をからかう声を聞いて、シーフードグリルを食べたのはやはり失敗だったかとそっとつぶやいた。

魚たちを見ながらふと思う。この一種憧憬にも似た感情はなんなのだろうと。太古の昔生命が生まれた海の記憶が細胞に刻み込まれているから――などどこかで読んだことがあるけれど、逆に魚たちは陸上にいる私たちをどう見ているのだろうか。憧れたりはしないのだろうか。

更に遠くの時代にまで思いを馳せていると、係長に声をかけられ先に進もうと促された。細長いチューブのように周りを水槽に包まれた空間を、エスカレーターで上に昇ってゆく。

「気に入った？」

「はい、とっても」

イルカのショーが終わると、係長がイルカ水槽を見に行こうと言った。水族館を構成する複合施設の一つである。

トンネルの形をした水槽を下から見上げると、イルカたちが悠々と泳いでいる。優雅に踊るような動きを見せたかと思うと突然方向を変え水の中を突き進む。その変幻自在な動きに目を奪われた。

「陸の上の越智美春とどっちが速いだろうな」

「あはは」

水槽には上から太陽の光が差し込んでいて、海底から上を見上げる魚の気分にならせてくれる。

「これって魚目線ですよ」

「うん、いつか君に食べられるとも知らずにのんびりと泳ぐ魚」

「ひど」

並んで水槽をのぞき込む目の前を、愛らしい目をしたイルカが横切った。すると微笑んで彼が言う。

「君に似てる」

以前藤田さんからは飼い犬に似ていると言われた。自分は動物顔なのかと思い、訊き返した。

「……顔が？」

彼はイルカを目で追いかけながら楽しそうに笑う。

「自由自在なところ」

「どういう意味ですか？」

「言葉のとおりだよ。初めて会ったときも――」

初めて会ったとき？ 非常階段か。会ったというより私が一方的に見て逃げ出したんだが、あれを自由自在と表現するとは、係長の言語センスって変わってるな。

彼はそれ以上先を続けようとはせず、蒼い水の中で戯れるイルカたちを楽しそうに目で追った。

外に出ると冬の弱い太陽の光が私たちを出迎えた。例年より高い気温が海辺の寒さを和らげている。

あの大きな水槽の前で魚を見ながら考えていたことを、係長にぶつけてみた。

「大昔、生命の進化の過程で、魚に足が生えて陸の上に上がるじゃないですか」

「うん」

「どうして魚は海から出たいと思うようになったんでしょうね」

彼は一瞬考え込んだが、すぐに目に楽しそうな色を浮かべて答えを出した。

「陸の上の方が美味しいものが食べられると思ったんじゃないか」

じとつと彼を睨んだ。

「本気で思っていないでしょ。係長が食欲優先の発想するわけないし」
彼はクスクス笑いながら言い訳を口にする。

「最近どうも君の影響を受けてるみたいなんだ。——君はどう思うの？」

「新たな種との出会いを求めてたのかなあ、なんて」

「つまり性欲？」

「せつ」

要約しすぎだ！ 憤慨していると彼は更に軽口を叩いた。

「ごめんごめん、足の生えた魚も純愛したかったんだよな」

「殴りますよ、係長！」

人がせっかく浪漫的な生命の進化論を考えていたというのに。茶化した係長に拳を振り上げようとしたそのとき、こちらにゆっくりと近づいてくる人影を認めた。張り詰めたその表情を目にして私の動きが止まる。

嘘だ。こんなところで。

不自然に固まる私を見て係長が不審に思ったのか、声をかける。

「どうしたの？」

適当な返事や取り繕う言葉は全て口の中で消えた。代わりにいくつもの懐かしい映像が脳裏に浮かぶ。

——教室のざわめき。廊下を走る靴音。詰襟の制服。日に焼けた笑顔。

嘘だ。こんなところで会うわけなのに。五年もたって、こんなところで、彼に。

『思わぬ場所で思わぬ人に出会う確率って結構高いんですよ？』

近所のカフェで社内の人間になど会うわけがないとタカをくくる係長に、注意を促すために言った言葉。

まさか自分が——

「越智」

あの頃と同じように私の名字を呼ぶ声を聞いて、やはり彼なのだ、と心が震えた。

——水野くん。

「久しぶり」

「……うん」

五年ぶりに見る水野くんは、あの頃の面影はそのままに少し大人の顔つきをしていた。私は言葉が何も出てこなかったのだが、彼は言葉を選ぶのに難儀しているようだった。

「知り合い？」

沈黙が降りる場を救ってくれた係長にホッとして「高校の同級生です」、水野くんに対しては係長のことを「同じ会社の人」と紹介

し、二人が会釈する。

少し離れた場所にこちらを見る若い女性がいて、どうやら彼の連れらしかった。

「転勤で去年の秋からこっちにいるんだ」

「そっか」

係長をチラと見た彼は再び口をつぐんだ。

氣を利かせて場を離れた係長を視界の隅に置き、私は水野くんを前に途方に暮れた。

何を話せば良いのか分からない。今更確かめても仕方のないことを口にするのはばかられる。

しかし彼はためらいながらも口を開いた。

「その……あれからずっと気になって……」

言いにくいことを口にしようとする雰囲気、あの日私たちの間で起きた出来事に触れようとしているのだと嫌でも気づかせる。

今更何を気にするというのか。私がカン違いしなかったかどうか、心配していたのだろうか。あの行為自体を過ちだったと捉えているのだろうか。

たとえそうであっても五年間の距離と空白は、とある同級生と一瞬交差した時間のことなど忘れてしまうには充分であっただろうに。

ところが水野くんは予想外の言葉を繰り出した。

「越智が陸上やめたの、俺のせいじゃないかって……」

「は？」

「あれからすぐに東京に行っちゃって出席日数ギリギリで卒業しただろ？ 陸上部のある地元の企業からも誘いが来てたのに、先生も陸上やめさせたくないって言ったのに、結局東京で専門学校行くことにしたって聞いて。それで俺……」

陸上。そういえば水野くんは私が試合で勝ったびに喜んでくれて

いた。クラスの誰よりも。彼が言ってくれた言葉を今でもはつきり憶えている。

『将来のオリンピック選手だな。俺友達さ自慢でざる』
でもどうして彼が気に病むのか分からない。

「俺が無理やりあんなことしたから……」

いったん言葉を切ってまぶたを伏せる様子に、自責の念の大きさが見え隠れしていた。

「それで学校に来られなくなったんだろ？ 俺に会いたくなかったから。家に独りでいるのが怖くなって、東京のお兄さんのところに行ったんだろ？」

彼が推量で述べていることはある意味正しい。彼に会って決定的な言葉を聞くのが怖くて、独りぼっちが怖くて、私は逃げ出したのだから。

でも何か違う。彼が悩み恐れる理由はそこにはないはずなのに。

「水野くん、あの……」

彼はしかし私の言葉は待たず、五年の間ずっと胸に秘めていた苦悩を今こそ解き放ちたいと言わんばかりに、振り絞るような声を上げた。

「でもレイプとかするつもりじゃなかった。本当にそんなつもりで越智のところに行ったんじゃないんだ」

——頭を殴られたような衝撃だった。

乱暴されかけてショックを受けたために学校に来られなくなった

——
水野くんが五年間もずっとそうカン違いしていたと知って、胸が痛んだ。私が陸上をやめたことを自分のせいだと思い込み、人知れ

ず悩んでいたのかと思ったら、哀しくなった。

なぜ私はあるとき逃げ出したんだろう。踏みとどまっていれば、彼の気持ちを確かめていれば、彼は苦しまずにすんだのに。

「乱暴されたなんて思ったことなかったよ。陸上やめたのは新しいことをやりたかったから。水野くんのせいじゃない。水野くんは関係ないよ。自分で決めたことだから」

苦い思いから解放させてあげたい一心で訴えたが、彼は硬い表情を崩すことはなかった。私はこちらを見守ってくれている係長の姿に一度視線を転じてから、再び水野くんを見て微笑んだ。

「仕事好きだし、今の会社も楽しい。この道を選んで本当に良かったと思ってる」

強ばっていた顔が緩んだ。吐息混じりのつぶやきが安堵の色を見せる。

「……そうか」

そして私も気づいたのだ。五年間も宙ぶらりんになってた想いに。時折現れては私に幻想を見せていた彼への想いに。

……もういいよね？ 閉じ込めておくのではなく、解放してあげよう。

なぜそんな気持ちになったのか正直分らない。引き出しを開けるたびに彼への想いに浸り、何も変わることはない懐かしい愛情に安心さえ得ていたのに。

今は、あの想いをきちんと整理ボックスの中に入れて名前をつけるべきだとさえ、思う。

そう思える自分を応援してやれ、と心が後押しする。

「ひとつ訊いていい？」

「うん？」

「あのときどうしてあんなことしたの？」

なじるのではなく、ただ穏やかに問いかける。今の私の心そのままに。

「私のこと可哀相だって思ったから？　母が亡くなって独りでいた私に同情したの？」

こんなふうに訊いたのは、今なら受け入れられると思ったからだ。あの頃の私は、可哀相な子だと他人から同情されても仕方ないほど、小さくて弱かった。

それを認められるようになったのはきつと、係長が今の私のことを「可哀相なんかじゃない」と言ってくれたからだと思う。

水野くんは困ったように目を伏せ、ためらいがちに唇を動かした。
「あ……えーと……いやでも……こんなこと言ったら怒られるかもしれない」

「大丈夫。怒らないよ、五年も前のことだから。ただ知りたいだけ」
そう言ってあげると、彼は係長がいる方にチラッと目をやった。

「そう……そうだな、越智だって……いるんだし。なら平気か」
何かを納得した彼は、「実を言うと」と恥ずかしそうに口を開いた。

「越智の泣き顔見たら、ついムラムラと……」
へ？

「その前段階で抱きしめてるときからすでにヤバかったんだけど」
何だって？

「……あの顔見たら、プツツとキレた」

……

……つまり、単なる衝動だったと。下半身の事情だったと。

つい、拳を握りしめてプルプル震えた。係長がしつこいぐらいに口にした、『その年頃の男論』が嫌でも思い出される。

おい。前言撤回してもいいか。やはり怒ってしまいそうだ。
しかし怒りの発動は起こらなかった。なぜなら。

「だからその……越智に好きな奴がいたとしたら、すごい悪いこと
したってあのとき思ってた……」

真っ白になった頭の中に、このフレーズだけが何度も響いた。

スキナヤツガイタトシタラ――

――この五年、彼に会いたくはなかったけど、いつかどこかで会う
ことを想像していなかったわけじゃない。

想像の中の水野くんは、あの頃の私を好きだったと、今でも私を
想っていると甘くささやく。何年たっても私を愛し続ける彼。私が
憧れてやまない純愛を捧げてくれる彼。

それが愚かな妄想であることを分かっているながら、夢を見続けて
いた私。

だけど。

現実の彼は、五年もの間私に対して責任を感じていただけだった。
衝動で私を抱こうとしたことに。

あやふやなままで終わってしまった私たちの関係ではなく、私が
陸上競技をやめたことだけをずっと気にして。

これが答えなのだ。逃げ出して、ずっと目を背けてきた答え。

今はっきり見える。

私たちの想いは最初から交わってはいなかったのだと。

第三十四話 遅れて来た真実（後書き）

昔の想いを解放しようとする美春。これでようやく瀬尾にも春がやってくるのでしょうか。

しかしあまりな水野くん（笑）美春に試練ばかり与える作者は鬼？
いえ、親心です。

次回、急展開です。

第三十五話 海から出る魚

水野くんとは元気で、と言って別れた。ぼんやりしたまま、ただ瀬尾係長の横を何処とも知れぬ方向に歩く。

「元カレ？」と訊かれて、頭が働かずにありのままを答えた。

「……ただの片想いの相手です」

「フラれたの？」

少しはオブラートに包んで訊かんかい！

優しいのか意地悪なのか分からない彼に、自嘲の色を込めて事実を告げる。

「……気づくのに五年かかりましたけどね」

彼は同情も面白がりもせず、ただ淡々と確認するように訊いた。

「好きだったんだね」

立ち止まって正答を模索する。五年間の想いは一言では簡単に表せない。

「好きだったんだと……思います」

ずっと同じ濃度で水野くんを想っていたわけじゃない。月日が経つにつれ彼を思い出す頻度も少なくなっていた。

それでも決して忘れることはできなかった。忘れなくなかったのかもしれない。

彼への想いを胸に抱いたままであれば安心だった。進展も後退もしない恋をしていれば安全だった。きっと藤田さんの言ったとおりだ。惰性に想い続け、変わらぬ夢を見ていればそれでよかった。

五年前に知るはずだった、知るべきだった答えを今日見つけて、悲しいというよりホッとした気持ちができるのはなぜなんだろう。やっと終わったんだなって納得している自分、終わりを受け入れている自分を不思議に思うのも、長く親しんできた彼に対する想いの名残なのかもしれない。

「……なんでこんなことベラベラ係長に喋ってんですかね、私は」
いくら彼が聞き上手とはいえ、自分の最奥にある心情を口に出す
など、今日の私はどうかしている。フラれたせいかな、やっぱり。

頭にふわっと温かみを感じた。係長が掌を私の頭の上に乗せて優しく微笑んでいる。そこから波動のようなものが伝わって全身に温
もりが広がっていくような気がした。

「たまには素直になるのもいいよ」

声までが温かくて、つい涙腺が緩んでしまう。いきなり涙が一筋、
つーっと流れて、慌てて手で拭いた。

「見……見なかったことにしてください」

係長が優しくするからだ。こんなふうにながむき出しになっ
ているときに。

なのに彼は私の願いを聞き入れてはくれない。

「それはできないな。だって他の奴には絶対見せないだろ？」

だ・か・ら、優しくするのか意地悪するのかどっちかにしろ、性
格悪！

再び歩を進めると「あのさ」と係長が声をかける。

「さっきの話。足の生えた魚の話」

「はい」

「君も海から出てみれば？」

まるでちょっと散歩に、というぐらいのさりげなさで言う。だが
意味を測りかねた。

「……美味しいものを求めて？」

「じゃなくて。——陸の上には出会いが待ってるんだろ？」

つまり、新しい恋をしろと言いたいのかな。私に気を遣って失恋の
特効薬を示してくれているのだろうな。すぐに次の恋ができるとは思
えないが、出会いを想像するぐらいなら。

「私にも素敵な出会いがありますかねえ。例えば」

パツと思ひ浮かぶベタな出会いのシチュエーションとしては。

「満員電車で痴漢を撃退してくれた人に一目惚れ。……私、女性専用車両に乗ってるから可能性は皆無ですね」

「いや、あのね」

「本屋で同時に同じ本に手を出した人。好みが似てるからアプローチしやすい。……でも本は兄に買わせるから本屋には行かないし」

「そういうんじゃない」

「エレベーターに二人きりで閉じ込められる。極限状態の恋。……階段使ってるからなさそうだなあ」

「だからさ」

「携帯拾ってあげたことから始まる恋ってのもありますよね。それが可能性としては」「少しは人の話聞けよ!」

いきなり大声を出されて泡を食った。

「映画や小説じゃあるまいし、そんな出会いがそうそうあるわけないだろう。それに、もう出会ってるかもしれないって可能性は考えないの?」

彼が少し苛立っているのを見て、真面目に考えることにした。

「……どこで?」

「会社とか」

同僚ってことかい。何を今更な話じゃございませんかね。

「私のことそういうふうに見てる人なんていませんよ。せいぜいがペットでしょ」

「そんなことはない。君は自分を女性として過小評価しすぎだ。自分に興味をもつ男がいるなんて考えてもみないんだろう」

ずっと意識から閉め出してきたことを巧みに突かれて、まごつきながらも肯定する。

「だって……恋愛しようなんて思ってたから」

「うん。でもこれからはもっと周りに目を向けてもいいんじゃない」

かな」

真剣な目に動かされて少しは考えてみようという気になり、同僚たちの顔を一人一人思い浮かべてみた。しかしそういう対象として見ることはどうしてもできず次々と消去されていく。

脳内処理をしている間、係長はじつと心配そうに私を見守っていた。失恋した部下を慰めようと出会いの可能性を指摘してくれたのに、何もありません、では失望するかもしれない。それは申し訳ないので言い方に気をつけよう。

「そうですね……出会ってないとは言えないですね」

二重否定を使って控えめな肯定を試みたら、嬉しそうにうなずいた。

「そうだよ。出会いっていうのは案外身近にあるものなんだよ」

私の前向きとも取れる発言に気を良くしたのだろう、力説することで更に気を引き立てようとする。

「まだ君が気づいていないだけなんだ。実際はすぐ手の届くところに恋ってあるんじゃないかな」

「係長」

呼びかけると彼は輝くような笑顔で応えた。きつと「すぐ手の届くところにある恋」とやらの私が思い当たったとカン違いしたのだろう。期待を裏切って申し訳ない。

「お腹すきました」

「え？」

「すぐ手の届くところにおやつが欲しいです、恋より先に」

立ち止まり、顔を硬直させた彼の心境はおそらく、出来の悪い生徒を持った教師、あるいは自分の思うように動かない部下に頭を悩ませる上司、といったところか。

でも腹が減っては恋もできないではないか。まずは食べることが優先だ。

ややあって彼は、溜息を一つついて微笑んだ。

「……何が食べたい？」

よかった。いつもの彼の台詞だ。

私は安心してさっきから頭の中で存在を主張してやまない甘いおやつの名を告げた。

「クレープ」

「了解。……でもその前に」

突如として薄ら寒い笑みを浮かべた彼が人差し指を向けた。その方向に目を動かす。

「……………私たちが立っていたのは、とある絶叫マシンの真ん前だった。」

フラフラになった私に係長が手を差し伸べた。二の腕をつかまれるに任せてようやく乗り物から降りる。叫びすぎでのが痛い。

あんなに高低差があり、身体がフワツと浮く感覚が気持ちの悪いシロモノに乗ったというのに、彼はケロリとして、私の具合を気にするどころかたしなめるように言った。

「ウエルカムウエルカムなんて言うから大丈夫だと思ってたよ。苦手なら苦手ってなんで正直に言わないのかな、君は」

それについては激しく後悔していますとも。苦手と察して水族館を選んでくれたのだと、係長の優しさを信じて疑わなかったこともね。

しかし目が回ったままでは何も言い返せない。足元もおぼつかず、つい彼のウールコートの腕にしがみついた。

「す……すいません、係長……目が回って……」

きつと腹の中で笑っているに違いないと思いながらも、目をつぶり額を肩に預ける。心なしか腕がこわばったような気がしたが、私を支えるのに力を入れたためだろう。……ごめんなさい、重くて。

「……いいよ、好きなだけそうしてて」

耳もとに落ちる声が甘く聞こえるのはなぜだろう。また意地悪なことを言われると思ったのに。

今日一日で係長はまたいろんな顔を見せてくれた。会うたびに新しい発見をした気分になる。今も、こうやって力強い腕が支えてくれるだけで安心できることもあるんだって、初めて知った。

失恋したけど。……そばにいてくれたのが係長でよかった。

帰宅した私に、待ち受けていたように興味半分、心配半分といった顔で兄が尋ねた。

「どうだった、美春？」

いろいろあったが全てを兄に語るのは面倒だ。私は当たり障りのない返事をした。

「楽しかったよ」

しかし一言で済まされて不満なのか、兄は更に突っ込んで訊いてくる。

「告白されたか」

何を言ってるんだ、いったい。

「告白どころが、フラれたよ」

「……何だって？ フラれた？ お前がか」

驚きの声を上げて確認する兄に、もはや開き直りの境地で繰り返した。

「そうだよ、フラれたの。何か文句ある？」

兄は一瞬言葉に詰まったが、不可解さを多少残しながらも喜色を浮かべた。

「いや、ないけど。それにしても楽しそうだな」

「だから楽しかったって言ったべ？」

「……よく分からんが、フラれてなによりだ。忘れろ忘れろ。お兄ちゃんの胸で泣くか？」

……早くも『失恋した妹を慰める兄』の態勢に入ったか。

「さんざん泣いたあとでちょっと恥じらいながら『お兄ちゃんがい
てくれればいい』なんて言ってくれたら、それだけでメシ三杯いけ
る」

「……着替えてぐる」

ああなっってしまったら、流すに限る。妄想に浸る兄を残し、自室
に向かった。

部屋着に着替えながら先程の兄の言動を思い返した。ひよっとし
て私が係長にフラれたとカン違いしたのだろうか。

しかし今更真相を話すのも気が引けるし、何よりも他のことが頭
を占めていた。

『忘れるなよ。海から出ること』

ついさっき別れ際に言われた言葉。マンションの扉の前、陽も落
ちて薄暗がりの中、あれはただその場の慰めで口に出したのではな
いのだと、係長の真摯な表情が訴えていた。

海から出る……

その言葉を胸の中で反芻はんすうした。

私は今まで深い海の中、深海魚みたいに泳いでいたのかな。とき
どき昔の想いに浸るだけで満足して。変わらぬ夢を見続けて安心し
て。

でもそこから出ていかないと出会いに気づくこともない。

今まで考えないようにしてきたけど。目を背けてきたけど。私に
もできるのかな。

海から出ること。

海から出たら、係長は喜んでくれるかな。こんな出会いがありま
したって報告したら、「よくやった」って褒めてくれるかな――

暖かかった日曜日が嘘のように翌週はぐっと厳しく冷え込んだ。風邪やインフルエンザで欠勤する同僚もチラホラいる中、私は変わらず元気で仕事に励んでいる。

この日私はカメラを手に出していた。ホームページ制作に、クライアントから提出された画像だけでは足りなかったので写真撮影に行ったのだ。

満足するものが撮れて帰社する途中、会社近くのコンビニに寄り、午後の休憩を兼ねて肉まんを食べることにした。この寒さの中、熱々の肉まんを頬張り肉汁がジュツと口に広がる様を想像するだけでも身体の熱量が上がりそうだ。

レジに近づき若い店員に声をかける。

「肉まん一つください」

「肉まん一つ」

ほぼ同時に声が重なり隣を見ると、スーツを着た男性と目が合った。三十歳前ぐらいだろうか、細い黒縁の眼鏡がシャープな印象を与える。瀬尾係長ほどではないが長身で、しかもまずまずのオトコマエだ。

コンビニ店員は恐縮して肉まんが最後の一つである旨を述べた。そういうことなら、レディファーストだろう。チラと男性を見て暗に譲れと主張したら、「じゃあ、俺はあんまんでいいよ」とあっさり身を引いてくれたので、微笑んで礼を述べた。

よしよし。肉まんは次の機会にしてくれたまえ。

店を出て行儀は悪いが食べ歩きをした。熱いのでハウハウしながら口の中で具を転がす。

視線を斜め前方に動かすと、先程の男性がやはりあんまんを食べながら同じ方向に向かって歩いていた。そして私たちの距離はつかず離れず、全て食べ終わる頃には会社が入っているビルに到着し、そろってエントランスホールに足を踏み入れる。

このビルで働いてる人だったのか。

男性は少し驚いたようだったが軽く会釈するとエレベーターに足を向けた。私は警備員のおじさんと二言三言会話を交わして、いつものように非常階段へと向かう。

階段を上りながらコンビニでのやり取りを思い返し、これもまた一種の出会いかもしれないと考えた。

最後の肉まんに同時に手を出した男女。

悪くない。同じビルにいるのなら再び会う確率もゼロではないのだ。

これはぜひ係長に報告せねば。きっと喜んでくれるはずだ。比較的身近でしかも映画にでも出てきそうな出会いではないか。タイトルは『肉まんが呼び寄せた出会い（仮）』

係長、どんな顔するかな。わくわくするあまり小走りで階段を駆け上った。

「ただの偶然だよ」

業務終了後に工藤課長との話が終わるのを待って、今日の出来事を報告した私に係長はすげなく言った。

「すぐそのコンビニなら同じビルの人間とかち合うのなんか珍しくないだろ。今日みたいに寒い日は誰だって肉まんに手を出すさ。運命の出会いでも何でもないから」

冷静に分析されてガクンと肩を落とす。すると横で話を聞いている課長がブツと吹き出した。

係長はそれを一瞥すると噛んで含めるように言葉を重ねた。

「忘れなさい。それは出会いじゃなくて、ただの通りすぎり」
通りすぎり……そうなのか……

まだ肩を震わせて笑っている課長を睨んで、声を上げる。

「何がそんなに可笑しいんですか！ 肉まんがいけないと言っても言うんですか！」

「いや……俺もそれは通りすぎりだと思うよ、ポチ」

だったら笑うなっつうの！

ところが、事態は予想もできぬほど早く私の目の前で転んだ。

翌日、クライアアントであるS社との初回の打ち合わせがあり、勉強も兼ねて参加させてもらえることになった。これは営業部から回ってきた案件で、WEB事業部では佐久間主任と杏子さんが担当責任者である。初回のみ営業部からも担当者が出席し、次回以降は私たちがS社側に赴くことになっていた。

営業部からクライアアントが到着したと連絡があり、私たち三人は十階エレベーターホールに出迎えにいった。

「ポチ、お茶出し頼むね」

「はい。緑茶でいいですよ」

「玉露淹れてよ」

「そんなのありませんよ」

杏子さんとそんな会話を交わしていると、主任がふと思いついたように口を挟んだ。

「ポチ、お前クライアアントの前でボケかますんじゃないぞ」

もう少し言葉を選んだらどうなのか。私は嫌味を込めてやり返した。

「分かってますよ、本当に主任は性格が悪い以上に口が悪いんだから」

すると杏子さんが調子を合わせ、ふたりで対佐久間主任共同戦線を張る。

「口が悪い以上にガラが悪い」

「ガラが悪い以上に見た目が悪い」

「見た目が悪い以上に」

「てめえら！」

主任が攻撃に移ろうとしたそのとき、チンと音がしてエレベーターの扉が開いた。S社の担当者を伴った営業部員が姿を現す。

私はぽかんと口を開けた。彼もまた驚いたようだったが、すぐに表情を元に戻し注意をクライアントに向けた。

ホールで全員が簡単な自己紹介をし、打ち合わせ用の小部屋へ移動する。私はお茶出しのため、ひとり別れて給湯室に向かった。内心汗をかきながら。

昨日の肉まん男——彼が食べたのはあんまんだったが——と、再び出会うことになろうとは。

営業部一課、滝沢信広主任。

——係長。通りすがりなんかじゃなかったですよ。また会っちゃいましたよ。ウチの会社の人だったんですよ。これってやっぱり『出会い』ですか？——

係長に伝える台詞が頭に思い浮かんだ。でも。

なぜかは分からない。昨日彼に報告したときほどの嬉しさは感じなかった。

そして昨日の男性が滝沢主任である事実を彼に告げるべきなのかどうか迷った。

どうして迷うのかその理由も、私には分からなかった。

第三十五話 海から出る魚（後書き）

第三十六話 微妙な立ち位置

「昨日はどうも」

ガラス張りのホールに差し込む弱々しげな陽の光の下で、泰然として彼は言った。予期せぬ二度目の邂逅に未知なる不安を感じた私とは対照的に。

打ち合わせの後に交わした雑談が盛り上がった流れで、全員でクライアントを見送った一階のエントランスホール。滝沢主任からWebデザインについて幾つか質問を受けているうちに、佐久間主任と杏子さんは先に部署に戻ると言ってエレベーターに乗り込んだ。質問に答え終わったところで、主任が昨日の一件を持ち出してきたのだった。

「どこかで見たことあるな、とは思ったんだよ。考えてみたら運動会後の社内ニュースレターに越智さんの写真載ってたんだよな。運動会には俺、たまたま法事と重なって出られなかったんだけど、でもまさか肉まんを盗られたのが越智さんだったなんてね」

盗られたなどと人聞きの悪い。苦笑混じりに訴える主任に反論する。

「盗ったんじゃないですよ。主任が譲ってくれたんですよ」

「目で脅してたからね」

「そっ……そんなことないですよ」

口では否定したが、内心の動揺がそのまま外側にも現れて視線を泳がせてしまう。するとこれまた主任に見破られたようでクスクスと笑われた。案外気さくな人なのだな。

更に親しげな口調で明日の昼の予定を訊かれた。特にないと答えると、

「よかったら昼飯一緒にどう？ 越智さんが手がけた事例見せてほしいな。この案件気になるから仕事ぶりを知りたいというのもある」

私がデザインを担当するので気になるのは当然だろう。自分が取ってきた契約ならなおさらだ。

了承して主任と明日の待ち合わせを取り決めた。

翌日の昼、各自が三々五々休憩に入ろうとする時間になり、私も待ち合わせ場所に向かうべくデスクから立ち上がったときだった。

「越智さん」

名前を呼ばれて振り向くと、部屋の入口に滝沢主任が立っていた。なんでわざわざ来たのだろうか、と思いつつ資料を手近づいた。

「一階のエントランスで待ち合わせじゃなかったですか？」

「ちよっと早めに出られたから迎えにきたんだ」

ふと振り返ってみると、同僚たちが一様に不思議なものを目にするような顔をこちらに向けていた。書類をプリントアウトしていた係長も手を止めてじっと見ている。彼に黙ったままの事実があることを少し後ろめたく思いながら、主任の後に続いた。

滝沢主任が連れて行ってくれたのは、高級感溢れる天ぷらのお店だった。御影石が外壁に使われたビルの、螺旋状の階段を地下に降りると店の入口があって、着物を着た中年の女性店員が私たちを出迎えた。夜は高価だが、同じ味をランチとしてお値打ち価格で提供しているのだとか。

ゆったりとした店内の奥まった一席に腰を下ろし、天井ランチを注文した。味噌汁、小鉢、サラダに漬物がついてくるのだ。

天井を待つ間にこれまで手がけたホームページの説明を始める。やがて食事が始まってもし主任は熱心に質問を繰り返しては、駆け出しのデザイナーにすぎない私の返答を興味深そうに聞いてくれた。お陰でこちらも話に熱が入る。気がつけば主任はとくに食べ終わって、仕事の話はもういいからどうぞ食べて、と笑って促された。

最後の一口を咀嚼し終わる頃、そういえば、と思い出したように主任が口を開いた。

「さっきWEBの人、みんな変な目で見てたね。俺、誘ってまずかった?」

「私、普段はお弁当なんですよ。それが他部署の人と外でランチなんて今までなかったから」

気にしないでください、と手を振ると、主任は眼鏡の奥の目を細めて言った。

「もっと他の部署と交流すればいいのに。飲み会に出るとか。今度ウチの連中と一緒に飲もうよ」

営業部の飲み会……酒に強い人ばかりでたくさん飲まされそうな雰囲気。杏子さんや係長から言語道断って言われそうだ。しかし、親切で誘ってくれているのに断るのもどうかと思ひ、条件付きで承諾した。

「あの、WEBの人と一緒にできれば」

「ひとりじゃやっぱ気が進まない?」

「いえ、ひとりじゃ絶対ダメって言われそうなので」

「WEBの連中から?」

呆れているだろうなと思ひながらもうなずいた。その理由が酔っ払うと人に抱きつく癖があるからとまでは言えないが。しかし主任は得心した顔つきで優しく笑った。

「越智さんってWEBで可愛がられてるんだな。でも分かる気はする。何て言うか……懐いたら尻尾振ってずっとそばで待ってるみたいな?」

「主任まで人のこと犬みたいに言わないでください」

抗議の声も彼には犬の鳴き声に聞こえるのか、笑って聞き流している。

「WEB事業部のペットか。……瀬尾も可愛がってんでしょ?」

やけに親しげな呼び方を不思議に思っていると、主任はすぐに言い添えて疑問を解いてくれた。

「俺ね、瀬尾や佐久間と同期なんだ」

「あ、そうなんですか」

同期。その単語はいわれのない安心感を私の胸にもたらした。それならば、係長と滝沢主任は気心の知れた仲なのだ。佐久間主任やみどりさんと同じように。

昨日から――滝沢主任に再会したときから――なぜだか胸の中に広がっていた雲が吹き払われていくような気がして、気持ちに余裕ができた。つい舌の動きも軽やかになる。

「じゃあふたりのマル秘ネタ、いろいろ知ってるんじゃないですか？ 今度教えてください」

「知ってどうすんの？」

「口止め料として御飯奢ってもらいます！」

堂々と恐喝を宣言した私に主任は本気で笑い出した。

「面白いなー、越智さんって。――知ってるよ、マル秘ネタ。今度教えてあげるよ」

「やった！」

今日のランチで最大の収穫ではないか。喜ぶ私に滝沢主任は微笑んで繰り返した。

「うん、知ってるよ。――いろいろとね」

近い未来の奢りを確信し意気揚々と部署に戻ると「越智さん、ちよつと」と瀬尾係長に呼ばれた。

内心、またかと思った。男性と二人で会うという状況に彼が異常なぐらい反応することは経験済みだからだ。私の身を心配してのことと分かってはいるが、ただのランチだぞ。

ところが今回はなぜか佐久間主任も一緒に、打ち合わせ用の小部屋に行くよう促された。

それぞれ腰を落ち着けると、予想どおり滝沢主任と昼食をとることになった経緯を訊かれる。私はコンビニでの一件を伏せて、その他はありのままを話した。

ふたりは眉をひそめて聞いていたが、腕時計に目をやった係長が険しい顔をして立ち上がった。

「これから会議なんだ。後は佐久間に任せる」

「えっ俺？」

「監督不行届だろ」

「マジかよ」

係長が部屋を出て行くのを見届けると主任がボヤいた。

「あーおっかね。お前が絡むとこれだからな」

いつもと違う成り行きに不穏なものを感じる。いったいどうしたのだろう。

どう始めたもんかなーとつぶやき、しばしの間腕を組んで考えた後で、主任はとある質問を投げかけた。

「お前さ。自分の立ち位置が実は微妙って分かってる？」

「微妙？」

「社長のお気に入りって立場、吉とも凶とも出るんだよ」

つまり、良いこともあれば悪いこともあるってことか。……そういえばあったぞ。

「しゃぶしゃぶ食べられるけど、みんなに恨まれるとか？」

直近で思い当たることといえばそれしかない。しかし主任は渋い顔で否定した。

「アホか。食いもんから少し離れろや。——お前を利用しようってヤツが現れてもおかしくねえってことだよ」

そのきな臭い内容にピクンと手が震える。

「——つまり、滝沢主任が私を利用しようとしてるって言うんですか？」

「お前鈍感なくせに、なんでそういうところは頭が回るんだ？」

鈍感？ 失礼なっ！

私がムツとするのを見て見ぬふりをして、佐久間主任は行儀悪く脚を組んだ。

「滝沢は俺や瀬尾の同期なんだけど、入社した当初からずっと瀬尾のことライバル視しててさ」

瀬尾係長と滝沢主任は入社後そろって営業部に配属された頃から、仕事のできる新入社員として注目を浴びていた。一年後に係長がPR事業部に異動し、二人はそれぞれの部門で頭角を現すようになる。当然周囲から比較されることも多く、二人が互いを意識するのは自然の流れであったが、滝沢主任の瀬尾係長への甲乙含めた感情はその逆よりもずっと強かった。

若手の出世頭として、異例の速さで二人は主任に昇進した。だが瀬尾係長より一年遅れたことが滝沢主任の負の感情を煽るあおることになる。

更に昨年の夏に係長が昇進を果たし、WEB事業部においても業績を上げているのに対して、主任は不況下の成績不振とも相まって焦りが強く見られるようになった。

そこで目をつけたのが——つまり私。社長のお気に入りである私に近づいて取り入ることで、社長の目に止まりあわよくば側近グループの一角に入り込むことを考えたのではないか——

「本気でそう考えてるとしたら激しいカン違いですね。私に取り入ったって社長に対して影響力なんかないのに。ただ弄られてるだけなんだから」

思ってもみなかったふたりの関係を知らされ、先程胸に宿った安心感がみるみるうちにしぼんでいった。

「外のヤツにはそれが分かんねえからな。だからお前の愛人疑惑だ

って出てくるんだろうが」

主任は脚を組み直して更に続けた。

「お前はそういう自分の立場に無自覚だから、近づいてくるヤツの真意なんか考えてみようとしねえだろ？　だから後になって傷つくこともあるんじゃないかねえかって、瀬尾がさ」

「係長が？」

「ずっと実力だけの世界で勝負してきたお前には、出世のために人に近づくなんて発想自体そもそもないだろうって。でも実際問題、人が集まれば派閥はできるし、少しでも自分の有利な位置に立とうとするんだよ、人間ってのはさ。中には『社長のお気に入り』って存在を疎ましく思って排斥したり、逆に利用しようとするヤツだっているさ」

それが私の微妙な立場か。確かにそんなの考えてみたこともなかった。「社長がウザくて嫌だ！」ってヒスってただけだし。

「今回滝沢がお前に近づいた理由はまだ不確かだけど、わざわざWEBまでお前を迎えにきたってところがさ、存在をアピールしたがつてみたいに見えんだよ」

それは確かにそうかもしれない。

それともうひとつ、滝沢主任が「瀬尾も可愛がってんでしょ」と言ったことが私には気になっていた。あれは係長を意識して様子を探ろうとしたのだろうか？　彼もまた『社長のお気に入り』に取り入ろうとしていると疑って？

でもどうして係長が私を『可愛がる』なんて思うんだろう。彼のようにもともと実力があって昇進を重ねてきた人には、他人に取り入る必要なんかないのに。

佐久間主任に疑問をぶつけると、あっさりと答えが返ってきた。

「向井の件があるからな」

以前社長のお気に入りだった人の名前を、苦々しさを込めて舌に

乗せる。

「瀬尾の方から、社長のお気に入りである向井に近づいたって見たヤツだっているんだよ」

「ええっ！？ 嘘！」

「人によって見方はそれぞれだろ」

「それはそうですけど……：：：：：そういえば係長のファンの人たちは、向井さんが係長を狙って社長に仲介頼んだって信じてました」

だから私をシメようとしたのだ、第二の向井さんが現れたとカン違いして。

「掛ける眼鏡で色も形も変わって見えるさ。真実は関係者にしか分かんねえよ」

つまり、社長と係長。

でも係長は、向井さんの問題を片付けるために結婚を画策したことを認めた。彼女が結婚すれば社長の興味は失せただろうからって『社長のお気に入り』に擦り寄るつもりなら、そんなことはしなかったはずだ。

「その瀬尾のファンにしたって、あの騒動のあと、あいつスッパリ手え切っただろ。自分のファンよりお前、つまり『社長のお気に入り』を選んだって見方もできる。そういう目で見るとヤツは、当然こう考えるだろうな——」

苦々しさに酸味を加えた声音で主任は言葉を継いだ。

「『瀬尾達也がいよいよ本気で出世競争に乗り出した』ってな」

ゴックンと唾を飲み込んだ。あまりに大きくなった話に、不意に背筋がゾクツとする。

「私……私、『お気に入り』なんかやめたいです……」

意気地のないことに弱音を吐いた。周囲の目に対する恐怖感が重く胸にのしかかる。

佐久間主任は私の顔を見て困ったように笑った。

「んな情けねえ顔すんな。それとそういう顔、瀬尾の前で見せんなよ」

「心配かけるから？」

「いや、むしろお前のためというか……分かんないわ。逆におもしれーかもな」

意味不明なことをつぶやくと、彼は背筋を伸ばして座り直した。

「ここからはオフレコな。お前、瀬尾は出世のためにお前を利用してると思うか？」

「思いませんよ！」

「即答するな。少しは考えろ」

いったい何を言っているのか。係長と仲の良い主任の言葉とは思えない。

「考えるまでもないでしょ？ それとも疑えって言うんですか？」

「『疑う』んじゃないねえ。目を開けてよく見ろつつってんだよ」

彼が何を言いたいかさっぱり分からない。

「同じように滝沢のことな。お前に関わろうとすると色眼鏡で見られる可能性もあるってことを踏まえて、周りの人間よく見てみる。周囲にどう思われてもいいからお前の傍にいたいってヤツがいたら、それがどうしてなのかを」

深い深い溜息をついた。一度に多くのことを聞かされて、頭が飽和状態になっていった。それでも主任に向かって賞賛の言葉をかける。「それにしても佐久間主任はエロいことばかり考えてるんじゃないんですね。お見それしました」

少しは謙遜するかと思ったが、彼はフンと鼻を鳴らして胸を反らした。

「ようやく俺様の真価が分かったか。これからはもっと敬え。佐久間様と呼べ」

「さくまさまさくさままさくまさ……私には無理ですっ」

「早口言葉じゃねえ！ このスカポンタン！」

佐久間主任から教えられた私の『微妙な立ち位置』は心に暗い影を落とし、日が経つにつれじわじわと深く侵食していった。一度は吹き払われたと思った雲が、次第に厚く色を濃くしていく。なるべく考えまいとしても意識がそちらに向かうのを止められなかった。社長に連れ出された休憩室で、彼に指摘されて初めて顔にまで出ているのだと知った。

「浮かない顔をしてるねえ、美春ちゃん。いつもの君らしくないな
ー」

そもそもの元凶は自分であることも自覚せずに何を呑気な。このオッサンが私をあからさまに『お気に入り』などとしなかったら、こうして思い悩むこともなかったのだ。

つい恨みごとが口をついて出た。

「どうして私なんですか？」

「うん？」

「どうして私だったんですか。リレーで勝っただけなのに」

ふたりの他には誰もいない休憩室にやるせない声が響いた。社長はしばしじいっと私を見つめると、やがて破顔して言った。

「だって美春ちゃんてば可愛いからっ。僕と息子の好みど真ん中だったんだよー」

息子……まだそれを言うか。オッサンに話したのが間違いだった。私が必要な溜息をつく傍らで、社長は「あ、光がまた会いたいつて言ってたよー」とこちらの気も知らずにニコニコして言った。

すっきりしない気持ちを抱えたまま日々は過ぎてゆき、一月も間もなく終わりを迎えようとしていた。

滝沢主任からは飲み会の誘いが一度あったが応じなかった。彼がただ親切心と好意で私と交流を持とうとしているのか、それとも裏に意図するところがあるのか、佐久間主任には目を開けてよく見ろと言われたけれど、彼の真意を知るのは怖いような気がした。

一方係長からもたびたび食事に誘われたが、こちらでも断っていた。出世のために社長のお気に入りかを可愛がっているなどと、彼が悪く言われることは我慢がなかったのだ。

私は彼を応援している。彼に一番になってほしいと思っている。でもそれは私が『社長のお気に入り』である結果であってはならないし、周囲にそう思われるのも嫌だ。

そういう心持ちは係長以外の人に対しても波及し、ついには藤田さんや杏子さんの誘いさえ断るようになった。自らシャッターを下ろしてしまう愚かさを自覚しても、周りの人を好きだと思えば思うほど、距離を置くことしかできなかった。

気分がクサクサしている。取り入るとか利用するとか色眼鏡で見るとか、私の気質にそぐわないことで頭を悩ますのはストレス以外の何物でもない。

こういう時は走りたい。走って汗を流して嫌なことを忘れるのだ。そうだ、酒を飲むよりずっと健康的ではないか。

そう思っていたら光くんから抜群のタイミングでメールが来た。水曜日に織田フィールドで陸上部の練習があるからよかったら来てという誘いに、仕事帰りでよければ行くと返事した。

係長には光くんからのメールは転送するように言われていたが、結局一度もしていなかった。挨拶程度の内容を転送する意味などなかったし、年下の男の子一人のことでおたおたしていたら越智美春がすたる。

お誘いの目的は走ることで場所は陸上トラック、心配ご無用である。

得意の集中力を発揮して精力的に仕事をこなした水曜日。終業時間になるやいなや帰り支度を終えた私に杏子さんが声をかけてきた。

「ポチ、御飯でも食べに行こうよ」

申し訳ないと心の中で手を合わせながら断る。

「すいません、用事があるんです」

「……最近ノリが悪くない？」

痛いところを突かれ、慌てて彼女の脇をすり抜ける。

「お疲れさまでした！」

「ポチ、ちよっと！」

引き止めようとする声を背中に受けながらも小走りで部屋を離れ、エレベーターに向かった。すると今度は「越智さん」と係長の声が耳に届く。

「早いね今日は。どこかに行く予定？」

彼の視線が手に提げたスポーツバッグに落とされるのを見て、ギクツとしてつい「え、えーと、その」としどろもどろになってしまった。案の定、訝しげに見ている。

マズイ。バレたら叱られる。まるで悪さをした子供のように嘘を探した。

「あ……兄と！ 約束が」

「ふうーん」

真偽のほどを窺う目に冷や汗がたらりと流れる。しかし係長はすぐに表情を和らげ優しい眼差しで私を見下ろした。

「まあいいや。あのさ、金曜日、食事に行かない？」

条件反射で心が踊ったが、引っ搦んで無理やり抑えつける。

「ダメです、金欠なので」

「……給料日は二日前だったよ？ でもいいよ、奢る」

さすが係長、私が弱いキーワードを提示して揺さぶりをかけてきた。
た。

「いつも奢ってもらってばかりだからダメです」

「何遠慮してんの？ らしくない」

「ダメなものはダメですよ」

そう。ダメだ、彼が周囲から汚い目で見られるのは。そんなのは嫌だ。

「越智さん？」

「あ、遅れちゃうんで、行きますね。お疲れ様でした」

踵を返して逃げ出すようにその場を去った。

心をどんよりと覆っていた雲から、雨が降り出していた。

第三十六話 微妙な立ち位置（後書き）

第三十七話 ペットの権利

現役男子高校生はさすがに速かった。本格的に陸上競技をやっている人間特有の熱が伝わってきて、並走する私の身体にも火が灯る。冷たい空気にさらされた肌がそこだけツンとして痛かったけれど、吐き出す息と同じぐらいに心も温められていった。

代々木公園内の陸上競技場、通称織田フィールドに着いたときには光くんたち陸上部の練習は終わりに近づいていて、こちらが入念な準備運動を終えてトラックの周回を始めると、これがラストと言って付き合ってくれた。八百メートルと四百メートルを一本ずつ走ったが、彼らについていくのが精いっぱいだった。

でも気分が向上したことは間違いない。やっぱり走ってよかった。

「やっぱ美春ちゃん、はえーわ」

目の前にやってきた光くんがハアハアと息を切らしながら笑う。

浅い呼吸音と唇の間からのぞく白い歯が、高校時代に男子部員と一緒に走った記憶をフラッシュバックさせた。

私は少し口を尖らせて彼に文句を言う。

「光くんずるいよ。男子校なんて一言も言わなかったじゃない」

陸上部員たちに紹介されてすぐに抱いた違和感。それが、男子部員しかないからだと気づくのにそう時間はかからなかった。

「陸上部には女子はいないんですか？」

途端にどっと起こった爆笑の意味も分からずにひとり取り残されていると、顧問の先生が低音を震わせながら告げた。

「ウチは男子校です」

男子校！？ うそっ！

集中する視線をまともに受け止められずにうつむいてしまったら、「てんねーん」「カワイー」「やべえ」とからかわれたのだった……

私からの苦情を聞いても光くんはクスクスと笑っている。

「ごめんねー。男子校って言ったら来てくれないかも、と思ってさ。美春ちゃんって男慣れしてない感じだし」

年下の子にまでそんなことを言われたのが心外で、反論しようとして口を開きかけたところで彼に同調する者が現れた。

「ほんとそんな感じー。美春ちゃんメツチャ可愛い。すげータイプ」
「へ……？」

よく見ればまだまだ幼さの残る顔だちだ。そんな彼から可愛いなぞと言われまごついていると、他の部員たちが一斉に非難の声を浴びせた。

「お前抜け駆けすんなよ」

「そうだよ、また早いモン勝ちとか思ってたんだろ」

「るっせーな、わりーかよ」

熱くなりかけた応酬を止めたのは顧問の先生だった。

「お前ら色気を出すのは十年早い！ さっさと着替えに行け！」

部員たちを追い立てると苦笑いをしながら近づいてきた。

「どうもすみません、普段女子と接点がないもんで浮かれてるんですよ、しかも元インハイ四位でこんなに可愛いお嬢さんと一緒に走ったもんだから」

「いえ、あの……」

可愛いお嬢さんなどと気恥ずかしいことを言われ言葉に詰まる。

すると光くんが横やりを入れてきた。

「先生こそ浮かれて色気出してんじゃねーよ。ほんと油断も隙もないんだから。ほら美春ちゃんも着替えに行こ」

これが男子校のノリなのだろうか？ すっかりペースを乱されたまま、光くんを守られるようにして更衣室に向かった。

着替えが終わって外に出ると、待ち構えていた陸上部員たちに取

り囲まれた。

「美春ちゃん、メアド交換しよ！」

「俺も！」

「俺も交換したい！」

なんなの、これは。

彼らの勢いに圧倒され呆然としていたら、慌てた光くんが間に割って入った。

「お前らはダメ！ 離れろ」

「じゃあ僕と交換しようか、美春さん」

「え……えっ？」

大人の落ち着きでもって迫ってくる先生をも、光くんは断固として拒絶する。

「何言ってるだよ、先生。オッサンはもっとダメ！」

「三十二歳独身男性の婚活に協力しろ」

「美春ちゃんはダメなの！ ほらもうお前ら帰れよ！」

「なんで光だけ？ ずるいじゃん！」

彼らはひとしきり不平を並べていたが、光くんの強い態度を崩すことはできなかった。ようやく全員を追い払ったところで、ひと息ついた彼がホッとしたようにつぶやく。

「あつぶね……メアドなんか交換させたら、俺、殺される……」

「……誰に？」

奇妙に思っただけで尋ねると彼は目に見えてギクツとしたが、すぐさま眩しいぐらいに爽やかな笑顔で応えた。

「父ちゃんだよ。美春ちゃんは父ちゃんの会社の大切な社員で、お気に入りだからね。何かあったら大変だもん」

そうだった。すっかり忘れていたが光くんは社長の息子だった。彼が意図せず口にした『お気に入り』という言葉が、走っていた間は忘れていたことを思い出させる。

「腹減ったなあ。美春ちゃん、何か食べに行こ」

こちらの気がふさいでいるのを知ってか知らずか光くんが誘ってくれたが、遅くなるとご両親が心配するから帰った方がいいとそこは未成年を氣遣う。しかし彼はかすかに悲しみの色をにじませて微笑んだ。

「ウチに帰ってもメシないんだ」

練習の後はいつも外食なのだろうか。それにしても彼が身にまとう空気が重い。

「二年前に俺の両親離婚したの。母ちゃん若い男作って家を出て……それ以来父ちゃんとふたりきり」

あまりの衝撃に舌の動きが止まり、足がすくんだ。あのおちやうけ社長の笑顔の裏にはそんな哀しみが潜んでいたのか。

光くんは口を引き結び視線を横に流した。これまでに見た朗らかに笑う姿との落差に、彼が心に抱える深い寂しさを見たような気がした。

私はニツコリ笑い陽気な声を出した。

「分かった。御飯食べにいこう。お姉さんが奢ってあげる」

「ホント？」

「お給料出たばかりだよ？ 任せなさい。十代の男の子はもりもり食べないとね！」

「やった！ ……美春ちゃん、ありがと」

少し恥ずかしそうに目を伏せた彼の背中をバンバンと叩いて歩みを促した。

私たちが入ったのは原宿駅からそう遠くないファミリーレストランで、「半田光御用達の店」という彼の言葉が決め手になった。

色鮮やかな写真がふんだんに使われたメニューを一通り吟味して、私はビーフシチューにサラダ、パンと飲み物のセットを選んだ。一方光くんは二種類のフライが付いたロースステーキにサラダ、ライスと飲み物のセットを頼んだのだが、さすがに若いだけあって食べ

る量も速さも違う。ライスをお代わりして見事に平らげたのには目を丸くしたが、いっそ見ていて気持ちが良かった。

空腹が満たされると、先日の『デート』の相手について根掘り葉掘り訊かれた。しかし父親である社長の耳に入ることを恐れ、人物像はぐらかす。

「え、じゃあ彼氏じゃないの？」

「いやいや、とんでもない」

「でも好きなんでしょ？」

「す、好き？ ……いや、そういう感情は……信頼はしているけど」横を向いてププツと笑う光くんの顔は、含み笑いをする社長にそっくりだ。

「何が可笑しいの？」

「だってその人は美春ちゃんのこと好きなのに、報われてないなって思っ」

「違う違う。本当にそういうんじゃないの」

そう。それに係長にはきつと、好きな人がいる。

はつきりと聞いたわけじゃないけど、異動してくる前に、その人のために言い寄ってきた女性は断ったような話だった。それに今はもう次々と相手を取り替えるような恋愛はしないと、誓ってひとりだけだと、真剣に訴えていた。あれはきつと本気で好きな人がいるからなんだろう。

元受付嬢の本田さんと付き合っていたことを周囲にはひた隠しにしてたのだって、噂が広まって彼女が本命だって誤解されるのが嫌だったからじゃないかと思う。そのうち竹内係長と白川さんのふたりをくつつけようとして、何がなんでも秘密にしなければならなくなっただろう。

どんな人なのかな、係長の好きな人。彼が腹黒だってこと、知ってるのかな。

とことん他人に冷たくできる一方で子供のような表情を見せたり、

太っ腹に御飯を奢ってくれるくせにお酒を飲むことには口うるさかったり、優しいかと思えば意地悪を言ったり、私が知っているよりもっと多くの素顔を彼女は見ているのだろうか。誰も知らない彼の素顔を彼女だけは知っているのだろうか。

すぐ近くで姿を見ているような気になっていたけど、本当はまだまだずっと離れた後ろを私は歩いているのかもしれない。そして今また更に距離を置こうとしているのだ。

私だけ置いてきぼりにされているような寂しさで胸が疼いた。^{うず}

グラスに残っていた氷をストローでかき回しながら、光くんがふいに優しい口調で言った。

「美春ちゃん、また走りたくなったら俺いつでも付き合うよ。だから元気だしてね」

「え？ 元気って？」

「父ちゃんが、美春ちゃん最近元気ないんだよーって心配してたからさ。そんなん、走ればもとに戻るよって言ってやったの」

……そうだったのか。社長は社長なりに気にしてくれていたんだな。それに走れば元気を取り戻せると、単純だけど私の本質をちゃんと見抜いている光くんにも驚いた。

「……ありがとう」

社長父子の思いやりを受け取って、感動がジワツと胸に広がる。

すると光くんはニッコリ笑ってデザートのメニューに手を伸ばした。

「さーてと。パフェにしようかな、あんみつにしようかな？」

「……まだ食べるの？」

気持ちに潤いができたのか、翌朝は爽快な気分で出勤した。オフイスの机を拭く手もリズムカルに動く。そこへいつもより早く杏子さんが来て、「コーヒー飲むの付き合え」と休憩室に連れていかれ

た。

熱いコーヒーに息を吹きかけながら杏子さんが尋ねる。

「昨日はどこに行ったの？」

社長の息子と走っていたと言ってもいいものだろうかと思案していると、彼女は「まあそれはいいんだけど」と言って後を続けた。

「係長と何かあった？　実は昨日廊下で話してるの聞いちゃってさ」逃げ出すように去ったところを見られていたのか。それならば心配するのも無理はないと思ったが、彼女が気になったのは別のことだったようだ。

「あんたが食べ物に釣られないのは変だなと思って
そこかい。」

「しかも奢りなのに」
そんなに変か。……返す返すも惜しいことをしたと自分でも思っているが。

「また係長と何かあったの？　……あんた最近元気がなかったし」

声音にいつにない優しさがあふれている。気づいていたのだと知って、ついポロツと心情がこぼれ出てしまった。

「……私が社長のお気に入りであってもなくても、杏子さんは変わ
りませんよね？」

「何それ。当たり前でしょ、何を今更。……まさか係長は違うって
言いたいのか？」

杏子さんが眉を曇らせたのを見て、慌てて否定する。

「いえ、係長だって同じだと思ってますよ。でもそうじゃない人も
いるのかもしれないって……」

「そんでぐじぐじ考えて周りをシャットアウト？　あんたらしくな
い」

「でも係長が私と仲良くするのは社長にへつらっているからだって
見られるのは嫌です。係長だけじゃないけど」

小さく溜息をついて彼女は私の頭を撫でた。

「忠犬だねえ。でも誰もペットにそんなこと望んじやないよ。一緒にいたいからペットなんじゃん」

……犬扱い。喜んでいいのかそれは？

「ひどい飼い主がいたら噛みつけばいいんだよ。それはペットの権利だから」

空に立ち込める雲を吹き払うかのような、鮮やかな笑顔で杏子さんは言った。やまない雨はないように、私の悩みも明日には消えているような気持ちにさせてくれる笑顔だった。

翌日の金曜日、PR事業部の片岡麻里子さんから社内メールで飲み誘われた。女性ばかり数名で行くのだという。急な話ではあったが逆に他意のなさも感じられて了承した。

ペットの権利なるものを教えられて、揺れていた心がストンと収まったように感じていた。真意を推し量っているだけでは何も生まれない。とにかく動いてみることに。

しかし飲み会のことは誰にも言わなかった。係長には金欠だからと嘘をついて誘いを断ったのに、そのことが耳に入れば何を言われるか分かったものではない。

その係長は昨日一日面白くなさそうな顔をしていたが、都合の良いことに昨日今日と彼と業務上接触することはなかった。

午後四時になって工藤課長と瀬尾係長を始めとする数名が九階会議室に向かった。春に予定された中堅企業向けのWebPRセミナー運営会議が今日から始まったのだ。このセミナーは営業部と合同で企画されたので、会議には当然、営業部からも担当者が出席する。議論が白熱しているのか終了予定時刻を過ぎても誰も戻っては来ず、やがて終業時間となった。帰り際に佐久間主任が寄ってきてボソッと声を出す。

「今日の会議、滝沢も出てんだよ」

「え？」

「あのふたり、やり合ってなきやいいけどな」

やり合う。良い意味でのライバルなら仕事にも良い影響が出るはずだけど、あのふたりの場合はどうなるんだろう。

新たに生まれた不安を抱えて職場を後にした。

片岡さんたちと向かった居酒屋は私が初めて行く店で、PR事業部では定番のひとつなのだと教えられた。部署ごとにテリトリーがあるのだなあ。

今夜集まった片岡さんと長野遥さんにもうひとりの女性社員とはすでになじみがある。係長に関する情報をこっそり教えてくれていたのは彼女たちなのだ。いずれも入社して数年が経ち、仕事にも慣れて波に乗ってきた様子が話し方からうかがえる。

四人で乾杯をしてしばらくすると、「あれ、来てたの」という声とともに二人の若い男性が近づいてきた。やはりPR事業部の社員だという。互いの紹介が終わると、隣のテーブルが空いていたのでくっつけて同席することになった。

「ラッキーだなあ、有名人の越智さんと飲めるんだから」

男性の一人、沼田さんの台詞を聞きとがめた。

「何ですか、有名人って」

「去年の女子トイレのケンカ。フロアが違うからPRであの場にいた奴なんてあまりいなくてさ、片岡さんと、あと誰でしたっけ？」

越智さんが何て言って怒鳴りつけたかPRでメールが回ったの」

「はああ？」

思わずすっとんきょうな声を上げてしまった。後から思い返すと相当キツイことを言った自覚があるだけに、文章にされた恥ずかしさはこの上もない。

「ごめんねえ。あんまり気持ちいいこと言ってたからつい、みんな

にも教えてあげたくて……」

どうせあまり悪いとは思っていないのであろう片岡さんが、笑いながら謝った。するともう一人の男性である宮下さんがかぶせるように言葉をつなぐ。

「だってあれは確かにひどかったでしょ。瀬尾さんはアイドルかつうの。俺、うちわに瀬尾さんの写真貼って総務に配布するエコPR企画書出そうかと本気で思いましたよ」

係長の写真付きうちわを想像して、ブツと吹き出してしまった。

「夏ぐらいから追っかけがひどくなってたもんね。瀬尾さんに彼女いないって聞きつけてから」

「そうそう、アプローチかけてきた人ふたりとも断るなんて前例がないから」

やはり人気者はこうやって酒の肴にされてしまうのだなと思いつながら、話に興じる彼らを眺めた。

思いきって動いてみたら案外なんてことない。彼らが裏を考えることなく付き合える人たちだということとは、交流を持ち始めたときから分かっていたことなのに。色眼鏡で見っていたのは私の方だったのだな。もしもそれが間違いで、彼らに思惑があったとしても、私には噛みつく権利がある。

そう思えばずっと気持ちも楽になるのだった。

「——あ、噂をすれば」

長野さんがつぶやいた一言を受け、全員がその視線の先を追った。店の入口で瀬尾係長が空席を探しているのか店内を見回している。

その横には——滝沢主任。

よりによって今一番会いたくないふたりがなんで一緒にいるの!?! 私はとっさに身をかがめて陰に隠れた。向かいに座る片岡さんが不審げに尋ねる。

「どうしたの、越智さん」

「いえっ、なんでも……」

離れた席に行ってほしいという願いもむなしく、見知った顔に気づいた滝沢主任がこちらにやってきた。一步遅れて係長も後に続く。

「あれ、越智さん？」

主任が私を見つけて驚きの声を上げた。すると即座に係長が反応して眉間にしわを寄せる。焦りを押し隠して微笑みながら会釈すると、主任は冗談ばく私をとがめた。

「PRの連中と飲んでるの？　なんだよ、こっちの誘いには乗ってこないのになあ」

気まずさとバツの悪さで舌が動かない。ところが意外にも係長が口を挟んで救ってくれた。

「滝沢。ふたりで話すって言うんなら別の席で——」

「いいじゃん。せっかくだからこっちに混ぜてもらおうよ。——いいよね？」

半ば強引に同席を求められたにもかかわらず、片岡さんたちは歓迎の意でふたりを迎えた。こうなると係長も退けず、沼田さん宮下さんが譲った席に——私の隣と斜め向かいだ——主任とともに着いた。

視線をまともに合わせられずもチラチラと係長の様子を探れば、表面上は普段と変わらず穏やかだが目は笑っていない。彼が不機嫌であるらしいことが見て取れた。

「珍しい組み合わせじゃないですか？　おふたり」

「今度営業とWEB合同でセミナーやることになってさ、その会議にふたりとも出ててその流れで。瀬尾と飲むの久しぶりだし、な？」

「ああ」

係長は言葉少なに注文したビールを飲んだ。この様子だと誘ったのは主任のようだ。

「でもこの店に来て、やっぱり縁があるんだなって思ったよ」

主任の意味ありげな発言に皆が興味深そうな目を向ける。

「何ですか、それ」

その問いに対する答えは、彼の隣りに座る私に向かって発せられた。

「俺たち縁があるよね、越智さん」

グラスを口に運びかけていた私が瞬間的に視線を合わせたのは係長だった。時間にすればわずか一秒ほどの間に、彼の目の奥が揺らいだのを見て私の心もざわつき始める。

次いで目をやった主任の顔には微笑みが浮かんでいたが、不透明な水の底で何かがうごめいているような、得体の知れない不安が胸の中で触手を伸ばそうとしていた。

「実はさ——」と私たちが出会ったいきさつを主任が語り始める。再び係長を目で追うと、彼もこちらを見ていた。表情を消して、ただその目には驚きの色を浮かべて。

——彼の体内で何かが動き始めたのは、おそらくこのときだった。

第三十八話 負けないで

「俺たち縁があるよね、越智さん」

滝沢主任が突然放った言葉の槍は、私の言語中枢に命中し機能を麻痺させた。彼が私たちの『縁』について語るのをただ黙って聞く傍ら、つい言いそびれていた事実を主任の口から瀬尾係長の耳に入れることの気まずさに唇を噛みしめる。

「――で、次の日にクライアントを連れてったら、俺の肉まんを盗った女の子がいるんだもんなあ。すごい驚いてさ。それが越智さんだったの」

「主任に肉まん譲らせるなんて、さすが越智さんだよな」

皆の笑い声に合わせて私もごちない微笑みを返す。ただの思いつきに過ぎなかった『肉まんの縁』が現実のものになってしまった焦りと、その相手が滝沢主任であることへの困惑が、受け入れがたく思っている自分を自覚させていた。

そして私の意識は、無表情のままテーブルに視線を落としている係長にずっと向けられていたが、主任が『ふたりの縁』の話をもっと広げたことで否応なしに引き戻された。

「そういえば越智さんは秋田出身なんだって？」

「はい」

「俺、子供の頃秋田に住んでいたの。親父が転勤族でさ。本物のかまぐらが作れるほど雪がたくさん降る場所に住んだのって秋田以外になくてさ。結構いい思い出なんだよね」

「そうなんですか」

「小学校の遠足できりたんぽ鍋食べるんだよな。野外で鍋作って食べるのってこっちの人から見ると可笑しいだろうけど、子供はみんな喜んで食べてたよな」

意外な人物から聞く私の故郷の話。本来なら率先して身振り手振りさえ交えてお国自慢をするのに、相槌を打つにとどめた。係長の前で、私と主任のふたりだけに通じる故郷の話題を自ら披露することはなぜかためらわれたのだ。

「もしかしたら子供の頃どこかですれ違ってたかもしれないね。やっぱり俺たち縁があるよね」

再び『縁がある』と口にする彼。でも何か奇妙な印象を受ける。

たとえ一時的にせよ故郷を同じくするというだけで、目に見えぬつながりに心安さを感じるものだ。それが『縁』だと言うのなら、私たちの間には確かに存在するのかもしれない。

でも、本当に彼はそれを信じているのだろうか。なんだか、係長に聞かせたいがために『縁』を強調しているような気がしてならないのだ――でも何のために？

係長が社長のお気に入りである私を『可愛がっている』と信じているから？

自分の方が私と深い関わりがあるのだと見せつけようとしているのだろうか？

チラッと係長を盗み見ると、無機質な表情でグラスを傾けている。心情をうかがい知る術が何もない、全身を『無』という色で塗り固めたような――そうすることで彼の内部でたぎるものを抑えているような――外観が、先程から胸に居座る不安を更に大きくしていた。

「瀬尾は？　ずっと東京？」

主任から突然話を振られて、これまで彫像のようだった係長の表情が動いた。

「ああ、僕は東京生まれ東京育ちだよ」

おそらく主任の質問の意図を正確に理解した彼が、わざと挑発的に返した答え。案の定主任はそこに含まれた刺^{とげ}に反応した。

「何それ嫌味？ まあ、瀬尾には似合ってるけどさ。でも田舎を知らないってのも可哀相だよな。子供の頃の貴重な体験って大人になってもずっと残るもんだろ」

彼の言い分はおそらく正しいのだろう。でも係長のことを可哀相だとみなした彼に、私は反発と悔しさを感じていた。

可哀相だなんてどうして分かるの。それは彼が言うべき言葉じゃない。

しかし係長本人は何でもないことのように受け流している。私はやり場のなくなった感情を紛らわすために、機械的に梅サワーのグラスを口に運び、やはり機械的に喉に流し込んだ。

「越智さん、次何飲む？」

空になったグラスを見て、気を利かせた主任が尋ねた。

「あ、えーと」

反射的に返事をしようとしたが、低くて鋭い声がそれを遮る。

「もうやめとけ。だいぶ飲んでるだろ」

真っ直ぐにこちらを見る係長の、反論を許さない強い瞳。しかし主任は私に肩入れしたいのか、係長の向こうを張って重ねて訊いた。「こんなところで上司面すんなんて。越智さん、何飲む？」

「だめだ」

彼も譲ろうとしない。しかも周囲を怯ませるようなきつい口調だった。これまでほとんど口を差し挟まなかった反動であるかのように、強い態度でこの場を支配しようとしている。

同席しているPR事業部員たちも重くなった空気に気づいて、互いに視線を慌ただしく交差させた。人当たりがよく物腰の柔らかな係長をよく知っている彼らの目には、その頑なな姿は奇異に映っただろう。しかし彼は自分の言動がもたらしている周囲の変化に何の配慮もせず、再び禁止の言葉を吐き出した。

「それ以上飲むな」

感情の制御に綻びが出始めているのか、表情に余裕がなくなっ

いる。

このままでは彼にとって流れが良くない方向へ行く。そんな予感がした。

工藤課長と私との関係を問い詰めて、彼が感情を爆発させたあの夜を思い出した。異動前後の評判や王子様な外見、普段の冷静沈着な仕事ぶりからは想像もできない、負の感情をむき出しにした、思いつめた子供のような顔を見せた彼。

でも、ここで見せてはだめ。滝沢主任の前で自分を見失ったりしないで。

「あの、私、烏龍茶を」

とにかく今は彼の言うとおりに動こうと決めた。再び破局が訪れることを回避するために。

ところが主任の言葉は更に彼を苛立たせた。

「ほら、瀬尾がそんなふう言うからビビっちゃったじゃん。花金だよ？ 可哀相なことすんなよ」

まるで頭の固い野暮な上司から、若い女の子を救済してやるかのような言い回しで係長を非難する。そこで私は彼をかばうために口を挟んだ。

「いいんですよ。私あんまりお酒強くないから」

「飲み会のたびに瀬尾にうるさく言われてんの？ それじゃちつとも楽しくないんじゃない？」

「そんなことないですよ。いつも楽しいです」

係長の顔に浮かび上がる焦慮が私にまで及んで声が上ずったが、この話題はこれで終わりだ、そう思った。

しかしもはや私の意志は覆せないと見て取ったのか、主任は違う方向から攻めてきた。

「ねえ、やっぱり今度営業部の飲み会においでよ。ウチの連中にも

紹介するからさ」

これならば私だって断れないと踏んでいるのか、余裕さえ見せて誘う。まるで、どうだこれでもまだ口出しするつもりかと、係長に挑むように――そして実際に、挑発的な台詞を主任は投げつけた。嘲りの成分が混じった口調で。

「まさかお前の許可がいるなんて言わないよな？ 安心しろよ、酔い潰してどうにかしようなんて考えてないから」

その瞬間、係長の目付きが変わり口が歪んだ。次に起こる事態を予測して心臓が驚づかみされたような痛みを覚える。そして唇を開き口撃に移ろうとした彼を、一瞬で心を決めて止めた――代わりに叫び声を上げることによって。

「あああっ！」

叫ぶと同時にガタンと立ち上がる。同席者たちばかりか店中の注目を浴びたが、摂取したアルコールのお陰なのかちっとも気にならない。

驚きの目で見上げる人たちと同じ高さの目線に戻ると、周囲も何ごともしなかったかのように再びざわめきにあふれた。酔っ払った女の子がちよっと大声を出した程度のものだ。

「ど、どうしたの、越智さん」

片岡さんが目を白黒させている。

そういえば以前にも全く同じことを彼女の前でやっていた。あのときは昼の定食屋だったが。つくづく私は突発的な女だと思われることだろう。

私は彼女には返事をせずに、係長に向かって怒涛の勢いで苦情をまくし立て始めた。

「係長！ 後で返すって言ったのに嘘つき！ 会議なんか行くから私まで忘れちゃったじゃないですか！ 今日中に返してもらわない

と困るんですよっ。今すぐ会社に戻って取ってきてくださいっ」

「な……何を？」

長野さんがびっくりしながらも興味深げに尋ねる。

「鉄道ファン垂涎の五枚組DVDボックス『日本全国ローカル線ぶらり旅』！勝手に持ち出したってバレたら、兄に殺されますっ。週末に全部一挙に見るって言ってたから、絶対に今日中に返してもらわないとっ。ホラ、早く行って！」

私の迫力に圧倒されたのか、目を見開いたまま何の反応も返さない係長に、大げさに舌打ちをした。

「あああ、もう、部下から借りたものをきちんと返さないなんて、よくそれで上司が務まりますねっ。そんなんだったら私だって明日から係長になれますよっ。ホラ私も行きますから！兄に見つかる前に戻しておかないとっ。ホラ係長早く！ホラホラホラ！」

喚きながら立ち上がって係長を追い立てる。ついでに財布から何枚か札を出して乱暴にテーブルに置いた。

「とっどと行ってくださいよ！オフィスが閉まってたら守衛さんに言っても開けてもらいますからねっ！」

そう怒鳴ったときにはもう、係長がいつもの落ち着きを取り戻しているのが分かった。苦笑さえ浮かべて、わざとなのかのんびりと答える。

「分かった分かった。そう急かすな。じゃあみんな、そういうことなんで」

再び爽やかな笑顔に戻った係長はプンスカプンに怒る私をなだめながら店を出たのだった。——呆氣に取られたままの滝沢主任たちを残して。

居酒屋の喧騒を後にした私たちは、まだ始まったばかりの金曜の夜を楽しむ人々が行き交う恵比寿の街を、駅に向かって並んで歩い

た。

「――明日から係長にもなれるって？」

短い沈黙を先に破った係長に、今更ながら自分が喚いた言葉の言い訳をする。

「言葉のアヤですよ……揚げ足取りはナシです」

「分かってるよ。……ありがとう」

爆発しようとしていた感情の余韻なのか、声が暗さを引きずっている。続けてポツリとこぼした私をとがめる言葉には、哀しみの色さえ混じっていた。

「どうして言わなかった？ 滝沢のこと」

言うべきなのか迷って結局口をつぐんだままでいたその理由を、私はすでに見つけていた。さっき大声で叫んだ瞬間に、取るべき道は決まったから。

「だって係長が言ったんじゃないですか、ただの偶然だって」

彼はフツと笑って自嘲気味に返した。

「偶然も三度続けば必然だって言うよ？」

「誰が言っただんですか？」

立ち止まって見上げると、彼は一度私と視線を合わせたがすぐに逸らして短く息を吐き出した。

「……さあ。分からないな」

「だったら」

主任のことを言わなかった理由は、たったひとつだ。

「誰が言っただのか分からない言葉より、係長が言う方を信じます」

彼の言葉を信じたかったから。

さつとこちらを振り向くと、彼は信じられないものでも見るような目を向けた。だから私は自分でひとつうなずいて言葉を重ねる――彼に信じてほしくて。

「言いましたよね？ 係長の言うこと信じるって」

——係長も言いましたよね？ 係長の言うことを信じるって言う私を信じるって。

彼は瞳を大きく動かすと口の中で何かをつぶやいた。聞き返そうとする前に柔らかな笑みを浮かべて「うん」とうなずく。それに安心して、私は悪戯っぽく訊いた。

「ただの偶然ですよね？」

彼もまた悪戯を思いついた子供のように目を輝かせた。

「ああ、偶然だよ。偶然はどこまでいっても偶然。何度あっても偶然」

この夜一番の楽しそうな表情を見て、私も嬉しくなる。

「縁なんかないですよね？」

「そんなもの、地上のどこを探したって君と滝沢の間にはないね」

調子を上げた彼が繰り出す軽口に、目を合わせてふたりで笑った。

「でもこれでまた君はしばらく噂の中心だな。居酒屋で上司を怒鳴りつけた女って。……ごめんな」

「どうせ一度キレてますから、何度キレても誰も変に思わないですよ。それに係長だってこれで鉄道ファンカミングアウトなんで、おあいこです」

「それは楽しそうだな。電車の名前、幾つか覚えとかなきゃ」

「今日から鉄男ですね」

「今度写真でも撮りにいく？」

「嫌です」

冬の夜風が人通りの途切れた道を吹き抜けてゆく。冷たさを感じないのはアルコールの効果が身体に残っているからだろうか、それとも気持ちが高揚しているからなのか。そして通りには静けさが降

りて、さっきぶつけることの叶わなかった負の感情を口にするなら今だと告げていた。

「――あの人、嫌いです」

「……滝沢？ どうして？」

「だって係長のこと、東京しか知らないから可哀相だって言いましてよ、偉そうに！ だから嫌い」

まるで子供のような物言いに呆れたのだろう、彼は一言も発することなく私を見つめた。それでも構わず気持ちの赴くまま舌を動かす。

「あんな人に負けないでくださいよ？ もし負けたら、私係長の部下辞めますから」

大声で叫んだ瞬間に決まった私の心。滝沢主任が係長にとってライバルなら、私にとってもそれは同じ。

だから負けないで。私も負けないから。

彼が右腕を伸ばして私の頭に手を載せる。その流れるような動作は、感情的でしかも不条理な要求への回答だった。頭を撫でる手の動きやこちらを見つめる目の色は、私の想いに共鳴するように優しさで力強さを増している。

「君に辞められたら大変だ。だったら絶対負けないよ」

今や自信さえ浮かんだその顔が、私を安心させてくれた。

「よかった。でもキレたらダメですよ？」

「分かった」

気持ちが上向きになって足取りも軽く歩みを進める。

一時はどうなることかと思ったが、終わりよければすべてよし。

本当はもうちょっと飲みたかったけど……これは係長には黙っておこう。

「越智さん」

呼ばれて振り向くと、意を決したふたつの目が私を見つめていた。とても大切なことを今から打ち明けるかのような、静かな熱さも孕^{はら}んだ態度に目を見張る。

「実は僕もさっき、初めて滝沢のことを嫌いだと思ったんだ。あいつが子供時代を秋田で過ごしたって聞いたとき。君と同じ体験をあの時もしたんだと思ったら、どうしようもなくあいつが嫌いになった」

心の襷^{ひだ}がめくれて隠れていた想いが飛び出したようだった。ずっと秘められていた想いが。

でも信じられない。そんなことってあるんだろうか。だって彼がまさか。

あり得ないとは分かっているけども身体の奥から込み上げる喜びに、私は思わず口走った。

「嬉しい」

それを聞くと彼は瞳を輝かせ、顔をほころばせる。

ああ、やっぱり嘘じゃないんだ。

「係長がそんなに秋田を好きになってくれてたなんて」

「……………え？」

そうかそうか、そういうことだったのか。ライバルの幼少時代に嫉妬するほど、我が故郷を気に入ってくれていたとは。

「あれですね、前に一度私が田舎の話したの、忘れられなかったんですよ。臨場感あふれる語りって実は私、得意なんですよねえ。こうやって草の根秋田ファンを増やしたら、将来観光大使になれるかも。フフフッ」

鉄道ファンならぬ秋田ファンであることをカミングアウトして照れくさいのか、彼は表情を固まらせたまま空を見上げ、そして「ああー」とうなり声を上げた。

何だ、その声。照れというより焦れだぞ、それは。

不思議に思いながらも彼と同じ空を見上げると、移動する数点の光が見えた。

「あれ、飛行機ですね」

「……秋田行きかな」

「新幹線の方がオススメですよ？ 駅弁食べられるから」

「……うん、やっぱり駅弁は欠かせないよな……」

光の点が消え去るのを見送り、私たちは再び歩き出した。いつもの位置で。

第三十八話 負けないで（後書き）

美春、もう無自覚の純愛ですよね……でもカン違いは絶賛継続中。

今回、作者の遊び心サブタイトル第2弾なんです（また古いですね……苦笑）、読者の皆様からの瀬尾係長へのエールになってしまっているかも（笑）

第三十九話 大事なものは

きちんと食事を摂っていなかった瀬尾係長に付き合ってくれと言われて入った二子玉川のうどん屋。注文が終わるやいなや、待ってましたばかりに彼は先程の居酒屋での一件を口にした。

「それにしてもとっさによくあんな話思いついたな。何て言ったっけ、僕が借りたっていうDVDのタイトル？」

「『日本全国ローカル線ぶらり旅』です」

「そうだったね。本当にお兄さんが持っているの？」

「いいいえ、瞬間的に頭に浮かんなんですよ」

「すごいな。やっぱり君には敵わない。君の頭の回転の速さときたら、脱水中の洗濯機並だ」

彼がこんなに褒めてくれたことがかつてあっただろうか。つい頭の後ろを掻きながらエヘへ、と照れ笑いをしてしまう。

そっかー、洗濯機かー。あんなに速いかなあ。ぐふ。

心配性的過干渉な兄に叱られるのを回避するため、幼い頃よりその場の思いつきで言い訳する技を磨いてきた私である。社内でも有数のできる男、最年少係長から褒められたことで自分の努力は無駄ではなかったと感慨に浸った。

こんなことでも彼の役に立っている。彼が一番になるための行程で私に頭の回転の速さが求められるのなら、もっと速くしてみせよう。

そう決意して笑顔を見せると、彼もまた人を惹きつけてやまない微笑みを見せて、しかしさりげなく爆弾を投下した。

「それで、金欠のはずの君が飲み会に行けたのはどうしてなのかな？」

笑顔のまま固まった私は、居酒屋で係長と遭遇した場面まで記憶を巻き戻した。

そうだ。店に入ってきた彼を見て、ヤバイ逃げたい隠れたいと思ったんだ。金欠だと嘘をついて誘いを断った以上、今日飲み会に行くことは彼には絶対に知られたくなかったんだ。

すっかり忘れていた。マズい。何か思いつけ、言い訳を。

私は即座に考えを巡らしこれならバレることはないという嘘を思いついた。

「昨日臨時収入がありました……」

「へえ、どんな？」

「肩凝りに悩む兄の肩を揉んでやったら三千円」

「三千円！ 気前のいいお兄さんだ」

「太っ腹なんですよー」

「じゃあ、一昨日某男子高校生に夕飯を奢ってやった金はどこから来たのかな？」

冷たい汗が背中を流れた。『某男子高校生』が光くんを指すことは言うまでもない。視線をさまよわせたが、係長はテーブルに乗り出して身を近づけ、もはやお馴染みとなった黒い笑みで言葉によらず語りかけた。

――どう言い訳するんだ？ ん？

……これが目的だったのか、家まで送ると言ったのは。全て知った上で私を袋小路に追い込み、言い訳が破綻するのを楽しむとは。

この人、Sだな。

瀬尾係長が滝沢主任に対して暴発するのを未然に防いだ私は、彼のために大きな仕事をひとつやり遂げたような満足感をもって別れの挨拶を告げた。

JR恵比寿駅前。

雑踏の中でもひととき目立つ彼はしかし、何かひらめいたらしく目に光を灯し薄く笑った。

「日比谷線で一緒に帰らないか？」

この人がこういう顔をするときは決まって良くないことが起きる。ここは遠慮してひとりで帰ろう。

「いえあの、JRで帰り」

全部言い終わらないうちに右手首をつかまれ引っ張られた。

「ちよっ、係長！ 何すんですかつ」

「上司命令」

そのまま日比谷線恵比寿駅まで連れて行かれた。そして私に一言も口を挟ませないまま、二子玉川までの切符を買って寄越す。恵比寿から日比谷線が乗り入れる東横線自由が丘まで行き、大井町線に乗り換えて二子玉川までのルートだ。

係長の最寄り駅は大井町線の九品仏だそうだ。自由が丘の隣でこのルート上にある。

「自由が丘って何か食べ物と関係の深いイメージが」

「……スイーツの店が多い？」

スイーツ！ そうだったそうだった。雑誌でもよく見かける。

私の瞳が輝くのを見たのだろう、彼がとある提案をした。通勤定期をこちらのルートに買い換えたらどうかと言うのだ。

「それならいつでも好きなときに来て、スイーツの店を片っ端から攻略できるよ？」

「それはいいアイデアですね」

「よければ僕も付き合うよ。僕と一緒にならケーキ二人分食べられるだろう？」

魅力的な提案に加え親切な申し出までしてくれた彼はまるで天使のようだ。嫌な予感がしたのは思い過ぎだったのだ。

甘いものが苦手なのに付き合ってくれて、しかも自分の分を私にくれると？ 係長ってやっぱりいい人だなあ。それとも居酒屋での一件のお礼がしたいのかな。私が喜ぶことで感謝の気持ちを伝えようとしてるんだろう。

そんなふうに考えていたから、彼が最寄り駅で降りずに私を家ま

で送ると主張しても、これもお礼のつもりなのだろうとありがたく受け入れたのだった。

「嘘をつくならバレないような嘘じゃないとな」

「彼からのメールは転送すると約束したのにな」

「僕との食事を断ってまさか男と飲むとはな」

うどんを食べ終わっても未だにネチネチと嫌味を言い続ける。こちらが一言も言い返せないと思って。礼だなんてとんでもない、恩を仇で返してるじゃないか。

店内に視線を走らせたが、閉店時間が近いせいか客の姿はまばらだ。混んでいればそれを理由にしてさっさと切り上げられるのに。店員ももはや、閉店までどうぞご自由にと言わんばかりに厨房で後片付けにいそしんでいる。

「どうしてバレたんですか……？」

観念しておずおずと訊いたら、だるそうな答えが返ってきた。

「昨日の朝の定例会議のあと、直々に社長に呼ばれてね。『瀬尾くん、僕今日WEBに行けないから、美春ちゃんにお礼を言っておいてくれる？』夕べはウチの息子が大変お世話になりましたって。陸上部の練習に付き合ってくれただけじゃなくて、夕飯までご馳走になったよって、息子ってば嬉しそうに言うもんだからあ。あのふたり、とっても仲良しになったみたいだよ？ 父子そろってお気に入りーっ』……とまあ、こんなふうだね」

社長の口調まで真似て語る彼が痛々しい。光くんと会ったことが社長に筒抜けになるのは覚悟していたが、まさか係長をメッセセンジャーボーイとして利用するとは。

「僕に嘘について彼に会ったことも気に食わないけど、あれほど男と一緒に飲むなど相沢さんたちからも言われていたのに、こっそり飲み会に行くなんてどういうつもりだよ」

「不可抗力ですよ……初めはちゃんと女性だけだったんです。あのPRの男性は後から来た人たちで、あの人たち同僚だから、自然に一緒のテーブルでつてなりましてですね、そしたらもう私には手も足も出ない事態になってしまったとき」

必死に言い訳をするも彼の容赦ない責めは続く。

「何が手も足も出ないだ。酒にはすっかり手を出してたじゃないか。男が来た時点でソフトドリンク頼めよ」

何が悲しくて飲み会に行つてソフトドリンクを頼まなけりゃならんのだ。

「どっちにしても係長は、今日は会議が延びて食事どころじゃなかったでしょ？」

「君と食事に行くんだつたら事前に充分根回ししておいたよ。だから延びてその上滝沢に無理やり誘われてあの店に行つたら、君がいたんだからなあ。僕がどんなにムカついたか分かるか？」

それはそうかもしれないが、私だってストレスが溜まってたのだ。『社長のお気に入りはずらいよ』のタイトルで本を一冊書けるぐらいの。そんなときに光くんから一緒に走ろうと誘われた。走つたらやはり気持ちが良かった。あの時間を彼と共有したことは間違いではなかった。

私は光くんのためにも自己弁護をすべきだ。

「でもっ、飲み会に行つたことはともかく、光くんとは別ですよ。係長が後輩から慕われるみたいに、光くんは私のこと先輩ランナーとして見てくれてます。私だって頑張つてる人は応援したいんです、ただそれだけなんですよ」

「それでもやっぱり彼と二人で会うべきじゃない。恋も憧れも尊敬も性欲も、区別できずに取り違えるもんなんだよ、あの年頃はね」
彼はあくまで持論を覆す気はないらしい。こうなつたら情に訴えるしかないな。

「でも家に帰つてもご飯がないなんて言われて放つとけますか？」

二年前にご両親が離婚して、光くん寂しいんですよ、きっと。お腹いっぱいご飯食べて笑ってくれたらそれでいいじゃないですか」

人間の基本だよ、食べて寝て笑うこと。それが満たされていたら、自分を可哀相だなんて思わない、絶対。私はただその手伝いをしただけだ。応援したただけなんだから。

ところが係長は情にほだされるところか、目に冷たさを加えて言い放った。

「社長夫妻が離婚したなんて話は聞いたことがないな」

「へ？」

「社長のプロフィール、休日の過ごし方は『妻とゴルフ』だったと思うぞ」

「はあ？」

「どうやら彼の方が君より少なくとも二枚はうわてらしいな」

……………あんのお、クソガキイイイ。

Vサインをしてニカッと笑う光くんの姿を想像してしまい、憤りを抑えきれずにプルプルと肩が震えた。

「……『元気出してね』なんてどの口が言ったんだか……！」

「……確かに君は元気がなかったね。ここ最近ずっと誘いも断った。……今度は何をカン違いしてるの？」

カン違いなどと心外なことを言われてこのまま引っ込むわけにもいかず、社長のお気に入りである私ということで、周囲の人が汚い目で見られることが嫌だったのだと打ち明けた。

「係長が仕事できて評価されることと私と一緒にいることは関係ないのに、そうは見ない人もいるんだって思ったら、何か嫌になっちゃったんです。滝沢主任が何を考えているのか知るのも怖い気がしたし……」

係長は頬杖について軽く息を吐くと、恨みがましそうな声を出し

た。

「佐久間の奴、もう少し言い方ってものを考えてくれてもいいのに……」

でも居酒屋でのやり取りから受けた印象では、滝沢主任に関しては私に取り入ろうとしているのではないような気がする。主任の態度はむしろ、私を利用して係長に挑みかかっているみたいだった。

「やっぱり係長の方が私に取り入ってるって思ってるのかな。でもわざと係長を怒らせるような言い方するの、変ですよ」

主任の意図についてあれこれ推測すると、彼はきっぱりとした口調で心配無用だと告げた。

「滝沢のことは気にするな。もともと僕らは仲がいいわけじゃないからね。それで君が利用されているんだとすればすまないと思う。だからあいつとはできるだけ関わらないようにしてほしいんだ」

真剣な目に動かされて了承はしたが、私が『社長のお気に入り』だという事実が変わらないのだ。一緒にいれば色眼鏡で見られるかもしれないということも。

それを伝えると、係長は和らいだ目でふっと笑った。

「君はいつも僕を心配してくれるよね。不倫の恋に悩んでるとか、ファンをもっと大切にしろとか、見当はずれなこともあるけど」

見当はずれで悪かったな。

「そう思いたい奴には勝手に思わせておけばいい。君と僕が真実を知っていればそれで充分だよ。……だから、他人の邪推を気にするよりも、僕の気持ちの方を優先してくれないか？」

彼が真摯に語りかけるたびに心が強く打たれる。強い意志でもって訴える姿は圧倒的ですらある。私がくよくよ考えていたことなど軽く打ち砕いてしまうような力強さに導かれて、優先してほしいという彼の気持ちについて考えた。

周囲の汚い目から守りたいと思いつながら、私は彼の気持ちを無視

していたんだろうか。

滝沢主任と何度偶然会おうが、偶然は偶然だと、出会いなんかではないと、縁でもないと言ってくる係長を信じたのが私の気持ちなら、社長のお気に入りではなくただの越智美春として一緒にいたいと言ってくれるのが彼の気持ち。

和解した日、私たちは互いを認め合った。互いを受け入れた。あのときの気持ちは本物で、今につながる大事なものだ。

私たちがスタート地点に戻ったときに手に入れた、大事なもの。

「分かりました。これからは係長の気持ちを優先します」

うなずいて返事をする、彼はテーブルに身を乗り出してもう一度確認する。

「約束だよ？ 僕の気持ちが優先だ」

「はい、約束します」

確約を手に入れて満足そうに微笑む彼。しかし私はすぐに後悔した――目の前の微笑みが禍々しく歪むのを見て。

「じゃあ今日行くはずだった食事に行くことにしよう。……君の奢りで」

嘘だろ！

「なんで、なんで私の奢りなんですか！？」

「社長の息子にだって奢ったじゃないか」

「光くんは未成年ですよ！」

「『君に嘘をついた』男には奢ったのに、『君に嘘をつかれた』男には奢れないの？」

「どういう理屈ですか、それは！」

「やっぱり嘘をつかれるっていうのは傷つくよなー、ショックだよなー。君が奢ってくれたら僕の心も癒されるなー」

半分も本気で思っていないだろ！ 腹黒の本領発揮だな。「これに懲りたら嘘ついて誘いを断るな」ということか。

私は諦めて腹をくくった。

「分かりましたよ、奢ります。でもっ、できればランチにしていた
だけると大変、とつても、すぐおく助かるのですが……」

揉み手をせんばかりに下手に出たのが失敗だったと悟ったのは、
彼の口もとが嗜虐的にカーブを描くのを見たときだった。

「ランチね、いいよ。でも一緒に行ってくださいってお願いしてみ
て」

性格悪……！　しかし従わなければディナーを奢り……それはム
リ！

「……どうか私と一緒にランチに行ってください、お願いします…
…」

あえなく屈服したら小さなつぶやきが耳に入る。

「まあ、これぐらいの報復は許されるだろ」

それはどういう意味かと問いただそうとしたら、携帯電話がメー
ルの受信を知らせた。兄からだ。

《今どこ？　迎えに行く》

「え、どうしよう」

「何？」

「兄が迎えにくるって言うんですけど」

それを聞くと係長は眉をひそめて一瞬押し黙ったが、口を開いた
ときにはすでに瞳が生き生きと動いていた。

「僕が送るから迎えは要らないって返信して」

「……係長の名前も出すんですか？」

「そう」

いい男同士対抗意識を燃やすふたり。一抹の不安を感じながらも
言われたとおりにメールを送った。

肌を刺す冷たい空気にブルツと震え、マフラーを口もとまで引き

上げた。そういえば今週末は冷え込むと予報が出ていたっけ。右隣を歩く係長も「寒いな」とコートの襟を立てる。自宅マンションへと向かう道はひっそりと静かで、リズムの異なる二種類の靴音が冷気の降りたアスファルトに響いていた。

「奢りランチ、いつにしますか？」

奢り、の部分強く発音して言っていると、係長は苦笑しながら答えた。

「月曜日がいいな」

「早速ですか」

「善は急げ」

「確かに給料日前よりはいいですけどね」

あまり高くない店でありますように。心の中で十字を切った。

「今度またドライブでも行かない？」

突然快活な声で誘いの文句を口にする彼に驚く。

「なんでですか？」

「なんでって……楽しいだろ？」

「誘う相手間違ってますよ。好きな人がいるんでしょ？」

「だから君を誘ってる」

「だから私を……？」 意味を把握するのに数秒を要した。

「その手はどうでしょうねえ」

「……どの手？」

足を止めて彼は訊き返す。別に確認しなくてもちゃんと分かっているって。

「他の女の子を誘って嫉妬心を煽る作戦でしょ？」

専門学校にいたのだ、そういう女の子が。気のある男の前でわざと他の男と仲良くするの。それで彼は焦って行動を起こすんだだけさ。

「女の子のタイプによってはそれは逆効果ですよ。あんまりお勧めしませんよ？」

彼が呆然とするのが夜目にも分かった。女性からの率直な意見を聞いて自分の考えが浅はかだったことを思い知らされたのだろう。また彼の役に立ってしまったな。

「……………忍耐心を試されているのかな、僕は」

切ない想いが凝縮されたようなつぶやき。彼女が振り向くのを我慢強く待とうとする心意気は、彼が本気であることの証だ。……でもどうしてそれを寂しく思ってしまうんだろう。

「美春」

突如耳に届いた声が意識を前方に向けさせた。数メートル先の暗がりから街灯の光の先に兄が現れる。自宅マンションまではあと三十メートルほどの距離。

迎えはいらないと返信したのに。コンビニでも行くつもりだったのかな。

隣に立つ係長からはピリピリと緊張感が漂ってきた。よほど兄にライバル意識を燃やしているのか。でも中身はただの変態だと知ったら張り合いがなくなるんだろうな。

「こんばんは」

一分の隙も見せずに兄が言う。

——係長と兄。二度目の対面だった。

第四十話 あの日、黄色いTシャツ

真冬の夜。冷たく澄んだ空気は厚手のコートを身につけていても容赦なく身体を突き抜けていく。足もとから這い上がってくる冷気は節々に入り込み居座って、内部から身体を凍えさせる。

しかし静かな住宅街の路上、この場だけはまるで異空間のように、真冬の寒さは冷ややかに燃え上がる対抗心によって打ち払われた。

「こんばんは」

「こんばんは」

にこやかなのは表面上だけ、いい男同士互いを意識し合うふたりは腹の探り合いのような視線を向け挨拶を交わした。

兄、越智悠人。上司、瀬尾達也。

キツネとタヌキ。さっき係長が食べたのはキツネうどんだったが、それはともかく。

「瀬尾係長さん、でしたね。わざわざ妹を送ってくれてありがとうございます。ございます。でも今夜一緒だとは存じませんでした」

「居酒屋で偶然一緒になりました」

「それだけでわざわざ？」

「こんな遅くに女性を独りで帰すなど、とんでもありませんよ」

「上司が優しい方で妹は幸せ者です」

ふたりとも白々しい台詞を大仰に言っ、まずは相手の反応を見ているのだな。次はどちらがどう仕掛けるのか。

「実は僕も法学部出身なんです。だから法曹界に入った先輩や友人もいるんですけどね、仕事が大変そう。お兄さんもお忙しいんでしょうね」

仕掛けたのは係長だった。兄の職業に関心を見せつつ仕事ぶりを探っているのか。

「弁護士としての業務だけでなく、事務所のパートナーとして雑務も山のようにおありでしょうね。休む間もないんじゃないですか？」

「忙しいことは否定しませんね」

確かに兄は仕事に忙殺されている。応対するのは業務時間内にやってくる顧客ばかりではない。夜間にしか時間が取れない顧客もいる。当番弁護の日などはあちらこちらの警察署を駆けずり回っているし、週末は弁護士会の会議で潰れてしまったり、急ぎの案件が入ることもある。

忙しさに比例して変態度も上がると気づいたのはいつのことだったろう。

「そういうことでしたら、毎回妹さんを迎えにくるのも大変でしょう。遅くなるときは責任をもって僕が送り届けますよ」

なるほど、係長の意図はここにあったのか。『責任感の強い男』というイメージをアピールしたいのだな。

彼の申し出を吟味しているのか、それとも自分のいい男ぶりを効果的に印象づける方法を考えているのか、兄は無言だ。ちよつと不気味。

……しかしいい加減寒くなってきた。これ以上このふたりの化かし合いに付き合うのはアホらしい気がする。

「係長、それじゃこれで」

暇を告げることで私から幕を引くつもりだったのだが、兄がぐいと前に出てそれを押し止めた。

「妹は扱いにくいでしょうね」

お得意の笑顔のままで相手を怯ませる視線を投げかけるも、係長も負けじと一歩前に出て距離を縮める。

「いいえ、決してそんなことはありませんが」

「昔も今も変わらず自然で元氣な子なんです。天衣無縫とでも言うかな。それが妹の良さだと思っています」

係長の『責任感の強い男』に対して兄は『家族愛に満ちた男』でアピールか。いい男合戦は中身で勝負、なのだな。

「でも会社ではそういうわけにもいかないでしょう。気が利かずにご迷惑をかけていることもあるかと思います。まだまだ子供ですから、自分からは気づかないことも多いですね。でも手に余ることは無理に気づく必要もないと兄としては思っているんですよ」

『さりげなく妹の欠点をフォローする男』――ひねった技でいい男ぶりを上げようとしているな、兄よ。

これを受けて対峙する係長もまた、攻勢に出てきた。

「妹さんはひとりの立派な大人の女性だと思います。今はまだでもいずれは気づくこともあるでしょう。僕の方でも気づかせてみせませすし。どうぞその辺のことはご心配なく、僕にお任せください」

『上司として部下を決して子供扱いせずに教育まで請け負う男』――高等な技を出してきたなあ、係長。

でもさっきからふたりとも、私が気づくとか気づかないとか、何なのだいたい。

兄と係長のいい男合戦は、なぜだか勝負の焦点となっている私を置いてきぼりにして更に続いた。

「妹の至らなさを補うのは兄の役目ですので、お間違えのないよう」

「僕は僕なりのやり方で妹さんと接するつもりですので、気遣いは無用です」

「いろいろとお忙しい方と伺ってますよ。妹のことまでは手も回らないでしょう」

「以前と違って今は時間がたっぷりあるんです。それは妹さんも承知していますよ」

「あー」

もはや意味不明となった会話に疲れた私は間に割って入った。

「寒いんですけど」

自宅に戻るとすでに風呂が沸いていたので歓声を上げた。あの方のお陰ですっかり身体が冷えていたのだ。女に冷えは大敵なのだぞ。

何よりもまずは風呂に入ろうと着替えを取りに自室に行くと、兄がすぐ後からやってきてぶっきらぼうに言った。

「お前、あいつにフラれたなんてよくも嘘ついたな」

「……そんなご言ったが？」

「デートしたって日に言ったじゃないか」

非難がましく見るので係長と水族館に行った日のことを思い返してみた。確かに「フラれた」と言った覚えがあるが……やはり係長にフラれたのだと誤解していたか。釈明するのが面倒くさいので放置していた。いけない、言い訳をしなくては。

「嘘なんがついてねって。『係長にフラれた』とは言ってねえべ？」

「じゃあ誰にフラれたんだ」

「高校の同級生。偶然会って……その、一緒にご飯でも食べようかって誘ったら……彼女がいるからって『フラれた』」

苦しい言い訳だったがじつまは合っている。五年前の出来事から話す面倒くささを思えば、こんな嘘など可愛いものだ。

兄は明らかに疑っていたが、これを嘘だとする根拠はないので最後には受け入れた。しかし機嫌がよくない。係長との勝負がつかなかったからか。

すると思ったとおり苦々しげなつぶやきが口から漏れる。

「あいつ、真っ向から勝負してきやがった」

兄もまた係長に負けず劣らずひとかたならぬライバル心を持っているようだ。

「係長は手ごわいよ？ あんちゃん、『相手にとって不足なし』だべ？」

からかい半分で言ってやったら痛いものでも見るような目付きをする。

「悪い予感ほど当たるもんなんだよな。なんだってまたあんな厄介なヤツが上司になったんだか」

自分の方がよほど『厄介』であるという認識のない兄は、完全休養となった土日をずっと私と過ごして変態の健在ぶりを示した。

週明けの月曜日。

奢りランチの約束を果たすために係長と入った中華料理店。良心的な価格設定に胸をなで下ろす私の傍らで、彼はキョロキョロと店内を見回して「いないな」とつぶやいた。

「誰がですか？」

「滝沢。ここ昔から営業部の連中がよく来る店なんだよ」

「係長、まだ金曜日のこと怒ってるんですか？」

やや粘着質のきらいのあることは分かっているが、あの暗い感情を引きずるのは彼のためにならない。しかし返ってきた答えに私はあんぐりと口を開けた。

「いや。どうせなら君と一緒にのそこを見せつけてやろうと思っ
さ」

「はあ？」

「それであいつが焦って何か失敗したら楽しいだろ？」

意地の悪さを口もとに貼りつけて笑む彼に呆れた。……どんだけ腹黒だ。

言い返そうとしたが店員が注文を取りにきたので八宝菜定食を頼むと、爽やかな顔に戻った係長も「同じもので」と告げた。

店内を見渡せばカウンターもテーブル席もほぼ埋まっている。この中華料理店は早い・安い・旨いで人気のある店だそうで、私たちが注文した料理を待っている間にも次々と客が出たり入ったりして実に回転が早い。

入り口の自動ドアが開くのはいったいこれで何度目か、次に現れ

た客は係長の顔見知りだった。

「比嘉さん」

「よお」

ちようど定食二つが運ばれてきたところで、同席してもらっていないかと私に断ってから係長は彼を呼んだ。

比嘉朋之営業部二課課長。年齢は三十代前半といった辺りか。あごのラインが緩やかで目つきも柔和な、穏やかな人という印象を抱いた。係長が入社一年目に配属された営業部で、教育係を担当したのだという。

私は普段見せたことのない爽やかスマイルを顔に浮かべ、いつもより三音高い声で挨拶した。係長が不審な目で見たがそれは無視する。

メニューを開きさして時間もかけずに青椒肉絲定食を選ぶと、比嘉課長は親しみやすい笑顔を私に向けた。

「越智さんと知り合いになれるとはこの店に来て正解だったな。あ、僕ね、あの日九階で君の怒鳴り声をしっかり聞いちゃってるから、猫かぶらなくていいよ」

八宝菜を咀嚼しながらガックリと肩を落とした。見れば係長も苦笑いしている。

あの話題を避けようと課長を持ち上げることにした。

「そんなにお若いのに課長さんってすごいですねえ」

「ウチの社で課長昇進の最年少記録を持つてる人だよ」

私の意図を察したのか、係長も少々大げさな言い回しを使って話をつなげる。

「ええっ、すごい」

「だろ？」

しかし私たちふたりの褒めそやしにも比嘉課長は冷静に応じた。

「君たちのところの工藤課長と同じだったと思うけど。まあ、工藤さんは転職組だから一概には比較できないし、それに、きつと瀬尾

が新記録作るんじゃない？」

お返しだとばかりに目が笑っている。係長は「いえいえそれは」と謙遜するしかなく、妙に白々しい空気が漂ったところで私は話題を移した。

「滝沢主任だけがライバルじゃないんですね、係長。もっとすごい本命がいるじゃないですか、ここに」

我が社の最年少課長及び係長はきょとんとしたが、好奇心を刺激されたらしい課長の方が先に何のライバルなのかと訊いた。

「もちろん『目指せ！ H & a m p , G コミュニケーションズ社長杯』のライバルですよ」

意気揚々と告げた私をそろって五秒間まじまじと見つめると、課長はブーッと吹き出し、係長はこめかみに手を当てる。私は張り切って先を続けた。

「私としては工藤課長と瀬尾係長を応援したいですけど、ふたりが社長・副社長になったら、美人の女性ばかり採用しそうなのが難点ですね。それでミニスカートの制服なんか作ったりしたら最悪ですよねえ。やっぱりエロくない人に社長になってもらった方がいいですかね、比嘉課長？」

「うーん、僕もエロくないとは言えないよ」

笑いながら微妙なエロ宣言をした課長に驚く。

「えっ、そうなんですか？ まさか係長の教育係をしていたときに、営業以外のことでまで教えてたとか？」

ぶはははと笑う課長とは対照的に赤くなって頭を抱える係長。これはビンゴだったか？

「しかし『目指せ社長』とは大きく出たね。瀬尾に社長になってもraithたいの？」

青椒肉絲を食べ始めた比嘉課長が興味深そうに尋ねた。

「はい。それでいつか自慢するんです。私、社長が係長時代にラン

チ奢ったのよーって」

「君、瀬尾にランチ奢ったの？」

「はい」

胸を張って答えたら、係長が身を乗り出して会話に割って入った。

「今日初めて奢るんだろうが」

「細かいこといちいち気にしていると早く老けますよ」

「君が気にしなさ過ぎなんだよ。何だ、さっきから言いたい放題」

「だって課長が猫かぶんなくていいって言ったから」

「何でもかんでも言葉どおりに受け取るな。それに君は猫じゃなくて犬だろ」

「トイプードルみたいなの？」

「秋田犬の流れを汲む犬」

「つまり雑種じゃないですか！」

……ふと気づくと比嘉課長が呆氣にとられた顔で私たちを見ていた。

「……失礼しました、課長」

赤面して謝罪する係長はまるで恥じらう乙女のようについ吹き出してしまった。すると思いきり睨まれたので首をすくめる。そんな私たちを見て課長が意味ありげな顔をした。

「何かキャラ変わったねー、瀬尾。それとも越智さんだからなのかな？」

彼の流し目に「いや、えーと」と係長は目を逸らす。

そしてこのとき、私の呼吸を止める言葉が課長の口から滑り出た。

「同じ陸上部同士だから話が合うんだろうな」

………いま、何て？

陸上部？ 係長が？

聞き間違いではないかと思ったが、当の本人は私と目を合わせないようにするためなのか隣りに座る課長に顔を向けた。

「……よくそんなこと覚えていましたね」

み、認めた？ 嘘お！

「ずっと忘れてたけど、去年の社内運動会で瀬尾が越智さんに抜かされたの見て思い出した」

「私が抜かす……？」

何のことか分からない。係長を見ても相変わらず視線を外したまままだ。

比嘉課長は軽く目を見張ると、二度目の決定的な台詞を投げかけた。

「あれ、知らなかった？ 瀬尾もリレーに出てたんだよ、第三走者で」

突風のような衝撃が身体を突き抜け、気づくとテーブルの縁を手がつかんでいた。

定食を食べ終わると急き立てるように私を店から出して、係長は足早に歩き始めた。遅れないように急ぎ足で彼の横に並び、早口でまくし立てる。

「陸上部だったのって係長のお友達ですよ？ 係長もなんですか？ 本当にリレーに出てたんですか？ なんで今まで言ってくれなかったんですか？」

彼は質問には答えず、カフェというより喫茶店の名称が相応しい店の前で足を止めた。

「コーヒーでも飲む？」

「……はい」

ふたりとも少し落ち着く必要がありそうだ。彼にとっても私に知られることは想定外だったのだろう。頭を整理しなければ、何から

口に出していいのか分からないのかもしれない。

係長はしばらく無言でカップの中の黒い表面を見続けた。私はスプーンでコーヒーをかき混ぜながら言葉を待つ。

ようやく彼が口を開いたとき、その声は面映さと懐かしさとそして甘酸っぱさで彩られていた。

「……ハイジャンやってたんだ。短距離やってたのは僕の一番仲が良かった友達で……ふたりとも関東大会まで進んだよ。それが精いっぱい。だからインハイ出るのがどんなに厳しいかってこともよく分かってる。君が全国四位だと知って心から、本当に心から賞賛した。あのリレーで君に抜かされたとき……」

「何色ですか？」

私は彼の言葉を遮って尋ねた。

「え？」

「係長は何色のTシャツを着ていましたか？」

「……黄色だ」

黄色。黄色いTシャツ。

脳裏にあの日の映像が蘇る。

まばゆい初夏の日差しに手をかざして仰ぎ見れば、透けるほど薄い帯状の雲が連なる青い空。心地よい微風を肌感じてレンガ色のトラックに降り立つ。

高まっていた気持ちはその瞬間から全一点に収束される。今、私の世界に存在するのはたった一人、私だけだ。

コースに立つと目に映るのはこちらに近づく黒いTシャツ。やがてバトンタッチの体勢に入り足が交互に動き始めると、進むべき動線がトラックの上に見える。そして右手にバトンが収まったとき、爆発的に放射し始める内部の熱。

すぐ手の届く距離を走る青い背中を視線が捉える。彼を抜かせば

次に見えてくるのは黄色いTシャツだ。次第に強くなる空気の抵抗。それすらも楽しんでやがて私は風と一体になる。

目の前に迫る黄色い背中。長身の割には走りが安定しているけど、脚の上げ方がもどかしげだ。一コースアウトに並んだときにはもう、前方を走るオレンジ色のTシャツを目は追っていて――――

意識を現実に戻し目の前に座る彼を見つめた。

「係長だったんですか。でもそんなこと誰も言わなかったし……」

「記憶に残るのは勝った人間だけだよ。負けた奴はその瞬間から忘れ去られるんだ。まさか比嘉さんが覚えていたなんて、巡り合わせが悪かったな」

恥ずかしそうに笑う彼を見ても、未だに信じられない思いでいっぱいだった。

係長は時計をチラと見て残念そうな顔をした。

「タイムアップ。……今夜時間取れる？ 君に話したいことがあるんだ」

その夜係長が連れて行ってくれた地中海レストランで、私たちは互いに一杯だけという約束で注文したワインと共に海の幸を中心とした料理を楽しんだ。周りに気兼ねなく話がしたいからという理由で個室を選んだが、今度は隣り合わせでなく向かい合わせで、彼が陸上部時代のエピソードを語るのをただ聞いていた。

暑い夏の日、練習の合間に顧問の先生の目を盗んでアイスを買に行ったとか、大会で顔を合わせる他校の女生徒を好きになった部員が告白するのを手伝ったとか、きつと誰しもがひとつやふたつ覚えのある、十代の頃の、あの頃にしか味わうことのできない、甘酸っぱい気持ち、反抗心、焦り、憧れ――そんなものを彼も同じように持っていたことを知った。

「もっと早くに言ってくればよかったのに」

わざと恨みがましそうな表情を作って彼をとがめる。

「やっぱりするいですよ、係長は。いつも私にばかりベラベラ喋らせて。でも今日は話が聞けてよかったです」

それを聞くと彼は少し慌てた顔で訂正した。

「聞いてもらいたい話というのはそのことじゃない。僕的心情というか——君には少し解りにくいかもしれないけど」

そう言っておいてまるでぎりぎりのラインに立っているような——この一線を超えてしまったら、もはや後戻りはできないかのよう——な——ためらいを見せる。

しかしやがてそれも振り切ると、彼は決意を込めた光を目にたたえて語り始めた。

第四十話 あの日、黄色いTシャツ（後書き）

当番弁護…刑事事件で逮捕・拘留された人が弁護士会を通じて弁護士の派遣を無料で要請できる制度。

兄VS係長のバトル心の声バージョンはいずれ番外編として書きたいと思っています。

次回は瀬尾の口から語られる美春との出会い。全て瀬尾の独白となります。

第四十一話 君との出逢い

僕は昔からクジ運の悪い男なんだ。

商店街の福引きに当たったこともなければ、雑誌の懸賞に当たったこともない。

ただ当たらないだけならそれでいいんだが、中学校でクラスの皆が嫌がるナントカ委員とか、ドアを開けた途端むっとする臭いが鼻を突く部室の掃除とか、そういうのは逆に当たってしまうんだ、昔からね。

だから去年の社内運動会でリレー走者をクジ引きで決めることになり、ものすごく嫌な予感がして——思ったとおり引き当ててしまった。第三走者を。

入社一年目、営業部に配属されていたの一番に訊かれたことは、学生時代に部活動は何をやっていたかということだった。僕は正直に陸上部だと答えた。

それを聞いた先輩社員たちから歓声が上がった理由をもちろんそのときは知るはずもなく、「これで何年間かアンカーは安泰だ」と言われて初めて、自分がリレー要員として重宝される存在であることを理解した。しかもアンカー、四百メートルのね。

そうだな、瞬発力には自信はあったから、百メートルなら今でもかなり速く走れるだろうな。しかし四百ともなると大学時代に陸上競技から離れていた僕には、まるきり自信がなかった。普段サッカーでもやってる奴の方が、よっぽど速く走れるだろうと思ったよ。

結果から言うなら、若さだけで何とか乗り切った感じた。三位でバトンを渡された僕は、そのまま三位でゴールした。一位と二位がデッドヒートを繰り広げて場を盛り上げていたよ。

一年後、P R事業部に異動した僕は自分が陸上部出身であること

を誰にも言わなかった。その年のアンカーはテニス部出身の新入社員が務めた。僕もまだ二年目だったから若いという理由だけで三百を走ったが、これは仕方ない。

入社三年目、四年目共に百メートルを走り、五年目はお役御免、僕より若い連中が頑張るのを高みの見物していればよかった。

ところが去年、僕が所属していたPR一課には新入社員は配属されず、一昨年のリレーメンバーは一人が退職、一人が異動をしていて、代替メンバーと走順をクジ引きで決めることになったんだ。やっぱり、という気持ちで神様を罵倒したよ。クジ引きの神様がいればだけどね。

そして社内運動会の日がやってきた。競技というより体感ゲームみたいな種目に出る同僚を羨ましく見ていたよ。最終種目であるスウェーデンリレーが行われる時間になったときは、とっとと終わらせて早く帰ろうなんて思いながら集合場所へ向かったんだ。

全部で八チーム、八色のTシャツを着た総勢三十二名の中には女性もチラホラいた。運動部出身の女性なら第一走者を務めるぐらい、なんてこともないだろう。男が出た方が有利には違いないが、しょせん社内運動会だし、要するにコミュニケーションを図ればそれでいいんだから。

集まったリレー走者がトラックに降りて走順ごとのスタート地点にぞろぞろと移動を始めた。第三走者の八人も同様に。

このとき観客席の雰囲気は期待でかなり盛り上がっているようだったな。しょせんは社内運動会だけどリレーともなればワクワクして当然だ。花形競技だからね。でも走るこっちにはそんな余裕はなかったよ。声をかけてきたPR三課の後輩も苦笑いしていたな。

「瀬尾さんも三百なんですか。キツいですよね」

「クジで当てちゃってね。アンカーでないだけマシだけどな」

そんなやり取りを交わす僕らの横をスッと通ったのが――君だった。

そう。僕はそこで初めて君に出会ったんだ。

君は見るからに若くて初めは新入社員だと思った。でも一度も見ることがない。研修で来ていれば会っているはずなのに。PR事業部に研修に来ないなんてことがあるんだろうか。黒いTシャツはこの部署だった？

他の走者を見たら、佐久間がいる。WEBか。クリエーターのかな。

君は緊張を解すためのカストレッチに余念がなかった。ショートパンツから伸びる脚は細くて筋肉がついている。アスリートの脚だと思った。そして君が履いているのが短距離用のスパイクだと気づいた。

この子、陸上経験者だ。

僕は思わず君に声をかけた。

「君は新入社員なの？ WEBにいるんだよね」

ところが君は心ここにあらずといった感じで僕を無視した。

今なら分かるんだ。君はいったん気持ちが入ると周りを遮断してしまうんだって。ものすごい集中力で一点に向かって照準を絞るんだよな。

でもあのときそれを知らなかった僕は正直面食らった。僕を無視する女の子に出会ったことはなかったから。

僕にとって女性が競争相手だったことは一度もない。子供の頃から勉強でもスポーツでも女の子に負けたことはなかった。

思春期に入ると女性は性的対象になるかならないかのどちらかで、

友人とオトすのを競う対象ではあっても、女性自身が僕と何かを競う相手には決してならなかった。

僕はいつでも周囲の女性を精神的にも肉体的にも凌駕して、優越感に浸っていたんだろうな。でも決してそれを表に出すようなことはしなかったよ。

なんでかって？　それが周りの人間とうまくやっていくための方法だったからだよ。周りが僕に期待している肖像だったからだ。『絵に描いたような理想の王子様』がね。実際にはそんな奴いるわけもないのにな。

そうやって顔を取り繕っているとますます多くの女性が近づいて、もはや本来の僕とはかけ離れた虚像の皮をかぶっている方が普通になってしまった。腹の中で実際は何を考えているかを知ったら、僕に近づく女はいなくなるだろうな。

……ごめん、話がだいぶ逸れたね。

話しかけても無反応でてつきり君に無視されたと思った僕は、男ばかりの中でどれだけ走れるのか見てやるよ、と少し意地悪な目で君を眺めた。願わくば僕らのチームがWEBチームより後ろの順位でありますように。でなきゃ、君の走りは見られないからね。

ところがクジ引きで決めた寄せ集めメンバーであるはずのPR一課は、予想外の頑張りを見せて二位で僕にバトンを渡した。一位との差はそれほどでもない。三百メートル走る間に向こうがバテれば抜けるかもな。

そんなふうを考えて走り始めたんだが、やがて後ろから近づいてくる足音にぎよつとなった。第三走者にそんな速いヤツいたのか？　周囲がどよめいているのが分かる。みんな、そいつの走りに驚いているのか。

バトンタッチまで残り百メートル。後ろから迫る気配が僕の右側

に並び追い抜こうとしていた――君だった。

嘘だろう？ W E Bの第二走者は四位か五位ぐらいを走っていなかったか？ 信じられない。僕は女に抜かされるのか？ この僕を負かす女がいるのか？ いくらスプリント専門ではなかったと言っても、僕の百メートルのタイムは決して悪くはなかったのに。

君はほんのわずか僕と並走すると、加速して先を行った。

女に抜かされるなんて冗談じゃない。そう思った僕は力の限り懸命に脚を動かした。これは明日筋肉痛で動けないかもな――頭の隅でそんなことも考えたけど、君に負ける屈辱を思えば無理やりでも身体に言うことを聞かせるつもりだった。

十年ぶりだったよ、限界に挑戦する熱を感じたのは。でもどれだけ一生懸命走っても君には追いつけなかった。距離にしたら三メートル、すぐ目の前に君の背中はあるのに決して届かない。近くて遠い君を追って僕はあがくように走った。

だけど、苦しさで心臓が爆発しそうになる中、そんな場合ではないのに僕の目は君の姿に惹きつけられていたんだ。

後ろから見る君の走りはとても美しく、無駄な動きが一切なかった。

君は風と一体になっていた。風のように自由だった。

バトンタッチ寸前でオレンジチームを追い抜いた君は、流れるような動きでアンカーにバトンを渡した。焦ったオレンジチームもたつく間に僕もバトンタッチを終えた。

そして貪るように酸素を取り込みながら僕は君を見た。君も、走り終わった連中も、観客も、皆W E Bのアンカーがトラックを一周する姿を目で追っていた。でも僕は君を見ていた。息を弾ませそれでもまだ走り足りないような顔をしている君を、ずっと見ていたんだ。

君への賞賛と負けたことへの悔しさが身体の中で渦を巻いてい

て、あのとき、僕の目には君しか映っていなかったんだよ。

翌週の社内ニュースレターに載った社長とのツーショット写真の下に、君の経歴を見つけた。

越智美春、二十二歳、秋田県出身、派遣のWEBデザイナー、二〇〇〇年インターハイ陸上女子四百メートル四位入賞。

速いのも道理だ、全国四位とはな。すごい。

それからというもの、君が気になって仕方がなかった。

どんな練習を積んだんだろう。なぜWEBデザイナーになったんだろう。どんなことを考えているんだろう。どんなふうに話すんだろう。

負けた悔しさはずっと身体の中に残っていたよ。だから、君という人間を知って見返してやりたいのだ、僕の方が優位に立ちたいのだと思っていたんだ、このときはまだ。僕自身が大了人間でもないのにな。

そうこうするうちに社長が君を気に入って直々に正社員に誘ったことを知った。ところが君は断ったらしい。朝の会議で工藤課長に、社長の誘いを断った女の子がいるそうですね、と訊いてみた。彼は苦笑いしながら言ったよ。

「あいつ滅茶苦茶プライド高いんだわ。社長がフライングして現場の人事に口を出したのが気に入らないとさ」

実力だけで勝ち上がってきた人間ならではのプライドの高さだな、と思ったよ。でもそういう気の強い女の子がまた、社長の好みでもあるんだよな。

思ったとおり社長は頻繁にWEB事業部に出入りするようになった。その話は八階のPR事業部まで聞こえてきて、いろんな噂が飛び交った。そうそう、『社長の愛人』もそのひとつだな。

社長から特別扱いを受ければ彼女だって天狗になるだろう、そして周囲と摩擦を起こして向井の二の舞じゃないか、でもしよせんその程度の女なのかもしれない、それなら見返してやるほどの人間じゃない――

僕はそんなふうを考えて君に負けた悔しさを晴らそうとしていたんだ。でも一方で、あれこれと氣を揉んでもいた。社長のお氣に入りという立場を野心のあるヤツに利用されていないだろうか、そういう目的で近づいてきたと後から知ったら傷つくんだろうな、なんてね。

部署もフロアも違う僕は君と何の接点もなかったから、君のことが氣にかかっても知り合う機会すらない。負けたままにいる悔しさはもちろんのこと、君への心配も日に日に増していったが、接点がない以上どうすればいいんだ？

そして七月に入り、信じられないことが起きた。君が非常階段をダッシュで上って警備員から嚴重注意を受けたんだ。

會議に出ていた役付き社員は皆笑っていた。唯一僕だけだ、真っ青になったのはね。本田沙織と一緒にいた現場を見たのが、よりによって君だったなんて。

あのときのことは一度も噂になっていなかったが、僕はその理由をどうにも測りかねていた。でも君なら僕のことを知らなくて当然だ。このまま僕を知らないでいてくれれば、白川さんの結婚を台無しにしたのが僕だったとバレることもないだろう。

しかしそれでは君とはずっと知り合えないままだ。どうしたらいい。

都合のいいことも考えたよ。僕を見ても分からない可能性もあるって。たった一度、数ヶ月も前に見かけた男のことなど覚えているだろうかっかね。

考えても答えは出なかった。たったひとつの問題にこんなに悩んだことはなかったよ。

そしてある日、転機がやってきた。係長に昇進した僕にWEBへの異動の話が出たんだ。PRに残ることもできただろう。しかし僕は賭けてみることにしたんだ。

異動してきた僕を君は最初興味深そうな顔で見っていたが、何か気づいた気配はなかった。やはり僕の顔は覚えていなかったのだろう。転校生と同じ理屈で、異動者は好奇心や興味の対象となる。僕についてのゴシップを集めて金を取ろうとする君には呆れたが、君自身ゴシップをばらまかなければそれでいいと思った。

だから万が一思い出したとしても何も言えないように、不確かな情報を口の端に上らせるべきではないという正論で口を封じようとした。その時点で五ヶ月も前のことだったから、記憶に自信はないと君に思わせればよかったんだ。

だから君が五階の会社まで乗り込んだと聞いたときはすごく慌てたよ。それが僕のことを考えてくれた上での行動だと知って、嬉しかったし調子に乗ってしまったんだな。

WEB事業部で見る君は、明るくて元気があって、いつも笑っていて、周囲を笑わせて、いじられて――要するに、皆から可愛がられていた。僕の心配など杞憂に過ぎなかったんだな。

そんな君を見ていたら、見返してやるとか優位に立つとか、どうでもいいことのような気がした。そもそも僕は本当にそんなことをしたかったんだろうか？

それよりも、くるくるとよく動く君の表情を追い、次に何をやらかしてくれるのかとワクワクし、君が笑っている理由を知ることの方が楽しそうだった。そして僕の言葉で君が慌てたり拗ねたり喜んだり笑ったりするのは、もっと楽しいだろうと思った。

君を見たら社長とのくだらない噂も信じる方が阿呆らしかった。

いつも太陽の方角を向いているひまわりのような君が、誇り高い君が、社長の誘いすらはねつけた君が、どうして後ろ暗い関係を持つことができるだろう。

そう信じたから、課長との不倫を疑って動揺した。どうしようもなく悩んだ。最終的に君が深く傷つく前に救ってやりたいとさえ思っただ。

全く、思い上がりもいいとこだよな。僕のそんな押し付けがましい正義心は、君をひどく傷つけたね。

それでも君のご両親が亡くなったことを知って、ひとつだけ確信したことがあるんだ。

君がいつも太陽の方を向いていると思っていたのは間違いで、本当は、きつとご両親が元気でいらした頃と同じように、ただシンプルに君が君らしく生きている姿をふたりに見せたいんだと。

そのとき初めて分かったんだ。僕が負けたのは当然だって。周りが望むように顔を作って自分を見せない僕が、君に勝てるはずがなかったんだ。そんな僕に君が心を開いてくれるわけも、大切な話を打ち明けてくれるわけもないよな。

あるとき初めて思っただよ。自分を見せたいって。

そして僕はもう一度走り出したんだ。

リレーで抜かされた瞬間から見続けている、近くて遠い君の背中を再び追いかけ始めた。それまではどのコースをどんなペースで走るべきかも分かっていなかったけど、あるときから、たとえば長距離になっても君に追いつきたいと思っただ。

君に嫌われ走ることですらできなくなって、このまま棄権しなければならぬのかと落ち込んだよ。

だけど君は僕を赦してくれたね。

だからいま、本気で走っているんだ、君に追いつくために。

君に敵わないことはよく分かっているが、それでも僕は君に追いつきたいんだ――――

第四十二話 真劍勝負、罰ゲーム付き

瀬尾係長が静かに怒っている。

眉間にシワを寄せ口はぎゅっと引き結び、まるでじっと怒りが通りすぎるのを待っているかのようだ。

……やはりおじさん扱いしたのは失言であつたか。いや、「おじさん」とはつきり口にしたのではないがそれらしきニュアンスだったことは認める。こちらはかなり焦っていた手前、四捨五入すれば二十歳と三十歳という私たちの年齢差を気にしているのであろう彼のデリケートな心まで思いやる余裕がなかった。反省反省。

謝るのはかえって失礼だろうか――逡巡していると、強ばつていた顔が緩んで笑みが現れた。しかし薄ら寒さを感じさせるそれに嫌な予感を覚える。彼がこういう笑顔を見せるときは決まってよくないことが起きるのだから。

あちらの出方を待っていると、やがて唇が動いて低い声が滑り出した。

「僕と勝負しろ」

……そもそもなぜこんなことになったかと言えば、つい先程語り終えた係長の告白に話は遡る。

彼が聞いてほしいと言った心情。熱を帯びた口調で語られたそれは、聞きようによっては恋の告白ともとれる内容で、私を大いに慌てさせた。

正直なところかなりドキドキしてしまった。あれは危なかったと思う。係長に好きなひとがいると知っていなかったら、もう少しでカン違いするところだった。

そう、彼にはずっと前から好きな女性がいることは分かっている。今ではもう誓ってひとりだけなのだと、信じてほしいと、切実に訴

えるほど本気の相手。

……ちよつと待って。それがまさか私なんてことはないよね!？
いやいや、あり得ないからそれは、どう考えても。

上司と部下というだけにとどまらない関係を私たちは築いていると思う。彼が私のことを大切にしてくれて、時折心の一端をのぞかせてくれることも分かっている。でもそれは例えて言うなら、決して他人には明かすことのない心情を大事にしているペットの前でだけ――自分を慕って甘えてくる存在に癒されて――ついポロツと漏らしてしまうようなものだと思うのだ。

そして私の頭の奥でも何かが告げていた。なぜ心地よい関係を壊す必要があるのかと。一步先へ踏み出せば、知りたくもなかった感情に向き合うことだってあるだろう。今のままでもこうして私は彼のそばにいられるのだし、作りものでない笑顔を見ることができなのだ。この絶妙な距離感を保ったままなら。

それは防御本能だったのかもしれない。私自身と、ふたりの関係を守るための。

彼が好きなのは私じゃない。あれは恋の告白ではない。そうではなくて――

うろたえながらも頭を働かせて結論を導きだした。

『これまで女に負けたことのない彼が唯一負けた私に強烈なライバル心を持っており、再び勝負をしたがっている』

我ながら強引かとも思ったが、それ以外にあの話はどう解釈しろと言うのだ。

焦っていた私は後先考えずに口走った。

「係長ってすごい負けず嫌いなんですわねえ。でも仕方ないですよ。現役のときほどじゃないけど、私、今だってトレーニングしてるんですよ? こう言っちゃんですけど、三十前のサラリーマンに負けられないじゃないですかあ。気にしない気にしない。」

でもそんなに勝負したいんだったら、いつでも受けて立ちますよ？ 短距離じゃ係長には勝ち目はないんで、ボウリングとかビリヤードならどうですか？ まあ、どっちにしても係長には負ける気はしないですけどお、あはははは」

言い終わらないうちから彼の形相が変わっていくのを目の当たりにして、しまったと思ったが時すでに遅し。怒りの青い炎がチロチロとその目に燃えている幻想を見たような気がして身が縮こまった。しかし彼が勝負を挑んできたということは、あの解釈で正しかったのだろう。やはりカン違いしなくてよかった。ただ私が若さをひけらかしたことが気に入らなかったに違いない。三十歳前は微妙な年頃だものね、女も男も。

勝負はボウリング。二ゲームの合計点を競うことで話がまとまった。

「一応君は女性だし、ハンデが必要だよ。二十ポイントでいい？ もっと要る？」

親切そうに申し出た彼の顔は優越感で余裕に溢れている。それが気に障り私は突っ張った声を上げた。

「ハンデ？ 要りませんよ、そんなもの。勝負に男女は関係ありません」

平等の条件でねじ伏せてこそ、勝利の醍醐味が味わえるというものではないか。

私の強気を見て係長はあっさりと引き下がった。

「そう？ 君がそれでいいんなら。――それと、ただ勝負するだけじゃ面白味がないから罰ゲームを付けないか」

楽しいことを見つけたみたいに目を輝かせる。それでこちらもつい興味を引かれた。

「罰ゲーム？」

「負けた方は勝った方の言うことを何でも聞く」

「何でも？」

「何でも。それだけ真剣勝負ってこと」

こんな提案をするということは相当な自信があるのか。しかしここで断ったら戦う前から負けを認めるようなものだ。

「いいですよ」

係長はニヤリと片頬を上げた。腹黒の笑みだ。まるで罠にかかったウサギのような気分になったが、おそらくは錯覚であろう。

「じゃあ金曜日ね」

うまいこと彼のペースに乗せられたような気がしなくもないが、要は勝てば良いのだ。

何でも言うことを聞く係長。何をやらしてもらおうか。……そうだ、コスプレをしてもらおう。ナースか、メイド服か。いや、白タイツの王子様ってのはどうだ。クククク。

勝つ自信ならある。仕事柄旅行には連れて行ってくれなかった父だが、合間に時間を見つけては私に近場レジャーの伴をさせた。

すなわち、ボウリング、ダーツ、ビリヤード。バッティングセンターも。

若い頃のめり込むほど遊んだという父の手ほどきを受けたお陰で、かなりの腕前だと自負している。兄など、これまで一度として私に勝ったことはないのだ。

係長、どうぞ派手に玉砕してくれ。そしてコスプレしてくれ。

翌日、係長にどのコスプレをさせるか意見を広く募ろうと思い、彼以外のWEB事業部全社員に一斉メールを送った。

《瀬尾係長にコスプレをさせるとしたら？ 女装可。ご意見募集中！》

執事、レースクイーン、全身タイツ等々の返信を肩を震わせて見

ていたら、隣の席の藤田さんがこっそりと「ポチ、これ見て」とモニターを指差す。そこに並んだ文字は係長から男性社員宛のメールだった。

《越智美春に似合うコスプレ募集中。エロいの大歓迎》

どうやら誰かが告げ口をしたらしい。係長からの報復攻撃か。だけど『エロいの大歓迎』って……何考えてんの！

とっさに思い浮かんだのはバニーガールだ。露出だけで比べるなら陸上競技のウェアと大差はないが、網タイツがあるとエロさは倍加する。絶対に嫌！

見れば男性陣からは続々と返信が集まっている。どんなコスプレを提案したのか気になり藤田さんのマウスに指を動かした。

《髪はアップで黒縁眼鏡、ブラウスのボタンを二つ開けてタイトなミニスカートに生足の女教師》

《白衣の下は黒いレースの下着のみ身につけた、聴診器片手に迫る女医》

何だこの個人的願望が詰まった、やけに具体的なコスプレは！

恥ずかしさに打ち震えているとまたもや新たな返信が。石津さんからだ。

《裸エプロン》

……コスプレじゃないだろ！

「何をやってるんだ、お前らふたりは」

あちこちから聞こえる男性陣のイヤラシイ笑い声を背に、工藤課長が呆れた声を出した。さすがに一児の父ともなると品格を気にするのだろう。しかしこの下卑た空気の中、係長はひとり爽やかな笑顔を浮かべて答えた。

「越智さんとボウリングで真剣勝負をすることになったんですよ。それで負けた方が罰ゲームをね」

「えーっ、あたしも行きたい」

杏子さんが声を上げると、数名の同僚が次々と後に続く。

「じゃあ、皆で行こうか。ただし罰ゲームは僕と越智さん限定で」

係長との真剣勝負がにわかにWEB事業部ボウリング大会となつてしまった。幹事をやることになった私のもとへ参加希望を伝えにくる同僚たち。コスプレをやらずに済むものだから皆気楽でいい。

しかし私の心にはかすかな不安が影を落としていた。係長が根に持つタイプで、やられたままではいけない人間であることはこれまでの経験でよく分かっている。おじさん扱いされたことへの報復としてエロい格好を命じるかもしれない。もしもそんなことになったら……と想像して内心でのたうちまわっているとき、佐久間主任から声をかけられた。

「俺も行くわ。ウイスキーの行方が気になるしな」

どういうことかと問えば、工藤課長と賭けをしたのだと言う。

「私と係長のボウリング勝負で？」

「いや、賭けの対象はそれじゃねえけどよ。大いに関係あるというか……瀬尾の力量が問題なんだよな……いや、問題なのはこいつの理解力か……」

訳の分からないつぶやきは、再び頭にもたげてきたエロいコスプレへの不安によって押し流された。

しかしボウリング大会の日までにはそんな不安も払拭されていた。単純なことだ。勝てば良いのだ。この私が負けるわけではない。必ず勝って係長にコスプレをさせよう。自信を持て！

業務が終了し参加者が全員そろったところで移動を始めた。一週間の仕事を終えた解放感とボウリング大会へのワクワク感で皆良い表情をしている。係長と言えば憂いのない笑顔で石津さんと喋っていたが、根拠のある自信の表れなのかそれともただのハツタリな

のか、判別はできなかった。

一階の出入口は勤め人たちを次々と陽の落ちた街へと吐き出していた。私たちもまた同じ波に乘ろうとしていたそのとき、ひとり流れに逆らって外から入ってくる人物が視界に映る。

――滝沢主任。外回りから帰ってきたところらしい。

彼の姿を見るのは一週間ぶり、あの居酒屋以来だ。あの場に漂っていた緊張感が再びもたらされたような気になり身体が固くなる。係長に視線を走らせるとすでに無表情になっていた。

主任はWEB事業部の集団の中に私の存在を認めると、越智さんと声をかけてきた。

「ちよつといい？ S社担当と今日電話で話したんだけど」

わざわざ呼び止めるからには重要な内容なのだろう。私は同僚たちから離れて彼とホールの端に移動した。ところがS社担当の話とやらはすでに了解済みのことで、肩透かしを食らった格好になる。

そしてさりげなさを装った非難を、このとき初めて彼は口にしたのだった。

「瀬尾って保護者気取りだよ。君のこと面倒見てやらなきゃってオーラが出ててさ、誰かにアピールしたいのがバレバレじゃない？ ……何を言いたいのか嫌でも分かる。そして主任自身が私にそうアピールしたいことも。」

「そんなことないですよ」

努めて冷静に返した。係長にキレるなど言った手前、私も不用意な言葉を口にするべきではない。

「かばうんだ。分かるけど。爽やかで、人当たりが良くて、人気者だし？」

実際は十分の一もそう思っていないと分かる、嘲りを含んだ口調だった。

「でもあんまり信用しない方がいいよ。特に君みたいな人は後で傷つくから」

「私みたいになってどういう意味ですか」

「いつも本音でぶつかるでしょ？ でも相手もそうだと思ってる、後になって裏切られた気持ちになるよ」

優しいとも言える表情で忠告を与える彼に、何と返事をするべきなのか迷う。それはまさしく、佐久間主任から言われたことと全く同じだったからだ。滝沢主任は、係長が出世への思惑があって私に近づいていると、本気で信じ込んでいるのだろうか。

返答しないことをどう思ったのか、つと彼は小声になって話題を変えた。

「そういえば越智さん、瀬尾のマル秘情報知りたいうって言ってたよね。それネタにしてご飯奢ってもらうって」

背筋にゾクリと寒さを感じる。口調を明るいものに変えてもその声は陰鬱な熱さを孕んでいた。深さを増すほどに暗く熱くなっている地熱のような熱さ。

聞いてはいけない。心の中で危険信号が点滅した。

「あいつが営業部に――」

「滝沢」

主任が言いかけた言葉は、横合いから聞こえた別の声によって遮られた。

「クライアントからの大事な用件なら、こんな所で呼び止めて話すべきじゃないだろう」

視界いっぱい係長の背中が映る。黒いトレンチコートの生地が彼の動きに合わせて波を打った。隣にはいつの間にか杏子さんがいて、私の腕を軽く握り成り行きを見守っている。

「怖いなあ。俺だって先輩社員なんだから、新人の子にいろいろ教えてあげるのは当然でしょ？ それとも教育係ってお前の専売特許？」

嘲笑を伴った台詞が係長の背中から静かに怒りを立ち昇らせた。杏子さんもそれに気づいたのか、指がわずかに動いて緊張感を伝え

てくる。この場に漂う危うさを感じて手に汗が吹き出していた。

そこにのほほんとした声をかけたのは、ふたりの間に入った佐久間主任だ。

「滝沢。S社案件ならもうこっちで動いてっからよ。重要事項なら俺を通せや」

不穏になりかけた空気が流動したのを見てか、滝沢主任は退く意思を示す。

「はいはい。じゃあね、越智さん」

首を伸ばして係長の背後にいる私に声をかけると、身を翻してエレベーターへと向かった。彼が去った後の苦味が残る空気の中で、何を言われたのかと係長から問われる。私は笑顔を作って答えた。

「佐久間主任は見るからにボウリングが下手そうだって」

「んだとおっ？」

「さ、行きましょう。主任のスコアにいくつGマークが出るか楽しみい」

「てめ、俺様の華麗な技に驚くなよ」

明らかな嘘に付き合ってくれる主任に感謝し、係長にも移動を促した。彼はまだ少し怒った目で何か言いたそうに私を見る。

「真剣勝負ですよ？ 余計なことは考えないで集中してください」
そう言ったら、やっと少し笑ってくれた。

ガコーンと豪快な音を立ててピンがはじけ飛ぶ。続けて黄色い歓声。

「係長、カッコイイ！」

二つ隣のレーンで、彼がまたしてもストライクを決めた。まさに投球に入ろうとしていた石津さんが動作を止めて驚嘆の声を上げる。

「マジ？ ターキーかよ」

すでに終盤に入った一ゲーム目、初めは私が圧倒的な強さでトップを走っていたが、久しぶりのプレーでようやくカンを取り戻した

係長が追い上げてきていた。このまま調子に乗らせてはならない。

スベアを取り損ねた石津さんの後に立ち上がった。ボールを抱え、投球位置に。そして流れるように腕を振り上げレーン上に滑らせる。美しい軌跡を描いてマール模様の球が狙った箇所ドンピシャで当たり、ピンが全てなぎ倒された。

――見たか。

「お前、可愛くない」

石津さんのむくれた声が拍手の代わりに飛んできた。

「女の子ってのはなあ、ポテツと球を落としてゆっくりゴロゴロ転がってピンがパタリパタリと倒れるぐらいの方がずっと可愛いんだぞ！」

擬態語をやたらと使って可愛い女の子を定義するのはやめてもらえないだろうか。

「しかも何だよ、ストライクばっか。ほんと、可愛くない」

好きなだけ言ってる。エロいコスプレがかかっているのだ、負けるわけにいくか。

杏子さんと藤田さんの間に腰を下ろすと、ふたりから賛辞が寄せられた。

「すごいな、ポチ。優勝まちがいなし」

「二百いくんじゃないの。あんた、どこのプロよ」

半分呆れ顔の彼女は、あたしこのままじゃ百切る、とため息をつく。隣のレーンでは佐久間主任がストライクを決め、私は戻ってくる彼を拍手で迎えた。

「主任、予想外の健闘ですね」

「予想外じゃねえ！ お前が飛ばし過ぎなんだよ。見てろよ、瀬尾以上に追い上げてやつから」

石津さんが飲み物を買いに席を外すと、杏子さんが気遣わしげに口を開いた。

「さっき係長、怒ってたね。……係長と滝沢主任って何かあるの？」

どう話してよいものか考えていると、代わりに佐久間主任が簡潔に答えてくれた。

「いわゆるライバルってやつだよ。それだけ」

「ポチがそれに何の関係があるんですか？」

「本来は関係ない。社長との絡みで巻き込まれてるけどな」

「係長はそれで怒ってるんですか？」

「まあな」

杏子さんは小さく溜息をつくと、何やら納得したような表情になった。

「ポチ氣にしてたもんね、社長のお氣に入りってことで周りがどう見てるのか。そっか、滝沢主任が原因だったんだ。それで係長はボウリングに誘ってくれたんだね」

しみじみとした口調で言うので、そこははっきりと否定することにした。

「それは全然関係ないですよ。私がいつでも勝負を受けて立つって言ったら、本当に挑んできたんです。係長ってば負けず嫌いなんだから」

「……は？」

「しかも負けたら何でも言うことを聞くって罰ゲームまで付けて。若さへの嫉妬ですよ、あれは。でも勝つのは私ですけどね」

呆氣にとられる杏子さんに向かって、主任が疲れた表情で口を開く。

「聞き流せ。俺もそうする。……ああ、俺の琥珀色の液体が」

「もしかして、係長って」

「あ、杏子さんの番。ほら、もうガーター出しちゃだめですよ」

彼女は立ち上がりながら視線を藤田さんに流した。目線を上げて彼は苦笑を返す。

「うん……かもね」

「何が――」

半分まで尋ねたところで、二つ隣のレーンで再び歓声が上がった。見ると係長がスピアを出して意気揚々と引き上げてくる。

自分が焦り始めたことを自覚せずにはいられなかった。

第二ゲームの最終フレームをきっちりストライクで決めた係長が、振り返って会心の笑みを浮かべた。私は青ざめて床に崩れ落ちる。……こんなはずではなかったのに。

二ゲーム合わせて合計九個のストライクと六つのスピアを決めた彼は、なんと三八六のハイスコアを叩き出したのだ。これに対し、私のスコアは三七一で終わった。

敗戦のショックに床の上で動けなくなっている私と、ニヤニヤ笑いが止まらない係長。やっぱりハンデをつけてもらえばよかったと思ってみても、今更それを言うことは自分のプライドにかけてできない。

「実を言うと大学時代にボウリングサークルに入ってたんだよな。

掛け持ちだったけど。卒業した先輩にプロ目指してた人がいて、ときどき教えにきてくれてたんだ」

それを早く言え！ やはり腹黒は腹黒か。

「だからハンデをあげようかって言ったのに。君が要らないって言うから」

親切はありがたく受け取っておくものだよ——などと、傷に塩を塗り込む意図があるのしか思えないつぶやきを残して、係長は祝福する同僚たちの元へ向かった。彼らが私を見て含み笑いをしている。おおかたどんなコスプレをさせるかあれこれ毒を吹き込むつもりなのだろう。

目の前に網タイツや白衣が現れ、めまいを起こしそうになった。

会計を終わらせ出口に向かうと、待っていたのは係長一人だった。「みんなには先に帰ってもらった。これから罰ゲームの打ち合わせ

するからって」

仕事が早い。さすができる男。罰ゲームにまで手抜きをしないとは。

「何をすればいいんですか」

顔のほてりを感じてわざと強気に尋ねた。だが係長はすぐに気づいてニヤニヤ笑う。

「なに赤くなってんの。エロいコスプレ想像した？」

「してませんっ」

完全に見破られている。ああ、どんな格好をさせられるのか。私が動揺するのを愉しむように意地の悪い笑顔で彼は言った。

「君には何が似合うかなーといういろいろ考えてみたんだけど」

身構える私を、わざと空白を置くことで生殺し状態にする。鬼畜め。

やがてフツと優しげに笑んで彼は唇を動かした。

「あのね」

第四十二話 真劍勝負、罰ゲーム付き（後書き）

ボウリング用語では正式には「ガター」と言うのですが、ここでは口語的表現として「ガーター」としました。

第四十三話 宿題

姿見の前でああでもない、こうでもないと取っ換え引っ換え服を試す。

これでいいかな。ちょっと子供っぽいかな。こっちと合わせたらどうだろう。

気づけば間もなく係長が迎えにくる時刻だ。慌てて一番良さそうなものを手に取った。

襟周りと裾にチュールレースの付いたスクエアネックの白いTシャツにボルドーのニットカーディガンを重ね、濃いグレーのチェック柄ひざ丈フレアスカートのを合わせる。アウターには前を閉じるとA型ワンピースのシルエットになるツイード素材のコート。そして黒のロングブーツ。

ボウリングで勝利を収めた係長が私に命じたコスプレ。いや、果たしてこれをコスプレと言って良いのか。

瀬尾係長が告げた罰ゲームの内容は私を大いに驚かせた。

「君が持つてる服の中で一番可愛い格好して。もちろんスカート着用」

そしてそれを見せるのは日曜日だと言う。

「あ……網タイツとかじゃなくていいんですか？」

口に出したそばからいらぬことを言ってしまったと後悔した。全身がカッと熱くなる。案の定彼は吹き出して笑いを堪えるのに一苦労だ。

「君がどうしても履きたいというならそれでもいいけどね」

首をブンブンと横に振って拒絶すると、またしても笑われた。それでつい文句が口を衝いて出る。

「でも真冬にスカートなんて寒いじゃないですか」

「ババくさいこと言うな。雪国育ちのくせに」

「寒いものは寒いんです」

「罰ゲームだぞ。負けたら言うこと聞くんだろ。これは命令」

そう言われてしまえば一言もない。ともかくエロい格好をしなくて済むことに胸をなで下ろしたのだった。

化粧にはいつもより少し長く時間をかけ、鏡を見てもう一度服装をチェックする。

そこへ係長からマンションの下に着いたとのメールが届いたので、部屋を出て、リビングで本を読んでいた兄に出かけてくると声をかけた。

「誰と出かけるんだ」

めったにしないおしゃれな格好を見て訝しげな声を上げる。

「係長」

「まさかデートってんじゃないだろうな」

「いや、コスプレだから、これ」

「はあ？」

まあ理解はできまい。私自身この格好に何の意味があるのか分からないのだから。

兄には心配無用と告げて玄関に向かう。しかし背中に届いたつぶやきはできれば聞きたくない類のものだった。

「セーラー服が一番似合うのにな。それでおさげにしたら最強だ」
変態の頭の中で繰り広げられている妄想は考えまいと音を立ててドアを閉めた。

マンションのエントランスを出ると、冷たい空気に鼻がつんとなった。藍色のステーションワゴンから係長が出てきて、私のために助手席のドアを開けてくれる。立て襟にフルジップのニットジャケットは暗緑色の地に細いグレーのボーダー柄で、いつもの彼よりず

つと若々しい。私への対抗心かと一瞬勘ぐりそうになった。

「お兄さんは何してるの？」

「読書です。そんなことより、今日何があるんですか？　なんで私にこんな格好させたんですか？」

「うん、可愛いコートだね。似合ってるよ」

「じゃなくてっ……！」

返ってきたのが思いもよらず褒め言葉だったので、後が続かなくなった。そんな私に彼は優しく笑み、エンジンをかけながら今度はきちんと返答する。

「今日は君とデート。可愛い格好してもらいたいだろ？　男としては」

「デートって……」

「この間君を誘ったら断わられたからな。罰ゲームなら絶対に断れないだろ？」

「誘うなら好きな相手にしたらどうかと言ったんです。私とデートなんかしたって意味ないでしょ？」

「意味があるから誘ってるんだ。でもまあそれはいいや」

「思わせぶりなことを言っておいて口をつぐむ。いったいどういうことなのだろう。漠然とした考えがもたげてきたが、まさかね、とすぐに打ち消してしまった。」

三十分ほど車を走らせて着いたのは郊外型ショッピングモールだった。ここには兄と一度来たことがある。ファッション専門店は言うに及ばず、スーパーや大型スポーツ用品店、書店にシネコンまで備え、とにかく広くて一日では回り切れないのだ。

「係長、何か買い物があるんですか？」

なにげなく訊くと彼は顔をしかめて不平を唱えた。

「『係長』はやめてくれよ。会社じゃないんだから」

そんなこと言われても、慣れてしまった呼び名というのは変えに

くいのだ。

「前にも言いましたけど、係長は係長なんですよ」

「知るかそんなの。デートなんだから名前で呼んで。僕も美春って呼ぶから」

『美春』

心臓がビクンと跳ね上がった。

「どうしたの？」

「いえ、あの……」

動揺しているわけではない。違う。なのに言葉に詰まる。

「美春？」

何を気にしているのだろう、私は。下の名前を呼ばただけのこととで。

「何、買うん、ですか」

いつもどおりにしているつもりなのに、なぜ舌がうまく動かないのだろう。

「美春の好きなもの」

名前を呼ぶ彼は平然としているのに、なぜ私の方がどぎまぎするのだろう。

「好きなもの……？」

「その前に映画でも観ようか」

優しく微笑む彼にただうなずくことしかできない。これじゃいつもと勝手が違う。何だか居心地が悪くて、くすぐったくて……甘い。

感動ものと話題の映画は確かに涙なしには見られない出来栄えだった。エンドロールの暗がりの中ハンカチで目を押さえて徐々に現実に戻る。場内が明るくなってから係長に行こうか、と声をかけられ、膝に置いていたバッグとコートを手にしち上がった。

劇場から吐き出された客と開場を待つ客とでロビーはあふれかえっていたが、気づくと背中には彼の手が添えられて、人にぶつかることも前後に距離が離れることもなく出口に向かう。

「美春はやっぱりすごく集中して映画を観るんだな」

再び名前を呼ばれたがもはや気にはならなかった。何度も呼ばれば何ということもない。それよりも私の意識はさっきから背中に向いていたから、言われたことにも鈍い反応しか返せなかった。

「僕が君の顔を見てたことにも気づかなかっただろ」

「へ……？」

絶対に間が抜けた顔をしたんだと思う。いきなり彼が笑い出したから。

だって、映画を観にきて普通しない、そんなことは。よほど……

——これ以上は考えない方がいい。

思考回路を遮断して彼を軽く睨みつけた。どうせからかっているのだ。それ相応にやり返すべきだ、ここは。

「お腹すきました。とっくにお昼の時間過ぎてますよっ、早くエサをください、エサ！」

「はいはい」

そう。私たちにはこんなやり取りの方が似合っている。ずっと居心地がいい。

いつものように係長から何が食べたいかと訊かれ、フードコートに行きたいと告げた。そこなら互いに好きな料理を選べると考えたからだ。彼はいつも私の希望を優先してくれるから、たまにはこんなのもいい。

半円形に中庭を囲む広い客席を、更に囲むように並んだ十五店舗

が出店するフードコート。ガラス張りの壁から入る陽の光が、客席を明るく照らしている。

全ての店をひとわたり眺めて、ふたつの間で心が揺れた。隣に立つ係長を見ると、困ったような顔をして私を見ている。

「これだけあると迷いますよねえ。何にします？」

「選べなくて困ってる。美春は？」

「海鮮丼か、ステーキ」

「じゃあ、僕もそのどちらかにしよう」

なんだ、その主体性のない決め方は。何のためにフードコートに来たと思ってるんだ。

私が不満に思っているのを感じたのか、彼は苦笑いして後を続けた。

「苦手なんだよ、こういうの。特にどれが食べたいってのがないから」

ただ好きなものを選べばいいだけなんだけど。困ること何もないんだけど。

「係長って頭が良すぎて難しく考え過ぎなんですよ。パツと見てパツと選ぶ！」

「だからないんだって、好きなものが」

「面倒くさい人ですね。じゃあ私は鮪丼を頼むんで、係長は特選サーモンいくら丼にしてください。それで私にもいくらを幾らかくくださいっ」

ダジャレを使ってうまいことやり込めたつもりでいたら、変化球を返された。

「次に『係長』って言ったらペナルティね。……網タイツ？」

早々と逃げて海鮮丼の店へ向かった。すぐに係長もやってきて注文と会計を済ませるとポケベルを渡される。昼の時間をだいぶ過ぎていたからか、空席を見つけるのも難しくはなく、中庭の見える明るいテーブルを選び腰を落ち着けた。

両肘をテーブルに載せ少し身を乗り出して、彼が真っ直ぐ視線をこちらに注ぐ。

「その服可愛いな。美春に合ってるよ」

……なぜ今日の彼は私の心を波立たせることばかり言うのだろう。返答に詰まることばかり。からかわれているとしか思えないことばかり。

視線を避けてうつむいたら、「どうしたの？」と彼が問う。そろそろ顔を上げれば、可笑しそうな表情が目映った。

やっぱりそういうことかとむかつ腹が立ち、唇をつきだして文句を言った。

「からかわないでください。こういうの慣れてないんですから」

「からかってなんかない。……それと、そういう顔も可愛いよな」わざと言ってるんだろうと思いつつも、顔が熱くなつて、どう返事をすればよいのかも分からない。視線をウロウロさせた挙句、隣の席に座る若い家族連れに目をやってきまり悪さを誤魔化そうとした。

口の周りを汚しながら慣れない手つきでご飯を食べる幼児と、微笑んで見守る若い両親。なにげない幸せの一風景にふと思いついたことを係長に尋ねてみた。

「係……瀬尾さんってどんな子供だったんですか？」

途端に顔をしかめたのを見て訊いてはまずいことだったのかと焦る。ところが彼が気に入らなかったのはその点ではなかった。

「『瀬尾さん』と来たか……」

下の名前なんて呼べるか！

『それはムリ』という意思表示を顔から読み取ったのだろう、まあいいか、と苦笑して質問に答える。

「僕は……そうだな……つまらない子供だったよ」

「つまらない？」

言葉の意味を自ら表現するかのように、その時代への懐かしさと

か感傷とか後悔とかの感情をどこかに置いてきたみたいな空虚な表情で彼は言った。

「周りがこうあってほしいと望むとおりに振る舞う子供だ」

「それは……良い子じゃないんですか」

「ただ言われるがままに従っていただけだよ。それで周りがうまく収まるならって。でもきつと君は……いつも君のまま、変わらず自然でいたんだろうな」

確かに私は両親や兄の望むような女の子じゃなかった。叱られたりなだめられたり呆れられても、反抗したり逃げ出したりして自己主張してきた。子供って皆そういうものだと思ってきたけど、彼は違うというのだろうか。

でも私は、彼にはそんなふうに思っただけじゃない。私が応援したいと思っただけじゃない。一番になってほしいと思っただけじゃない。自分の子供時代を振り返ってつまらないなどと一括りにまとめてほしくはなかった。

だから気づいたときには口が勝手に動いていた。

「つまらない子供なんているんですか？」

「え？」

「良い子でも悪い子でも、言うことを聞く子でも聞かない子でも、つまらなくはないですよ」

要領を得ない顔で私を見ている。こんな言い方で彼を力づけたいと思うのはおこがましいのだろう。でも「あなたはつまらない子供なんかじゃなかった」と言ってあげられるのは、子供の頃の彼をよく知っている人——例えば両親とか近所の人とか学校の先生とか——だけだから、私にはこんなことしか言えなかった。

「だって卵子に飛び込んだ瞬間に一番になってるんですよ？ 子供はみんな一番になって生まれてくるんですよ？ それだけです。いいことじゃないですか。だから、つまらない子供なんてこの世にはいないんですよ」

それこそつまらない言いぐさだ——自分の表現力の乏しさに泣きたくなった。彼だってほら、無言のままこちらをじっと見つめている。……呆れているんだろう、やっぱり。

やがて唇がかすかに動いた。

「どうして君はいつも——」

その言葉にかぶさって、テーブルの上に置いてあったポケベルが電子音を鳴らした。内心助かったと思い、すぐさま立ち上がる。

「よかった。これ以上待たされたら倒れるところでしたよ。ほら、取りに行きましょう？」

私を見上げる目は何か言いたげだったが、やがて細くなりカーブを描いた。同様に緩い曲線を描く口もとから滑り出た「うん」という返事と共に、彼も席を立った。

食事を終わると何か買いたいものはあるかと訊かれ、特にないと答えると、なら自分の買い物に付き合ってほしいと頼まれた。

係長に連れられて入ったのは和食器や和風小物を扱う店。古典的様式から斬新なデザインまで、美しい和の様々な色と形は見ているだけでも楽しめる。やがて土鍋が置いてある棚の前に来ると彼が言った。

「美春が選んでくれないか」

「土鍋を？　でも私でいいんですか？」

「僕にはよく分からないから。君は鍋が一番好きなんだろう？　金子チャンはそう言ってたけど」

課長の家でお鍋をごちそうになったとき？　そんなことを言ったような気もするが、よく覚えてるなあ。

「『私の好きなもの』を言うってそういうことだったんですか」

そうだよ、と笑って彼がうなずく。

なるほど。季節柄土鍋がひとつあると重宝するだろう。我が家でも出番は多い。

選んだのは信楽焼の少人数用の鍋で、味わい深い黒地に白い刷毛でさっと一振り描いただけのシンプルな外観の品。フッ素樹脂加工だから焦げ付かず、電子レンジにも使用できるスグレモノだ。信楽焼と言えばタヌキの置物だが、そこにつながる連想は私だけに通じるものなので係長には黙っておくことにした。

「美春はこれが好きなの？　じゃあこれにしよう」

彼の好みは全く考慮されていない選択であることを告げたが、いんだよ、と満足げに微笑んで店員を呼び、購入する旨を伝える。支払いをする係長の背中を見ていたら心に何かが引っかかった。しかし頭を軽く振ってそれを取り除く。だから彼がこちらを振り向いたときにはいつもの私だった。

「一番最初はどうのお鍋にするんですか？　激辛カレー鍋？」
からかい半分で尋ねると、彼は苦笑しながら答えた。

「それだと僕以外は食べられないよな」

「……そうですよね」

再び何かが心に引っかかる。さっきよりも大きくなってかすかな疼きを伴うもの。でもそれは考えない方がいいことだった。

夕闇が落ちかかる道を照らすヘッドライトの先に、自宅マンションが見えてきた。

「本当に夕飯食べないでよかったの？」

「はい、さっきのケーキでもうお腹いっぱいです」

まるでエサを与えるのが自分の役目とばかりに、係長はやたらと私に食べることを勧めるのだ。これ以上食べたら絶対に太る。

車が減速しマンション前に横付けされた。礼を述べようとする私を制して彼が挑戦的な目付きで言う。

「金曜日、また真剣勝負しないか？　一度勝っただけじゃ物足りなくて」

「まるで自分がまた勝つみたいない言い方じゃないですか」

「もちろんそのつもりだけど？」

どれだけ自信家なのだ。私の中に競争心がメラメラと沸き起こつて、この高くなった鼻をポッキリ折ってやりたいという思いに捕われた。

「やってやろうじゃないですか。三日天下って言葉の意味を思い知らせてあげますよ」 「どっちが負けず嫌いなんだか」

「今度こそ負けませんからねっ。それで、か……瀬尾さんにコスプレさせるんだから！」

「そうか。僕が勝ったらまた君とデートだ」

あまりに自然な口調で言われて初めは聞き間違いかと思った。しかし微笑んでじっとこちらを見つめる様子は間違いでも冗談でもないのだと静かに訴えかける。

「……なんで」

「なんでだと思う？」

質問に質問で返すのはずるい。そう思ったが、漠然としていた疑念を確かめてみようかという気になった。

「あの、言いづらいかもしれないんですけど……もしかして、フラれちゃったとか……」

それで慰めを得たくて私と一緒にいるとか。ペットみたいなものだから。

しかし彼はフツツと笑って否定した。

「フラれてはいないよ。——考えておいて。宿題にするから」

好きな相手ではなく、私を連れ出す理由。宿題と言われたけれど、きっとそれは考えない方がいいことだ。

エントランスの扉が彼と私との間で閉まったとき、そう思った。ふたりがこのままの距離でいるためには、心地よい関係を壊さな

いでいるためには、考えない方がいい。考えたらいけないのに。

踵を返してエレベーターへと向かう。家に着いたらやるべきことを思い出そうとしたができなかった。彼が土鍋を買ったときに心に引かなかったものが、今はっきりとひとつの問いになって存在を主張していた。

彼には訊くことのできない、切なさの混じった問い。

『係長、誰と一緒に鍋を食べるんですか？』

第四十四話 男の戦い

「お前、女の顔してるぞ」

兄の言葉に面食らい、テレビのリモコンに伸ばしていた手を止める。視線を投げかけるとまるでこちらを観察しているかのような目とぶつかった。

今頃妹の性別を知ったのか、変態兄。

「今度は鳩が豆鉄砲食らったような顔」

「……女？ 鳩？ どっち？」

瀬尾係長とのデートから帰宅した私はいつもより言葉少なで、それが兄の関心を引いてしまったのかもしれない。でも言われるまでもなく私は『女』であり、今更それを指摘されれば『鳩』の顔にもなろうというものだ。

ところが兄はそれ以上の観察をやめ、代わって次の週末の予定を口にした。

「次の日曜日はお兄ちゃんと中華街でも行くか。豚まん食いながらブラブラするのもいいな」

だめ、日曜日は係長と。……違う、何考えてんの、私。

係長とは二回目の勝負をするのであって、私が勝てばデートもないのだ。でも兄と出かけたいとは思わなかった。

「あんちゃん、次の日曜はバレンタインデーだよ？ 妹より彼女優先だよ、普通は」

カレンダーに目をやって顔をしかめた兄は苦々しげな声を出した。

「……お前は誰かと約束しているわけじゃないよな？」

「してないよ、誰とも」

嘘ではない。約束なんてしていない。でも真実に薄衣をかけた。

頭のどこかで、黙っている方がいい、とささやく声が聞こえていた。あれほど係長のことを意識していた兄が、今日に限っては何も

訊いてこない。その理由を本人に尋ねることも避けるべきだと、さやき声は告げていた。

翌日の会社で会う係長はいつもどおり私を「越智さん」と呼び、上司の顔に戻っていた。ホッとするのとガッカリするのが、微妙なブレンドで心を波立たせる。

同僚たちは私がどのコスプレをしたのか聞きたがったが、係長からデートのことは秘密にしておくようにと念を押されていたし、彼と過ごした困惑の時間について話そうとは思わなかった。するとエロい格好をした恥ずかしさから口をつぐんでいるのだと皆が納得する。それはそれで複雑な気分だった。

藤田さんは一言「楽しかった?」と訊き、うっかり「はい」と返事をした私ににっこりと微笑んだ。

係長から出されていた宿題は考えない方がいいとの結論だけを導きだしてそのままにしておいた。答えは見つかったのかと問われても、まだだと言えはいい。次の勝負には絶対に勝つ。そうすれば彼との距離はこれまでどおり、居心地も良いままだ。

でもそれはそれで何だか寂しいような気にもなってその理由を考えようとしたが、やっぱりやめた方がいいと結局は思考を停止した。勝負はもうこれきりにしよう。ひそかにそう決意して意識的に仕事に集中した。

私がデザインを担当したB社案件は、先方の担当者が途中で交代したせいか幾度となく変更を要求されていて、この日のB社での打ち合わせには佐久間主任と一緒に来てくれることになっていた。

クライアントの要望だけではサイトの構築はできないので、こちらの提案も織り込んだものを先方には受容してもらいたいのだが、

『経験の浅い若い女』というだけで説得力は低下する。それを認めるのは悔しいが現実を受け止めないと仕事は先に進まない。主任の存在は私にとって援護射撃のようなものだった。

ようやく最終的なゴーサインが出てB社を後にする。冷たく吹きすさぶビル風に口までかじかんでしまいそうだったが、安堵する気持ちのほうが強かった。

「あー、よかった。主任がいてくれたお陰ですよ、ありがとうございます
います」

びっくりした顔をするのでどうしたのかと訊くと、お前も変わったな、と言う。

「以前ならそんなのおかしい、悔しいつつって大騒ぎしてただろ」
そうだったかもしれないな、と我が身を振り返る。

でも今は受け入れるべきことは受け入れて、後は私一人でも相手にきちんとなんと納得してもらええる仕事をするのが目標……になっ
てい
る
よ
う
な
気
が
す
る。自分の力量をきちんと把握できない、足元さ
え
ぐ
ら
つ
い
て
い
る
よ
う
な
人
間
に
係
長
を
応
援
す
る
こ
と
な
ん
て
で
き
な
い
と
思
う
か
ら。

その係長は今、WebPRセミナー運営会議に出ているはずだ。
主任は腕時計に目をやると、私の思いを見通したかのように気が
かりを口にした。

「……今頃、会議始まってるな」

瀬尾係長と滝沢主任のふたりが出席する会議。いやが上にも不安
が募る。

ビルの隙間から見える空は鈍色で、弱々しい太陽は雲の後ろに隠
れていた。どこを向いたら安心できるのだろう。

「まあ課長もいることだし、そう心配する必要もねえだろ」

気を引き立てるように主任が言い、私もいい、とうなずく。

しかし会社に戻った私たちを迎えたのは、部屋に満ちた重い空気
だった。セミナー運営メンバーを中心に同僚たちが深刻な顔をして

集まっている。嫌な予感がして係長のデスクに目をやった。主のいない席にぽつんと置かれた、閉じられたままのノートパソコン。

課長と彼のふたりだけが戻ってきていない。

「会議で何があった？」

不安と焦燥感で押し潰されそうになっている私を横目に、佐久間主任が冷静な声でメンバーに詳細を求める。口を開いたのは石津さんで、私に視線を走らせたあと、会議での出来事を忌々しそうに語り始めた。

春に行われる予定の中堅企業向けWebPRセミナー。

参加企業は営業部がリストアップして個別に参加誘致をする一方で、開催を告知するホームページを作り、メディアにもリリースして、セミナー自体をWebPRすることになっている。ホームページの制作は当然WEB事業部が請け負い、山本さんの手によるデザインが未完成ではあったが今回の会議で披露された。

それに難癖をつけたのが滝沢主任だった。

「このデザイン、ちょっと地味過ぎるんじゃないか。もうちょっと訴求力のあるものに変更してほしいね」

ホームページ担当である手塚さんはあっさりとは受け入れない。

「派手だから訴求効果があるわけじゃないでしょう。セミナーの内容を踏まえて何度も打ち合わせしてますよ、こっちだって」

手塚さんにしてみれば、素人のくせに営業が口を出すな——と言いたいところだろう。

ところが主任も負けじと言い返す。

——今回のセミナーはもともと営業部から発案されたもので、通常のWeb制作で言うならクライアントと同じ立場にあり、デザインの出来に意見を言って当然だ。

そこで手塚さんは辛抱強く構築したサイト設計について説明した。そう、ついさきほどB社に赴いて打ち合わせに臨んだ私のように。

しかし主任は得心した様子はなく、むしろ焦れたように言う。

「デザイナーを替えたらいんじゃないかな。コンテンツは同じでも個性の違いは出るでしょ？」

デザイナーに山本さんを選んだ自分自身をも否定されたようで手塚さんは気を悪くしたが、それにも構わず主任は意見を押し広げた。「越智さんなんてどう？ この間彼女の手掛けた事例見せてもらったけど、すごくいい仕事してるじゃない。発想がユニークだし、面白いもの作ってくれそう」

「山本がベストだと思って選んだんです。それに奇抜なデザインにするつもりもないんですよ、こっちは」

彼女は彼女で山本さんとも入念な打ち合わせを重ねた上でやっている仕事だから、はいそうですかと引き下がれない。

「だから一度越智さんにやってみたらわかるでしょ」

「無茶言わないでください。ここまでやって――」

「手塚さん」

静かに割って入ったのは瀬尾係長だった。

「僕も言わせてもらっていいかな」

手塚さんの後を引き取った係長は、滝沢主任に向き直った。

「デザインに意見があるなら、もっと具体的にどこが悪いのか言ってもらおうか。ただ地味だと言うだけじゃ、こっちも対処の仕様がない。それからデザイナーに対する意見は遠慮してもらおう。誰を選ぶかは営業部が口を出すことじゃない」

「良いものを作るための会議の場で、議論がなされないのはおかしいと思いますが」

「君がやっていることは議論じゃない。ただの言いがかり、根拠のないクレームだ」

意見をぶつけ合うふたり。この場の空気が次第に陰悪なものに変わっていくのを誰もが感じていた。

「越智さんをデザイナーとして評価しちゃいけませんか」

「彼女がどうと言うんじゃない。デザイナーを変更する理由がないと言ってるんだ」

「僕には彼女を関わらせたくないと聞こえますがね」

「よっぽど耳が悪いようだな。耳鼻科に行って検査でも受けたらどうだ」

毒で味付けされた応酬を止めたのは、工藤課長と営業一課の坂本課長だった。

セミナーが企画されるとすぐに運営委員会が立ち上がり、委員長は坂本課長、副委員長は工藤課長が務めていた。その下で実働部隊を指揮していたのが瀬尾係長と滝沢主任で、実質的責任者はこのふたりと言ってもいい。

しかし会議には両課長も参加しており、本来なら自由な議論を歓迎する両名も、内容が次第に若いふたりの対立に変わっていくのを眉をひそめて見ていたのだ。

そして一度は収まったかに見えた火は、会議の後に再び燃え上がることになる――更にヒートアップして。

課長二人が営業部長への報告をしに先に会議室を出たのを見送ると、続けてこの場を離れようとした瀬尾係長に滝沢主任が声をかけた。

「あんまり熱くなるなよ」

「それはこっちの台詞だ」

波乱含みのやり取りを見て周囲に緊張が走った。入り口に立つ係長と主任の距離は、わずかにメートルほど。

元来瀬尾係長は気配りの人であって、他人との間に揉めごとを起こすタイプではないことを営業部の連中も知っていたが、主任に向かって毒舌を吐いたのを聞いている。何かあったら止めに入ることになるだろうが、二メートルの距離は実に微妙と言えた。

「あの子、随分お前のこと信用してるみたいだな。お前にとっちゃ、女の信用を得るのなんか、朝メシ前だろうけど」

誰が聞いても挑発と受け取れる台詞だったが、係長は冷静に応じた。

「何が言いたい」

「カン違いさせんなよ？ あんな純情そうな子、あとで厄介だろ？」

「お前に何がわかる」

吐き捨てるように言う係長。これに対して主任は鋭く、毒のこもった声で返した。

「わかんねえよ。何しろ誰かさんが囲い込んで、ロクに話もできないからな」

「……………」

「ボロ出さないようにすんのも大変だな。そんなことになったらあの子に嫌われるんだろうなあ、『係長がそんな人だったなんて』つてさ。シヨック受けるんじゃない？」

「……………」

「でも心配すんな。そうになったら俺が慰めてやるよ。ああいう慣れてない子って、ちょっと強引に押し倒せばすぐに情が移って——」

係長はすべてを言わせなかった。流れるように素早く大股で歩み寄り、主任の胸ぐらをつかんで壁に強く頭と背中を打ち付けたのだ。「もう一度言ってみろ」

いつもより低いその声に含まれる怒気に周囲の者は震撼したが、身体に打撃を受けたにもかかわらず主任は嘲るように言い放った。

「お前、もう味見したのか？」

係長が振り上げた拳はすんでのところで同僚たちによって抑えつけられた。しかしながら、予期していたにもかかわらず未然に防げなかったことを、彼らはこの後すぐに後悔することになる。

なぜなら、運悪く会議室前を通りがかった人事課長に見とがめられ、その場だけで收拾するはずだった事態が大きくなってしまったから———

同僚たちは話を聞き終わると一斉に憤慨した。

「何それ？ ポチのことも係長のこともバカにしてるじゃない！」

「そんなの係長じゃなくたって怒るよ」

「何も知らないくせに」

係長と私が深刻に確執した時期を経て今の関係を築いたことを、すべてではないにしても見てきたのだ。滝沢主任のような外部の人間がそれをバカにしたり嘲り笑うなど、彼らにとっても腹立たしいのだろう。

「だいたいポチがおとなしく押し倒されるタマか」

「そうだよねえ。食べものに釣られるならまだしも」

……こんな状況下でもツツコミを忘れないのもまた彼らだが。

「それで今、係長は？」

「滝沢主任と一緒に工藤課長と坂本課長から注意を受けてる。人事課長もその場で話を聞いてどう処分するか検討するって。当然上の耳にも入るよ。川嶋常務とか」

「挑発したの向こうじゃない！」

「でも胸ぐらつかんで壁に打ち付けたってのはまずいよね」
水を打ったように場が静まり返った。

あのふたりは同期であるが役職は係長と主任だ。組織においては目上の者が目下の者に暴力を振るうことは、その逆よりも罪が深い。この私にだってわかることが係長にわからないはずなのに。だからキレたらダメだって言ったのに。係長のバカ。

「あたしが主任をちゃんと納得させられればよかったんだけど……
そしたら係長が助け船を出すこともなかったんだし」

しょんぼりと話す手塚さんの肩に手を回して杏子さんが慰める。

「手塚さんのせいじゃないですよ。滝沢主任は係長をライバル視してるからそうやって挑発したんだと思う」

「もしかしたら狙いはそれじゃないかな」

これまでじっと考え込んでいたらしい藤田さんが口を開き、皆の視線が集まった。

「わざと仕掛けて係長が暴発するのを待ってるのか。何らかの処分は下るだろうし、経歴に傷もつくしね」

その推測は同僚たちにももっともらしく感じられ、自然と意見を一つにまとませた。

——そういうことなら、なるべくふたりを接触させないように気をつけよう。主任が挑発できないように距離を置けばいい。常に誰かが傍にいればまずい事態も防げるだろう。

どんよりと暗くなっていた心がそのときだけは明るくなった。空を覆う雲の切れ目から太陽の光が差し込むように。

ねえ係長？ あなたの部下たちはみんな、あなたのことを心配していますよ。みんなあなたを守りたいと思っていますよ。みんなの気持ち、届いていますか？

ひとり佐久間主任は私を呼びつけ深刻な顔で注意を与えた。滝沢には気をつけろよ、と言って。

「心配なのはむしろお前なんだよ。瀬尾ひとりのことなら、あいつはいくらだって自分をコントロールできるんだからな」

「どういうことですか？」

「滝沢がお前に接触しようとする自体、瀬尾を刺激するんだよ。ましてやお前がなんか言われたりされたりしてみろ、何すっかわかんねえぞ」

「まさか」

冗談だろうと半分こわばった笑みを返したが、主任はため息をひとつついて続けた。「もしも部下を殴って会社をクビになったなんて噂が広まったりしたら、あいつ、この業界じゃ再就職すんのも難しくなる」

ひとつの悲観的な未来を示され胸がドキリとした。

係長が会社を辞める？ そんなのは嫌だ。

不安がぐるぐると頭の中を駆け巡った。

いったいどんな処分を受けるのだろう。順当に地歩を固めてきた彼がつまり、足元を崩されようとしている。仕事とは関係のない理由で。

そんなのフェアじゃない。彼のような人がこんなところで、立ち止まってるべきじゃない。彼は前を向いて走らなきゃならないのに。どうか彼が走る道を奪わないで。

そう願った瞬間にはもう、決意を固めていた。

終業時間になると同時に立ち上がり、同僚たちに挨拶をして部屋を出る。課長と係長はいつもと変わらない表情で戻ってきて業務をこなしていたが、WEB事業部全体が緊張感に包まれていることを口には出さなくても誰もが認めていた。

私が退出するのをちらと見た係長の目は何か言いたげだったが、なるべく自然に見えるような笑顔を作って部署を後にした。

廊下の角を曲がって奥に進む。重役室が並ぶ一角。そこに至る前で後ろから声をかけられた。

「ポチ」

追いかけてきたのは杏子さんだった。目の前までやってくると憂いを含んだ表情で問いかける。

「何をするつもり？」

「私には何もできません、でもこのままじゃ不安で」
「うん、わかるよ」

痛々しい目付きで私を見る。それで自分がどれほど情けない顔をしているのか想像できた。これじゃだめだ。『弱々しい女の子』のままでは相手だって話に耳を傾けてはくれないだろう。

気合を入れようと両手でピシャッと頬を打つ。すると杏子さんの

目がふっと和らぎ、唇の間から柔らかな声が漏れでた。

「係長ってさ」

そこで止めたまま先を続けようとしなない。普段彼女が言いよどむことなどないので不思議に思ったが、やがて微笑むと優しく私を送り出した。

「何でもない。――行っておいで」

杏子さんに背を向け更に奥へ進み、とある扉の前で足を止めた。

川嶋真一郎常務取締役室。

あの女子化粧室での騒動の後、困ったことがあったらいつでも力になる、と常務が言ってくれたことを忘れてはいなかった。今こそ彼に頼るときだ。

今日の行動予定は知らない。部屋にいてくれればいいけど。アポもなしに失礼だけど。

でもどうしても彼と話さなければ――――

胸の鼓動がやけに大きく聞こえる。さすがに緊張は隠せなかった。目をぎゅっとつぶって大きく息を吸い、静かに長く細く吐いた。

そして意を決して腕を上げ、扉をコツコツと叩く。

「はい、どうぞ」

その声が聞こえると同時につぶっていた目を開け、自分を奮い立たせるようにして扉を押した。

第四十五話 一番になれる人

川嶋常務の部屋には先客がいた。

「あれー、美春ちゃんどうしたのー？」

嬉しさと驚きを足して二で割ったような顔をした半田社長。常務の机に半分尻を落とした姿勢で手にはシルバーフレームの写真立てを持っている。正月に工藤夫妻から聞いた話を思い出した——有名なウエディングプランナーだという常務夫人の写真なのだろう——が、椅子から立ち上がった常務が近づいてきたので慌てて頭を下げた。

「突然お邪魔して申し訳ありません」

「いや、構わないよ。——それじゃあ社長、あなたはどうぞ戻ってください」

「ええっ、僕は仲間はずれなのー？　せっかく美春ちゃんが来てくれたのにー」

オッサンに会いにきたのではない。脱力感が私を襲う。

写真立てを机に置いて彼もこちらにやってきた。が、常務は取るに足らないことのように社長の不満を受け流す。

「越智さんは私に用事があったて来てくれたんですよ。ほら、とつとと社長室に帰ってください」

さすがに長年の友人だけあって社長のあしらい方も堂に入っている。オッサンは渋々部屋を出たがドアの向こうから顔を出すとニコッと笑って言った。

「じゃあねー美春ちゃん、今度社長室にも遊びにきてねー」
ここには遊びにきたんじゃないっての。

張り詰めていた緊張感がぷつんと音を立てて切れたような気がした。予期せぬ社長の存在は良かったのか悪かったのか。

常務が黒い革張りのソファを指し示して座るように促した。

「何か飲むかい？　と言ってもここにはインスタントコーヒーしかないけど」

突然押しかけたにもかかわらず飲み物まで勧めてくれる。感謝と断りの返事をしてから腰を落ち着けた。

何と言って始めるべきか。思い惑っていると、対面に着いた彼の方から訪問の目的に言及した。

「もしかして、瀬尾係長のことかな？」

「は、はい」

やはり係長と滝沢主任の一件はすでに報告されていたのだ。『思い立ったら即行動』は、今回は失敗ではなかった。

それならば回り道をする時間はない。私は単刀直入に尋ねた。

「係長は何らかの処分を受けるんでしょうか」

彼の一部下に過ぎない私が常務の部屋に乗り込んでまで訊くことではない。それに答える義務も常務にはもちろんない。しかし彼は気を悪くするでもなく淡々と口を開いた。

「気になるかい？」

「はい、係長は私のことで滝沢主任に怒ったと聞きました」

いったいどんな処分なのか。その内容について彼が話してくれるのを恐る恐る待った。どうかおとがめなしであってくれればいい。そう願いながら。

しかし常務が口にしたのはとある質問だった。

「瀬尾係長のことをどう思う？」

漠然とした問いに戸惑っていると、彼は言い方を変えて再び訊いた。

「瀬尾くんはこの会社にとってどういう人間だと思う？」

それならば答えは簡単だ。

「一番になれる人だと思います」

難しい言い回しなど、私にはできない。組織にとってどうか、対外的にどうか、そんなことはわからない。でも彼は間違いなく

一番になれる人で、そんな彼について行こうとする者はたくさんいる。

彼はそういう人だ。

「一番か……」

幼稚な表現に呆れるでもなく、常務は微笑んで私を見つめた。そして再び問いかける。

「一番になれるかもしれないのになる気がない人間に、やる気を出させるにはどうしたらいいだろうね？」

私はしばし考え込んで何とか探し当てた答えをおずおずと告げた。「それは……エサで釣るとか……」

「うん。他には？」

「競争相手を作るとか」

「うんうん。それから？」

「……他に選択肢がないように仕向けるとか」

思い出していた。

高三の夏。病床の母の傍にいても何もできなかった自分。一番を目指してただ走る以外にできることなど何もなかった。最期に母を喜ばせたくてインターハイに出て、ゴールを目指したあの日。

川嶋常務は一瞬目を見張ると、次いで目尻を下げて私を見た。

「僕が考えていたのはもっと単純なことだったんだが――君の意見も悪くないな」

単純なこと。それは何だろうと考える前に常務が話を続けた。

「……瀬尾くんは驚くほど優秀な人間だが、これまで一番になろうという気概を見せたことはなかった。社外の女性関係では派手な活躍をしていたようだがね。」

仕事ができるから結果として昇進はした。でもそれだけのことだ。同じく優秀で一番を目指す人間が現れればそこでお終いなんだよ。ただ最近はそれが少し変わってきていた。良い傾向だと思っていた

んだが」

声のトーンが変わり、目を伏せる。

「暴力はまずいな。どんな理由があっても。どんなに優秀で信頼に足る人間でも、暴力を振るうことを認めるわけにはいかない」

彼の主張には上に立つ人間としての非情さが込められていて、一部下の嘆願など入り込む隙間はなかった。

「……係長はどうなるんですか？」

最悪の結果になってしまふことを恐れ、声が震える。

「今回は始末書提出にとどめるつもりだよ。これまでの会社への貢献を考慮した温情措置だね。——でも二度目はない」

厳然たる態度で常務は言い切った。

とりあえずの安心を手に入れ、退出しようと深く礼をしたところで呼び止められた。

「社長に『どうして私なんですか』って訊いたそうだね」

それは、『社長のお気に入り』という立場に思い悩んだあまり恨みを込めて訴えた言葉だった。リレーに勝っただけの私をなぜお気に入りになんかしたのだと。……社長からはフザけた答えしか返ってこなかったけど。

「もしも君でなかったら、きっと今日、こういう事態にはなっていないかっただろうね」

常務は非難をしているのではなく、むしろ声音には慈愛さえ感じられた。でも彼が仮定した過去は無情なまでに私の胸をえぐった。

もしも私が社長のお気に入りでなかったら。

滝沢主任は近づいてはこなかったのだろうか。係長と主任の対立に巻き込まれることはなかったのだろうか。あのふたりがあそこまで衝突することも。そうだとしたら——

「それならやつぱりお気に入りになんてなるべきじゃなかったんです」

身体の奥からせり上がってきた気持ちが声に現れたが、取り繕うことはできなかった。こんな事態になることを私は決して望まなかったのに。

湿った感情から飛び出した訴えに、川嶋常務は快活な口調で応じた。

「僕は君でよかったと思っているよ。でもどうしても気に病むのなら、こう考えたらどうか。――よんだ池を綺麗にするには水を流すしかない。古い水に新しい水を流し込めば池の魚は混乱するだろう。でも汚い水の中にいるよりずっといいと思わないかい？」

わかるようでわからない川嶋常務の比喩。『池の魚』って私のこと？ たしかに今の状態は『混乱』なのかもしれないけど、でもこれが『ずっといい』だなんて到底思えない。

係長の処分は始末書で済んだけれど、もう次はないのだ。WEB事業部の同僚たちが団結して滝沢主任との接触をとりあえずは回避させてくれるだろうが、あのふたりは相変わらず対立したままなのだから。

主任はいったい何を望んでいるのだろう。係長を追い落として出世するのが目的なのか、それともただ彼を傷つけたいだけなのか。それは彼が業績を上げていることに嫉妬しているからなのか、他に理由があるのか。

彼らの間にある葛藤が謎のままでは解決の糸口さえ見つからない。でも私がいたずらに動いてもかえって事態が悪化する可能性もある。佐久間主任からも、滝沢主任には気をつけるように言われているし。第三者に間に入ってもらうのはどうだろう。例えば比嘉課長とか。年齢が近いから気安く話ができるだろうし、直接の上司ではないから中立的な立場で相対してくれるだろう。彼の意見なら滝沢主任も

受け入れやすいのではないだろうか。

係長に相談してみよう。言いたいこともあるし。

その夜に電話で交わした会話は私からの説教が始まった。

「だからキレちゃダメだって言ったじゃないですか」

〈ごめん〉

普段とは逆の立場で、叱られた子供のようにシュンとした声を出す係長。

「つまらない挑発に乗って」

〈ごめん〉

「みんなに心配かけて」

〈ごめん〉

軽くため息をついてから、比嘉課長に仲裁に入ってもらう案を話した。係長から言い出しにくければ私が課長に頼んでもいい。

しかし彼は乗り気でなく、やや虚ろな口調でそれはやめてくれ、と言う。

〈君を巻き込みたくないんだ。これは僕と滝沢の問題で、君は本来関係ないはずなんだ。だから〉

そんな格好つけてる場合か！　こっちがいろいろと気を揉んでいるというのに。

「じゃあもう二度とあんなことしないって約束してくれますか？」

〈それはできない〉

「係長、何言ってるんですか」

〈僕のことなら我慢できる。でももしかたあいつが君を巻き込もうとするなら、何をするかわからない〉

思いつめたような口調が私を不安にさせた。佐久間主任が言ったのと全く同じことも。

「係長、またあんなことが起きたら会社にいられなくなるんですよ

？」

「それでもいい。僕がいなくなればあいつは君に関わろうとはしなくなるよ」

音を色で表現できるとするなら、彼の声は無彩色そのものだった。雨が降り出す直前の空のような鈍色。

本当はもっと鮮やかな色なのに。私が聞きたいのはこんな声じゃない。

「……そんなの無責任じゃないですか。仕事をほっぽり出して会社辞めるんですか？」

「代わりに新しい係長が来る。それだけだよ」
投げやりな言い方に腹が立った。自分を何だと思っているのだろう。

「WEBのみんなはどうなるんですか。みんなが一緒に仕事したいのは『瀬尾係長』なんです。部下を捨てて辞めちゃうんですか？ 社長を目指す人がそんなこととしていいんですか？」

一気にまくし立てたら電話の向こうに沈黙が降りた。でも私の真剣さだけは受け止めてくれたらしい。

「……あれ、冗談で言ってるんだと思ってた」

「冗談なわけじゃないでしょう。実力のある人が一番を目指すのは当然のことです」

彼は再び無言になったが、息を潜めてじっと聞いているような気がした。私の声はちゃんと彼の心にまで伝わっている。そう信じて言葉をつないだ。

「本気で走って負けるんなら仕方ないです。でもわざと自分からコースを外れるのは許せません」

「……そうだね」

耳に届く声がかすかに色づいた。

「試合放棄しないでください」

「うん」

暖色が鈍色を塗り替えてゆく。

「滝沢主任には負けなideてください」

「わかった」

鮮やかな色が広がった。私の聞きたかった声。

「いつか自慢させてください。私、社長にビリヤードで勝ったのよって」

「……それとこれとは話が別だ」

あ、バレたか。

「真剣勝負だぞ。絶対に負けないからな」

耳に心地良いいつもの声。

「望むところです」

金曜日。係長との真剣勝負第二戦の日がやってきた。ビリヤード対決だ。

昨夜からイメージトレーニングを行なって気持ち的にはすっかり準備ができている。いつでもかかって来いのオーラが全身から立ち上っているはずだ。闘争心に溢れた私には怖いものなどなく、今日に限っては社長の来訪も余裕で迎えている。チヨコレートもあることだしね。

今年のバレンタインデーは日曜日に当たるため、会社関係者への義理チョコは前倒しで金曜日に渡すか、いっそ無視するかのだらなかだ。先輩女性社員の皆様がたと相談した結果、年に一度のお祭りみたいなもんだし、楽しみに待っている男性もいるだろうというところで、合同で部署の男性全員にチョコを渡すこととなった。不況の世の中、財布は少しでも重くしておきたいのが人情というものだ。そして、日頃差し入れを持ってきてくれるお礼にと、社長もチョコを配る頭数の中に入れたのだった。

「社長、いつも差し入れありがとうございます。これ、私たち女子社員からのお礼のチヨコレートです」

チョコを渡すのは当然というか案の定というか、この私だ。お姉サマがたから押し付けられた役目を果たすと、社長は顔をほころばせて喜びの声を上げた。

「本当にもらったいいのかい？ 美春ちゃんからチョコをもらえる日が来るなんて、生きててよかったー」

そんな大げさな。それにそのチョコは『私から』ではなく『私たちから』だと言ったのに、何を聞いているんだ。

訂正しようと口を開きかけると、社長の背後にいる杏子さんを始めとする先輩がたが、そろって首を横に振って（放っとけ）（話がややこしくなるから）と目で合図する。嘆息したが、今日の私はいつもとひと味違う。

「ちゃんと味わって食べてくださいね。女子社員みんなの気持ちがかもってますから」

「もったいなくて食べられないよう。美春ちゃんがくれたチョコは特別だよっ」

「もちろん特別です。みんなで社長のために選んだチョコレートですから」

「うんうん、僕を想いながら選んでくれたんだねー、美春ちゃん……オッサン。なぜ人の話を聞こうとしない。」

脱力する私の横を抜けると、社長は瀬尾係長の机に近づいてこれ見よがしにチョコを持つ手を振った。

「美春ちゃんからチョコもらっちゃったよー、瀬尾くん」

またいつものバトルが始まるのかと全員が身構えたが、係長は爽やかさのお手本みたいな微笑みを見せた。

「よかったですね」

これを見て「係長も一皮むけて大人になった」と我々が胸をなでおろしたのも束の間、「正確には越智からではなく、WEB事業部の女性社員全員からのチョコレートですが」

微笑みを絶やさずに言い切ったのは見事と言う他はない。あから

さまに訂正をされた社長は笑顔を凍りつかせ、なめるように係長を見て言い放った。

「そういえばさあ、僕知らなかったよー。瀬尾くんが武闘派だったなんてねー」

おそらくこの場にいる全員の背筋に冷たいものが走った。

滝沢主任との一件が社長にまで報告されていた。エリート街道を突っ走ってきた係長の足跡に付いた黒い汚点。

しかし彼の顔は雲ひとつなく澄み切った空のように清々しかった。

「私の新しい一面を社長に知っていただいて、何よりです」

「新しい一面ねえ。他にも僕の知らない一面があるのかなー？」

「もちろんです。いずれはお見せできる機会もありますよ。どうぞお楽しみに」

「何だか思わせぶりだねー。僕も心の準備しておこうかなあ」

「心の準備より体型管理の方を優先されたいかがですか。最近腹回りが怪しくなってきましたよ」

「……ゴルフに行ってるからいいのっ！」

係長との待ち合わせ場所は書店だった。今回の勝負については同僚の誰にも言っていないから、外で落ち合うことにしたのだ。

待ち合わせをして軽く食事をしてビリヤード。係長は勝ったらまた私とデートなんて言ったけど、今日の勝負からしてもうデートみたいだ。そう思ったらドキドキしてきて、斜め読みの情報誌のページを更にパラパラとめくる。何を焦っているんだろう。

彼と一緒に過ごす時間は楽しい。でもこの間のデートは距離感がいつもと違って居心地が悪かった。彼の言動が私を戸惑わせた。

でも会社ではいつもどおりで安心していたのに。

「美春」

目の前に現れた彼は当然のように名前で私を呼ぶ。

「ごめん、だいぶ待たせたね。……どうしたの？」

「……なんで名前で呼ぶんですか」

「ここ会社じゃないし。別にいいだろ？ 美春も名前で呼んで」

「今日はデートじゃないです」

「そうか。じゃあ日曜のデートで呼んでもらおう」

「私が勝つからデートはありません」

彼は笑って、行こうか、と促す。自分の勝利を疑いもしない自信はどこから来るのか。

私だって勝つ自信はある。勝ったら彼に命じることだってもう考えてある。

勝負はこれきりにしてください。ふたりっきりでデートもしません。私を美春って呼ばないで。係長の名前も呼ばせないで。

「腹減ったな。何食べようか」

私を見下ろす笑顔は裏も屈託もなく心底楽しげだ。だからきつと気がついていないだろう、私がふたりの距離を意識していることにそれを知られるのは怖い。

でも勝負はもうこれきり、二度としないと云ったら。デートもしないと言ったら。

彼は訊くかもしれない——じっとこちらを見つめて、微笑んで。

『どうして、美春？』

そのとき私は何て答えたらいいの。

第四十六話 銀杏の木の下で

寝ている兄を起こさないために、極力音を立てないように支度をして家を出た。見つかったら何を言われるかわからないから。

マンションを出て一呼吸。朝の冷たくて清涼な空気が鼻腔に入れば兄とは顔を合わせたくなかったのだ。

でも嘘の書き置きは残してきた。

《バレンタインデー限定スイーツ巡りに行ってきました》

用意周到に有名パティスリーのホームページをいくつかチェックしておいたから、後で詮索されてもきちんと答えられるだろう。

日曜日の朝はまだ本格的な活動が始まっておらず、静かな住宅街をひとり駅へと向かう。瀬尾係長との待ち合わせには早いが、適当に時間を潰すことにした。

脳裏には金曜日の夜に行ったビリヤード対決の映像が浮かぶ。そこには呆然とし次いで怒りを表す私と、勝ち誇って笑む係長の姿が映っている。今震えているのは、早朝の寒さのせいではなく悔しさが身体に残っているからだ。

駅で会ったらどんな顔をしてやろう。もう一度文句を言ってやろうか。

頭ではそんなことを考えているのに。

……………足取りが弾んでいるのはなぜなのかな。

ふたりのビリヤード勝負。ゲームはナインボール、三セットマッチで先に二セット先取した者が勝ちと決めた。

係長は、これは学生時代に相当遊んでいたな、と思わせるぐらい

には上手かった。しかし常に試合を優勢に進めたのは私であって、彼が一セット目を先取したのは、四番ボールの弾いた九番ボールがたまたまポケットしたという、偶然の作用からだった。

二セット目は順当に私が勝利し、そして三セット目。

彼が八番ボールの攻略に失敗して、私がそれを難なく決め、残るはラストの九番のみとなった。入角を計算し、ボールの軌跡を頭に描く。

よし、この勝負、もらった。

ニヤリとしてキューにチョークを塗り、ショットをする位置に立つ。上体を深く前に落とし、左手を山の形に作ってキューを添える。すでに私の目には突くべきポイントが手球の表面上に見えていた。そして右腕をすつとかすかに引き、再び前へ突き出そうとした瞬間、いつの間にか傍らに立っていた係長がささやいた。

「エロい」

「！」

キューがかすった白球が、ゆるゆるとあらぬ方向へ転がっていく。嘘だろう！？

そして私が呆然としている間に係長が、コーナーポケットと九番ボールを結ぶ直線の延長線上に手球を置き、軽くショットして黄色と白のツートンカラーの球を落としたのだった。

「やり方が汚いですよ！」

妨害行為によりファウルは無効と猛然と抗議したが、彼は頑として聞き入れなかった。曰く、「僕は独り言を言っただけ」「集中力が切れたのは君」

「邪魔したのは誰ですか！ 私が勝ってたのに！」

こちらの猛攻を闘牛士のようにさっとかわして彼は言った。

「負け犬の遠吠えは見苦しい」

ま、負け犬？ 私が？

愚弄されて言葉を失っていたら、彼はおまけの一言までつけた。

「犬と君を掛けるなんて、上手いな僕も」

それを聞いて逆上したが、すかさず彼が買ってきたアイスクリームを食べていたら、なしくずしに誤魔化されてしまった。それもまた不本意なのだが。

日曜朝の上り電車。車内は空いておりふたり並んで腰をかけた。

「お兄さんは何してるの？」

「兄も今日はデートです。兄のことまだ気になるんですか」

「最大の関門だからね」

それは兄じゃなく滝沢主任だろうと思ったが、何も今彼の名前を出して空気を壊すこともないだろう。せっかく早起きして出かけてきているのだから。

今日のデートはあらかじめ場所を教えられ、それに適した服装で来るようにと言われた。ふたりで話しあって決めたのは、朝一番で行って混み合う前に引き上げることと、都内だから電車で行こうということ。

明治神宮外苑のアイススケート場。

何でもできる『完璧瀬尾くん』のことゆえ、スケートもきつと上手なのだろうと思ったら、意外にもそれほどでもないのだと言う。

「じゃあなんでスケートにしたいんですか」

「美春が滑っているとこ見たいから」

「私だってそんな上手じゃないですよ。何とか後ろ向きに滑れる程度です」

それで充分、と笑って言う彼に少し迷ったがあることを尋ねてみた。

「……この間買ったお鍋、もう使いました？」

これぐらいなら訊いても構わないだろう。購入に付き合ったのだから不自然ではない。

「まだ。でもそろそろ練習しないといけないんだよな」

「何ですか、練習って」

「僕は鍋を作ったことがないから、本番の日に備えて練習が必要なんだ」

「変なところで生真面目ですね」

「何ごとにつけ生真面目だよ」

その後は軽口の応酬となったが、心が向かう先は一つだけだった。本番の日。そうか、お鍋をする日はもう決まっているんだ。誰かと一緒に。

知り得た事実だけを胸に収めて後は何も考えないようにした。ふたりの距離を保つためにはそれが最も賢明な方法だと思った。

開場したてのスケート場は人の出足もまだ鈍くて、リンクに立っているのは上級者や家族連れが多かった。アイスホッケーの靴を履いた小学生ぐらいの少年たちが、リスのようにすばしこく間をすり抜けていく。

久しぶりのスケートは氷に慣れるまで少し時間がかかったものの、コツを思い出した後はエッジの動きも滑らかになった。一方それほど上手ではないと言った係長は、前に滑るだけなら充分に美しい軌跡を氷の上に描き出していた。とはいえ自分が滑るよりも、前に後ろにと自由に動き回る私を視線で追いかけてばかりで、さっき言ったように私が滑るのを見ているのが楽しいみたいだった。

あの瞳はどこかで見たことがある。楽しげに微笑んで視線を動かすところも。

どこでだったか思い出せないまま一周して彼のところに戻り声をかけた。

「私、ドッグランで放された犬の気分なんですけど」

「僕は愛犬が走り回るのを眺めている飼い主か。……違うんだけどな」

どう違うのかと訊いても笑って答えようとしないので、のんびり

見物するのを邪魔することにした。

「係長も後ろ向きに滑ってみませんか？」

「……『達也』だけど？」

それは聞こえなかったふりをして横に並び、足をハの字型にするよう指示する。

「少し膝を落として……つま先で蹴るんです」

子供の頃に通ったスケート教室で教わったことを思い出しながら実際にやってみせた。

足の動きを真似る彼。しかし最初の二歩ぐらいまでは後ろに進むものの後がなかなか続かない。

「……難しいな」

「始めは何だって難しいんですよ。ほらもう一回」

「鬼コーチか」

「係長は褒めて伸びる子ですか？」

「『達也』だけど。……うん、褒められる方がいいな」

「よくできまちだねー、瀬尾くん。はい、もう一回やってみまっちゃうかー。次はもっとできるようになりまぢゅよー」

「……おい」

眉間にシワが寄るのを見て、フザケ過ぎたかと慌てた。

「あつ、じゃ、じゃあ私が押してあげますから、か……瀬尾さんは足に集中して」

「押すって……？」

彼の正面に立ち両手をとると、私は氷を蹴って前へ進んだ。これなら慣性がつくから滑りやすいだろう。そう思ったのに、視線の先にある彼の足は肩幅の広さに開いてただ押されるがまま、氷上を後ろ向きに滑っている。

「何やってんですか。ちゃんと足動かして……」

最後まで言うことも、彼の返事を聞くことも叶わなかった。

顔を上げると驚きに彩られた目が私を見下ろしていた。瞳を間近からのぞき込む形になり、視線が絡み合う。互いの瞳に焦点を合わせて。

やがてその目が緩んだのを見て、ハッと我に返り現状を客観視した。

――氷上で手を取り合って見つめ合う男女。

うわーっ、何やってんの、私！

つないでいた手を瞬間的に離そうとして――逆に強く握られた。

「続けようか」

顔が熱くなっていた。きっと赤くなってる。

ニマニマと笑う彼の顔はもう見る事ができずに下を向き、早口で喋った。

「いえ、ひとりで頑張ってください！ 陰ながら応援しますから」

「始めた以上は責任もって教えてくれないと。ねえコーチ？」

「指導力に欠けるので辞任しますっ」

「生徒を見捨てて辞めるのか。無責任って言ったのはどこの誰だったっけなあ」

ぐっと言葉に詰まったが、向かい合わせで手を握り合うにしても、このまま立ち止まっているよりはまだ滑っている方がマシだと考え直した。

もともと筋が良いのか、しばらくそうやって滑っていたら彼の足の動きも形になってきた。さほど押してやらなくても後ろ向きに進んでいる。

少しずつリンクの人口密度が高くなってきたので、私は進行方向彼の背後に気を配りながら前に進む。すると時折彼と目が合う。そのたびに見せる微笑みが私を落ち着かなくさせる。

エッジが氷を刻む音。私に向けられる眼差し。そして、手袋越しに伝わる手の力強さ。

全身の神経が研ぎ澄まされたようにそれらを感じていた。

ふいに彼に手を引っ張られ、身体を引き寄せられる。驚きの声を上げるより先に、アイスホッケー靴の少年たちがつむじ風のように私たちをかすめて通りすぎていった。

背中に回された左手に力がこもり、ふたりが更に近づく。わずかなセンチとなった彼との距離に身体が硬直した。かすかに届くシトラスの香り。

「甘い匂いがする。シャンプーの香り？」

彼もまた私の匂いを嗅いだことが羞恥心を刺激して、その場に屈み込んだ。

「何やってんの、美春？」

無言のままエッジで削られた周囲の氷をかき集める。そして掌で氷をすくって立ち上がると、彼の頬を両側から挟んだ。

「わっ、冷てっ」

「エロ上司への罰ですっ」

氷を蹴ってその場から飛ぶように離れた。彼から逃げたのではない。接近したときに嗅いだ彼の匂いに心が揺らめいたことが恥ずかしかったから。

休憩を挟んで二時間近く滑ると、氷上の賑わいが増してきた。当初の予定どおり引き上げることにしスケート場を後にする。昼時なので、散歩がてら青山方面に移動して昼食をとる店を物色することになった。

何組かのカップルと通り過ぎる。やたらと姿が目につくのは今日がバレンタインデーだからなのかな。それとも私の目が自然と追っってしまうのかな。……私たちは周囲からどう見えるんだろう。

そんなことを考えている自分に愕然とする。いったい何を気にしているのか。

私たちはカップルじゃない。上司と部下。係長は川嶋常務からも

期待されるようなすごい人で、私は彼を応援する部下。ときどきペットみたいに可愛がってもらえば、それでいいんだ。

彼が罰ゲームとしてデートに連れ出すのは、きつと……気晴らし程度のものなんだろう。兄のストレスが溜まると私を構う変態度が上がるみたいにな。

自分の中で折り合いのつく答えを探し出した頃、円錐形に先端の鋭く伸びたイチヨウ並木が視界に入ってきた。大通りの両側に二列ずつ計四列、整然と並んだイチヨウの木々。ドラマロケなどが行われる有名な場所だ。兄と一緒に見にきたのは上京した年で、心細さを抱えて東京での生活を送っていた頃だった。

あのときは黄葉の見頃で、上を見上げれば枝に繁る葉、下は落ち葉が歩道を敷き詰めていて、黄金色に染まった幻想的な世界はそこだけが現実から切り離されたように美しかった。

今は葉もすべて落ちた裸木が、空に向かって真っ直ぐ伸びている姿がずっと連なっている。その光景は決して物寂しさを感じさせず、むしろ力強く壮観だった。

「葉っぱがなくても迫力ありますね」

「うん、何て言うか、静かで厳かな感じだよな」

しばらく遠景で眺めてから道を渡って、イチヨウ並木の間に作られた歩道に足を踏み入れた。

一枚の葉さえない、幹と枝だけの裸の木。でも秋にあれば綺麗な情景を作り出すのは、この幹に潜んでいる自然の力だ。そう思うと、今はシンプルな木々が冬の寒さの中、凜として立つ姿もまた美しいと思えるのだった。

「手、寒くない？」

突然の問いに虚を突かれた。手袋は氷を触って湿っていたのでつけていなかった。冷たい空気に手がさらされているのが気になった

んだろう。係長はこういうところが優しいなあをつくづく思う。

「いえ、大丈夫です」

しかし彼は苦笑していきなり私の右手をとった。

「こういうときはね、寒くなくても寒いって言うもんだよ」

「ちょ、寒くないんです、私は！」

「僕が寒いのだ。……何焦ってんだよ、さっきは美春の方から手を握ってきたくせに」

「だ、だってあれはっ……」

後ろ向きに滑る練習だったし。手袋はめてたし。

それは声にならずに終わった。彼がニヤリと笑うのを見たから。

「名前を呼んでくれるんなら離してもいいな。……どうする？」

前門の虎後門の狼か！ さっき優しいって思ったの、撤回。意地悪だ、やっぱり。

結局名前は呼べないのでそのまま手をつないでいた。少しひんやりとした彼の指にときどき力がこもる。私はうつむいて、心の中で自分に言い聞かせた。

ただ手をつないでるだけ。寒いから。意味なんかない。意識しちゃだめ。

だけどつい視線がちらちらとつないだ手に向かう。私より大きくて力強い手。

その手をたどると腕があって、肩があって——そこで気づいた。

初めてのデートで絶叫マシンに乗った後、あの腕につかまったこと。力強く支えてもらって安心できたこと。

思い出したら胸がドキドキしてきた。なんで今頃。

対処に困って視線をイチヨウの木に流した。

ひとつ、またひとつとイチヨウの木の前を通り過ぎる。太い幹を眺めていたら、普段は忘れていたことを唐突に思い出した。

イチヨウは太古の昔から生き続ける植物で、雄の木と雌の木があ

る。風が運んだ雄花の花粉を雌花が受粉して実^{ぎんなん}を作る。それをずつとずっと昔から、変わらぬ姿で繰り返してきた。

雄と雌。男と女。

——男と女。

ふいに係長が口を開き、私の意識は引き戻された。

「次の勝負は何にしようか」

「……まだ勝負するんですか」

「もちろん。美春が心理的負担を感じなくなるまで」

「心理的負担？」

「罰ゲームで命令されるんだったら、僕とデートするのも抵抗ないだろう？」

それは、そのとおりだと思う。罰ゲームでなければふたりっきりでデートなんかしない。する理由もない。だって私たちは。

自然と声が口からこぼれ出ていた。

「係長は……係長なんですよ。会社で最年少の係長で、将来有望で、みんなから慕われていて。そういう人は私とデートなんかしません」
卑屈になっているのではない。ただ彼と私とは次元が違うような気がするだけ。それに私は不安定な未来を選ぶより、確実な現在を大事にしたい。彼の部下でいれば、あるいはペットでいれば、そばにいられるのだから。

私の見解には口を出さず、代わりに彼はぼそっとつぶやいた。

「美春の手はあったかいな」

「そうですか？」

「身体はもっとあったかいんだろうな」

ぎよっとして足が止まった。冗談にしてもきわどすぎる。

「セ……セクハラで訴えますよっ、係長！」

「今は係長じゃない」

注がれる眼差しの熱さにどきりとしたが、言いたいことは予測できた。どうせまた下の名前を呼ばせようとしているのだろう。

けれど唇の間から出てきた言葉は――――

「ただの男だよ」

時が止められたように身体が動かなかった。彼を見上げる目も、表情さえも動かせない。

彼が望んでいること、私に気づかせようとしていることが胸に押し入ってきた。

ただの男。ひとりの男。上司でもなく、一番を目指す人でもない。ただの瀬尾達也。

外側についている、華やかに彼を形容するものを取っ払って、残った彼自身。

優しかったり、意地悪だったり。腹黒なのに、子供みtainな表情もして。大人の余裕を見せるくせに、思いつめたりもする。

私に見せてくれた彼自身。ただの男として、私の前に立ちたいと望んでいる――

イチヨウの木の下で。つないだ手に、ふたりの体温が融け合ったそのとき。

葉っぱをすべて落として裸になったイチヨウの木が、彼と重なった。

第四十七話 冬の残滓

一日の終わり。眠りにつく前、脳裏に何度も再生されるシーンがある。

氷上を向かい合って一緒に滑っているふたり。まつげの長さまで確認できるほど接近するふたり。手をつないでイチヨウ並木の下を歩くふたり。そして。

『ただの男だよ』

耳に残る声は静かな熱を帯びて身震いさえ感じさせる。瞼の裏に焼き付いた眼差しが身体を火照らせる。じたばたしながらベッドの上で悶えるように顔を枕に埋めた。

どうしよう。以前のように彼を見られない。もう同じ関係ではない。認めないわけにはいかない。

——男と女。彼と私。……彼の気持ち。

あの日、会話の途絶えがちな昼食を共にした後、今日はもう帰ろうと言い出したのは瀬尾係長だった。

「普段使わない筋肉を使ったから、疲れただろ？ 帰ってゆっくり休んだ方がいい」

理由がなんであれ一も二もなく承知しただろう。一緒にいても身の置所がなかったから。ところが彼は私を家まで送り届けると主張する。路線も違うし昼間だから大丈夫と言っても、意見を譲ろうとはしなかった。

「ちよつとぼんやりしてるから。独りにして何かあったら困る」

何だか熱があるみたいにぼおつとしていたのは事実だったので、それ以上強く断ることはできなかった。駅からの帰り道には彼がまた手をつないできて、互いに無言のまま共に歩いた。

マンションの前まで来ると彼はようやく口を開いた。

「宿題の答えはもうわかった？」

彼から出された宿題。私とデートする理由。胸の中で確信に変わ
りつつある答えを口に出すことはできなかった。それを言っ
てしま
ったらもう元には戻れない。

「君が答えを見つけて納得してくれるまで勝負は続ける。それ
までは『罰ゲームで仕方なくデートする』んで構わない。でもふ
たりで
会っていれば何かが変わる。僕はそれに賭けてるんだ」

彼の狙いはちゃんと当たっている。実際この間のデートから、私
はふたりの距離を意識するようになった。でも何も変わってほし
くない。

「僕の手の内は見せた。次は君の番」

「私……？」

「自分の気持ちをよく考えてみてほしいんだ。……これも宿題だね」
私が考えまいとしていたことを考えろと言う。最後通告を突きつ
けられたような気がして泣きそうになった。すると困ったように笑
って手を伸ばしてくる。

「そんな顔されると――」

頬に彼の指が触れた。私を見下ろす目は何かを言いたそうに、で
も辛うじて踏みとどまっているように見える。親指の腹を三度肌の
上に滑らせて、彼は手を離れた。

「じゃあ明日、会社で。金曜日はまた勝負な」

携帯電話に手を伸ばして彼から届いたメールを読み返した。

《君が戸惑っているのはわかってる。そうさせているのは僕だから。
でもそれでもいいから避けるのだけはやめてほしい》

こんなメールが来るのは私の会社での態度が原因だ。彼はいつも
どおり上司の顔を見せて業務に当たっているのに、私は気持ちが乱
れてケアレスミスを連発する。これじゃいけないと仕事には集中し

でも、彼の顔が視界に入るたびに意識が持っていられる。でも目が合ってもどうしていいのかわからずに視線を外し、よそよそしい態度をとってしまう。

寝返りを打ち、自室の天井を見上げた。そこにも彼の顔が浮かぶ。

係長を応援したいと思ってきた。一番を目指す彼の手伝いをできたらいいなと思ってきた。私を支えてくれた陸上部の先生や部員の仲間たちのように。もう一度あの熱を感じることができたら、どんなに楽しいだろうと。

でも彼が私に求めているものは、そうではなくて。

――男と女。

そういう形で相手から望まれる現実に不安と戸惑いを覚える。それはまるで、観客席で見ていただけだったのが急に舞台の上に引っ張り上げられたみたいで、自分が今や傍観者ではないことが恐れにも似た感情を抱かせた。

水野くんの思い出をときどき引っ張り出して満足していた恋とは全く違う、もっと実体があって、生々しくて、ふたりの距離を心と身体の両方で測るような。

呼吸が聞こえるほど、匂いを嗅げるほど、体温に触れるほど近づいて、甘くて痺れるような感覚を互いに分け合うような。

そんな関係を彼と築くのだろうかと思像しただけで、胸の鼓動が速まり身体の奥が疼く。それを直視したくない。でもその先を知りたい。

自分の中で何かが目覚めた気配にかすかな慄きを覚える。

私、どうしちゃったのかな。彼が好きなのかな。好きになって後悔はしないのかな。

こんな自信のなさでは答えなど見つかるはずはなかった。

「美春、それ砂糖！」

兄の叫び声で我に返った。どこかを泳いでいた意識が目の前の鍋に戻る。スパゲッティを茹でようと沸かした湯にもう少して砂糖を入れるところだった。

「お前は最近ボーッとしておかしい。頼りになるお兄ちゃんが可愛い妹の悩みごとを聞いてあげよう」

私が塩とスパゲッティを湯に入れるのを見届けた後で、ここが理想の兄の出番とばかりに人生相談を買って出る。が、変態兄に本当のことは言えないので、適当な相談事はないかと考えながら口を開いた。

「んーと、実は……」

「瀬尾はやめとけ」

いきなり核心を突くな！

「あ、あ、あ、あんちゃん……なして？」

私の狼狽ぶりを満足そうに眺めて兄は言った。

「俺が気づいてないけども思ってたのか。何年俺の妹をやってるんだ、お前は。『バレンタインデー限定スイーツ巡り』なんて嘘つきやがって」

バレてたのか。まさか私の身体からスイーツの匂いがしなかったからではあるまいが。

「で、告白でもされたのか」

「違う……」

「でもあいつの気持ちに気づいた、と」

「……なしてあんちゃんが知ってたんだ？」

ため息をつき、苦いコーヒーを飲んだみたいな顔をする兄。

「あんな目で見られたら嫌でも気づくよ」

「あんな目？」

「俺を羨んでる目。お前を独り占めしてる俺が羨ましくて羨ましくて仕方がない」

それはいくら何でも大げさだろうと思ったが、係長がいつも兄の

ことを気にしていたのは事実だった。

『お兄さんは今日何してるの?』

その問いの裏側にどんな想いを秘めていたのだろう。

「お前は どう思ってるの、あいつのこと」

率直に訊かれて言葉を濁した。答えはまだ見つかっていないかった。すると兄は得心したようにうなづく。

「お前が不安になるのも無理はないよ。女遍歴重ねてきた男だもんな。自分も結局その一人になるかもしれないと思えばためらって当然だよ」

「係長は、もうそういうんじゃないって言ったんだ。誓って一人だけだって」

そこは彼のために反論したかった。兄にそんな評価を下されたくはなかった。

彼が真剣な顔で訴えた日のことは忘れない。私も彼の言うことを信じると伝えた日。

「じゃあ何が怖いんだ? お前が先に進めない理由って何? あいつのこと信じてないからじゃないの?」

兄の情け容赦ない言葉に私は唇を噛み締めた。

信じる信じると口では言っておきながら、結局私は彼のことを信じていないのだろうか。そういう自分を認めたくなくて考えようとしなのだろうか。

目を伏せると兄はもう一度ため息をこぼしてから、いつになく真剣な口調で言った。

「お兄ちゃんから大切な妹への忠告。あいつはやめとけ」

「あんちゃんが心配するのはわかるけど……」

「言っとくけど、俺が反対する理由はある。あいつの女関係じゃない。お前が弄ばれて捨てられるっていうんなら、まだいいんだ。でもあいつにはそれ以上の危うさがあるって気がする。だからやめた方がいい」

危うさ？――病人と言っていたあれか。

「もっと普通の男を探せよ。普通で平凡な」

「係長は、普通だよ」

変態が何を言うか。兄に比べれば係長はずっと普通だ。

「……今年の誕生日は気分転換に温泉でも行くか？」

それ以上は押して主張せず兄はいきなり話題を変えた。まもなくやってくる私の誕生日。何だか他人事みたい。いろんなことがあってすっかり忘れていた。

「去年の今頃は病院の世話になってた。一年間頑張ったんだし、ご褒美としてさ」

感慨深げに兄が言う。ちょうど一年前、残業続きの果てに身体を壊してすごく心配かけた。前の会社を相手取って訴訟を起こそうとしたほどだったのだ。今の会社でつつがなく働いていることは、兄にとっても喜ばしいのだろう。でも一緒に温泉なんて論外だ。

「行がね。平日だべ」

「休みを取ればいいじゃないか」

取るか、普通。単に自分が行きたいだけだろ。

忙しいから無理と言ってこの話題は強制的に終わらせる。

「仕方ないな。じゃあいつもどおり食事でもいいか？ 和食？」

「……うん」

小さくうなずいてカレンダーに目をやった。明日は係長との勝負の日だった。

翌日の朝、工藤課長が例のセミナー運営委員会の飲み会が急遽行われることになったとメンバーに告げた。委員長である坂本営業課長自らの発案なので、半強制である。前回の会議で起きた騒動の火種がくすぶったままでは良い仕事にはならないと見た課長が、親睦会を開こうと提案したらしい。

《ごめんな。せっかく君と約束したのに》

《気にしないでください。それより、飲み会ではおとなしくしててくださいね。主任に何を言われても》

《飲み屋で出入り禁止になったら困るからね、おとなしくするよ。他のメンバーもいるから大丈夫》

社内メールでそんなやり取りを交わしながらも内心は複雑だった。勝負が流れたことには安堵したが、滝沢主任の存在はもはや鬼門と言ってよかった。

あの騒動以来、係長と主任は接触することなく日々を過ごしていた。職場のフロアが違うのだから遭遇する可能性も低くはなる道理だが、何度かニアミスはあったらしい。しかしそのたびに彼に張り付くWEB事業部の同僚たちが接触を回避しようとするので、暫定的平和が保たれているのだった。

あの一件は係長にダメージを与えたかと思われたのに、むしろ活力源となったかのように生き生きとして、社長に向かって開き直ってみせたことから、彼にとってはマイナス要因とはならなかったことが窺えた。会社側の評価は別として、だけれど。

ただ、主任との遭遇を心配する同僚たちがどこへ行くにもついてくるのに辟易しており、特に昼休憩に志願者が増えるのは給料日前であるがため、あわよくば昼食を奢ってもらおうという下心が透けて見え彼も苦笑いするしかないのだった。

その日の夜、飲み会がどうなったか連絡くださいとメールを送っておいた。翌日の土曜日になって、主任とは席も離れていたし口を利くこともなく無事に終わったと返事が来て胸をなでおろした。

しかし飲み会に出た他のメンバーの話によると、滝沢主任は今月末で退職する総務の女性社員を話題に出し、係長の神経に障るような発言を繰り返したらしい。

「その人って……もしかして」

「うん。ポチをシメようとした六人のうちの一人だって。『好きな男に振り向いてもらいたくて少しやり過ぎただけなのに、あっさり切り捨てるってどうよ、キツク言われてすげー泣いててさ、可哀相になっちゃったよ』とかなんとか。そんなの、自業自得だっつーの」
やはりまだ終わっていない。擬似的な平和の上にふたりは辛うじてバランスを保っているようなものだ。係長はもう挑発には乗らないと約束してくれたけどやはり心配で、その旨をメールした。

《彼女たちに厳しいことを言ったのは後悔してない。切り捨てたと言われても構わない。実際そのとおりだしな。それで何を言われても何とも思わないから心配しなくていい》

返信を読んで思った。『配慮の人』が見せるもう一つの顔。必要とあらばとことん辛辣にそして非情に振る舞う——冷静に計算をした上で。そういう人だから主任との衝突は本当ならあり得ないはずだったのに。

メールには続きがあった。

《滝沢とは関わらないで。君のことに关しては自信がなくなるから》
このまま何も起きなければいい。そう願いながらあまり気の進まない次の勝負の日を待っていた。

二月二十五日。

この日は朝から春一番が吹き荒れて、通勤中の髪やコートの裾をはためかせた。気温も上がりいよいよ春が出番の準備を始めたことを知る。

警備員のおじさんに朝の挨拶をすると、ウキウキした表情が帽子の下で踊った。

「おはようさん。もうすぐ春だねえ」

春が持つ魔力とでも言うのだろうか、心が浮き立つのを感じずに

はいられないのだ。非常階段を上る足取りも今日はいつもより軽く感じる。

もう少し暖かくなったらプランターに植える苗を買いに行きたいな。どの花がいいだろう。窓ガラスの掃除もしないといけないな。冬が残していった汚れを拭きとってピカピカに磨き上げたい。

次から次へと春のプランが浮かんできて頭がいっぱいになり、視界の隅に何かを捉えたもののそれと認識したのは視覚ではなく聴覚だった。

「おはよう、越智さん」

はっきりと視界に入るように視線を移動させると――そこには滝沢主任がいた。十階に至る踊り場の壁に寄り掛かって、微笑みを浮かべている。

「おはようございます、滝沢主任」

挨拶を返した途端にもたげてくる警戒心。佐久間主任から言われていた言葉――滝沢には気をつけろ――を思い出す。

「一階のエントランスで見かけてね。本当に毎日階段上ってんだ。すごいなあ」

少しずつ近づいてくる彼に心がざわざわと波打った。

「あの、何かご用ですか」

「一度注意してあげた方がいいかと思って――瀬尾のこと。あんまり信用しない方がいいよ」

親切そうに忠告を与えるのはボウリングの日と同じだ。何か根拠があるとしても言うのだろうか。確信的な目で語りかける彼に少なからず恐れを抱く。

「あいつ、見た目より腹黒いよ」

そう言い切った主任の声はひどく冷たく、おそらく彼らには単に同期のライバルという以上の深い相克があるのだろうと思わせた。係長は私をそれに関わらせまいとし、主任は巻き込もうとする。

もうウンザリだ。そんなことを聞かされたって私は傷つかない。それを主任にはつきりとわからせてやろうと思った。

「知ってますよ。係長って腹黒で策士でその上辛辣ですよ。知ってます。だから何だっていうんですか」

泰然として言い放つと、彼は驚いて一瞬怯むもののすぐに表情を元に戻す。

「でもあいつが営業部時代に何やってたかまでは知らないでしょ？」

——営業部時代。彼が入社一年目の頃。

「あの比嘉さんですら何回通っても契約取れない会社があったんだよ。なのに新入社員のあいつが二、三回通っただけで取ってきた。向こうの担当は女性部長。……これがどういうことかわかる？」

侮蔑の色が濃い声音を耳にしながら、私は息苦しさを感じ始めていた。

「枕営業したんじゃないかって噂になってさ。ほら、あいつあのおりの外見の持ち主だから。他にも新規で取ってきた契約、半分以上は女性が担当だった。あいつが一年で異動になったのってそのせいでしょ。まずいでしょ、枕営業するヤツが大手を振って営業部にいったら」

噂の的になる。中傷する者、擁護する者、遠巻きに見る者。様々な目に見つめられる。係長が当時受けた視線の矢はどれほど痛いものだったのだろう。それを思うと胸が締めつけられた。

「俺、一応同期だから言ったんだよ。違うんなら釈明しろよって。

でもあいつ、『いいよ別に。どうせPR事業部に行きたかったからちようどよかった』って笑って言うから、これはクロだなと思った」

私は視線を足元に落として悲しみに身を任せた。その噂が真実なのかどうか——それは係長しか知らないことだ。そして彼が釈明したとしても、どれだけの人が信じたというのだろう。最初に疑惑の色がついた眼鏡を掛けて見ていたのなら。

『例えば僕にとって不利な状況証拠があっても、僕の言うことを信じる？』

あの日に聞いた彼の声が蘇った。何かに縋りたいように思いつめた横顔も。あれはもしかしたら、その噂のことを指していたのだろうか。

だとしたら私が取る行動はたったひとつだ。約束したとおり彼の言うことを信じる。彼の言葉だけを。

息を吐いて顔を上げ、主任を真正面から見据えた。

「そんな話信じません。それに何年も前のことでしょう？ 正直なところどっちだっていいんです。私の上司は今の瀬尾係長ですから」「それはそれは、あいつもずいぶん信用されたもんだねえ。――骨抜きにされちゃった？ あいつの手にかかったら、君なんかすぐにオチるだろうしね」

下卑た笑いを唇に乗せて私を嘲るこの人に、前から言いたかったことを今、ぶちまけようと思った。

「……どんなに実力があつたって、独りでは一番になれないんですよ。周りに支えてくれる人がいなかったら、信頼してついて行く人がいなかったら、一番になんかなれない。主任にはいるんですか？ 一緒に一番を目指そうっていう人がいるんですか？」

勢いに任せて言った方がいいが、彼の目が釣り上がり口元が歪むのを見て瞬時に怯えた。現状を見てみればこの空間に彼と二人きり。今すぐこの場を離れたい。

「もうすぐ会議が始まるんじゃないですか。早く行った方がいいですよ」

それが会話を打ち切る合図だった。彼に背を向け先に階段を上り始める。

しかし主任の行動は直線的且つ動物的だった。

「待てよ！」という声と共に右肩をつかまれる。そこに伝わってきた彼の負の波動が恐怖心を呼び起こした。

逃げなくては。そう思った瞬間、肩に置かれた手を振り払いバランスを崩した。

後ろに倒れそうになり、辛うじて段の端に右足が半分だけ載る。

しかし結局滑って、次の段に変な角度で足は落ちた。

身体を支えきれなかった右足を軸に、引力が私を強く呼び寄せる。

一瞬空に浮いた身体は、踊り場に投げ出された。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5089r/>

カン違いにもほどがある！

2011年9月27日01時10分発行